



信
世
よ

標
半



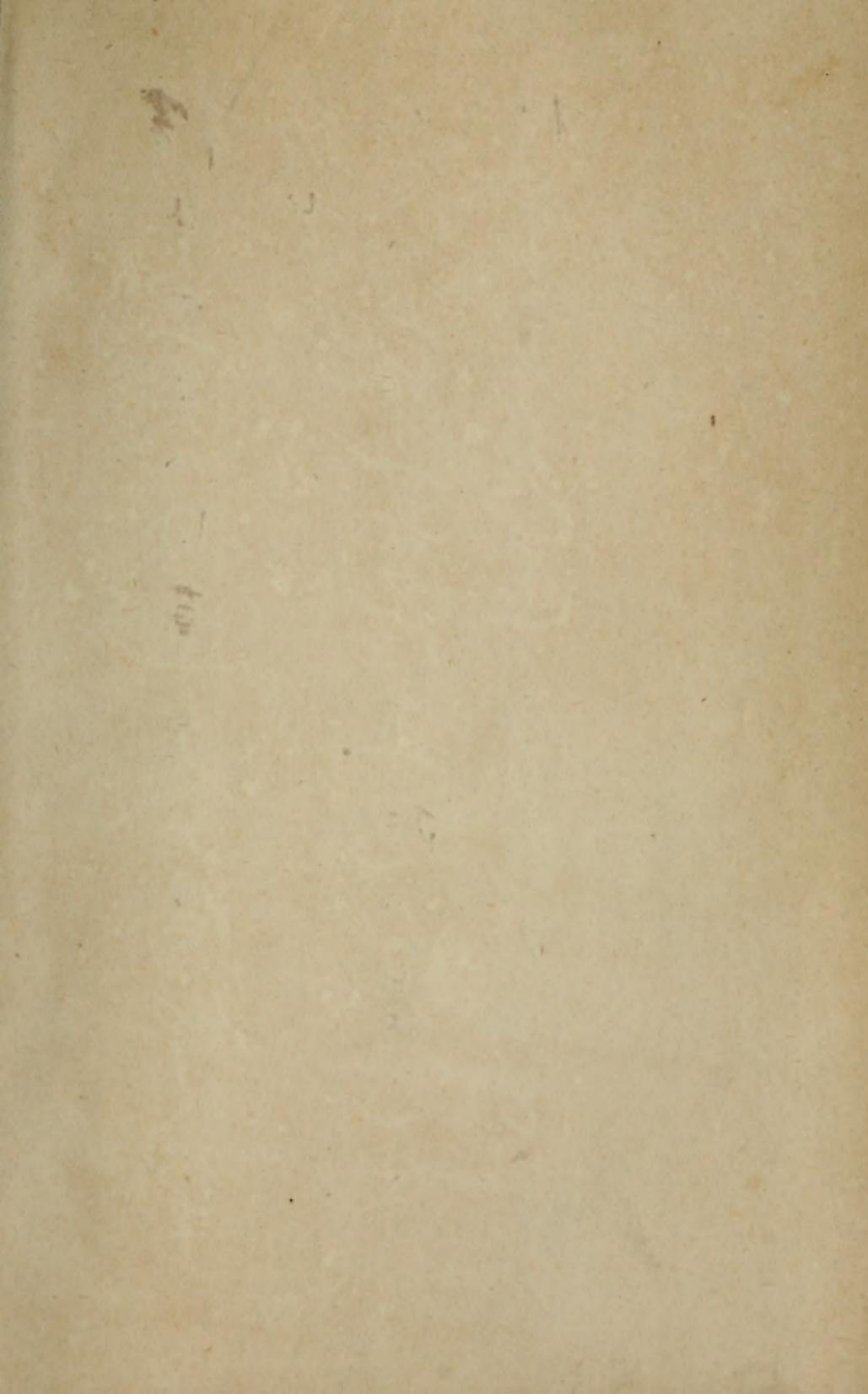
PL
817
A48Z63

Anesaki, Masaharu_
Takayama_Chogyu to
Nichiren shonin

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



妹壽郎風
山川留石

共編

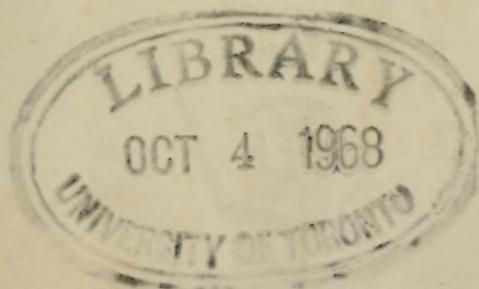
高山樗牛と日蓮上人

博文館發行

PL

817

A48263



日蓮上人と云

日蓮上人と云

「日蓮上人とは如何なる人ぞ」の
初稿の断片「日蓮上人を論ず」と

我者所教、今名已流是也、
我者所教、今名已流是也、
我者所教、今名已流是也、

佛の御心、世の人、
佛の御心、世の人、
佛の御心、世の人、

正体二年、
正体二年、
正体二年、

唯根根、
唯根根、
唯根根、

正体二年、
正体二年、
正体二年、

日蓮上人と云

大光世尊年七十有二、法華

一巻三ふの身量義法と云

高城一町も、神に決定に入り、法華

若佛の、大地に動き、世尊偈の白毫目から光を放

萬八十の世界と照、用漏せし所也。法華の大衆、

止つ悟り、

大小大光而、而し、

一と三昧より起る、

衆日王三尊の、

於者所利、

此の、

（白毫目より放光する）
 法華の經に「白毫目より放光する」とあり、
 此の光は、法華の經に「白毫目より放光する」とあり、
 此の光は、法華の經に「白毫目より放光する」とあり、
 此の光は、法華の經に「白毫目より放光する」とあり、

高山樗牛と日蓮上人の巻首に叙す

樗牛の一生は櫻の如し、其盛甚だ短くして而して美なり矣。その美や自ら三期を劃す、半開の美なり、爛熳の美なり、落花の美なり、三美の中尤も落花の清節高風を推す。樗牛の晩年は實に彼れが短く美なりし一生の點睛期にして即ち落花の美なりき。こゝに樗牛の爲に、尤も舊るくして深き友姉崎博士は、この尤も新らしくして深き友なる山川智應と計りて、樗牛が晩年の心血たる日蓮上人觀の諸文を整聚し、題して『高山樗牛と日蓮上人』といひ、博文館をして刷刊發行せしむるに至る。是れ世間

(1)

の熱望に應ずる所以にして、洵に機宜の可を制したるものと謂ふべし。

(2)
維新已來の人傑、公侯顯官碩學巨匠、盛名茂行を留めて逝けるもの幾百千人なるを知らず、然れども其死を惜み其徳を慕ふもの、千里來り弔して、墳頭香花を絶えざること、龍華山頭樗牛の墓の如きもの、天下果してその類例ありや。是れ即ち彼れが一代の中心といふべき、晩年の盛業、日蓮上人の崇仰鼓吹あるに因て然るなり。彼れは日蓮上人を知るに及んで其深さを増し日蓮上人を鼓吹するに及んで其大を致せり、聲は螺貝に入て其響大なりとは、是の謂か。世の樗牛を慕ふもの、多く全集の中

特に日蓮上人に關する詩文を渴仰す、是れ彼れが眞價の存する所を知ればなり。本篇の出る全く渴仰の反影に屬す。予や亦實にこれを慇懃したる一人なり、隨て本篇の全部に互り評閱を爲すべきの約あり。然るに此書編纂のはじめより、圖らず病臥の身となりて約を果すこと能はざるを遺憾とす。然れども姊崎博士等の編纂、すでにその竭すべきを竭して、復た予の蛇足を須たざるに似たり。惟樗牛が上人に歸依せる動機が予の拙著『宗門之維新』に在りしと、その研究に就て多少の助力を爲せりと
の因縁に由り、本書の發刊に際し、一言の叙述なかるべからずとの理由の下に、聊か縁起を叙べて、此勝縁に漏れざらんこと

(4)
を念ふのみ。唯予の切に本書を讀む人に對して望む所のもの一
あり、これを提示して、故人の爲に知己の言を爲さんとす、曰
く、

此書を讀む人は、須らく此書の著者たる樗牛が、曾て
日蓮上人の書を讀みたる如く之を讀め、而して第二第
三の樗牛たることを期せよ。

大正二年四月八日

田中智學識す

序 言

今茲に亡友樗牛が日蓮上人に關する言論を一括して世に公にするに當つて、尙ほ一言を加へる。

彼れが性格並に上人崇敬の心理については、彼れ自らの文章が、之を語り、又附録に於て、山川君はその來歴を、自分はその信仰の評論を加へておいた。茲に加へて、特に讀者の注意を望みたい點は、樗牛の上人觀が、個人の天才、人格の尊嚴に重きを置くために、上人の抱負理想に關して、その組織的又は團體的の方面の着目がまだ十分周到でない一事である。世人並に一般日蓮門下の人々が、上人の國家觀を淺薄に解釋し去つて、上人を世間並みの愛國者とし了つたに對して、樗牛が憤つたのは確かに正當である。彼れが此の點の證明として、遺文錄を涉獵し、上人の國家觀に關する文に張紙をしたのでも、その用意は明白であり、その

箇處は、本書(九八——一二二頁)に拔書きをしておいた通りである。謗法の國は血に依つて淨められて始めてその本來の天職を自覺すべく、病める國民は灸治を以て之を對治すべしとの、上人の熱誠を高調力説した點は、樗牛の日蓮論に於ける出色の點である。但し、此の警醒を以て、末法の導師上行の再現たる日蓮の人格を本位とし、日本國を以て單にその興教の方便の如くに見る文句が處々に見えて居るのは、所謂る法と人との關係に於て、人にも重きを置き、又法と國との關係に於て、法即ち理に偏した見解である。上人の信は、此以上に、法即ち眞理と人格との雙全、法國冥合の理想に於て、特に大切な消息を傳へて居るが、樗牛の見は此の一點に於て尙ほ不備であり、少くとも人をして上人を誤解せしめる文句がある。特に現代思想を唱ふる人々が、主觀に偏し小我に屈し、それを萬事の標準にしようとする現代にあつて、樗牛の文は、日蓮上人の眞意を現代人に誤解させる傾向がある。勿論、樗牛が言論は、在來の淺薄な愛國論者に對する反動として、他の

一方に馳せたのは、事情大に諒とすべきことではあるが、今日となつては、中正に歸つて、能く上人の眞意を汲む必要がある。

上人の世界觀は、事理雙全を期すると共に、人と法との關係についても、法と國との關係についても、偏頗の見を排して、中正包括の統一觀を特色として居る。即ち上行の再現日本に出でるのは、久成の約束であるから、その人が重要であると共に、その國も亦正法の缺くべからざる要素である。法は國に依つて昌へ、國は法に依つて貴く、二者一を缺いては共に不全となる。但しその『國』といふのは單に日本國土、又日本人の住する場所、又は歴史のあるだけの日本國でなくて、法に基き法を理想とする國でなければならぬ。それ故に、鎌倉時代に見る如き日本國は上人にとつては病國である、國の國たる所以、日本の生命を缺いて居る國であるから、之を灸治し、之を咒咀しなければならぬ。かくして淨められたる國は、即ち聖德太子が一體三寶の理に依つて解釋せられた日本國、傳教大師の理想たる法

國一如の日本國である。此の如き久遠の日本國は、即ち『日本の聖人』の生まれ出づべき國、三祕の本源發祥地たるべき國家である。三寶一體については、今一々の解釋を略するが、要するに、根柢あり理想ある國家であつて、この根柢を繼承する統治が行はれ、理想を表現し指導する人格があり、而して理想を實にすべき國民の團結生命があり、此の三者が不即不離、相助け相長するとの謂である。日蓮上人の日本國は、此の三寶一體の日本國であり、上人はその表現の先導者、『地涌の菩薩の先驅』である。

此の意味は、樗牛も既に十分觀取して、謗法の國は亡ぶべきも、久遠の日本國は亡びないことを論じて居る。然しながら他方、淺簿な愛國論者を喝破するため、その言句が處々激越になつて、上人を偏頗な方面に寫し出す結果を生ずる憂があるから、此の點の注意を、特に眞摯な讀者、熱心な上人研究者に望む次第である。

その他編輯上の事については、別に加へる要はない。但、全集に漏れた分でも少新加したものであるのと、山川君の況後録註釋とは、特に本篇の新光彩である。今や樗牛死して十年餘、余の信解は、彼れの生前に比して舊阿蒙の状態を脱しない。但し日蓮上人の統一的大抱負を近世的に移植することに於ては、多少樗牛の志を繼ぎ來つた。今夏、海を度つて、大西洋の岸に一年を過ごし、日本人の理想信仰を西洋の同胞に傳へ得る時、彼れの追懷は、自分にとつての力である。この冬の樗牛忌は、例の如くに清見潟で暮らさず、ケンブリッジの講堂で聖徳太子傳教大師、日蓮上人を説き得るであらう。此を以て遙に亡友への手向としやう。

大正二年五月二十七日

八年前の日本海々戦を廻想して

嘲風

本書の表題文字は總て田中先生の揮毫で「文は人なり」と共に、亡友に對する厚意から書き與へられたものである。又表紙の意匠は同門下植中無畏鎧氏が樗牛墓畔に立ち盡して後畫かれたものである。編者は、田中先生並に植中氏に對して深厚の謝意を表する。此の一事は出版の初から書き記すべき事であつたに、匆忙の際に序言の原稿を草し、自分には分かつて居る事を讀者に告げなかつたのは、粗漏の罪、謝するに辭ない次第である。茲に四版に際して感謝と謝罪との意を併せ表する。

大正二年七月

嘲

風

目次

感奮以前

書簡(廿七年七月)

近時の銅像(廿一年十月)

腐敗せる宗教(廿二年七月)

日蓮と親鸞(廿二年九月)

佛教の外護(廿二年十月)

釋尊の行者(廿三年五月)

人格の力(廿三年七月)

鑽仰論議

田中智學氏の『宗門の維新』(廿四年十一月)

.....一

.....三

.....四

.....四

.....八

.....九

.....一〇

.....一〇

.....一三

.....一五

日蓮上人(廿五年三月頃)……………二一

日蓮上人とは如何なる人ぞ(廿五年四月)……………二四

日蓮と基督(廿五年六月)……………五四

日蓮上人と日本國(廿五年六月)……………七三

史傳感想……………一二三

鎌倉時代の人傑(廿五年一月)……………一二五

宗教談(廿五年四月—五月)……………一三一

冠鑑日親(廿五年五月)……………一三八

豪傑の半面(廿五年七月)……………一六〇

予の好める人物(廿五年八月—十一月)……………一六七

吾が好む文章(廿五年二月)……………一七八

無題錄(廿五年四月—五月)……………一八六

感慨一東……………一九七

ロンドンよりの書簡(卅五年五月)……………一九七

鎌倉より(卅五年八月)……………二〇七

雑談(三十五年八月)……………二二二

日蓮研究會を起すの議(三十五年八月)……………二二五

餘沫談論……………二二九

天才の出現(三十四年十一月)……………二三一

天才の犠牲(同上)……………二三一

天才無き世界(同上)……………二三二

平等主義と天才(同上)……………二三二

ニイチエの歎美者(三十四年十一月)……………二三三

郷里の弟を戒むる書(三十四年十二月)……………二三四

現代思想界に對する吾人の要求(三十五年一月).....	二四一
中江兆民居士(三十五年一月).....	二五五
教科大學(三十五年一月).....	二五六
麵包を求めて石を得たり(三十五年一月).....	二五六
先づ人たらむことを要す(同上).....	二五七
年若き人よ(同上).....	二五八
事後の註釋 理前の是認(同上).....	二五九
怯夫に非ざれば即ち僞人(同上).....	二五九
無題 錄(三十五年五月).....	二六〇
無題 錄(三十五年六月).....	二六二
無題 錄(三十五年十月).....	二六五
無題 錄(三十五年十一月).....	二七二

消息書簡……………二七五

明治三十四年十一月十五日(田中智學氏へ)……………二七七

同日(姊崎嘲風へ)……………二七七

同日十二月十日夜(登張信一郎氏へ)……………二八二

同日十二月十一日(姊崎嘲風へ)……………二八三

同日十二月十四日朝(田中智學氏へ)……………二八四

同日十二月二十日(笹川種郎氏へ)……………二八五

明治三十五年一月二日(姊崎嘲風へ)……………二八六

同日一月五日朝(田中智學氏へ)……………二八七

同日一月二十六日(田中智學氏へ)……………二八八

同日二月二十四日(田中智學氏へ)……………二八九

同日三月十日(田中智學氏へ)……………二九〇

同	三月二十七日(田中智學氏へ)	二九四
同	四月三日(山川智應へ)	二九六
同	四月十六日(田中智學氏へ)	二九八
同	七月三日(姊崎嘲風へ)	二九九
同	七月二十二日(山川智應へ)	三〇一
同	八月十日(山川智應へ)	三〇二
同	八月二十日(山川智應へ)	三〇三
同	八月二十九日(山川智應へ)	三〇三
同	九月二十八日(山川智應へ)	三〇四

況後錄(山川智應註解)……………三〇七

樗牛論評……………三四七

目次終

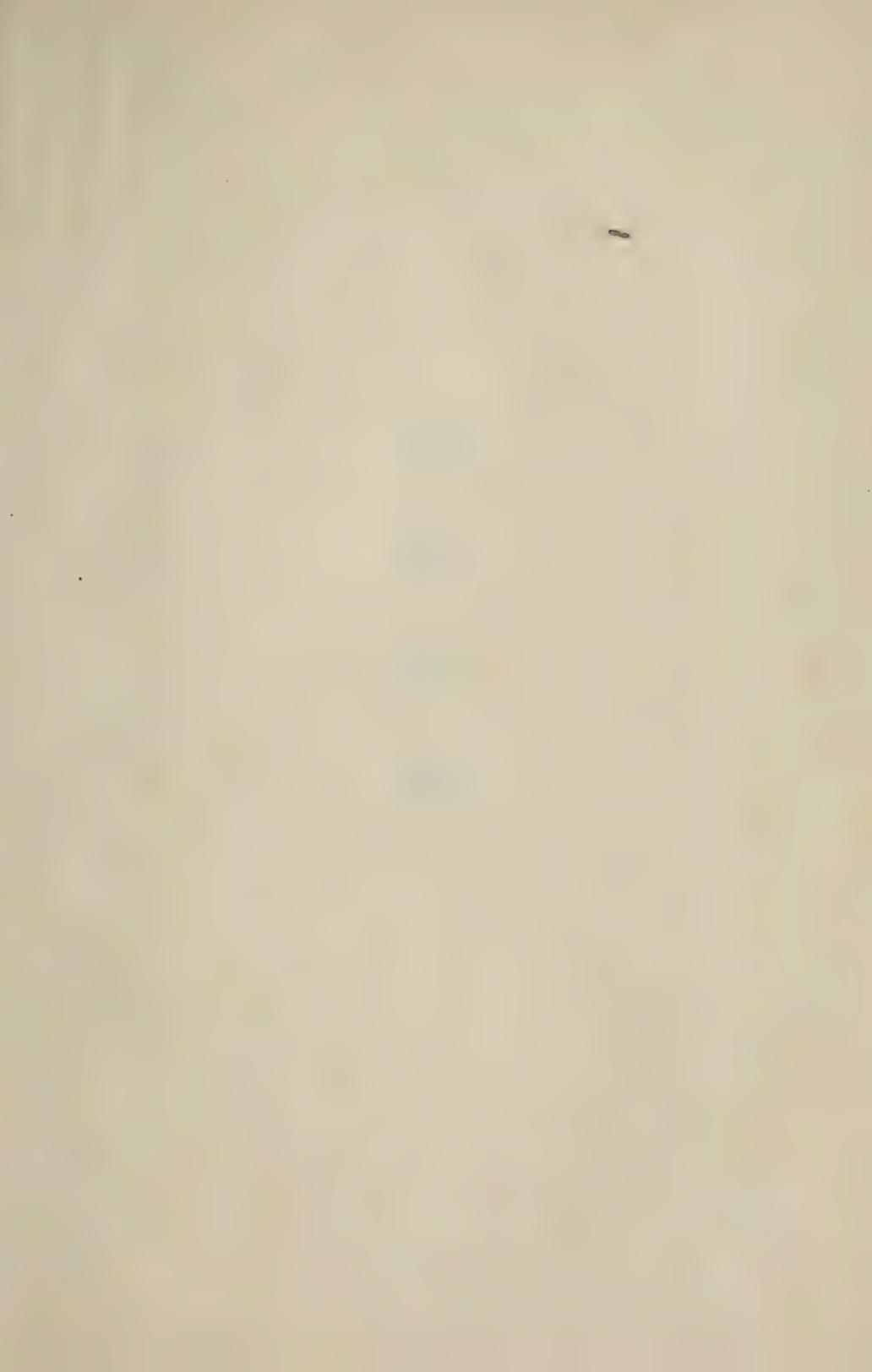
目次

高山樗牛の日蓮上人崇拜に就いて(山川智應)……………三四九

性格の人 高山樗牛(姉崎嘲風)……………三八七

信仰の人 高山樗牛(姉崎嘲風)……………四一三

感奮以前



書簡 (簡略)

(明治廿七年七月三日。逗子より弟良太へ)

鎌倉には、日に七回之汽車往復有之、今日天氣も少々曇り涼氣に相見候に付、午後三時十四分の汽車にて同地に出かけ、六時に歸宅致候……(中略)……北條屋敷、將軍屋敷等は新士町の吾等の宅ほどもなし。されどかゝる小き處に、幾百年の歴史をつなぎ候事故、一木一石何とかにかの、歴史的インテレストなきはなく、其の面白き事、何くにも比較すべきものなかるべしと被思候。由井ヶ濱より江ノ島つゞきに日蓮大士の故蹟タント有之、日朗土牢、龍ノ口、行逢川、宿屋入道屋敷等、何れ近日出かけ可申候。其他五山、七切通、十井等枚舉に遑あらず。平家物語、太平記の復習を實地にするが如きものにて、机上にては得がたき愉快可有之候。

(櫻牛全集 第五卷二九五—二九六)

近時の銅像 (一節)

(4)

若し夫れ、日蓮の像の建てらるべき地が、池上に非ず、鎌倉に非ず、房州に非ず、身延山に非ずして、博多なりと云ふに至ては、其の不當なること言ふまでも無きなり。日蓮の安國論が元寇の豫言なりとは、歴史上に確證無き説なり。是の曖昧なる一事を附會して、其の像を博多に建て、以て元寇記念と稱するは、即ち當時日本の忠臣義士、別しては伊勢の神靈を侮辱する者に非ずや。若し是の歴史上の一大事實の爲めに、記念像を造るの必要あらば、何ぞ北條時宗、若しくは宗、河野諸忠臣の像を以てせざる。日蓮宗の信者が、一安國論によりて是の神聖なる故趾を壟斷するは、我が國民の默視すべからざる所也。(卅一年十月。第四卷七四二)

腐敗せる宗教

腐敗も茲に到りては極矣

宗教家の運動は、須らく宗教者らしかるべし。救済の大願に據りて、精靈の感化に力むれば、宗教家の爲すべき所、即ち盡せり矣。帝室權家の外護を是れ頼み、朋黨比周して互に相排擠するは、是れ政治社會の弊風のみ。今の宗教家が其本に力めずして其末に趨り、事に三道擁護と謂ふが如き、頑迷なる運動に出でたるは、まさしく宗教墮落の真相を暴露せる者と謂ふべし。日蓮や親鸞や、是の如くにして其の宗門を開きたる者に非ざりき。今の僧侶は内に修めずして、徒に外に求め、六慾煩惱の餓鬼となりて自ら覺らず。腐敗も極まれる哉。

何ぞ大勇猛心を奮起せざる

宗教家の立場より觀れば、今の世はまさしく革命の來るべき時代也。良しルテルの旗は猶ほ揚がらずとするも、少くともサボナロラの血の濺がるべき時也。親鸞氏、日蓮氏が其教を創めけむ時勢は、正に是くの如かりき。而して曾て安立救

濟を與へむが爲めに起りたる彼等の宗門は、今や更に他に向て、其の安立救濟を仰ぐべき勢を示し來れり。第二の親鸞何處に在る、第二の日蓮何處にある。

宗教家にして果して、眞に救世の本願を有する乎。彼等は當に是の大勇猛心を示さざるべからず。人をして血を見るを恐れしむるものは、眞の宗教心に非ざる也。迫害と禍難とを避けしむるものは、眞の慈悲心に非ざる也。況や妻妾を擁護し、暖飽を樂みて、却て外護を他人に仰ぐ者に於てをや。マホメットの號令の如何に猛烈なるかを見よ。曰く、『我が同胞にして戰に臨まずして、其竈を掘る者は禍なる哉。爾等は果して死を避け得べしと信するや。何ぞ生死の宿命動かすべからざるを思はざる。爾等は戰鬪の熱火を恐るる乎。見すや、天國は爾の前に在り、地獄の火焰は後にあることを。』——亞刺比亞人は、是の如き精神に鼓舞せられ、其の『コーラシ乎、貢乎、將た劍乎』を叫びし也。又日蓮の教示の如何に壯烈なるかを見よ。曰く、『日蓮が弟子等は、臆病にては協ふべからず。彼々の經々と法華經と、勝

劣、深淺、成佛、不成佛を判せむ時、爾前迹門の釋尊なりとも、物の數ならず。何に況や夫れ以下の等覺の菩薩をや、況して權宗の者どもをや。』——法華一宗は、是の如き烈々たる光焰の中に産まれたり。區々たる迫害又何かあらむ。一匹の蟲を殺さざる慈愛の法性も、一朝激すれば、河嶽の流峙も是れを妨ぐる能はざる也。是の活氣ありて、宗教初めて立つ。

往年、本願寺に所謂白川黨なるものありき。時の人或は擬するにルーテルの革命を以てせりき。而して所謂ルーテル等の爲せる所を見よ。法主は彼等を獄に投せしに非ず、斷頭臺に上せしにあらず。輿論は却て熱心なる應援の聲を與へたりき。而して我が憐むべきルーテル等は、塵に僧職寺格の褫奪に遭て、鈍くも其聲を潜めたり。而して陰に特免を請願して、柔媚猫の如くになりぬ。宗教家の革命的熱誠とは、果して是の如き者なる乎。……(中略)……白川黨の小ルーテル等は、眞のルーテルに對して、果して、何の面目かある。而かも想ふに、彼等は今日宗教界の錚

錚^{△△△△△}たるもの、而^{△△△△△}して尙^{△△△△△}ほ是^{△△△△△}の如^{△△△△△}し。自^{△△△△△}餘^{△△△△△}の碌^{△△△△△}々^{△△△△△}たるもの、又^{△△△△△}知^{△△△△△}るべきのみ。信^{△△△△△}徒^{△△△△△}

幾^{●●●●●}百^{●●●●●}萬^{●●●●●}、僧^{●●●●●}侶^{●●●●●}幾^{●●●●●}十^{●●●●●}萬^{●●●●●}、教^{●●●●●}界^{●●●●●}は墮^{●●●●●}落^{●●●●●}に瀕^{●●●●●}し、時^{●●●●●}勢^{●●●●●}は革^{●●●●●}命^{●●●●●}を招^{●●●●●}く。一^{●●●●●}人^{●●●●●}大^{●●●●●}勇^{●●●●●}猛^{●●●●●}心^{●●●●●}を奮^{●●●●●}起^{●●●●●}

して、本^{●●●●●}邦^{●●●●●}宗^{●●●●●}教^{●●●●●}界^{●●●●●}の風^{●●●●●}色^{●●●●●}を一^{●●●●●}變^{●●●●●}するもの無^{●●●●●}き乎^{●●●●●}。(卅二年七月。第四卷七九八―八〇二)

日蓮と親鸞

富士新聞の廢刊に際して木村鷹太郎君に與ふ(節略)

基督は、己れを十字架に上したる者の爲めに禱りたり。然れども是れ彼れの半面のみ。彼れは其の他面に於て、マホメットなりき。妻をして其の夫に反かしめ、子をして其の父に反かしめ、臣をして其の君に反かしめんが爲めに、彼れは生まれたり。彼れは、世に戰ふべきもの多きを認めれば也。古來劍は大なる福音の傳播者なりき。想ふに足下の理想に近きものは、親鸞よりも日蓮乎。孔子よりも韓

非子乎。基督よりは寧ろマホメット乎。

足下よ、人心は凡ての方面に於て倦み疲れたり。大執着なき也、大煩惱なき也。足下世に爲すあらんと欲せば、先づ此の人心を新たにせんことを要す。

(三十二年九月。第二卷七三一—七三二)

佛教の外護

(藤岡勝二氏論文の批評)

宗教家が外護を求むるは、是れ其の宗教の亡徴を示すものなり。ヨハネは羊皮を着けて野に叫びたり。基督は、教會に於て其の教を説かざりき。日蓮は、二度流され、三度び死に瀕して、尙ほ其の教を續けたり。彼等に於て何の外護かある。活ける信仰は活ける勢力也。吁、今の佛教徒の没分曉なるや。(三十二年十月)

釋尊の行者

〔東本願寺と村上專精氏の一節〕

昔者日蓮の教を唱ふるや、曰く、吾は是れ釋尊の行者也と。如何に偉大なる宣言なるよ。今の宗教界の腐敗せるは、畢竟禪宗の行者あり、眞宗の行者あり、一法主、一舜台の行者あり、而して釋尊の行者無きが爲めならずや。宗教は人生の爲めに存す。人生、宗教の爲めに存するに非ず。腐敗せる本願寺と、腐敗せる佛教との滅亡を希望したる村上氏は、須らく釋尊の行者を以て、自ら任すべきにあらずや。

(三十三年五月。第四卷六〇二)

人格の力

世間には、オーソリチーに對する信仰とし云へば、直ちに迷信と同一視する人多し。されど吾人を以て見れば、オーソリチーに對する信仰ばかり、たしかなるは少し。

オーソリチーを信ずとは、其言を信するに非ずして、其人を信する也。其の高大なる人格の現はれたる一形式としての其の言を信する也。人の知には到らざる所あり、人の情には達せざる所あり。宗教茲に立ち、信仰茲に本づく。こは人の弱點ならむも、人として免れ難き、殆ど必然とも云ふべき弱點也。オーソリチーに對する感情は、一種の宗教也。吾人は是の偉大なる人格の中に於て、知り難きことをも知り得べく、感じ難きことをも感じ得べしと信する也。かゝる人格の發表としては、一言一行も吾人にとりては、言ふ可らざる高大なる意義あるが如く觀らるべし。古の所謂る、言は人なるもの、即ち是れ也。……(中略)……

されば、其言を以て相争ふは表面上の事也。争ひの根本は人の争也、性格の争也。

天下は道理もて動かし得べしとする人あらば、そは未だ共に談ずるに足らざる人也。

(三十三年七月。第四卷八四〇)

鑽
仰
論
議

田中智學氏の『宗門の維新』

吾人は久しく田中氏の名を聞けるも、未だ其の人を知らず。日蓮宗の教理沿革等に就いては、素より一門外漢たり。而かも茲に氏の近著『宗門の維新』に就いて、一言せんと欲するは、是の書が末法五濁の當世にありて、教祖日蓮の偉大なる精神を繼紹せる所に、同情を禁ずる能はざるものあれば也。

著者は、開卷の劈頭に於て、**本化の妙宗は、宗門の爲めの宗門に非ずして、天下國家の爲めの宗門也と喝破し、是れ日本國家の應に護持すべき宗旨にして、亦宇内人類の必然同歸すべき一大事因縁の至法也と唱道し、此の大事縁を宣傳せむが爲めに、日蓮聖祖は我邦に垂化し給へりと説き、今の宗門は數百年來の歴史的腐**

敗の爲めに、全く其の本分を亡失し了りたりと慨き、聖祖の宏猷を恢復し、宗門の妙用を光顯せむが爲めに、茲に宗門改革の根本義を明にせむと揚言し、而して後斷じて曰く、『予は、此の論篇の云ふ如き宗門に非ざれば、日蓮聖祖の宗門に非ずと爲し、又此の宗門の改造は、單に宗徒の間にのみ唱ふべきものに非ずして、日本國家の應に大に注目すべき最高問題也と爲すもの也』と。何ぞ其の宣言の高大にして、其の意氣の猛烈なるや。吾人は先づ是の開卷第一章に感激して、編を終るまで、遂に手を釋く能はざりき。

著者の所謂る改革論の大綱は、宗法に於て復古的態度を採り、制度に於て進歩的態度を採り、而して全體を統率するの一大精神として、侵略的態度を採らむとするにあり。所謂る侵略的態度は、日蓮の法華折伏ほふけしやくぞくの大義にして、著者の是に論及するや、氣魄雄大、光焰萬丈、蓋し本篇の大主眼の存する處。亦著者最得意の壇場たるが如し。其の要に曰く、人類を一妙道に歸せしむるには、先づ一大勢力を

事實の上に建立せざるべからず。國家を以て道教の原動力とする教旨、即ち是れ也。曰く、日本をして宇内を統一して、永く宇宙人類の靈的巨鎮たらしめざるべからず。是れ宇内廓清の爲め也、人類救済の爲め也。而して是れ聖祖立教の大義、天祖建國の要道にして、兼ねて釋尊塔中たつちゅう付屬の元意也。曰く、是の大理想を唱道したる聖祖日蓮は、正しく世界統一軍の大元帥也。大日本帝國は、正しく其の大本營也。日本國民は其の天兵也。本化妙宗の學者敎家は其の將校士官也。事觀高妙の學見主張は其の宣戰狀也。折伏立敎の大節は其の作戰計畫也。信仰は氣節也。法門は軍糧也。四大格言は軍規の振肅也。本化妙宗の日本國敎奠定は、全く其の出征準備也と。著者は是の大法鼓を鳴らして、先づ宇内統一の大理想を建て、是の大理想を實現するに先ちて、内亂鎮定の必要ありとなし、既に法華折伏の四字を以て宗を立てたるもの、四大格言の麾下に立ちて、飽くまで一切の邪宗邪敎を討伐せざるべからずと説き、終りに大々の氣焰を吐いて曰く、

寺院の門石を見ずや。その『一天四海皆歸妙法』『閻浮提內廣宣流布』の文字
 は、日夕出入の縑素に侵略を號令する也。久遠寺、本門寺、本國寺、妙法華經寺、
 妙顯寺等、是れ皆相對的對破の名に非ずや、『侵略的』の徽號ならずや。侵略的
 に信仰せよ、侵略的に説けよ、侵略的に書けよ。朝々夕々造次顛沛も侵略的意
 氣を充たせよ。本山を參謀府とせよ、檀林を練兵場とせよ。一切すべて侵略的
 理想に行動せよ。『コーラン乎、劍乎』は猶甚だ緩弱也。須らく『法華經は劍也』
 と曰へ。老嫗も杖を揮て世界統一を説け。幼童も鼓を鳴らして『法皇進軍の曲』
 を歌へよ。利の爲に祈る勿れ、身の爲に祈る勿れ、父母の爲に祈る勿れ、師の
 爲に祈る勿れ、只侵略の爲に祈れよ、侵略の爲に死せむと祈れよ。侵略に非れ
 ば言ふ勿れ、動く勿れ、視る勿れ、聽く勿れ。侵略的意味なき勸化に布施する
 勿れ、侵略的ならざる布教に奔走する勿れ。侵略的氣節ならざるものは速に宗
 門を去れ。死せる萬人を有するよりは、生ける一人あるに如かず。況や七千の

僧侶、三百萬の信徒、一たび昏睡より起ち、警呼應同して異體同心の大節を復し、一舉して侵略突貫の聲を齊うせば、山岳震ひ湖海動くの概無くむばあらし。侵略なる哉、侵略なる哉。

(廿三・四頁)

讀者は、以上の叙述によりて、略々本書の目的及び文章を想像するを得べし。著者は別論に於て教會の組織を説き、附録に於て妙宗の未來を預想せりと雖も、其の主腦とする處が『侵略的態度』以下の數章に存するや明けし。其の意氣の猛烈なる、其の抱負の高大なる、其の理想の深遠なる、而して其の文章の雄偉なる、吾人は以て、近時宗教界の一大文字なりと賞讃するの、決して溢美に非ざるを信ずる也。人の傳ふるを聞く、著者は平生熱心なる日蓮の崇拜者たるの故を以て、日蓮狂の目ありと。狂か、癡か。吾人得て是を知らず。然れども萎微衰弱を極めたる今の宗教界に於て、敢て日蓮の後身を以て自任するもの、著者の如きあるは、吾人の甚だ喜ぶ所也。法華折伏、破權門理は、げに日蓮が布教三十年間の一大主義な

りき。彼れは是の主義の爲めに、住處を追はれたること二十餘度、或は暴民の爲めに夜襲せられ、或は法敵の爲めに狙撃せられ、遠流に處せられたること二度。或は斷頭の圓座に坐し、或は弟子を殺され、法を路傍に説けば杖木瓦礫を投せられ、道を壇上に講ずれば罵詈惡言に恥められ、打撲刃傷殆ど身に絶ゆる事無かりき。是の如きもの前後實に二十有二年。而して迫害いよゝ大にして折伏愈々烈しく、天下の威武に面して一步も退讓する所あらざりき。北條氏遂に屈し、榮爵を授け美田を贈りて、宗門の弘通ケツウを允許し、請ふに諸宗の折伏を中止せむことを以てするや、彼れ昂然として曰く、日蓮の教を弘むるは、釋尊の遺命のみ。一北條氏の許否、我に於て何かあらむ。法華折伏は聖經しやうぎやうじに自爾の大義、救世根本の方便、釋尊の行者一日も是の事無かるべからずと。嗚呼、何ぞ其の主張の嚴明にして、其の意志の猛烈なるや。吾人は、日蓮宗に於て一門外漢のみ。今に於て猶ほ法華折伏を標榜するの可否は、吾人の得て知らざる所なりと雖も、田中氏が二十年來、

内外の障礙に抵抗して、終始其の主義を枉げず、斷々乎として益々其の侵略的態度を擴張するの一事は、少くとも其の教祖の偉大なる精神に感孚せる所ありと謂ふべし。吾人深く其の志を壯とし、其の行を偉とす。其の文章亦彷彿として高祖遺文の流韻を傳へたるが如き、亦吾人の欽羨に堪へざる所也。

嗚呼、世に閑文字多し。言はざるべからずして、初めて言ふもの果して幾何ぞ。田中氏の是の書の如きは、眞に言はざるを得ずして言へるものか。其の説の當否如何は姑く措き、世人は須らく、憂世者の最も眞摯なる憤慨録として、一讀の勞を吝むべきに非ざる也。

(三十四年十一月。第四卷一〇〇〇—一〇〇四)

日蓮上人

(研究項目)

一、法華經弘通の付屬

靈山會上の次第——上行付屬——佛滅後二千年の經過——

二、上行菩薩出現の預言

時——大集經の五個五百歲——藥王品「後五百歲」の定解——處——藏經流布

——彌勒菩薩預言——天台妙樂の預言——傳教の預言——末法の初め、日本——

——其人に關しての預言——勸持品……

三、法華經の行者としての日蓮

日蓮の傳記——清澄開宗——松葉谷燒打——小松原法難——伊東法難——龍の

口法難——是までは法華經行者のみ、八幡諫曉は頂上——佐渡流竄は一大自覺

の機縁

四、上行菩薩の自覺、日蓮信仰上の大飛躍

上行自覺の次第——「我は上行也」——其宣言、寺泊御書、開目抄……——如

說修行抄の開示——觀心本尊抄の顯現——大使命の覺悟——日蓮一生の大基礎

五、日蓮と預言

釋尊の預言と日蓮——日蓮は預言によりて信仰あり、——自信あり、——自らも預言によりて一世を感化せむとす——預言は天地人生の上に有する至上方を意味す、而して此の力は釋尊付屬の行者たるによりて生ず——開宗の預言、立正安國論——蒙古來襲、十一通書、……——

六、日蓮と日本國

佛識に本づける國家主義——立正安國論——大義名分——反人廿四人……法華經至上主義——厩の小島のあるじ——而も日本國は大切——一閻浮提の理想——本尊に天照大神

七、八、蒙古來襲に對する日蓮の態度、日蓮傳中の大疑問——

九、基督と日蓮

十、結論

(三十五年三月頃。第五卷二七三—二七四)

日蓮上人とは如何なる人ぞ

(日蓮上人と上行菩薩)

今の世の凡俗に厭きたるものは、願はくは是の篇を讀め。日本は如何に墮落するとも、吾人は、其の同胞に日蓮上人を有することを忘るる勿れ。彼れの追懷は力也、信念也。諸君、若し學究先生の所説を聞くの餘暇あらば、吾人と共に是の一大偉人を研究せざるべからず。

一 法華經に於ける上行菩薩

大覺世尊、年既に七十有二、法機漸く熟し、一代の嘉會將かゑに近きにあらむとす。乃ち先づ成道じやうたう以後、法華爾前に於ける、權實兩教の起盡を明にせむと欲し、一卷、三品の無量義經を説き、『四十餘年未顯眞實』と喝破し了りて、靜びんぢやうに禪定に入り給ふ。

是の時、四種の天華雨の如く降り、普刹の大地六様に動き、世尊眉間の白毫びやくこう忽ち光を放ちて東方萬八千の世界を照らし、洞然として周徧せざる所無し。滿地の大衆且つ歡び且つ怪み、念へらく、是の如き瑞相は未だ曾て有らざる所、世尊夫れ大法雨を雨らし大法義を演せむか。乃ち專念合掌して齊しく瞻仰す。無見頂相遠く雲に入り、五天寂寞じやくまくとして聲なし、偏へに一大事因縁の顯現に待つところあるものの如し。是に於て世尊安庠として三昧より起ち、方便、譬喩、信解等の八品を以て、徐ろに一乘無待の眞理を證し、會あひ下一切衆生を導いて無上道を悟らしむ。『一切衆生を化して皆佛道に入らしむ』る世尊出世の本願、茲に乃ち成就しぬ。經に所謂る、『如我昔所願、今者已満足』即ち是れ也。

然れども、三世の人父は、尙ほ當來の生靈に慮りなきを得ず。若し夫れ前師既に去りて、後佛未だ世に出でざるの日、六道流轉りゅうてんの凡夫、それ何によりてか長夜の生死を離脱せむ。佛緣未だ淺からざる正像二千年の間こそ、權教人師の教化も猶ほ

庶幾くは力あるを得べけむ。唯信解しんげの機根共に敗退し、謗法不信に充滿すべき末法萬年の初めに到らば、國土と衆生と共に、偏へに妙法蓮華經の開顯を待つて、初めて救濟せらるるを得む。然らば則ち、茲こゝに末法の大導師を選定して、妙經の弘通こうつうを付屬し了るに非ざれば、世尊身後の慈悲未だ全きを得ず、出離の本願亦具足せりと謂ふを得ざる也。

世尊乃ち更に法師品を説き、授戒の沙門、稟道の弟子に就いて、妙經の一偈一句を力に随つて唱説する大功徳を推奨し、進みて寶塔品に入りては、三度び末法弘通の付屬を提唱して佛前の祈誓を促がし、提婆品に入りては、世尊の成道と龍女の作佛とにより、前例の證悟を以て、後來の信解を要め給ひぬ。是に於て藥王、勢至、彌勒等みろくの二萬の菩薩、既に作佛の授記を得たる五百の阿羅漢、竝に會下無數の比丘、比丘尼等、齊しく佛前に進み、固く不惜身命ふしやくしんみんやうの志こころを持して、末法の化導くふだうに當らむことを希ふ。他方佛國の八恒河沙に過ぎたる無數の菩薩、亦同時に詣りて、

同じく濁世ぢよくせ弘通の付屬を得むことを望む。世尊儼然として是等の菩薩大衆に告げて曰く、已やみね、善男子。汝等の此經を護持することを須するず、我が娑婆世界に六萬恒河沙の菩薩あり。彼等、我が滅後に於て能く此經を護持し、讀誦し、弘通せむと。梵音十方に徹し、三千悉く震ふるひ響く。是の時、大千世界の國土皆震裂して、無量千萬億の菩薩、同時に地中より涌出しぬ。法華經本門の序品たる從地涌出の大觀、是の如くにして展開せられぬ。

地涌の菩薩、身は皆金色にして、三十二相無量の光明あり。儀格堂々として威容四邊を壓す。是の如きは靈山會下未だ曾て見ざるところ、彌勒菩薩が補處兼知の明を以てして、尙ほ且つ一人も知らず。大衆皆疑つて念へらく、吾が佛、成道このかた、年處幾も無し。如何にして、是の如き無量無邊の大菩薩を教化し得たりしや。世尊是に於て、初めて如來久遠の法門を開顯し、本因本果の妙理を説き、久成くじやうの妙經を付屬すべきもの、亦久成の菩薩なるべきを示し給ふ。這こゝろの顯本遠壽

の教理こそは、實に四十餘年の佛説を撥無して、法華爾前の經典に全然新面目を與へたるもの。而して是の本門の開顯の由て本づくところは、地涌菩薩の本貫を明にして、末法付屬の大事業を完成せむが爲めに外ならず。

世尊既に衆疑を排したる後、分別、隨喜、法師の三功德品を説いて、妙法受持の利益を讚歎し、更に不輕品に入りて折伏逆化の現證を示し、以て末法弘通の標範を垂れ給ふ。是に於て、地涌本化の無量の菩薩、其の上首たる上行等の四大菩薩によりて、佛前に誓つて曰く、吾等、佛の滅後に於て、廣く是の經を弘めて敢て退轉すること無けむと。世尊之を嘉納し、告知して曰く、『善い哉、上行菩薩。如來一切所有いっさいしやうの法、如來一切自在の神力、如來一切祕要の藏、如來一切甚深の事、皆是の經に於て宣示し顯説しぬ。是の故に汝等如來の滅後に於て、一心に受持し、讀誦し、解説し、書寫し、説の如く修行すべし』と。法華一經の主眼たる末法付屬の一大事は、茲に初めて成就しぬ。世尊成道の本願は、茲に初めて全きを告げぬ。多寶の大塔は、茲に

初めて其の出現の因縁を了しぬ。十方諸刹の諸佛は、是の一大慶事の歡喜の爲めに、廣長舌を出だして無量の光を放ち、譬咳彈指の響は、普く三千の世界に到り、地は六種に動き、虛空に讚美の聲あり。天華繽紛として雨の如く降り、瓔珞旛蓋の類、雲の如く十方より集り、變じて五彩の寶帳となりて、諸天諸佛の上に搖曳さぬ。

是の如きは、法華經に於ける所謂る結要付屬の次第也。本化地涌の上首たる上行菩薩の上に寄託せられたる、末法の大導師たる使命は、本論の大序として、吾人特に讀者の注意を要めむと欲す。何となれば日蓮の品性、抱負、信仰を包括せる彼れが一代の本領は、實に『我は上行菩薩也』てふ一大自信に存すれば也。

二 上行菩薩出現の預言

上行菩薩てふ日蓮の自信は、畢竟釋尊の預言に對する絶對の信仰と、妙經色讀

の行者としての一身の證悟とに本づく。されば吾人は、先づ彼れが信仰上の經歷に就いて、少しく考査するところ無かるべからず。蓋し是の如きは、日宗學徒が常套の談義ならむも、而かも本論の序次として、日蓮の立脚地を會得する上に於ては、極めて重要な事項に屬す。

佛滅後に於ける法華經弘通の使命は、既に本化地涌の上首たる上行菩薩に寄託せられたり。然らば則ち、彼れ上行の出現すべき歳時は何れの年代にして、方處は何れの國土なりや。將た又彼れが、依て以て其の使命を果すべき當體は、抑々如何の人、もしくは如何の神ぞ。是等の事情に關する釋尊の預言は如何。

吾人は先きに上行出現の佛識ぶつしんを記して、末法の初めと謂へり。是れ姑く文底の本意に依れるのみ。法華經には單に、或は末法と云ひ(法師品、分)、或は末世と云ひ(樂行品、安)、或は惡世、濁世、濁惡世(勸持品等)等と云へるの外、特に末法の『初め』の明文無し。唯藥王品に、『我滅度後、後五百歲中、廣宣流布、於閻浮提、無令斷絶：

『の文字あり。此の文中の『後五百歲中』の五字を以て、正像二千歲後の五百歲、
 即ち末法の初めとするは、後世學者の定解にして、上行出現の時機は、是の定解に
 よりて永く確定せられし也。而して斯かる解釋の由て來る所を尋ぬるに、一は本
 文の末法、末世等の文字に參照せる結果ならむも、主として大集經の有名なる五個
 の五百歲の預言に起因せる者の如し。即ち此經第五十一に、世尊月藏菩薩に告げ
 て曰く、『我が滅後に於て五百年の中は解脫堅固、次の五百年は禪定堅固(以上正法)、
 次の五百年は讀誦多聞堅固、次の五百年は多造塔寺堅固(以上像法)、次の五百年は
 我が法中に於て鬪諍言訟あり、白法びやくほんをひつ隱沒せむ』と。是れ明に末法の初めに於て、教
 法の堙滅を預言せるものにして、かの『後五百歲中』に對する擬釋として、前後
 恰も符契を合するものに似たり。是れを以て、妙樂、天台、傳教等皆是の解釋を
 採り、日蓮亦數々是れを以て其の門下に教へたり(撰時鈔、法華取要抄、曾谷入
 道殿御書等)。是の如くにして、法華經弘通の付屬を受けたる上行菩薩が末法の

初め、即ち佛滅後二千年より二千五百年までの間に於て、出現すべしとは、佛説の預言を信するものにとりて、疑ふべからざる信念なりし也。

時代は既に末法の初めに定まりぬ。然らば則ち其の國土は如何。佛説は是の點に關して、何等信憑すべき徵證を與へずと雖も、後世の論釋中には、多少の預言的文字無きに非ず。彌勒菩薩の瑜珈論に、『東方に小國あり。其中唯大乘の種姓あり』と謂へるは、妙經流布の國土の印度以東にあるを示せるもの、而かも特に記して小國と謂へるは、注意すべき文意なりとす。肇公が翻經の記に、大師左手に法華經を持し、右手に鳩摩羅維什の頂を摩して授與して曰く、『佛日西に入りて、邊耀將に東に及ばむとす。此の經典東北に緣あり、汝慎みて弘傳せよ』と。印度より東北の國土は支那に非ざれば韓半島、然らざれば日本あるのみ。傳教是れを擬釋して曰く、『代を語れば則ち像の終り、末の初め。地を尋ぬれば即ち唐の東、羯の西。人を原ぬれば則ち五濁の生、鬪諍の時也』と。知るべし、彼れが明に彌勒の所謂る東

方の小國を以て、日本國なりと信せしを。日蓮亦傳教の擬釋を承け、更に其の時代の状態と一身の現證とによりて、此の信念に動かすべからざる根據を與へぬ。所謂る時代の状態とは何ぞや。他なし、末法行者の境遇に關する法華經の預言也。抑、世尊、法華經を説くや、此經を受持し、弘通するの極めて困難なるを誠むること一再に止まらず。方便品に、『此經を讀誦し受持するものを見て、輕賤憎嫉して結恨を懷かむ』と云へるを初めとして、法師品には、『此經は、如來の現在すら猶怨嫉多し、況や滅度の後をや』と説き、寶塔品には所謂る六難九易の教を述べて、須彌山を擲つも、足指を以て大千世界を動かすも、若しくは手に虚空を把て遊行するも、或は大地を爪上に置いて梵天に昇るも、猶ほ末世に於て法華經を受持するの難きに如かざるを告ぐる等、策勵戒飭到らざる所無し。殊に勸持品と不輕品との二者の如きは、全篇の文字、殆ど皆法華經の行者に對する迫害の覺悟を垂示せるものに非ざるは無し。其の世蓮の衰頽を述べ、教法の墮落を描き、末法の行者た

る者は、所謂る三類の強敵に反抗して、不惜身命の苦節を忍ばざるべからざるを説くところ、文意尤も激越を極む。是れ即ち、上行菩薩が出現すべき國土の狀態に關する、釋尊の預言として見るべきものとす。大集經に所謂る、『鬪諍言訟、白法隱沒』とは即ち是れ也。

是を以て之を觀る。時は即ち末法の初め、地は即ち日本國。時と地と既に定まりぬ。然らば則ち其人は如何の人ぞ。勸持品説く所の如くむば、彼れは惡世の中に法華經の眞理を弘むる爲めに、身命を惜まざる者ならざるべからず。諸の無智の人、惡口罵詈して、或は刀杖瓦石を加ふるものあらむ。邪智諂曲の比丘、俗惡鄙客の僧侶等、名を正義に假り、力を權家に求めて彼れを誹謗せむ。彼れは是等一切の迫害を忍受し、身命を愛ま^{をし}ずして、唯無上道を惜むものならざるべからず。彼れは是れが爲めに『數々擯出^{ひんすか}せられ』、又幾度か寺塔住居を遠離せむ。而かも彼れは、唯大覺世尊の告敕を念ふの外、其の他を知らざる者ならざるべからず。

嗚呼時は方に到りぬ。地も亦定まりぬ。是の如き人、獨り未だ出でざる乎。

是時に當り、現身の證悟を以て、是の疑問に最後の解決を與へむが爲め、佛識の攝理によりて日本鎌倉を追はれたる一個の僧ありき。彼れ名は日蓮、是の一大使命の將に彼れの頭上に落ちむとするの時、彼れは方に佐渡流竄の途上にありき。

*

*

*

*

*

是に於て、一言の讀者に告ぐべき事あり。吾人が上文述べ來りたる上行菩薩の付屬と、其の出現の時處位とに關する教相判釋は、毫も吾人の私意に出でたるにあらず。天台、妙樂、傳教等の繼紹授受したる定解にして、隨つて亦佛敎教理の上に於て、是等諸大師の傳統を承けたる日蓮の敎判たりし也。台家以外の諸宗派にありては、或は是の如き敎判を認容せざるものあるべく、今日の學者等が所謂佛敎敎典に對する、高等批評の見地よりすれば、這般の問題亦全然別種の意義を有し來るやも知るべからず。然れど是の如きは、本論の毫も關知する所にあらず。吾

人の主旨は、上行菩薩の自信に到達するまでの、日蓮上人の教判及び信仰上の經歷を明かにするにあり。是の目的に向つては、日蓮其人が如何の知解、如何の信念の下に、其の宗教的性格を修養したりしかを看取し得れば則ち足る。吾人は是點に於て、特に讀者の注意を請はむと欲す。

遮莫、日蓮は如何にして、上行菩薩の自信に到達したりしや。是の自信は、彼れの性格、信仰、事業の上に、如何の影響を與へしや。吾人は是に於て、少しく日蓮の傳記に就いて語るところ無かるべからず。

三 法華經の行者としての日蓮

多寶の塔閉ぢ、靈山の會散ふじてより、春去秋來二千二百有餘年。日本東海の邊土、安房國清澄寺に一個の小僧ありき。彼れ素漁夫もとの子、年十二にして家を出で十八にして僧となり、爾來専ら聖典の研究に身を委ね、天下の名山巨刹を歴訪し

て智見を修養し、信念を陶冶すること前後十有五年、内外古今の典籍一も涉獵せざることに無し。彼れ今方に、長き遊學の旅路より其の故郷の寺門に歸り來り、其の故舊及び檀家の大衆を集めて教を説かむとするなりき。遠近傳へ聞き、新來の學僧、説く所の教法の如何に清新なるべきかを想ひて、來り集るもの甚だ多かりき。

是れ天台大師が『後の五百歲、遠く妙道に沾はむ』と預言せしより七百年、傳敎大師が『正像や、過ぎて末法太だはなは近きはなはにあり、法華一乘の機、是れ正しく其の時』と預言せしより四百年の後、時は方に建長五年四月二十八日、而して彼れとは言ふまでもなく日蓮なりき。

日蓮が是日の説法は、會下大衆の期待せる如く實に清新なるものなりき。恐らくは佛法二千年の歴史に於ける、如何なる論師の説よりも清新なるものなりしならむ。彼れは口を開いて、先づ一切現行の宗門を否定し、念佛無間むげん、禪天魔、眞言亡國、律國賊と宣言し、法華經の行者たる彼れの唱道する一佛乘の妙理に非ざる

よりは、一切の諸宗を排して、凡べて無得道と喝破しぬ。聽衆は皆是の意外の傲語に驚きて、或は怒り或は笑ふ。同門の僧侶袂を連ねて席を去り、互に願みて、『嗚呼吾が蓮長遂に狂せり』と嗟嘆しぬ（蓮長とは彼れが當時の名なりき）。恰も基督が其の故郷ナザレに歸り、以賽亞イサイアの預言を誦して、『是の録しるされたること、今汝等の前に應かなへり』と言ひし時の如く、何人も日蓮の言を以て、常識あるもの口より出で得べしと思惟する者あらざりき。

然り、法華經の行者たる彼れの宣言は、常識を超越する天來の師子吼なりき。彼れは狂と呼ばれ、痴と嘲けられながら、遂に其の故郷を追はれぬ。かくて恐らくは何人も、此の一狂僧の前途を思念する者無かりし間に、日蓮の名は幾もなく天下の覇府なる鎌倉の中央より響き渡りぬ。彼れは淨土、禪門の全盛を極めつゝある是の大覇府の廣衢に於て、彼等の熱心なる歸依者にして、且つ外護者たる北條氏の權威を嘲りつゝ、公々然として四個の宣言を標榜し、諸宗無得道を絶叫して、一

日も緩怠することあらざりき。言ふまでもなく、あらゆる嘲笑罵言は彼れの身邊に集まれり。瓦石糞土は到る處に雨の如く、彼れの頭上に降り懸かれり。然れども是れ唯ますく彼れが折伏の決心を堅うし、逆化の氣焔を昂むるのみなりき。かかる間に、立正安國論の大論策は、彼れが立宗の大本、一期の遠鑿として世に現はれぬ。三災七難の佛識に基きて、内訶外患の近きにあることを警戒せる一大國家的預言は、青天の霹靂の如く、上下の耳目を聳動しぬ。衆怨遂に爆發せり。數百の暴民は、幕府の默許の下に、彼れが松葉が谷の庵室を燒撃しぬ。北條氏は罪名を糺さずして、彼れを伊豆に流しぬ。年を越えて、赦され歸るや、門下皆折伏を緩うせむことを請ふ。彼れ儼然として曰く、折伏逆化は聖經自爾の本義、釋尊弘法の遺範也。佛識昭々として火を睹るが如し。法華經の行者一日も此事無かる可らずと。侃諤益々力む。日蓮宗聖日の一たる、所謂る小松原の法難は是の間に起り、彼れの額上は、是れより永く深大の刀痕を印しぬ。

斯かる間に、彼れの精神に一大覺悟を促がすべき時機は漸く迫り來りぬ。文永五年の初め、蒙古、大陸連勝の餘威に乗じて、書を我れに送り、暗に侵逼の禍心を示す。上下驚怖し人心恟々たり。正に是れ日蓮が八年前に發表したる安國論の預言を實にするもの、適中恰も符契を合するが如し。彼れは是に於て、十一通の書を裁して、北條氏を初め幕府の權家、府中の大寺に送り、大に往年の誹謗を詰り、預言の現證に據りて改悔かいげの實を促がし、揚言して曰く、極樂寺の良觀、建長寺の道隆等の頭を由井が濱に梟して、早く一佛乘に歸依せずむば、國家の滅亡遂に避くべからざる也と。辭意激厲を極め、氣魄一世を吞吐す。十宗の緇素怨嗟措くところを知らず。百方讒を構へて、刑戮を幕府に逼る。幕府遂に捕へて斬に處す。是の時、彼れ昂然として曰く、死は素より我れの期待するところ、是の臭骸くさがいを法華經に捧ぐるは、糞土を以て黄金に替ふる也。『僅かの小島の主の威をどさむに恐れ
ては、閻魔王の責をば如何にすべし』と。

然れども、天乎、命乎、彼れの頭は龍の口に落ちざりき。越えて一月、彼れは警護の武士に伴はれ、信山越水を踰えて、遠く北海のほとりに漂泊らひぬ。關外秋深うして、野に悲風あり。眸を放てば、北洋の煙波蒼茫として、遙に青螺の天邊に横はるを見る。

是れ即ち、流人日蓮の配處、佐渡が島なりき。

嗚呼佐渡が島！ 其處には、如何なる運命の、是の希有の流人を待ちつゝありや。

四 疑 問

日蓮にとりて、佐渡は即ち末法の壽量品なりき。鎌倉の反對者が、彼れを北海の孤島に放逐したる間に、法華折伏の使命を付屬せられたる末法の大導師は、更に此の謗法の國土に、大法雨を雨らすべく出現しぬ。末法の大導師とは、言ふまでもなく本化地涌の上首上行菩薩にして、而して此の一大使命を自覺したる者は、

即ち日蓮其人に外ならざりき。

如何にして日蓮は、上行菩薩の自信に到達し得たりしか。是れ彼れにとりて健康感應の一大事に屬し、固より傍人の容喙を容れざるべしと雖も、而かも猶ほ其の事蹟の彷彿を想ふに足るものあり。吾人は茲に彼れの信仰上の徑行に就いて、其の心事を觀測せざるべからず。

第一、最も明かなるは、彼れの『不惜身命』^{ふじやくしんみんかう}の一切の云爲は、法華經の教理及び預言に對する絕對の信仰に本づく事也。彼れは末法教化の爲めに展開せられたる、顯本遠壽の一大眞理を信せり。本化地涌の菩薩等が、是の使命の爲めに靈山の會下に召集せられたるを信せり。而して是の使命の付屬を受けたる者は、彼等の上首たる上行菩薩なりしことを信せり。彼れは、又是の上行菩薩の出現すべき時の、末法の初め五百年、即ち佛滅後二千年より二千五百年迄の間なること、竝に其の出現の處が東方の小國日本國なることを信せり。是の如き信仰を固持せる彼れは、

果して彼れ自身に就いて如何の感想を有したるべき乎。彼れの時は佛滅後二千二百餘年に當る、所謂る末法の初めに非ずや。彼れの國土は、即ち日本國に非ずや。取りも直さず、彼れは少くとも、上行菩薩の出現すべき時機と國土とを共有せることを覺らざる可らず。是の自覺も彼れの宗教的生活の初めより存在せることは、遺文明かに是れを證するのみならず、法華經の行者としての彼れが、不撓なる精神と遠大なる抱負とは、主として是の自覺に本づきしことは、極めて明瞭なる事實なりとす。既に時代と國土との契合を確信したる法華經の行者たる彼れは、上行菩薩自らの出現に關して、如何の觀察を有せし乎。法華經の預言にして眞ならば、若しくは大覺世尊にして妄語の佛に非ずむば、是の時、是の國、既に上行菩薩の出現を見ざるべからず。——是の如きは、必ずや妙經色讀の間に於て、日蓮の胸中に日夕往來したる疑惑にして、又同時に苦悶ならざるべからず。

然れども、本化の大菩薩を以て自ら讀するが如きは、彼れの恐らくは想ひ及ば

ざりしところ。彼れは、唯一個の誠度なる法華經の行者たるに過ぎざりき。法華經の行者として一身を法王の宣示に委ね、『如說修行』の大願に一任して、其の他を知らざりき。彼れは末法の導師の爲めに預言せられたる、勸持品二十行の偈を讀みて、あらゆる迫害を忍受すべき一大決心を固め、危害の身に及ぶ毎に佛識の空しからざるを喜べり。是の如くにして折伏逆化の事業に當ること二十餘年。今や僅に龍の口の斬首を免れて、遠く北海の流人となりぬ。あゝ、惡世惡國並び存して、法華經の行者を容るるに處なし。而かも上行菩薩は遂に出現せざるべき乎。彼れは疑ひもなく、是の幽深なる疑惑を抱いて、北海の配處に向ひし也。

五 疑問の解決、一大醒覺

然れども、是の疑惑の解決せらるべき日は、漸く近づきぬ。一大醒覺將に近きにあらむとす。

塞外十月、北地風荒く波高し。彼れは暫く越の寺泊に泊して、天候の回復を待ちぬ。匆劇の境を離れて、忽ち幽靜の地に客たり。感懷果して如何。嗚呼彼れは遂に目覺めたり、永遠に目覺めたり。二十年來の疑惑は、霧の如く散じたり。法華經の預言は是の覺醒によりて、更に新しき生命を得ぬ。東海の佛子日蓮の生涯は、俄に寂光寶土の光明に照されて、直に佛識の現證となりぬ。彼れが過去は久遠の過去となりぬ。彼れの未來も久遠の未來となりぬ。彼れが接觸したる一切の衆生と國土と、凡べて彼れの一身に關聯して、妙經預言の註脚となりぬ。彌勒、天台、妙樂、傳教等は、彼れによりて初めて妄語の罪を免れたるのみならず、一代佛敎の歸着は彼れによりて初めて現前の事證となりぬ。是の大自覺の喚起せられたる時、鎌倉の流人、安房東條の旃陀羅が子日蓮は、一躍して本化地涌の上首上行菩薩となりぬ。

彼れは如何にして、是の自覺に到達したりしや。吾人は法華經勸持品の所謂二十行の偈が、是の自覺を彼れの心中に喚起したる重なる媒介者なることを疑は

ず。何となれば、末法の大導師が一身上の經歷に關する預言は、殆ど是の一偈の中に包括せられたれば也。されば目蓮にして、自家二十年の境遇が歴々として、是の預言の現證なることを認識したる時、猛然として自ら省悟する所あるは、蓋し自然の事なるべし。偈の文に曰く、

諸々の無智の人、惡口罵詈等及び刀杖を加ふる者あらむ。我等皆當に忍ぶべし。

惡世中の比丘、邪智にして心諂曲なり。未だ得ざるを既に得たりと謂ひ、我慢の心充滿せむ。或は阿練若あらんじやに納衣なふえにして空閑に在り。自ら眞道を行へりと謂ひて、法華經を弘むる者を輕賤する者あらむ。彼れ利養に貪著するが故に、法を説き、世間無智の人に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならむ。是の人、惡心を懷き、常に世俗の事を念ふ。唯名を阿練若に假るのみ。好むで我等法華經を弘むる者の過を出し、而して言はむ、此の諸々の比丘等は、利養を貪る爲の故に、外道の論議を説き、自ら此經典を作て、世間の人を誑惑し、名聞を求むる爲

の故に、是經を分別すと。彼等常に、大衆の中に在りて、我等法華經を弘むるものを毀らむと欲するの故に、國王、大臣、婆羅門、居士及び餘の比丘衆に向ひ、誹謗して我が惡を説いて謂はむ、是れ邪見の人にして外道の論議を説くのみと。

我等佛を敬するの故に、悉く是の諸惡を忍ぶべし。濁劫惡世の中には、多く諸々の恐怖あり。惡鬼其身に入りて、我を罵詈し毀辱せむ。我等佛を敬信して、當に忍辱の鎧を著け、是經を説く爲の故に、此の諸々の難事を忍ぶべし。我は身命を愛をしまず、但無上道を惜む。我等來世に於て佛の所囑を護持せむ。世尊自ら當に知り給ふべし。濁世の惡比丘、佛の方便宜しきに隨つて、説く所の法を知らず、惡口して擻蹙し、數々擯出せられて塔寺を遠離せむ。是の如き衆惡をも、佛の告敕を念ふの故に、皆當に是の事を忍ぶべし。(文意不通の處には假りに釋字を添加す) 是の偈に所謂る罵詈は、言ふまでも無し。刀杖を加ふる者とは、即ち東條景信等の一輩に非ずや。惡世の比丘、邪智にして増上慢なるものは、當時の十宗の僧

侶にあらざるや。阿練若(寺院)に在りて白衣空閑、無智の人に恭敬せらるること阿
 羅漢の如く、名利に貪著して法華經の行者を誹謗するものは、即ち良觀、行敏、
 道隆、隆觀等の當時の所謂の諸高僧に非ざるや。國王大臣に向つて、我れを讒毀す
 るものとは、即ち持齋、念佛、眞言師等が北條氏に嗾訴せるの謂ひに非ざるや。身命
 を愛まずして、但無上道を惜み、是等一切の諸惡を忍受して、佛の付屬を護持せる
 ものは、即ち日蓮に非ずして誰ぞ。所謂の數々擯出せられて塔寺を遠離せむと謂
 へるものは、即ち居處を追はるること二十餘度、一度びは伊豆に放たれ、二度び
 は佐渡に流されたる日蓮其人の現境に非ずして何ぞや。日蓮は法華經の行者也。
 時は末法の初めに當り、國は東方の惡土に合し、而して現身を以て勸持品二十行
 の預言を實現す。是の如きは南岳、天台、妙樂、傳教等の尙ほ遙に及び到らざる
 所、本化の上行菩薩に非ざるよりは、誰れか能く佛識を顯證して此の如くの確なる
 を得むや。佛にして妄語の神ならむか、則ち已む。苟も久遠實成の三界の教主な

らば、日蓮亦必ず上行菩薩ならざるべからず。日蓮は疑ひもなく是の如く思惟し、是の如く確信したりし也。

六 上行菩薩としての日蓮

今彼れの遺文に就いて檢するに、是の信念の曙光は、彼れが越後の寺泊より、其の隨一の檀越富木氏だんをらとぎに與へたる所謂る寺泊御書に顯はれ初めぬ。『當世三類の敵人は之れあるも、地涌の菩薩は一人も見えざるか。日蓮は八十萬億那由陀の諸菩薩の代官として之を申す』と言へるもの、彼れの爾前にぜんの書、曾て見ざる所の文意に屬するを見るべし。越えて一月、佐渡より同じく富木氏に送りたる消息に至りては、文義更に明晰なるものあり。『寺泊より法門を書き遣はし候ひき、推量候らむ。已に眼前也。佛滅後二千二百餘年に、天台、傳教は粗く釋し給へども、弘め殘せる二大事の祕法を此の國に於て之を弘む。日蓮豈其人に非ずや』と。又曰く、『前相既に顯

はれぬ、是れ時の然らしむる故也。經に曰く、『有四導師、一名上行云々』。是れまさしく上行菩薩の使命を言明したるものに非ずや。翌年(文永九年)二月最蓮房に與へたる所謂る生死一大事血脈鈔、亦明かに是の意を表はして曰く、『上行菩薩末法今の時、此法門を弘めむが爲に御出現之れあるべき由、經文に見え候へども如何に候やらむ。上行菩薩出現すとやせむ、出現せずとやせむ。日蓮先づ粗く弘め候也』と。斯くて教相の釋義として日蓮一代の大文章たる開目鈔は、主として是の一大事實の宣言の爲めに草せられ、法體の主判として日宗全門の秘論なる觀心本尊鈔、亦是の説明の爲めに著はされ、如說修行鈔はた是の信仰の偉大なる勢力を代表し、壯厲激越なる法華折伏の宣戰狀となりて、全國門下の志氣を鼓舞しぬ。是に於て彼れは、一代の聖教、皆是れ吾が一身の註脚のみと喝破し、勸持品二十行の偈は、日蓮だに是の國に生まれずば、世尊の大妄語となり、本化地涌の菩薩は、提婆が虛誑罪に墮すべしと揚言し、日蓮法華經の故にたび／＼流されずば、『數々見擯出』の

數々の二字を如何せむと高語し(開目)、『今の遣使還告は地涌也』と説き(觀心本)、
 『已に地涌の大菩薩上行出でさせ給ひぬ。結要の大法亦弘まらせ給ふべし。日本
 漢土萬國の一切衆生は、金輪聖王の出現の先兆、優曇華に値へるなるべし』と示
 現して、一閻浮提廣宣流布の一大理想を發表しぬ(教行證)。

日蓮は、果して上行菩薩の化身なりや。彼れは佛家の所謂る前生に於て、靈山
 會下に釋尊の付屬を受けたりしや。是の如きは、吾人の知る所に非ず、又知るを要
 する所にもあらず。吾人は、唯日蓮が釋尊に對する無限の歸依によりて、吾れは上
 行菩薩也てふ金剛こんこう不壞ふゑの確信に到達したるを見るを以て、足れりとせむ。是の如
 き確信が今の學究輩によりて、如何の説明を得べきかは、吾人の關する所に非ず。
 唯是の確信が、日蓮の精神に於て、無上絶對の事實なることを知れば、則ち足る。
 見よく、確信を得てより、彼れの性格の偉大は、殆ど人界の規矩を超越しぬ。
 彼れは、是れによりて天地人生の上に、無限の威力を得ぬ。其の意志と情熱と、

共に天來の靈氣によりて鼓吹せられぬ。彼れは、是れによりて預言の力、己れの手
 にあることを信じ、祈禱の聽かれざることなく、咒詛の行はれざること無きを信じ
 ぬ。彼れは是の確信の力によりて、天下萬國の一切衆生に向つて、無上の權威を有
 てるものの如く教訓し、告知し、且つ命令せり。彼れは、自ら是の如き權威を有
 せることを疑はざりし也。彼れは、國家政府が是の確信の前には、如何に小弱な
 る者なるかを見ぬ。是を以て、當代の君主執權を指して、『塵かの小嶋の主』と輕
 むじ、天照大神、正八幡等の國神を『小神』と卑しめぬ。三世十方の世界を貫通
 して、久遠寶成の無上道、妙法蓮華經の現證たる是の確信の前には、日月も其の
 光を失ひ、天地も其の大を失ひ、一切人天の衆生は帝王もを食も、悉く皆一小兒
 となりぬ。事茲に到りては、言の記すべきなく、文の述ぶべき無し。吾人は、唯
 歸命讚歎して、唵々の一語を反覆するの外無き也。

遮莫、是の如き大いなる確信の下に活動せる、彼れが半生の事業の、如何に雄大

崇嚴を極めたるかは、晉に鎌倉時代の偉蹟としてのみならず、晉に日本歴史の壯觀としてのみならず、又實に人類永遠の史上に於ける一大事實として傳へらるべきもの也。吾人請ふ、篇を改めて少しく述ぶるところあらむ。

本論を草するに當り、田中智學氏及び氏の門下山川智應氏が、有益なる注意を與へられたるは、著者の深く感謝する所也。(廿五年四月。第四卷八八―九一二)

日蓮と基督

偉大なる宣告

四福音書は、實に日星河嶽の大文字にして、吾人が宗教的感情に對して、あらゆる高大なる理想を標示す。まことに仰いで貴むべく、即いて親しむべし。而して、人若し其の中に最も偉大なる宣言は何なりやと問はば、吾人は答へて言はむ、**貢の貨幣に就いての基督の答也と。**

靈性の是認

『**カイザルの物はカイザルに歸へし、神の物は神に歸へせ。**』あはれ是の一語こそは、**當に羅馬帝王の至上權に對する大折伏なるのみならず、凡べての地上の權力を永遠に否定し、人間靈性の獨立、自由、光榮、威嚴に對して、萬古動かすべからざる是認を與へたるものに非ずや。**如何なる宗教が如何なる福音を傳ふるとも、

理想は、恐らくは是の一言を超越し得べからざらむ。「予は基督教の信者が是の一言の力によりて、人生最大の祝福を自覺せむことを希望するもの也。」

何の患ふる所ぞや

人は患ふ、是の世に於て靈性の自由を神の國に捧ぐるものは、其の現實の生活に於て、支吾する所あるを奈何と。あゝ是れ何の患ふる所ぞや。迫害の歴史を飾れる幾多の義人が、平和と満足とを以て、是の疑問に答へたるを見よ。是れ人生に於て最も大いなる祝福に非ずや。

人の國と神の國

人の國は、遂に神の國に非ず。人性の無限なる要求に應じ得べき生活は、是の世のものに非ざるや、寧ろ明かなるに過ぐ。人は方便を説く。然れども是れ強辯のみ、假託のみ。事實は、長へに事實たるを如何せむ。誠虔なる信者よ、汝は果して其の眞信の聲に隨ひ、其の靈性の囁きに聽きて、尙ほ且つ是の兩者の兩全を

望み得る乎。「調和を口にし得べきか。」

靈性の支配

昔者、日蓮、鎌倉の殿中に宣言して曰く、『日蓮王土に生まれたれば、身は従ひ奉るとも、心は従ひ奉るべからず』と。是れ亦「まさしくカイザルの物はカイザルに。」神の物は神に歸へせよの意也。

あゝ貢を納むる者のみが、臣下には非ざるぞかし。吾人は、是の世に於て、別に靈の國土を有す。吾人は、是の靈性の支配の下に、如何なる人をも如何なる國をも征服し、君臨し、且つ審判し得る者なることを悟れ。是に於てか、吾人に自由あり、希望あり、榮光あり。所謂祝福せられたる生活、即ち是れ也。

世に最も醜なるもの

世に見苦しきもの何ぞ限らむ。中にも「神の國を建立すべき宗教家が地上の權力を調和して其の安逸を貪らんが爲めに、自家の眞信を枉げて世に阿ねる程、見苦

しきはなし。予は是の如き見苦しき事例を、現に我邦の多くの宗教家に於て實見せり。」國家的宗教と云ふが如き名目の下に、其の存在と昌榮とを誇らむとする宗教は、見苦しき哉。人よ、何ぞ言ひ得ざる、我が教は地上の一切の權力を超越すと。是の如くにして迫害せられむか、是れ迫害せられたる者の恥辱に非ずして光榮也、敗亡に非ずして勝利也。「迎ふべきものは國家にして、迎へらるべきものは宗教也。」彼等は、是の超絶の見地に據りて、安立する能はざる乎。「若し人生とは、是の世に於てのみ言ひ得べきものならば、吾等何の爲めにか宗教を要せん。永世の命と無限の祝福とを望む者何爲れぞ現世の榮辱に心を勞すること爾かく甚しき。」

嗚呼今の時、國家の面前に立ちて、神の物は神に歸へせと宣告し得る人あらば、吾人は趨つて、其の靴の紐を結びても彼れの門下とならむ哉。(三十五年五月五日)

◎吾人、曾て日蓮を評して謂へらく、「彼れを目して、日本のルートルとなさむ

は謬れり。彼れの偉大は、獨り基督のそれに較べ得べきのみ」と。人の是の言を以て、誇大に過ぎたりとするものあり。想ふに彼れは、其の基督を知りて、未だ其の口蓮を知らざる者乎。

◎日蓮と基督。是の二者の比較は、吾人にとりて一好題目なり。其の精細は他日を俟ちて、必ず世に問ふの期あるべし。今試みに、其の概要を録して讀者に示さむか。片言隻語、固より其の言はむと欲する所を盡くす能はず。是を以て、直ちに吾人の日蓮基督比較論と看做す無くむば幸也。

◎日蓮と基督との比較は、其の根柢に於て、佛耶兩教の比較を預想す。佛耶兩教の比較は、直に民族風土の上に基ける東西文明の比較たらざるを得ず。是の考察を離れて、漫に兩者の異同を別ち優劣を辨せむは、殆ど無意義の事たるを免れず。

◎一言以て是れを蔽へば、基督教は主として感情の教也、佛教は主として道理の教也。吾人は四福音書によりて現はされたる原始基督教に於て、何等後世神學家

の所謂る教理なるものを認むる能はず。基督自らは、唯其の高潔なる熱情に動かされて、直に人間の本然に訴へたるのみ。彼れ自らが所謂る識者に非ざるが如く、彼れは其の對者に於ても、何等の學識を要めざりき。彼れの教に聽きたるものは、例へばガリラヤ湖畔の漁父の如き、單純無垢なる自然の小兒なりき。畢竟彼れの言を解するには、哲學を要せず、傳説を要せず、唯是の小兒の如き心あれば、則ち足れりし也。是を以て、基督自らも小兒の如き心あるものに非ざれば、天國に入るに難しと訓へたりき。彼れが僅に三年の短日月の間に於て、能くこの世界の一大宗教の根據をきづき得たる所以のもの、亦其の教の簡單明瞭にして、直下に人情の本然に訴へたるが爲めに外ならず。是れを釋迦が五十餘年の永き説法によりて、僅に法華一乗の眞理を開顯し得たるに比すれば、彼此兩教の性質、亦おのづから劃然として明かなるを見る。

○佛教は、主として道理の上に立つ。領解の一途、固より直ちに無上道に達し

難く、其の根本に於て、信依の一念を預想するは、言ふまでも無しと雖も、而かも是の信依の一念をして大悟の域に徹底せしむるには、其の方便として、極めて煩瑣にして且つ難解なる道理の判釋を要す。是を以て八萬四千の教義、一代五時の説法、機に臨み根に應じて、成佛の道を示さざるなしと雖も、畢竟法華一乘の眞理を開顯せむが爲めの方便に外ならず。是の如き深遠なる教義は、基督の如く三年の間に説明し得べからず。されば釋迦の智慧廣大を以てして、其の成道の初めより、法華壽量品に於て顯本遠壽の妙理を現示するまで、實に五十餘年の長日月を要したりき。

◎日蓮は、彼れ自ら釋尊の正統と稱せし如く、其の教風に於て、佛敎の精神を最もよく體達したる一人なりき。されば、彼れと基督とを比較するに當つては、讀者は、先づ佛耶兩敎の特性を眼中に置かむことを要す。

◎然れども大いなる宗教家として、人類の救済を目的としたる事に於ては、兩者固より其の軌を一にす。大いなる宗教家に於て常に見る如く、其の心事の清朗

にして純潔なる、其の意志の勇猛にして大膽なる、其の事業の高明にして悲壯なる、而して現世以上に於て理想世界の實在を認め、人間靈性の醇化によりて、是の世界の實現に力めたる、彼れと此れと殆ど符契を合するが如し。兩者の比較に當りて、遭遇する幾多の異同は、是の點より説明し得べし。即ち多くの場合に於て、其の異は、佛耶兩教の根本的差別に本づき、其の同は、大宗敎家としての特性、即ち宗敎其物の普遍性に本づく。

◎吾人は、茲に這般の點に就て、精透なる論述を試むる能はざるを憾みとす。唯左に、兩者の史蹟に本づきて、其の性行の一斑を比較するを以て暫く足れりとせむ。

◎吾人は、先づ其の出世の因縁に關して、基督と日蓮との類似の太だ大なるに驚かざるを得ず。聖者東方に出でて天下を動かさむとの信念は、當時羅馬の天下に普く行はれし所にして、希伯來の預言者も、タチツス、スエトニウス等の歴史家等も共に證する所也。基督此の信念の間に生まれて、是の聖者の預言に應へぬ。

是れ佛滅後二千年と二千五百年との間に於て、末法付屬の行者たる上行菩薩、東北有縁の小國に出現せむと謂へる佛識と、頗る相似たらずや。

○基督、自ら是の預言を身現せむが爲めに、ペツレヘムに生まれたるを以て、米迦の預言を實にせるものとなし、又以賽亞の預言に應せむが爲めに、其の後ナザレに移りぬ。彼れがサマリヤの婦人に答へて、『我はメシヤ也』と言ひしは、日蓮が寺泊の羈宿に於て、上行菩薩の自覺を喚び起したると、心事何の異なる所ぞ。

○基督の前には、洗者ヨハネあり。日蓮の前には、傳教あり。彼れは、我れより後に來るものは、我れ其の轡の紐を結ぶにも當らずと預言し、此れは、末法の初め、近きにあり、法華一乘の行者將に現はるべしと預言しぬ。兩者出世の因縁は、驚くべく相似たり。

○基督の教を創むるや、預言者の其の郷に容れられざるを知りながら、先づ其の故郷ナザレに歸りて、神殿の前に立ちぬ。以賽亞第六十一章の破題を吟じて、

『是の録るされたる事、今汝等の前に應へり』と叫びし時、人皆、彼れ狂せりとし、斷崖の上より落さむと企てたりき。日蓮も亦十五年の沈思と勉學との後、其の新しき眞理を唱へむが爲めに、其の故山清澄に歸りぬ。彼れが七字の題目を唱へて、四個格言を喝破せし時は、彼れの郷黨故舊は、皆彼れを狂せりと想ひたりき。人神に近づけば、目して狂とせらる。古今東西、其の軌を一にせるを見よ。

〔○サマリヤの女子に、メシヤの任命を證したる基督の自覺は、寺泊の羈宿に、上行菩薩の付屬を證悟せる日蓮の心事と、何の異なるところぞ。基督は、學者と呼ばれず、智者と稱せられず、唯自らは人の子と稱し、人よりは神の子と稱せらるるを喜びき。日蓮は、自ら日本一の曲者と稱し、知解ちげに於て天台、傳教が千の一にだも及ばずと卑しめ、或は自ら旃陀羅の子と稱して、唯獨り上行菩薩の自信の中に、自家の天職と満足とを求めたり。超世の大理想を抱けるもの、おのづから然らざるを得ざる也。〕

○基督は、ポンテオ・ピラトに答へて、我れは王也、眞理を證さむが爲に臨めりと言ひしと、日蓮が平の左衛門尉に答へて、我れは日本國の主也、師也、親也、法華經の妙理を弘めむが爲めに、是の土に降りと言ひしと、精神口吻共に相似たり。無上道に安する者の言は、おのづから然らざるを得ざる也。

○何れの世に於ても等しく、村學究と道學先生とは、眞人の喜ぶ所に非ざりき。

基督は、當時の祭司學士の徒を罵倒して、曰へらく、長き袍にて歩き、衢にて禮せらるるを喜び、會堂宴席の高座を好み、長き祈禱に託つて寡婦の家を吞むかの學士等を慎めと。是れ日蓮が勸持品二十行の偈によりて、空閑納衣の當時の高僧學者等を痛罵したるの言と、何ぞ相似たる。僞人と眞人とは、常に相容れざる也。

○基督は、己れに隨はむとする者に訓へて曰く、行いてあらゆる汝の所有を賣り、歸りて十字架を取りて我れに隨へと。日蓮、亦其の弟子檀那等を誡めて曰く、謹んで所領を思ふ勿れ、父母親子を顧みる勿れ。常に是の臭骸を以て法華に捧ぐ

るの覺悟あれ。是れ砂を以て金に代へ、糞を以て米に替ふる也と。〔其の高調激越の聖語、共に永く靈界の指針となれるを見ずや。〕

◎基督が其の使徒等に示して、宣教の覺悟を訓ふるの一段は、四福音書中の最も光焰ある文字也。讀者若し去つて、日蓮が日進に與へたる、所謂教行證御書を一讀せよ。布教の方法固より相同じからずと雖も、其の地上一切の權力を否定して、眞理に殉ずるの精神氣魄に到つては、兩々相照して其の文字亦光明を競ふの觀あり。

◎基督が山上の説教は、當時の文明に對する大折伏なりき。續いて其の弟子等に訓へて、傳教の覺悟を示せる言の如きは、光焰萬丈、眞に今古の大文字也。日蓮が種種御振舞鈔に述べたる、佛滅後二千二百二十年餘以下の告示と、日進に與へたる教行證鈔とは、正に是れに匹敵すべきもの也。〔其の折伏の意氣に於ても、其の文字の壯大に於ても。〕

◎吾人が前に一言せし如く、貢の錢に關する基督の答は、實に四福音書中の最

大の宣言也。曰く、カイザルの物はカイザルに歸へし、神の物は神に歸へせと。是れ正に、日蓮が鎌倉の殿中に於て、身は従ひ奉るとも心は従ひ奉るべからずと斷言せると、恰も符契を合するが如し。是の一言を没し去らば、天下又基督教無く、佛教無し。

◎基督の預め受難の運命を知るや、歎じて曰く、あゝエルサレムよく、汝等の家は、墟址となりて遺されむ。唯我れ汝等に告ぐ、主の名によりて來るものは祝されむと。是れ、日蓮が蒙古の來襲に關する預言と太だ相近し。曰く、あゝ謗法の國家日本は滅びなむ。唯唯幸なるものは日蓮が徒なる哉と。嗚呼諸君よ。諸君は是の兩個の宣言に潜める偉大なる真理を如何にとか觀るや。

◎讀者、若し四福音書と高祖遺文錄とを比較せば、這般の類似太だ多きに驚かむ。吾人、亦煩を避けて是れを盡さざるべし。唯兩者の相反對せる諸點に就いて

は、更に一言の要あるを見る。

◎基督教は感情の教也。故に直覺的也、頓悟的也。秩序無く、系統無し。佛教は道理の教也。故に思辨的也、理論的也。秩序あり、系統あり。

◎基督は、パリサイ、サドカイ等の徒にあらず。又當時流布せる何等の知識にも觸れざる一無學者に過ぎざりしが、圖らずも洗者ヨハネが熱誠に感せられて、愛の道に悟り入りぬ。日蓮の學智は是れに反して、常に當代のみならず、永く古今に俯仰して、何人にも遜色無きものなりき。彼は清澄に學び、叡山に學び、前後十五年の間、一代聖教の疑惑を決せむが爲めに、天下の書を讀み盡して、終に法華一乘の眞理に達したり。」

◎基督は三年の間、一度びも學理を説きたる事無し。彼れ自らも當代の知識に離れたる一個の自然兒に過ぎざりき。今日の學者は、彼れが姦姪の女に對するの場合に於て、地に書けりと云ふの一事を以て、僅に其の文字を書し得たるを證す

る程也。日蓮は、全く是れに反せり。彼れは智見高邁、學殖豊富、當に當代の大智なりしのみならず、其の教相判釋の點に於て、古今に俯仰して多く遜る所無き也。是の點に於て、兩者の性格正に相反す。

〔◎布教の方便に於ても、二者全く其の軌を異にせり。基督は情に訴ふるを先とし、惱める人の心に慰めと望みとを與ふるを旨とせしが、日蓮は理を攻むるを旨とし、對者の邪義を破折して、自家の眞理を認識せしめずむば已まざりき。されば基督に従ふものは、情の門よりし、日蓮に従ふものは、智の門よりせり。〕

◎山上の垂訓の如何に感情的に、如何に直覺的に、又如何に詩的なるかを見よ。是れを日蓮が、所謂る四個格言の理論的思辨的なるに較ぶれば、其の立教の大本に於て、明かに兩者の相違を見る。

◎基督はヨルダンを離れてより、四十晝夜の間沙丘の中に彷徨ひしが、日蓮は叡山を下りて、八年の間天下の知識を求めたり。彼れの教を弘めたるや三年、此

れの法を説けるや三十年。

◎日蓮は、道理の辨折を以て對者を屈せむとす。是を以て、奇蹟の如きは、彼れの教に於て多く用ふる所無し。彼れの伊東の朝高の病を治し、其の母を復治せしめ、「或は龍の口に奇厄を免れ」しが如きは、「彼れが傳記中の奇蹟に類すれども、其の有無は」彼れの教に於て殆ど輕重する所無し。是の奇蹟を外にしたる基督傳が、如何に落寞たるべきかに比較せよ。又ラザロ復活の如き事實が、如何に其の教の傳播に力ありしかを思へ。

◎布教の方法「場所」に於て兩者は全く其の趣を異にせり。基督の教を説けるは聖京の殿堂に非ずして、ガリラヤの湖畔なりき。彼れに聽きたるものは、當時の學者に非ずして、多くは漁夫の類なりき。「彼れは其の感情の言葉に聽き得る者が、當代の俗智に汚されざる小兒の如き民衆なるべきを賢くも覺りしなり。」日蓮の法を弘めたるは、鎌倉霸府の中央にして、天下の碩學名僧の環視の間に於て、

其の法鼓を鳴らしたりき。「彼れは先づ當代最高の知識を屈服して、自家の教義に歸依せしめ、以て天下の民心を風靡せむとしたりし也。其の方法、基督が無智の民衆を感化して、社會を根柢より改造せむとしたると、正に相反す。日蓮のやり方は謂はば、演繹的也。基督のやり方は、謂はば歸納的也。」

◎基督は、遑あれば則ちカペルナウムの谷、ガラヤの湖畔、もしくはヘルモンの山に登りて、其の自然の美の間に、高潔なる感情を養ふを樂みしが、日蓮は動もすれば經藏を巡歴し、岩窟に隠れて、論述著作を事とせり。「遺文錄三十卷を讀めば、彼れが平生の研究に太だ力めたるを認むべし。」

◎基督が其の反對者に向ふや、多くは機智を以て其の正面の攻撃を避け、却つて省察によりて、悔悟を促すの態度を取れり。例へば、姦姪の女に關しては、汝等の中、罪無きものは、是れを打てと言ひ、貢の錢に關しては、カイザルの物はカイザルに歸へせと答へ、又何の權威ありて汝是等の教を爲すやとの、長老、學士等の難詰

に對しては、我れも亦一言汝等に問はむ、ヨハネが洗禮は何處よりぞ、天よりか人よりかと反問する等、何れも是の類ならざるは無し。然れども、日蓮は全く是れに反す。彼れは如何なる場合に於ても、正々堂々の論陣を張り、天下に檄して法論の對決を求めたり。彼れは常に公言して曰へらく、我れは眞理の在る所に就く、我が説誤らば、我れは直に是れを捨てむのみと。されば開目鈔の三大誓願に序して、『我が義、智者に破れられずば用ひじと也』と公言せり。

◎此の種の異同は、尙ほ甚だ多し。畢竟是れ、其の立教の精神のおのづから然らしむる所にして、妄に輕重是非の批判を許すべきに非ず。若し夫れ、東西の偉人を取つて、漫に其の異同を列擧するの無用の事たる、素より是れを知る。唯吾人は依て以て、這般外面の比較の下に伏在せる偉人其のものを看取し得れば則ち足る。

(三十五年六月。第四卷九三四—九四九)

(編者記附。『二蓮と基督』の第一は、全體としては無題にて公にせし者なり。故著者が廿五年四月十四日以後、毎週『太平洋』にて公にしたる『宗教談』は、大體にてこの二文に同じく、四月廿一日發行の分は、茲に掲げたる第一に、同廿八日及び五月五日の分は第二と大差なし。乃ち編者は、『宗教談』中よりこの二篇を補ひ、その他大同の分はこの二篇の儘に存して、『宗教談』を棄てたり。後より補ひたる分は角括弧〔 〕を附したり。

日蓮上人と日本國

(日蓮上人の眞面目を見よ)

一 讀者の疑惑

前號に掲げたる『日蓮と基督』と題する論文中には、恐らくは讀者の多數を驚かしたる、數行の文字ありたるべし。吾人は初めより是れを預期したりしが、果して天[●]外[●]生[●]と稱する人の寄書によりて、是の預期の空しからざることを知り得たり。是の如き疑惑を懐ける者は、決して天外生一人に限らざるべきを想へば、吾人は茲に是の疑惑に對して、明瞭なる解決を與へ置かざるべからず。而して讀者よ、是の問題の關はる所は、吾人にとりては意外に重大也。即ち歴史上の一宿疑たる日蓮對蒙古の問題も、是れによりて解釋せらるべく、而して是の解釋の結果として、日

蓮上人其人の通俗的概念は、一大刷新を被るべく、更に吾人の所謂日本の一大偉人としての上人は、茲に初めて其の本來の面目を發揮し來るべし。

天外生の寄書は頗る長しと雖も、其の要は左に記するが如し。

樗牛兄足下。余は足下の指導に隨ひて、日蓮の研究を初めたる一人なり。余は足下と共に日蓮の偉大を悟り得たることを欣ぶ者也。然れども足下近時の文章は、余が研究の前途に一疑團を齎らせり。果して足下の言の如くむば、余は恐る、日蓮に對する余の態度は、又前日の如くなるを得ざらむことを。

近刊の「太陽」載する所の『日蓮と基督』と題する足下の論文中に、謗法の國家日本は滅ぶべし、唯日蓮の徒のみは幸ひなるかな云々の文字あり。是を以て觀れば、日蓮は日本の滅亡を意とせざりしのみならず、却て謗法の國土としてその滅亡を希ひし者に非ざるか。果して然らば、日蓮こそは日本國の大不忠漢に非ざるか。余は足下と共に、日蓮の人物を景慕す。然れども、其の

本國の滅亡を憂へざる不忠漢は、余の道義的感情と相容れざる也。日蓮果して足下の言ふ如き人物なるか。足下是れを認めて、尙ほ且つ其の偉大を讚美せんとするか。足下と余と其の執る所の、或は相容れざるものあらんを恐る。然れども余の見る所によれば、日蓮は決して足下の言ふ如き、亡國を意とせざる不忠漢に非ざるなり。是れ獨り余の而か言ふのみならず、其の忠君愛國の精神に於て、本邦諸高僧の間に一異彩を放てるは、日宗歴代の諸高僧の齊しく認むる所なり。日蓮宗徒の或者が自宗を標榜して、特に國家的宗教と稱ふるもの、亦必ずしも不當の見に非ざるを想ふ。足下燃犀の識、必ずや這般の觀察に一頭地を抽けるものあらん。余は足下の所謂『斷片』ならざる論文に於て、其の委曲を知り、以て是の一大疑惑を解かんことを希ふ。云々。

想ふに天外生の疑惑は、即ち多數の讀者の疑惑ならむ。吾人は茲に最も簡明に是の問題に答へ、延いて左の條々に就いて、吾人の見る所を陳せむと欲す。

- 一、日蓮は、今日の所謂る忠君愛國主義に反對せり。
- 一、日蓮の説を以て、國家主義と呼ぶは可也。然れどもそれは全く理想上の意味に解すべし。今日の所謂る國家主義とは相容れず。
- 一、佐渡以後の日蓮の進退——身延退隱の原因。
- 一、蒙古襲來に對する日蓮の態度。
- 一、日蓮には蒙古調伏の形迹無し。元寇記念像の建立は無意義也。

二 日蓮は大不忠漢也

天外生の疑惑に對する吾人の答辯は、極めて簡單也。曰く、日蓮は生の疑へる如く、日本國の滅亡を意とせざりし生の所謂る大不忠漢なりき。然れども驚くなかれ。吾人の是の語を誤らざらむと欲せば、讀者は先づ『國』てふ文字の眞意義を解せざるべからず。

此世に於て最も大いなるものは、必ずしも國家には非ざるぞかし。最も大いなるものは法也、信仰也。而して法に事ふるの人も、亦時としては國家よりも大いなることある也。是の如き人にありては、法によりて淨められたる國土に非ざれば、眞正の國家に非ざる也。日蓮は即ち是の如き人なりき。

世の日蓮の國家主義を説くもの、吾人數々是れを聞けり。然れども畢竟是れ最員の引き倒しのみ。嗚呼國家的宗教と云ふが如き名目の下に、自家宗門の昌榮を誇らむとする僧侶は禍なる哉。斯かる俗惡なる僧侶の口より、其の國家主義を讚美せられつゝある日蓮上人は氣の毒なる哉。

日蓮の國家主義を説くもの、必ず先づ立正安國論を引く。曰く、『國を失ひ家を滅ぼさば、何れの處にか世を遁れむ。汝須らく一身の安堵を思はば、先づ四表の靜謐を祈るべし』。又曰く、『夫れ國は法に依りて昌え、法は人に依りて重し。國亡び人滅せば、佛誰れか崇むべき、法誰れか信すべしむや。先づ國家を祈りて須らく

佛、法、を、立、つ、べ、し。』。是の如きは吾人を以て見れば、例へば一昨日御書に於ける、『日蓮は生を此土に得たり。豈我が國を思はざらむや』と謂へると等しく、尋常一般の辭令のみ。是れによりて直に其の國家主義を論せむとする、寧ろ大早計と謂はざるべからず。

法は其の對境として國と人とを要す。然れども如何なる國も如何なる人も、悉く皆法の對境たり得べきに非ず。惡國は膺懲せざるべからず、惡人は戒化せざるべからず。是の如くにして適法の國と人とを造る、毫も怪むべきに非ず。日蓮は眞理の爲めに國家を認む、國家の爲めに眞理を認めたるに非ず。彼れにとりては眞理は常に國家よりも大也。是れを以て彼れは眞理の爲めには、國家の滅亡を是認せり。否、是の如くにして滅亡せる國家が、滅亡によりて再生すべしとは、彼れの動かすべからざる信念なりし也。蒙古襲來に對する彼れの態度の如き、亦實に是の超國家的大理想に本づく。

立正安國論は、日蓮立宗の大論策なりと雖も、其の國家觀は、尙ほ遙に佐渡以後の諸文章の緊當剴切なるに及ばず。畢竟其の心、未だ其の境に到らざるの致す所か。何ぞ其の明瞭を捨てて彼の糞稜を執るの理あらむや。況や國家主義者流説く所の『國は法に依りて昌え、法は人に依りて貴し』と云へる文意は、宗教を離れたる國家の存在を否定せるものに外ならざるをや。偏に文字の外觀によりて、故らに偉人を誤る、罪甚だ大なりと謂ふべし。

且つ夫れ生を此土に受けたるが故に、是の國を思ふと謂ふが如きは、輕めて淺薄なる愛國者と謂はざる可からず。若し彼れをして英國若しくは露國に生まれしめば、則ち直に英露の愛國者たるに過ぎざるべし。何ぞかの丙丁童子の國家觀と相似たる。英國史上の愛國者の最も大いなる者、吾人先づ指をクロムエルに屈す。而して、彼れが英吉利及び其の國民を愛したるは、其の生國たるが爲めに非ずして、上帝の攝理を負へる神聖なる選民なりてふ、偉大なる信念に基きたりき。是の

信念ありて初めて、是の眞正の愛國心あり。

三 日蓮は眞正の愛國者也

日蓮の理想は、法華經の眞理を宇内に光被せしむるにあり。是の大理想の下に活動せる彼れにして、若し特に日本國を愛したりとせば、そは生國の因縁以外に於て、眞理其物と是の國土との間の或る必然的關係に基かざるべからず。而して彼れ自ら『日本乃至一閻浮提』(報恩抄)と言へるを以て見れば、彼れが此の國土に於て、是の必然的關係を認めたるは、疑ふべからざるが如し。然らば則ち、是の必然的關係とは何ぞや。他無し、法華經本門に於て末法化導の寄託を受けたる上行菩薩出現の國土は即ち日本國なる事、及び上行菩薩は日蓮其人に外ならずとの自覺、即ち是れ也。

吾人は、クロムエルを以て眞正なる愛國者なりとすると同一の意味に於て、日

蓮を眞正の愛國者なりと認む。是の如き意味に於ての愛國心は、和氣清麿、楠木正成、乃至北條時宗等の夢にだも會得し能はざりしところ、恐らくは二千五百年の歴史に於て、日蓮獨り是れを會得したりしならむ。吾人が清麿、正成、時宗等を措いて、特に日蓮に歸依するものは、畢竟是が爲めのみ。

是の如き愛國心の要求する所は、唯是の國土の究竟の榮光のみ。時の政權に奴隸たらざるの故を以て、直に擬するに叛逆の名を以てするは、彼れの爲さざる所也。彼れは、時として當路の君主に従順ならざることあり。天の名によりて、查斯一世を斷頭臺に上せたるが如きは、其の例也。彼れは、時として所謂滅亡をば甘受することあり。彼れは眞理の命する所には、決して滅亡なるもの無きことを確信すればなり。世俗の道德は、時として種々の惡德の名によりて、彼れを呼ぶことあらむ。然れども最終の勝利は、常に眞理の味方なることは、彼れの信じて疑はざる所也。是の如くにして、彼れは一世の耳目に逆らひ、其の信念に殉する也。

再び言はむ。日蓮は二千五百年の日本歴史中に於て、是の如き愛國心を有したる殆ど唯一の偉人也。丙丁童子の國家主義は、請ふ、去つて道學先生と共に是れを談せよ。吾人の日蓮は則ち與らず。

四 日蓮と日本國

吾人は茲に、佐渡以後の進退と其の遺文とに據りて、彼れが日本國に對して、如何の觀念を有せしかを明かにし、併せて、蒙古襲來に對する彼れの態度に就いて、述ぶる所あるべし。

日蓮流されて佐度に在るや、地頭本間の六郎左衛門に向つて曰へらく、(種種御振舞御書)

吾が言を用ひずば、國必ず亡ぶべし。日蓮は幼若なれども、法華經を弘むれば釋迦佛の御使ぞかし。僅の天照大神、正八幡なむと申すは、此の國には重けれど、梵、釋、日月、四天に對すれば小神ぞかし。されども此の神人なむと

を失^きまぢぬれば、只の人を殺せるには七人半なむと申すぞかし。太政入道、
 隱岐法皇等の亡び給ひしは是也。此れは彼れに似るべくも無し。教主釋尊の
 御使なれば、天照大神、正八幡宮も頭を傾ぶけ、手を合せて地に伏し給ふべ
 き事也。法華經の行者をば、梵釋左右に侍り、日月前後を照し給ふ。かゝる日
 蓮を用ひぬるとも、あしく敬はば國亡ぶべし。いかに況や、數百人に憎まれ、
 二度まで流しぬ。此國の亡びむこと疑ひ無かるべけれども、且しはらく禁とがめを爲し
 て國を助け給へと日蓮がひかふればこそ、今までは安穩あんゑんにありつれども、法
 に過ぐれば罰あたりぬる也。又此度も用ひずば、大蒙古國より打手向うて日
 本國亡なさるべし。云々。

是の如きは今の道學先生にとりて、眞に驚心駭目の文字なるべし。天照大神、
 正八幡を目して小神となし、自らは教主釋尊の御使なれば、天照大神、正八幡も
 叩頭合掌して拜跪し給ふべきこと也と言ひ、吾が言を用ひずば、國必ず亡ぶべし

と斷言す。日蓮そもく何の權威ありて、是の不敵の言を爲すや。是れ道學先生等の怪みて、而して解し能はざる所也。

然れども怪むを休めよ。日蓮にとりては、是の如きは毫も奇矯の言にあらじ。

彼れにして苟も國家神祇に及ばむ乎、言の此に到る、寧ろ理論の自然のみ。畢竟三界は悉く皆佛土たり、日本亦其の國土と神明と萬民とを併せて、教主釋尊の一領域たるに過ぎず。苟も佛陀の悲願に適はず、眞理の榮光に應へざるものは、其の國土と民衆と、共に膺懲し、改造せられざるべからず。日蓮釋尊の敕使として、『國必ず亡ぶべし』と宣言せる、毫も怪むに足らざる也。三界既に佛土たり。天照大神、正八幡の諸神も亦佛の眷屬のみ。昔者、釋尊靈山の會上に於て、地涌の菩薩を召集し、三千世界の佛神を集めて、末法化導の重任を上行菩薩に寄託したりし時、天照大神、正八幡等も亦世尊の告敕に應じて、末法行者の影護を誓ひたる八萬恒河沙衆の中にあり。

今夫れ、一代佛敎の大歸趣を體現せる上行菩薩は、己れ自らに外ならずとの自覺に住せる日蓮よりして是れを觀れば、天照大神、正八幡の如きは、固より言ふに足らざるのみ。『頭を傾ふけ手を合せて地に伏し給ふべき也』と宣言する、亦毫も怪むを要せざる也。

五 身延隱退の理由

日蓮の國家に對する觀念は、佐渡以後、元寇の時機漸く迫り來りたる頃より、愈々明かに發表せられたり。史を案するに、文永五年以降、元使數々來りて連りに侵逼の禍心を漏らしぬ。日蓮救されて佐渡より還れる年、即ち文永十一年の頃に及びては、禍機漸く熟して、國家の大事旦夕に逼りたるの觀あり。暴慢無禮の平の左衛門が辭禮を厚うして、來襲の期を日蓮に問ひたるが如き、亦以て幕府上下の狼狽を想ふに足る。是の時に際し、門葉歡呼の中に鎌倉に歸りたる日蓮が、

俄に法鼓を鎮め、幔幢を收めて、甲州身延の深山に退隱したるの事實は、頗る注意すべしとなす。借問す、日蓮は是の國家多事の前途を望みて、事に救済に従はず、却て道を世外に避けたるは、果して何の思ふ所ありて然りしや。是れ疑問也。

從來の日蓮傳の告ぐる所によれば、是の理由は極めて簡明也。即ち日蓮鎌倉に還り、時の執權時宗に説きて、妙經の歸依を勧めしも容れられず。是れ彼れが前年より幕府に上りたる、所謂る第三次の諫曉也。彼れ是に於て、歎じて曰く、嗟呼甚しい哉、我が化の及ばざることや。三度び諫めて聽かれざれば逃る、是れ古の禮也。嘉遯の時方に至れり。我れ此の地を去るべき也。——註書讀、別頭統記、日蓮大士眞實傳等の諸書録するところ、皆是の意に外ならず。而して日宗歴代の碩學、亦是の意を體認して、敢て違はざるものの如し。

然れども、吾人は是の文意を信する能はず。是れを日蓮出世の因縁に見、上行菩薩の自覺に見、立宗以來二十餘年の行動に見て、『三度び諫めて聽かれざれば逃る』

と云ふが如き理由によりて、其の從來の事業を放擲するが如きは、吾が日蓮に於て決して有り得べからざる進退なるを認む。彼れの順ふべきものは、釋尊の告敕あるのみ。其の一生の事業は、靈山寄託の大使命を果すにあるのみ。國土茲にあり、衆生茲にあり。末法化導の大悲願を貫くに於て、日も亦足らずとすべし。北條時宗何者ぞ、所謂る『わづかの小島の主』に非ずや。其の諫の聽かれたると聽かれざると、彼れに於て何の輕重する所ぞ。三たび諫めて聽かれざるが故に去ると謂ふが如きは、腐儒循臣にして是れを言ふ、可也。上行菩薩の使命を自負する末法の導師の口にすべき言に非ず。是を以て吾人は斷ず、是の如きは流俗に對する一片の辭柄のみ、日蓮の眞意決して茲に存すべからざる也。

然らば、日蓮の眞意何處にか存すと爲す。吾人斷じて曰く、是れ蒙古の襲來を預想せるが爲めのみと。其の理由概ね左の如し。

日蓮既に世尊の告敕を擔へる末法の導師也。既に又久遠なる佛識の攝理に基き

て、東方有縁の小國に降り、妙經の眞理を流布せむが爲めに、二十餘年の迫害を
 忍受しぬ。而して國君其の説に隨はず、國民依然として邪法に沈湎せり。そもそ
 も佛敎昭々として動かすべからず、而して百魔競うて其の途に横はることは是の如
 し。事體遂に變せざるを得ざる也。即ち佛は是の謗法の國土を膺懲せむが爲めに、
 茲に降魔の軍を起して此國に臨まむとす。蒙古の襲來は、即ち是れ也。是を以て、
 日蓮の眼より觀れば、蒙古は外敵の假面を被ふれる佛陀の遠征軍のみ。彼れが二
 十餘年間呼號し來りたる眞理の聲に目覺めざる謗法の國民は、是の遠征軍の劍に
 流るべき自己の血潮を以て、自ら淨めざるを得ざる也。是の如くにして國は或は
 亡びなむ、民は或は殺されなむ。唯眞理の光、是れによりて輝き、妙經の功德新
 國土を光被するを得ば、又恨む所無かるべき也。日蓮は日本國の上に懸かれる是
 の一大慘劇の運命を忍受せむが爲め、鎌倉を去りて身延の幽谷に退隱したるのみ。

吾人の説を以て、臆測に過ぎたりとするものあらむ。然れども是の如く思料す

るに非ざれば、日蓮てふ人物は、遂に解釋すべからざる也。良しや文獻の明かに徴すべきもの無しとするも、彼れが前後の經歷より其の遺文に徴證すれば、吾人の斷案は、牢乎として動かすべからざるものあるを覺ゆ。讀者若し煩を厭はずむば、左に抜く所の文字を一讀せよ。

蒙古國の事既に近附いて候歟。我が國の亡びむことは淺ましけれども、是だにも虚事になるならば、日本國の人々愈々法華經を謗じて、萬人無間地獄に墮つべし。彼(蒙古)だにも強よるならば、國は亡ぶとも謗法は少くなりなむ。譬へば灸治をして病を癒すが如く、鍼治にて人をなほすが如し。當時は歎くとも後には悦び也。云々。(異體同心事)

亡國は誠に悲むべし。而かも此の事無くむば、日本は永く謗法の國土に墮したるべし。即ち是れ、一時の悲嘆にして永遠の歡喜也。日蓮是の危機に際し、暫く其の生國を蒙古の膺懲に任せ、身は身延に退隱して、忍んで機縁の熟するを待つ。

心○事○太○だ○推○察○し○難○か○ら○ず○。所○謂○る○異○體○同○心○事○は、彼○れ○が○身○延○に○入○り○て○よ○り○三○個○月○の○後○、即○ち○文○永○十○一○年○八○月○の○初○め○、其○の○檀○越○の○太○田○殿○に○復○す○る○の○書○に○し○て○、彼○れ○が○當○時○の○心○情○を○最○も○明○瞭○に○言○明○せ○る○も○の○也○。

身○延○退○隱○後○の○彼○れ○の○文○書○に○は、蒙○古○の○事○を○言○へ○る○も○の○甚○だ○多○し○。文○永○十○一○年○十○月○は○蒙○古○の○軍○太○宰○府○に○寇○し、大○に○壹○岐○、對○馬○を○劫○掠○し○た○る○時○也○。同○じ○く○十○一○月○、日○蓮○が○南○條○七○郎○二○郎○に○復○す○る○書○に○曰○く、

抑○ゝ○日○蓮○は○日○本○國○を○助○け○む○と○深○く○思○へ○ど○も、日○本○國○の○上○下○萬○人○一○同○に○國○の○亡○ぶ○べ○き○故○に○や、用○ひ○ら○れ○ざ○る○上、度○ゝ○仇○を○爲○す○。さ○れ○ば○力○及○ば○ず、山○林○に○交○は○り○候○。又○大○蒙○古○國○よ○り○寄○せ○て○候○と○申○せ○ば、皆○人○、當○時○の○壹○岐○、對○馬○の○様○に○な○ら○せ○給○は○む○こ○と、思○ひ○や○り○候○へ○ば、涙○も○留○ま○ら○ず○。云○々○。

是○の○文○、亦○日○蓮○が○退○隱○の○事○情○を○暗○示○し○て、太○だ○分○明○な○る○者○也○。讀○者○須○ら○く、『力○及○ば○ず○山○林○に○交○は○り○候○』の○一○句○に○注○意○せ○ら○る○べ○し○。

六 蒙古襲來に對する日蓮の態度

蒙古の襲來に對する彼れの態度、亦多言を要せざる也。彼れはクロムエルの如く、一切人世の事凡べて佛意によりて攝理せらるることを確信せり。蒙古は彼れにとりては、政治上の國敵にあらずして、佛意によりて遣はされたる膺懲の義軍也。日本の國民として、其の生國の滅亡を目睹するは、彼れの忍びざる所なりと雖も、彼れは其の精靈の本貫に於て、元と是れ佛子法臣たり。世尊の告敕に基ける一切の運命は、彼れに於て何等反抗するの理由あること無し。即ち彼れは蒙古の襲來に對して、所謂る愛國者流と其の歩調を異にせざるを得ざる也。彼れ乃ち明言して曰く、

是れ梵天、帝釋、日月、四天の、彼の蒙古國の大王の身に入らせ給うて責め給ふ也。日蓮は愚かなれども、釋迦佛の御使、法華經の行者也と名乗り候を用ひ

ざらむだにも不思議なるべし。其の失に依て國破れなむ。云々。(一谷入道御書 遺文錄八卷)
 又曰く、

後生は扱置きぬ。今生に法華經の敵となりし人をば、梵天、帝釋、日月、四天罰し給ひて、皆人に見懲りさせ給へと申し付けて候。日蓮法華經の行者に有る無しは、是にて御覽あるべし。斯う申せば、國主等は此法師の威すと思へる歟。敢て惡みては申さず。大慈大悲の力、無間地獄の大苦を今生に消さしめむと也。云々。(王舎城事 遺文錄十七卷)

此の文中に所謂る今生に法華經の敵となりし人とは、即ち日本人也。日蓮自ら明言して梵、帝、日月、四天に對して、是の日本人の懲罰を要請したりと曰ふ。取りも直さず。蒙古の襲來は、日蓮自らの希望を實現せる者に外ならず。彼れは是れに反對し、若くは是れを咒詛すべき何等の理由をも有せざる也。隨つて彼れは其の生國の滅亡を忍受するを以て、所謂る無間地獄の大苦を今生に消さしむる「大慈

大○悲○の○力○』○と○な○し○、○獨○り○彼○れ○の○み○な○ら○ず○、『○日○本○國○守○護○の○天○照○大○神○、○正○八○幡○等○も○、
 争○で○か○斯○か○る○國○を○ば○助○け○給○ふ○べ○き○。○急○ぎ○／＼○治○罰○を○加○へ○て○、○自○禍○を○免○れ○む○こ○と○こ
 そ○勵○み○給○ふ○ら○め○』○(○下○山○御○消○息○)○と○思○斷○せ○り○。

文永十一年五月身延退隱以後の日蓮の文書には、是の思想を現はせるもの一にして足らず。一々引用の煩を避けて、單に其の主なる書目を列舉せむ。讀者の就いて参照せられむことを望む。

- | | | | | |
|----------|----------|-----------|---|--------|
| 一、顯立正意鈔 | (遠文錄十六卷) | 二、撰時鈔 | 下 | (同十卷) |
| 三、高橋殿御返事 | (同十卷) | 四、蒙古使御書 | | (同十卷) |
| 五、下山御消息 | (同廿二卷) | 六、賴基陳狀 | | (同廿三卷) |
| 七、兵衛志殿御書 | (同廿三卷) | 八、本尊問答鈔 | | (同廿五卷) |
| 九、聖人御難事 | (同廿七卷) | 十、筒御器鈔 | | (同廿八卷) |
| 十一、上野鈔 | (同廿八卷) | 十一、妙一女御返事 | | (同廿八卷) |

三、智妙房御返事 (同廿九卷)

四、諫曉八幡鈔 (同廿九卷)

五、富木入道殿御返事 (同三十卷)

七 日蓮が蒙古を調伏せりとは妄誕也

蒙古の襲來に對する日蓮の態度は、略々右に説けるが如し。然るに所謂る國家主義によりて、自家宗門の昌榮を望みたる日蓮宗の俗僧等は、其の守護國家論と立正安國論とによりて、日蓮を一個の道學先生的愛國者に墮落せしめたるに慊らず、更に蒙古の襲來に對して、調伏の祈禱を行じたりとの事實を捏造して、國民の耳目を迎合せむと力む。荒誕無稽も亦甚しと謂ふべし。

日蓮果して蒙古を調伏したりや、否や。是の如き疑問は、果して日蓮の人物性行を知る者の念頭に起り得べきものなりや。是の如き疑問の起りたる事、此の一事既に、日蓮に關する知識の皆無を證する者に非ずや。是の如き問題に容喙するは、

吾人にとりて、是の上も無き馬鹿氣たる事也。

二十餘年の間、法華經の行者を迫害し、三度びの諫曉にも耳を傾ぶげざるは、北條氏也。其の配下に生活して謗法の邪宗に傾倒し、末法の導師を苦めたるものは、日本人也。蒙古は梵帝、日月、四天の力を假りて、是の謗法の國土を膺懲せむが爲めに來らむとす。其の來るは佛意也、攝理也。將た法華經の行者たる日蓮其人が、生國の安寧を犠牲として佛天に祈りたる大悲願也。然るに彼れを調伏すとは何の意ぞ。日蓮にとりて日本は大い也、然れども眞理は更に大い也。調伏論者は、祖書綱要刪略を以て典據となす。其の文に曰く、

至弘安四年六月、作小蒙古書。其旨乍反前來。所以然者。是時時宗、賴綱既發悔心。委高祖于蒙古降伏之事故也。云々。(卷二、蒙古退治本化威力章)

是の如きは曲解もしくは誤解のみ。毫も典據とするに足らず。所謂る蒙古御書(遺文錄卷三十)は、蒙古襲來の事實が日蓮年來の預言に的中せるを以て、其の

門弟檀越等の中に、連りに其の師の達見を吹聴するものあるを見、特に門下に牒して是れを戒めたるに過ぎず。文意平明、毫も疑義を留めず。所謂る『乍ち前來に反す』と云ふが如きは、吾人何の意たるを解せざる也。況や時宗、頼綱等が悔悟の實跡は、日蓮一代中に一度びも現はれず。況や蒙古調伏の事を、日蓮に委ねたりと謂ふが如きは、毫も證據無き事也。かゝる妄誕を構成して、恣に千古の偉人を評隲す、畢竟小人己れを以て他を料るの罪のみ。夫の最教寺(東京本所押上)傳ふる所の旗曼陀羅と稱する物の如き、後人俗を欺くの僞物たるや、固より論無き也。

近年元寇記念像と稱し、日蓮の銅像を博多に建てむとする者あり。是れ亦蒙古調伏の妄誕に依據せる妄舉のみ、無意義も亦甚しと謂ふべし。無智の俗人にして是の事ある、尙ほ姑く恕すべしとせむ。堂々たる妙宗の碩學相率ゐて是の没分曉の事を爲す。嗚呼日蓮の世に知られざる、蓋し又久しい哉。

*

*

*

*

*

是の文は素、個條書に過ぎざりしを、後に讀者の見易からん爲めに、節を分ちて小題を附せり。故に文義間々貫通せず、説明亦簡單に過ぎ、一篇の論文として體裁を成さざる所あるを免れず。讀者、其の意を取りて其の文を取る無くむば幸也。

(明治三十五年六月二十二日。 樗牛生)

(同七月公。第四卷九一三—九三三)

*

*

*

(編者附記。樗牛が卅四年十一月に日蓮上人の研究を起して、三月に『日蓮上人とは如何なる人ぞ』を草するまでには、少くとも高祖遺文録三十巻を通讀し、尙ほ『日蓮上人と日本國』を草するに方りては、三月以後少くとも一回全部を通讀して、上人の國家觀に關する點に特に附箋を施したり。右文中に十五の參考を掲げたるはその結果にして、左に當時の附箋ある箇條を摘録す。樗牛が田中先生より借覽したる遺文録は、その後、杉家、信策の許を轉々して、編者の保管に歸したるは、四十二年秋なり。さればその間に、附箋の脱落したるものなきを保せざれども、兎に角現存の分を茲に示し、一は以て樗牛が立論の用意を示し、一は又上人遺文の面影を讀者に傳ふる便に供す。單に附

箋とあるは、白紙にして、その下に文字あるは、附箋に記したる文句なり。又文題の下に括弧内に示せる數字は、縮刷御遺文初版の頁附なり。木版本の遺文録を藏せる人は少かるべきを以て、之を以て参照の便に供す。又引用の文句は、大抵附箋を中心として、前後にて一節の意味をなせる分を節録したるものなり。

三卷二八右、一生成佛鈔 (二一七一—二一八)

然れば佛敎を習ふといへども、心性を觀せざれば、全く生死を離るる事なきなり。若し心外に道を求めて萬行萬善を修せんは、譬へば貧窮の人、日夜に隣の財を計へたれども、半錢の得分なきが如し。

附箋

十一卷三九左、寺泊御書 (七〇〇)

日蓮は半八十萬億那由陀の諸菩薩の代官として半之を申す。

附箋

十一卷四一左、富木入道殿御返事 (七〇二)

一大事の祕法を此の國に初めて之を弘む、日蓮豈その人にあらずや。

附箋

同、 (七〇三)

日蓮粗之を勘ふるに、是れ時の然らしむる故也。經云有四導師一名上行。云々。

附箋

十二卷三左、生死一大事血脈鈔 (七四四)

上行菩薩、末法今の時、此の法門を弘めんがために御出現之あるべき由、經

文に見え候へども、如何候やらん。上行菩薩出現すとやせん、出現せずとやせん。

附箋 (廿五年三月十五日附の郵便紙)

十二卷七右、開目鈔上 (七四八)

此等の賢聖の人々なりといへども、過去を知らざること、凡夫の脊をみず、未來をかながみざること、盲人の前をみざることが如し。

附箋

十二卷三一左、開目鈔上 (七七二)

而るに法華經の第五の卷、勸持品の二十行の偈は、目蓮だにも此の國に生まれずば、殆ど世尊は大妄語の人、八十萬億那由陀の菩薩は、提婆の虚誑罪にも

墮ちぬべし。

附箋

十二卷六四右、開目鈔下 (八〇四)

日蓮といひし者は、去年九月十二日子丑の時に、頸はねられぬ。此れは魂魄、佐渡の國にいたりて、返る年の二月、雪中にしるして。有縁の弟子におくれば、おそろしくておそろしからず。

附箋

十三卷二一右、得授職人功德法門 (八四六)

釋迦既に妙法の智水を以て日蓮の頂に灌いで、面授口訣せし給ひ、……………。

附箋

十四卷六と七、祈禱鈔（九〇〇）

されば法華經の行者の祈る祈は、響きの音に應ずるが如く、影の體かたちに副へるが如く……明鏡の物の色を浮ぶるが如し。世間の法には我が思はざる事も、父母主君師匠妻子、疎からぬ友なんどの申す事は、恥ある者は、意こころに合かなはずとも、名利の爲めに壽いふちを失ふ事侍るぞかし。何いかに況や、我が心より起りぬる事は、父母主君師匠なんどの、制止を加ふれども成す事あり。

附箋

十四卷一〇左と一二、祈禱鈔（九〇四）

佛は人天の主、一切衆生の父母也、而かも開導の師也。父母なれども、賤き父母は、主君の義を兼ねず、主君なれども、父母ならねば、おそろしき邊もあり。父母主君なれども、師匠なる事はなし。諸佛は又世尊にておはせば、主君

にておはせども、娑婆世界に出でさせ給はざれば、師匠にあらす。又其中衆生こちゆうしゆじやう悉是吾子しつせごしと名乗らせ給はず。釋迦佛獨り主師親の三義を兼ね給へり。然れども四十餘年の間は、提婆達多を罵り給ひ、諸聲聞を訾そしり、菩薩の果分の法門を惜み給ひしかば、佛なれども、よりくは天魔破旬の我等を惱ますかと疑ふ。人には云はざれども、心中には思ひし也。此の心は、四十餘年より、法華經始まるまで失せず。而るを靈山八年の間、寶塔虛空に現じ、二佛日月の如く並び、諸佛大地に列なり、地涌千界の菩薩、虛空に星の如く列なり給ひて、諸佛の果分の功德を吐き給ひしは、寶藏を開いて貧人に與ふるが如し。

附 箋

十六卷二九右、異體同心鈔 (一〇五五—一〇五六)

蒙古の事既に近附いて候か。我が國の亡びん事はあさましけれども、是だに

もそら事になるならば、日本國の人々愈々法華經を謗じて、萬人無間地獄に墮つべし。彼だにも強よるならば、國は亡ぶとも謗法は少くなりなん。譬へば灸治やいしとをして病を愈なほすが如く、鍼治はりたてにて人をなほすが如し。當時は歎くとも、後には悦び也。

附 箋

十六卷三二左、曾谷人道殿御返事 (二〇六〇)

章首に附箋

日蓮ノ預言

十六卷三五左、上野殿御返事 (二〇六三)

日本國の上下萬人一同に、國亡ぶべき故にや、用ひられざる上、度々あだを

なさるれば力及ばず、山林に交はり候。又大蒙古國より寄せて候と申せば、申せし事を御用ひあらば、いかになんとあれば也。皆人、當時の壹岐、對馬の様にならせ給はん事、思ひやり候へば、涙も留まらず。

附 箋、日蓮と蒙古

十六卷四六右、顯立正意鈔 (二〇七四)

設たとひ日蓮、富樓那ふるなの辯を得て目連の通を現すとも、勸かんがふる所當らずば、誰か之を信せん。去いぬる文永五年に蒙古國の牒狀、我朝に渡來する所、……………。

附 箋、日蓮と預言

十七卷、九と一〇、新尼御前御返事 (二〇九〇—二〇九二)

佛法は眼前きまななれども、穢きたなければ顯はれず、時至らざれば弘ほふにまらざる事、法爾

の道理也。……今この御本尊は、教主釋尊の五百塵點劫より心中に納めさせ給ひて、世に出現せさせ給ひても、四十餘年、其の後、法華經の中にも、迹門をば過ぎて、寶塔品より事起つて、壽量品に説き顯はし、神力品、屬累品に、事極まりて候ぞかし。

附 箋

十七卷六二右、王舍城事 (二一四七—二一四八)

是より後も御覽あれ。日蓮をそしる法師原が日本國を祈らば、彌々國亡ぶべし。……後生はさて置きぬ、今生に法華經の敵となりし人をば、梵天、帝釋、日月四天、罰し給ひて、皆人に見こりさせ給へと申し付けて候。

附 箋、日蓮亡國咒詛

十七卷、六二と六三、法蓮鈔 (二一四八)

章首に附箋

十八卷九左、一ノ谷入道御書 (二一八二)

是は梵天、帝釋、日月、四天の、彼の蒙古國の大王の身に入らせ給ひて責め給ふ也。日蓮は愚かなれども、釋迦佛の御使、法華經の行者也と名乗り候を用ひざらんだにも不思議なるべし。その失とがに國破れなん。……。

附箋、日蓮は亡國を意とせず

十八卷六六左、撰時鈔 (二二四〇)

此等の大謗法の根源を糾す日蓮に怨みをなせば、天神も光りを惜み、地祇も怒らせ給ひて、災天も大に起るなり。

附 箋、日レンと亡國

十九卷二三右、高橋殿御返事 (一二七六)

當時の念佛者、持齋者は國を亡ぼし、他國の難を招く者にて候。日本國の人々は一人もなく、日蓮がかたきとなり候ひぬ。梵天、帝釋、日月、四天のせめを蒙りて、當時の壹岐對馬のやうに成り候はんするに、いかさせさせ給ふべき。：日本國の人々は、大體はいけどりにせられ候はんする也。

附 箋

十九卷六一右、蒙古使御書 (一三一九)

夫れ大事の法門と申すは、別に候はず。時に當りて我が爲め、國の爲め、大事なる事を、少しも勤へ違へぬが智者にては候也。佛のいみじきと申すは、過去

を勘へ、未來をしり、三世を知ろしめすに過ぎて候御智慧はなし。

附箋

同六一左、蒙古使御書 (一三一九—一三二〇)

日本は皆人の歎き候に、日蓮が一類こそ歎きの中に悦び候へ。國に候へば蒙古の責は、よも脱れ候はしなれども、國の爲めに責められ候ひし事は、天知ろしめして候へば、後生は必ずたすかりなんと悦び候に、御邊こそ今生に蒙古國の恩を蒙らせ給ひて候へ。

附箋

廿二卷三八左、上野殿御返事 (一五五二)

愚者が法華經をよみ、賢者が義を談ずる時は、國もさわがず、事も起らず。聖

人出現して、佛の如く法華經を談せん時、一國さわぎ、在世に過ぎたる大難起るべしとみえて候。今日蓮は賢人にもあらず、まして聖人は思ひもよらず、天下第一の僻人にて候か。但し經文許りには合て候様なれば、大難來り候へば、父母のいき還らせ給ひ候よりも、憎き者の、事に値あふよりもうれしく候也。

附箋

廿二卷四四左、下山御消息 (一五五八)

儒家之本師たる孔子、老子等の三聖は、佛の御使として漢土に遣され、内典の初門に禮樂の文を諸人に教へたり。止觀に經を引いて云く、我遣三聖化彼震旦等、云々。

附箋

廿二卷五九左、下山御消息 (一五七五)

予は日本國の人々には、上一人より下萬民に至るまで、三の故あり。一は父母也、二は師匠也、三者は主君の御使也。經に云く、則如來使、又云く眼目也、又云く日月也と。

附 箋、自負

廿二卷七〇左と七一右、七一左と七二右、下山御消息 (一五八七—一五八九)

諸僧を貴み、日蓮を賤み給ふ故に、自然に法華經の強敵と成り給ふ事を辨へず。存じの外に政道に背き行はるる間、梵、釋、日月、四天、龍王等の大怨敵と成り給ひ、法華經守護の釋迦、多寶十方分身の諸佛、地涌千界の菩薩……等他國の賢王の身に入れ替つて、國主を罰し國を滅ぼさんとするを知らず。實の天の責にてだにもあるならば、假令ひ鐵圍山を日本國に引き圍らし、須彌山

を蓋と爲し、十方世界の四天王を集め、波なづり際に立て竝べて防がんとするとも、叶ふべからず。日本國の諸人、必ず兵難にあふべし。法華經の敵となつて、教主釋尊よりも大事なる行者の日蓮を、法華經の第五の卷を以て頬を打ち……し大科は免れ難くこそ候はんずらん。日本國守護の天照大神、正八幡等も、いかであかゝる國をば助け給ふべき。急ぎ急ぎ治罰を加へて、自罰を免れんとこそのはげみ給ふらめ。……而るを今、大蒙古國を調伏する公家武家の日記を見るに、或は五大尊、或は七佛藥師、或は佛眼、或は金輪等云々。此等の小法は大災を消すべきや。げんぢやくおほんにん還著於本人となつて、國忽ちに喪びなんとす。……只今國土壤れなん、後悔先に立たず、不使不便と語り給ひしを、千萬が一を書き付けて進せ候。但し身も下賤に生まれ、心も愚痴に候へば、此の事は道理かとは承はり候へども、國主も御用ひなきかの故に、鎌倉にては如何が候ひけん、不審に覺え候。返す／＼も愚意に存じ候は、是れ程の國の大事をば、

何いかに御尋ねもなうして、兩度の御勘氣には行はれけるやらん。

附 箋 三つ

廿三卷二四左、賴基陳狀 (二六一四)

爰に彼の三つの邪法、關東に落ち下りて、存外に御歸依ある故に、梵釋日月四天、瞋をなして、先代未聞の天變地妖を以て諫めけれども、用ゐ給はざれば、隣國に仰せ付けて、法華經誹謗の國を責めさせ給ふ。然る間、天照大神、正八幡も力及び給はず、日蓮聖人この事を知ろしめせり。

附 箋、蒙古

廿三卷三〇右、彌三郎殿御返事 (二六二〇)

今此の日本國は釋迦佛の御領也。天照大神、八幡大菩薩、神武天皇等、一切の

神、國主並に萬民までも、釋迦佛の御所領の内なる上、此の佛は我等衆生に三つの故御座す大恩の佛也。一には國主也、二には師匠也、三には親父也。

附箋、法界佛界

廿三卷四七右、兵御志殿御返事 (一六三九)

今我が弟子、死にたらん人々は、佛眼を以て之を見給ふらん。命つれなくて生きたらんは、眼に見よ。國主等は他國へ責め渡され、調伏の人々は、或は狂ひ惑ひ、或は山林にかくるべし。

附箋、亡國

廿五卷六三右、本尊問答鈔 (二八〇六)

日蓮が諫を御用ひなくて、眞言の惡法を以て、大蒙古國を調伏せられ「な」ば、日

本還て調伏せられなん。還著於本人と説けりと申す是れ也。

附箋

廿六卷三二右、上野殿御返事 (一八四二—一八四三)

日蓮は二度値ひぬ。杖には既に少輔房せうふぼうに面を打たれしかども、第五の巻を以てうつ。……打たれし時の心中には、法華經の故とは思へども、いまだ凡夫なれば、うたてかりける間、杖をも奪ひ、力あるならば、ふみ折り捨つべきことぞかし。然れども杖は法華經の五の巻にてまします。今思ひ出したる事あり。子を思ふ故にや、親つぎの木の弓を以て、學文せざりし子に教へたり。然る間、此の子うたてかりしは父、憎くかりしはつぎの木の弓。されども終には修學増進して、自身得脱を究め、又人を利益する身となり、立ち還つて見れば、つぎの木をもて我をうちし故なり。……日蓮も亦此の如くあるべきか。

附箋

「いまだ凡夫なれば」の左に鉛筆線

廿八卷八右、筒御器鈔 (一九三二)

日本國に代始まりてより、已に謀叛の者二十六人、……二十五人は頼朝、第二十六人は義時也。二十四人は朝に責められ奉り、獄門に首を懸けられ、山野に骸を曝らす。二人は王位を傾け奉り、國中を手に握る。王法既に盡きぬ。此等の人々も、日蓮が萬民に惡まれたるには過ぎず。

附箋

廿八卷九右、右同 (一九三三)

かゝる惡法、國に流布して、法華經を失ふ故に、安徳尊成等の大王、天照大神、

正八幡に捨てられ給ひて、或は海に沈み、或は島に放たれ給ひ、相傳の所從等に傾けられ給ひしは、天に捨てられさせ給ふ故ぞかし。

附箋

廿八卷一〇左、右同 (一九三四)

飢渴發おこれば、其の國餓鬼道と變じ、疾病重なれば、其の國地獄道となる。軍起れば、其の國修羅道と變ず。父母兄弟姉妹を簡えらばず、妻とし夫と憑ためば、其の國畜生道となる。死して三惡道に墮つるにはあらず、現身に其の國四惡道と變ずる也。此れを誘國と申す。

附箋

廿七卷一六右、聖人御難事 (一八七七)

たとへば灸治の如し。當時は痛けれども、後の樂みなれば、いたくていたか
らず。

附 箋

廿八卷三三左、上野殿御返事 (一九六〇)

當時、日本國のたのしき人々には、蒙古國の事を聞いて、羊の虎の聲を聞く
が如し。まして筑紫へ赴きて、いとをしき妻子にはなれ、子を見ぬは、皮を
はぎ、肉を破るが如くにこそ候ふらめ。

附 箋

廿八卷四二左、妙一女御返事 (一九七〇)

日蓮は、日月の御爲めには、恐らく大事の御敵也。教主釋尊の御前に必ず訴

へ申すべし。

附箋、日月の呪詛

廿九卷四右、妙一女御返事 (一九八一)

卽身成佛と申す法門は、世流布の學者、皆一大事とたしなみ申す事にて候ぞ。

附箋

廿九卷三六左、智妙房御返事 (二〇一七)

日蓮が一類を、二十八年が間せめ候ひし報いに、或は射殺し、切り殺し、或は生けどり、或は佗方へ渡され、宗盛が繩附きてさらされし様に、數千萬の人の、繩附きて責められん不便さぞ。

附箋、モウコ

廿九卷四三右、諫曉八幡鈔 (二〇二四)

法華經の行者を、國主國人等、父母の敵の如く、朝敵の様にあだむを、對治をも加へず、數年過ぎ候へば、梵、釋、日月、四天等の重科に行はるる之間、八幡等は事に値ひ給ひぬるか。此の事は一大事の事也。我が門家等祕すべし、祕すべし。

附箋

廿九卷五六右、右同 (二〇三八)

涅槃經に云く、一切衆生受異苦、悉是如來一人苦。日蓮云く、一切衆生受一切苦、悉く是れ日蓮一人が苦と申すべし。

附箋

卅卷一五右、曾谷入道殿御返事 (二〇六〇、縮刷文異なり)

然りと雖も、頼朝は法華經を持ち、安徳は明雲を信じ、眞言第一なりとおぼす。加之、八十二三四五代の隱岐院、佐渡院、東一條、廢帝等の四人の大王は、日本の主上、上皇たり。源頼朝の臣義時は、國民也。……………。

附箋

卅卷二六左、宮木入道殿御返事 (二〇七四)

今亦彼の僧侶の御弟子達、御祈禱承はれて候げに候あひだ、いつもの事なれば、秋風の纒の水敵船敵などの破損仕て候を、大將軍生けどりたりなど申し、祈り成就の由を申候げに候也。

附箋、蒙古戦後

追 補

廿六卷一一左、九郎太郎殿御返事 (二八二〇)

人の心もかくの如し。此れは代の末になり候へば、山には曲れる木のみ留まり、野には低き草のみ生ひたり。世には賢き人は少く、はかなき者は多し。……佛御入滅ありて、二千二百二十餘年也。

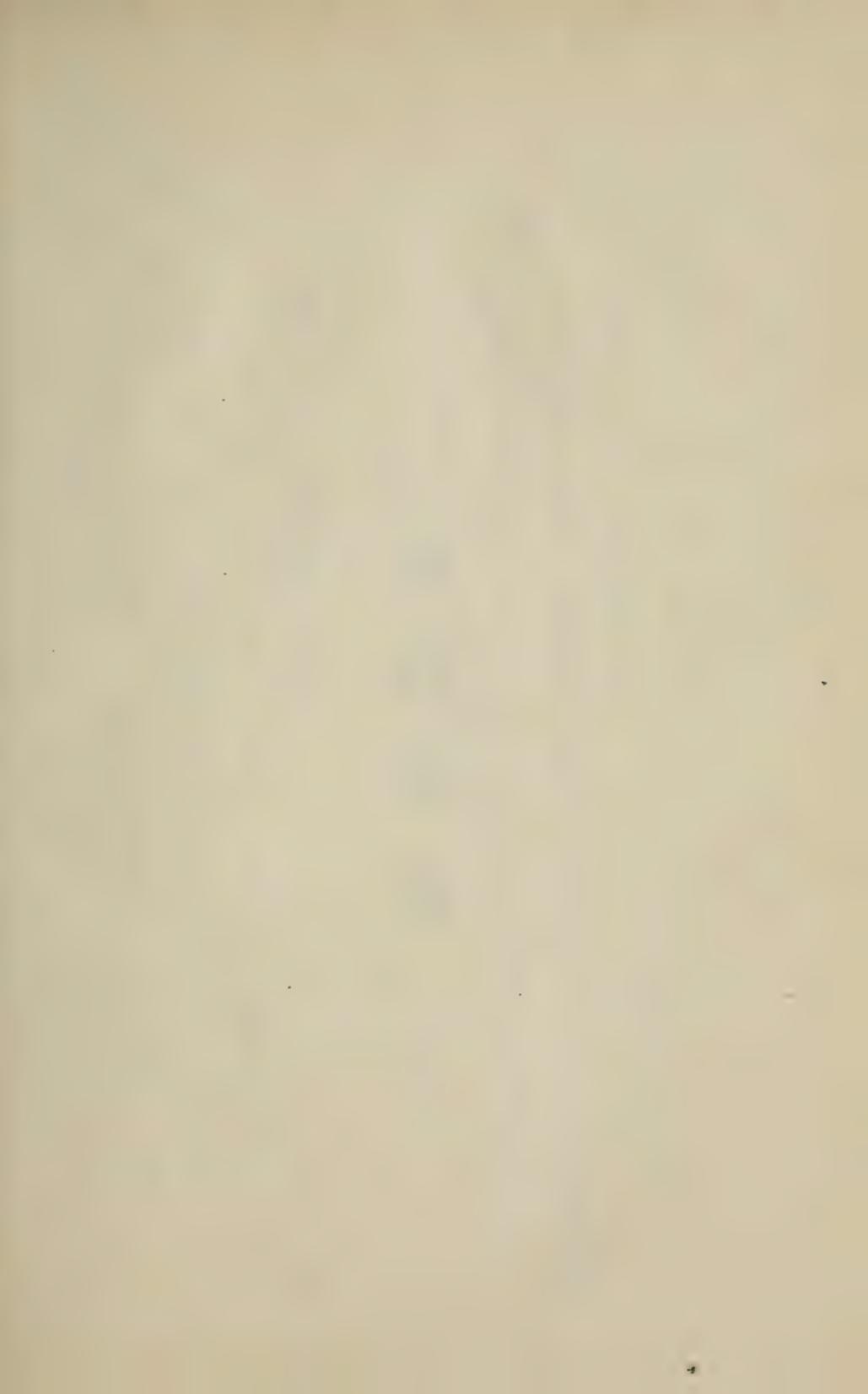
附 箋

卅卷、一〇、小蒙古御書 (二〇五五)

小蒙古の人、大日本國に寄せ來るの事、我が門弟并に檀那等の中にて、若し他人に向ひ、將た又、自ら言語に及ぶべからず。若し此旨に違背せば、門弟を離すべき等の由、存知する所なり。此旨を以て人々に示すべく候也。

附 箋

史
傳
感
想



鎌倉時代の人傑

源氏三代、北條九代の間にて、鎌倉の土地と引合にせらるる人物は、先づ左の如くなるべきか。

源 頼 朝。

二位尼政子。

源 頼 家。

大江廣元。

源 實 朝。

北條時政。

牧 の 方。

北條義時。

北條泰時。

和田義盛。

三浦義村。

北條時頼。

青砥藤綱。

日蓮上人。

北條時宗。

北條高時。

頼朝は覇府を開きたる源氏中興の英傑なれば申すに及ばず。二位尼政子は頼朝の死後政を執りて能く覇業を墮さず、女流の豪傑なりと謂ふべし。頼家は暗愚の大將なれども、大將軍家の嫡統なれば、其の事傳ふべきものなくして其の名後世に傳はれり。大江廣元は當時第一の文官として、頼朝の覇業を輔け、永く鎌倉の柱石

たり、先づは當代第一流の政治家と謂ふべきか。實朝は能く歌を詠み、又大船を造りて宋に渡らむと企てしが如き奇行あり。豫め源家の絶ゆるを覺りし如くにて、其の事蹟甚だ哀れ也。時政は其の妻牧の方と共に、老獵の奸臣としては中々にエラシ。義時は遠謀深慮、其の父にも優りて能く其の志を遂げたり。故らに承久の亂を激成せしが如き、權謀なか／＼に凄じと謂ふべし。泰時は良執權也、貞永式目は永く武家の憲法となれり。和田義盛、三浦義村、共に右幕下老功の臣にして、權勢北條氏と並びて劣らざりしが、權略無きが爲めに、遂に北條氏に凌がれたるは惜むべし。世治まりて後に、武人の成功せる例の和漢共に乏しきは、是非もなき事とや言ふべき。時頼は政治に辛勞したる人にて、行脚となりてまで政の得失を調べし熱心は、政治家として有難き心懸けなりと謂ふべし。青砥藤綱が滑川の事、賄賂を退けしこと等は世の知る所也。日蓮上人は一世の英雄僧、其の人物殆ど古今に絶す、尊むべし。時宗は元寇の時に大功勞を現はして、『相模太郎膽如斗』と歌はれし

快男子。勇敢果斷、心地よき人物也。高時は犬氣狂ひの執權にして、たゞ一暴慢無謀の凡人なれども、北條滅亡の歴史に連りて、世人に知られたるは、幸か不幸か。右の中にて第一等の人物は誰なりやと問はば、予は日蓮上人なりと答ふべし。上人は嘗に鎌倉時代の第一等の人物なりしのみならず、日本歴史上に於て、殆ど其の倫を見ざる大英雄也。秀吉、家康、乃至頼朝、尊氏等も上人に比すれば、其の人物遙に小也。今左に上人の事に就いて一言すべし。

世に英雄豪傑とだに云へば、軍人、政治家などに限る如く思ふものあれど、こは甚だ誤れり。軍人、政治家の事業は、表面上如何にも派手なれども、唯力づくにて敵を亡ぼし、國を取り、或は時運に乗じて政權を掌握するに過ぎず。謂はば聞口のみ廣くして奥行の淺き生活也。されば其の事業は、其の當時にこそ天下の耳目を驚かせども、後世に傳はりて永く人類を支配すること能はず。是の點に於て、宗教家の仕事は、世に並びなく大なるもの也。釋迦、基督、孔子等は其の當時に

ては眇たる一個人に過ぎざりしが、其の勢力は數千年後の今日に於て、隆々として盛なるに非ずや。印度、羅馬は既に亡び、支那歷代の變遷數ふるに遑なき程なれども、佛教、耶蘇教、儒教は依然として人心を支配せり。是等の點をよく考へなば、軍人などの事業のまことに淺墓なることを悟るべし。

日蓮上人は、日本宗教家の中にて第一等の人物也。常に宗教家として第一等の人物なるのみならず、單に一個人として見るも、其の人物の偉大なると古今殆ど其の比を見ずと謂ふも溢美に非ざるべし。安房の漁師の家に生まれながら、少き時より宗教改革の大願を起し、京都、奈良及び關東の諸國に歴遊して、佛法は言ふに及ばず、神道儒學一つとして通せざることなく、殆ど天下の知識を學び得たる後、茲に法華經を以て、佛法の極致と證悟して、當時流行せる淨土、眞言、禪宗、律宗の諸宗派を攻撃して、法華宗の一派を開けり。固より天下に一人の味方もなく、四面悉く法敵なる中に、いさゝか臆し恐るることなく、是の新宗派を宣傳し、念

佛者は無間地獄に墮つべし、禪宗を信ずるは天魔の業たるべし、眞言宗は亡國者、律宗は國賊なりと喝破せり。而かも是の新宗派を唱へたるは、念佛者、禪宗信者等の充滿せる鎌倉の眞中にてありしかば、執權北條氏を初めとして諸宗の僧侶は言ふまでもなく、鎌倉中の信徒皆擧て是れを迫害せり。日蓮ひるいさゝかひる怯むことなく、法華經の爲めに命を捨つるは砂に黄金を代へ、糞に米を替ふるが如しとてますます其の教を弘めたり。彼は是れの爲めに住所を逐はると二十餘度、或は暴民に夜襲せられて庵室を焼かれ、或は法敵に要撃せられて眉間を割かれ、或は弟子を殺され、或は檀越の所領を召し上げられ、或は伊豆のはてに流され、佐渡の島に追ひやられ、或は龍の口にて首切られむとし、打撲刀傷身に絶ゆることなし。是の如き迫害に遭ふこと前後實に二十年。されど風大なれば波亦いよゝく大なるが如く、少しも其の當初の志を撓げず、身命を塵芥の如く輕じ、偏へに法華經の眞理を弘通して天下を救はむとせり。其の事蹟を思ひやれば、心も言葉もなかくに及ばず、

實に人間業ならず見ゆ。法華の宗旨如何は措き、其の祖宗たる日蓮の人物は、實に千代萬世の龜鑑たり。日本の如き小島にも、かゝる大人物出でけるにやと怪まらるばかりなり。

日蓮が布教の舞臺は鎌倉なれば、其の遺跡亦甚だ多し。先づ小町通りに日蓮腰掛け石といへるあり、辻説法の折腰かけし石なりと傳ふ。昨年田中智學氏の發起にて、其處に立派なる記念碑を建てて是の聖跡を表彰せり。松葉が谷は日蓮が暴民の爲めに燒撃に遇ひたる處にて、當時日蓮が難を避けしと傳ふる窟、今も猶ほ山後にあり。妙本寺も日蓮の開きし寺にして、其の向ひたる本覺寺は其の庵室のありし跡なりと謂ふ。總じて東の方の山麓には日蓮宗の寺院多し。皆宗祖の遺跡なり。又長谷の觀音の側なる光則寺の山後には、日朗上人の土牢あり。日朗は日蓮の最愛の弟子にて、日蓮が龍の口に引かるる時、捕へられて是の土牢に入れられしとなり。日蓮の最も忠實なる信徒の一人なる四條金吾の屋敷跡も、今の長橋の料

理屋三つ橋の小路にあり。其の他尙ほいろ／＼あれども、煩はしければ略す。

予は法華宗の信者にあらざれども、日蓮上人の人物をば歎美して措かざる者也。かゝる偉人を想ふ毎に、吾が心の強くなる心地す。少年諸君も折あらば上人の傳記を読み、鎌倉に遊ばば必ず其の遺跡を吊うて、追懷の念を勵ますべし。上人の傳記も種々あれ共、解り易くして面白きは日蓮大士眞實傳なるべし。年長じて中學卒業の後に至らば、尙ほ上人の遺文を一讀すべし。(卅五年一月。第五卷二五五—二六〇)

宗 教 談

◎日蓮上人と云へば人は、皆エラキ坊主なるを知れども、扱て如何にエラキかを知れるは極めて稀にして、大方は日本のルーテル位の漠然たる概念の外は有たざる

が常也。何故に斯くは名のみ傳はりて、實の知られざるにやと尋ぬるに、其の主な原因二つあるが如し。一つは日蓮の宗旨は、本來他宗と兩立せざる性質のものなるが故に、佛教徒の中にも同宗門徒の外は、蛇蝎の如く憎み嫌ひて、初めより耳目を假さず、況して深く其の人物性行に立ち入りて研究するが如きは、押しなべて思ひも寄らざる事也。故に試みに、今日淨土眞宗等の名高き學者に向つて、御身は日蓮の御書ごしょを讀みたりやと問はば、十中の八九は讀まずと答ふべし。かゝる有様なれば他宗の僧俗は、殆ど絶えて日蓮の爲人を知らず。同宗の門徒間には、其の祖師のこととて、流石に深く研究せる人はあれども、概ね同一門流の間に會通せらるるのみにて、門外の人には多く傳はらず。斯くて世間には其の人物の真相の弘く知らるる機會なくして過ぎ來れる也。

◎日蓮上人の世に知られざる他の原因は、其の研究の困難なるが爲め也。こは日蓮上人に關してのみならず、すべての佛教者の研究に共通せる困難也。そを如

何にと云ふに、抑、佛教は基督教などと違ひ、主として道理の上に建立せられたる宗教なるが故に、其の教理の判釋は極めて複雑にして且つ難澁なるもの也。随つて古來諸高僧の有せる信仰も、單純なる感情に非ずして、何れも是の複雑難澁なる教理の中に根柢を有せざるは無く、随つて又是の信仰に本づける其の人物性行を會得し批判するに當りても、すべて其の根本たる教理の判釋を離れ難き場合多し。是の故に日蓮上人の研究に於ても、單に世間に現はれたる事業の側より其の人物を觀破することは思ひも寄らず、少くとも法華經の教理上より、其の人格の根本を明かにせむことを要す。この教理上の研究を離れては、上人の遺文は一句一字も其の眞味を解し得べからず。其の世間に現はれたる一言一行も亦其の根本の動機を知るに由無し。是の事は佛教者と雖も猶ほ易しとせざる所、況してや門外の世人より見れば、極めて難事と謂はざるべからず。是れ日蓮上人の眞相が廣く世に知られざる第二の、又主なる原因なるべし。

◎佛教と基督教とは、是の點に於て、最も相違を有するを見るべし。基督教の教祖たる耶蘇の信仰は、最も單純なる感情に本づける者にして、人生自然の要求を直下に感應せしむるを主とせり。随つて其の宗教には本來教理なるもの無く、唯純潔なる人性本然の感情あるのみ。されば耶蘇自らの説く所は、苟も人性あらむ者の凡てが、各、其の胸底に於て直下に會得し得べき、最簡最明の事實にして、それを會得せむが爲めには哲學を要せず、傳説を要せず、唯人の心あれば足る。故に彼れの教に最も耳を傾けたるものは、多くは漁夫村民等無智無學なる小兒の如き心を有する者にして、彼等に説ける耶蘇其人も亦當時の學者、僧侶などの眼より見れば、實に無學無智なる大工の息子に過ぎざりし也。彼れが歴か三年の短日月の間に、後世歐洲を一統すべき大宗教の根本を建立し得たるは、畢竟其の信仰の單純にして解し易きが爲め、一言すれば感情的なりしが爲めに外ならず。今是れを釋迦が一代五十年の永き間の説法によりて、其の教を立てたるに比すれば、彼此兩教が

其の信仰の性質に於て、根本的に相違せる所あるを知るべし。(中略。下一七八頁参照)

◎此頃 日蓮宗の青年信徒の中にて、祖師が立宗の記念會を機會として、道路演説を爲せるもの尠からざるが、是の道路演説は我邦の宗教史上にては、是の宗旨の特有にして、他宗には殆ど絶えて其の例を見ざるが如し。先づ其の第一の模範を開きたるものは、宗祖日蓮其人なりとす。

◎日蓮が當時天下の覇府たる鎌倉の、今の東京にて云へば日本橋通とも云ふべき小町の辻に於て、路傍の石に腰掛けながら、天下を敵として折伏の大法螺を鳴らせしは、世人の熟く知るところ、現に今は本化妙宗の優婆塞田中智學氏の周旋によりて、其の遺跡に立派なる記念碑をさへ立てられたれば、茲に申し述ぶるまでも無し。

◎日蓮の以後に於て道路演説にて有名なるは、久遠成院と諡せられ、京都本法寺

の開祖として、是の宗の道俗には其の名隠れもなき日親上人也。この上人の事蹟は、時の政府より大迫害を受けたる點に於て、本邦宗教史上に一異彩を放てり。又他方より見れば、一個人の信念の力が、如何なる點まで外來の勢力に反抗し、折伏し、且つ是れに打克ち得るものなるか、又一念の信力が靈性に安慰を與へたるの結果として、如何に肉體の苦惱を忍受し、且つこの苦惱によりて受けたる傷害を無効ならしめ得るものなるかの絶好の事例として見るを得む。(以下日親の事蹟、下
一三八—一五九頁参照)

◎あ、日親の如きは、眇たる一沙門に過ぎざれども、其の信念の力によりて國家を折伏し、個人の勢力が時としては地上の如何なる權力にも匹敵して、其の威嚴と榮光とを保ち得るものなることを現示せる人道上の一大事實として見るを得べし。殊に人間の力として殆ど堪へ忍び得べくも覺えざる酷烈なる傷害も、一念の信力によりて優に是れを忍受し、是れに打克ち、獨り精神の獨立のみならず、肉體

の健全をも保全し得たるは、實に目ざましき事例と謂はざるを得ず。世人往々曰く、『人は氣で生きる』と。日親の如きは、眞に是の套語を事實の上に現はしたるものと謂ふべし。

○因みに曰ふ、日親は八十二歳の天壽を以て、其の開きたる京都の本法寺に逝きぬ。今や日蓮宗の道俗や、活氣を呈し來り、日蓮、日親の遺業にならひて、辻説法を試むるもの少からず。知らず彼等の中、燒鐺を冠りて晏如たるの覺悟を有せるものありや、將軍吾れに歸依せずむば、斷じて獄を出でじと傲語し得るものありや。

(三十五年四月—五月。第五卷一〇四六頁以下)

冠 鑑 日 親

一 緒 言

(138)

『冠鑑日親』なべかぶりにつしんとは、本誌〔中學世界〕の讀者の多くにとりて、恐らくは初めての名稱ならむ。されど予は望む、そが秀吉、家康の名の如く諸君に親しからざるの故を以て、小事實として輕むする無からむことを。人を殺せる多少、國を取れる廣狹などによりて人物の大小を比擬せむは、少くとも吾等にとりては無意義の事也。苟も個人の勢力の深く、強く、若しくは大きく現はれたらむ處、そこには必ず人生の眞の大なる事實あらむ。まことに吾人の心情を動かす者は、實に是の如き事實に外ならざる也。げに冠鑑日親は、秀吉、家康の如く人を殺さず、國を取らず、所謂る史家先生には、何處に何時生死したる何人なりやをも知られざる、眇たる一

僧侶に相違なけれども、而かも猶ほ吾人の見て人生の大いなる事實とする所、亦この一僧侶の生涯に現はれたり。諸君は先づ、予が本篇を述ぶるの趣旨を了解せざるべからず。

二 日蓮宗と迫害

古より宗教家はその信仰の維持の爲めに、迫害を被りし事例は鮮からざれども、我邦にては日蓮宗の僧侶に於て殊に多し。是れには種々の事情あれども、その主なる原因は、日蓮宗其物の立宗の主旨おのづから然らしむる也。その詳細は茲に述ぶる違無けれども、是の宗の主義たる固と折伏にあり。折伏とは己れを立てむが爲めに他を破するの謂也。即ち日蓮宗は釋迦一代の說法中、法華經を以て唯一究竟の眞理と立て、他の經典を擧げてすべてこの法華經を説明せむが爲めの方便なりと爲し、随つて是等方便の經典を典據とせる一切の宗門は權教にして、釋迦

の眞意に非すと論ず。かの日蓮上人が立宗の際に大呼したる所謂四個の格言、即ち念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊とは、是の折伏の主義を最も簡明に發表したる宣言にして、決して一時弘教の方便などに非ず。實にこの宗門の世に存せむ限り、その生命、精神として護持すべき大主義なりとす。

かゝる折伏を主義とせる日蓮宗なれば、是の宗に屬する歴代の僧侶の、この主義の爲めに反對者の迫害に遭遇せる例一にして足らず。而して迫害忍受の模範を示して後世の同門を策勵したものは、即ち宗祖たる日蓮上人其人に外ならず。實に上人が禪、念佛、眞言の諸宗が全盛を極めつゝある鎌倉時代に於て、法華經の眞理を弘通せんが爲めに如何なる迫害を忍受したりしやは、言葉も心もなか／＼に及ばず。居處を追はるること二十餘度、流罪に處せらるること二度、其の間刀杖の難を被れること其の數を知らず。二十二年の長き歲月の間、一日も其の身の安きことなく、打撲の痕刀杖の瘡身に絶ゆること無かりき。而かも上人は、法華經の故に

喜んで是等の迫害を忍び、此の臭き頭を法華經に捧ぐるは、砂を黄金に代ふるに等しとなし、假令ひ題目を捨てて念佛を唱へなば日本國の位を譲らむと誘はるるとも、念佛を申さずば父母の頸を刎ねんと脅かさるるとも、ピクともせじと誓ひ、その外の大難風の前の塵に等しと喝破せり。折伏逆化を以て宗門の主義とするの是非は、もと佛教教理上の問題なれば、茲には姑く説かず。唯々身命を抛ちて其の所信に殉し、嶄々乎として退讓することなき大丈夫の心事は、まことに驚嘆の外無し。この日蓮上人が立宗の主旨と強毒逆化の模範とは、後世の日蓮宗の信者に偉大なる感化を及ぼし、其の僧侶の中には其の信仰の爲めに、時の社會又は政府に反抗して慘憺たる迫害を被りし事例甚だ多し。是れ我邦の宗教史上に於て、日蓮宗の外には稀に見る所の事實也。今茲に述べむとする日親の事蹟は、即ち是の迫害中の最も慘憺たる者の一也。

三 忍力試験

(142)

日親の父母は審かならず。後小松天皇の御宇、應永十四年に生まれ、幼名を寅菊麿と呼べり。初めは上總國はにや埴谷の妙宣寺に入りしが、年十四の頃、同國中山法華經寺に赴き、日暹上人の弟子となりて、初めて日親と名のりぬ。少にして才氣人に勝れ、膽力あり。夙に宗風漸く衰へ、祖業將に地に墜ちむとするを見て、深く心に決するところあり。年二十一の頃より一身を以て妙宗の弘通に委ね、高祖日蓮上人の遺業を繼紹して、天下を法華經の檀下に歸依せしめむとの大願を起しぬ。さりながら今の世は正邪處を換へ、權實道を違へたり。この謗法の國土に於て、さしきつて妙經の眞理を説かば、他宗の僧侶皆怒りをなし、百千の危難到る處に身に集まらむ。こは聖典の既に預め説き示せるところ、高祖上人亦既に百世の龜鑑を垂れ給へり、吾れに於て固より悲み悔ゆるところ無し。寧ろ妙經色讀の行者と

して、佛識のこの身に空しからざるを喜ばむ。唯憂ふる所は、此身の忍力足らずして、中道にして迫害の爲めに、其の所信を枉ぐるあらむこと也。故に吾れ教を弘むるに先ちて忍力を養成し、如何なる危害に遭ふとも、泰然として動搖すること無き大覺悟を成就せざるべからずと。

日親は是の忍力養成の手段として、殆どあらゆる苦痛を試みぬ。或は一日に一指の爪を剃ぎて、針を其の跡に刺し貫き、十日に十指の爪を剃ぎ悉して、其の跡に針を刺すこと以前の如し。或は雙手を沸騰せる熱湯の中に入れ、湯の冷ゆるまで是れを忍ぶ、冷ゆれば復た新たに熱湯に入れて又冷ゆるを以て期となす。是の如く間斷なく雙手を熱湯中に浸すこと一七日、皮爛れ肉解くれども彼れは毫も苦痛の色を示さず。是等の瘡傷また幾もあらずして舊に復しぬ。彼れは己れの忍力能くかゝる苦痛を甘受し得るを見、大に喜びて以爲らく、是等をしも忍ぶべくむば天下何物をか忍ぶべからざらむと。是より志いよく堅く決まり、偏へに時機

の到るを待ち、大折伏の法鼓を鳴らして、妙經弘通の素願を果さむと期す。

四 一條戻橋の辻説法

(144)

時機は到りぬ。應永三十四年正月の末、日親初めて京師に上り、妙法七字の玄題旗を高く輦轂の下に掲げぬ。當時日蓮宗の風氣大いに衰へて、人皆折伏を口にするものなし。嘗つて四箇格言を標榜して、念佛者は無間地獄に墮すべし、禪宗は天魔の業ぞと叫びたる宗門は、今や同席をも忌み嫌ひたる他宗の人々と往來し、彼等と同じく邪師勸請の神社に詣で、宗門に謗法の標札を押し並べ、因循姑息、偏へに一時の苟安を貪りて、かの高祖上人の樹立し給へる『一天四海皆歸妙法』の大理想を遺却し了りたり。日親京に入りてこの宗門の頽廢を眼前に視るや、憤慨に勝へず、大いに時流に反抗して、折伏逆化の大法鼓を鳴らし、専ら高祖上人の遺風を紹述して一步も假借するところ無し。かゝる有様なれば、自宗の僧俗

と雖も、日親を目するに邪宗を以てし、洛中を擧げて一宿を許すものだに無かりしかば、彼れは已むを得ず、一條戻橋の邊りに於て路傍に傘を立て、其の下に立て、大音聲を擧げて四個格言を絶叫し、諸宗無得道と呼號しぬ。往來の人或は眉を昂げて怒るもあり、手を搏ちて笑ふもあり。或は瓦石を飛ばし、或は糞土を雨らし、狂漢よ、痴人よと罵りあひぬ。事の體、ひとへに日蓮上人が初めて鎌倉小町の大通にて、辻説法を開きしにも似たりけり。

固より法華經の爲めに身命を抛ちたる日親なれば、かばかりの障礙は風前の塵にも等しかりき。義を責めて言に典據あり、道を説いて論に條理あり。たまく法門を争ふ者あれば、喜むで是れを迎へ、論難辯折、其の人を屈し、其の信を改めしめずむば已まず。熱誠面に溢れ、舌端火焰を吐くが如し。されば初めに嘲笑罵詈せる者も、後には漸く尊敬の心を起し、連日法を聽くもの市の如し。攝州の富豪宇野、西村の兩人が彼れに歸依して、一乗寺を建立したる等、感化の事例少

からざれども、煩はしければ書かず。

かゝる間に迫害の歴史は、漸く日親の身上に近づき來りぬ。

五 將軍義教への上書

日親京に居ること數年にして、其の教漸く傳はり、遠近より來り聽き、或は勸請して化導を望むもの頗る多し。されど一世を風化するには、先づ時の勢力の中心たる幕府を動かさむことを要す。是を以て彼れは數々書を足利將軍に上り、餘他一切の邪宗門を禁制して、一佛乘の法華に歸依せむことを勸め、一日改悔の實を擧ぐることに遅ければ、一日國家の運命を縮むべきを極言しぬ。時の將軍は足利義教也。彼れ未だ將軍の位に上らざりし前には、義圓と號して眞言宗の僧侶にして、又天台の座主となりしこともありき。そも、眞言宗と日蓮宗とは、其の教理に於て氷炭相容れず。されば日蓮は眞言を亡國の宗旨なりと罵倒し、念佛・禪宗に

も増りて大折伏を加へたりき。されば、平素より日蓮宗の主義を快からず思へる眞言僧侶たりし義教なれば、争でか辭令激越を極めたる日親が上書を喜ぶべき。幕下の大道に於て、他の宗門無からむ様に四箇格言を唱道するに、時の政府に對して傍若無人の振舞なるを、況してや直に書を將軍に上りて改悔を迫るが如きは、古今無雙の大無禮と謂つべしとて、心に大いに憤る處ありしが、流石に罪名なくして刑を加ふるを憚り、人をして日親に言はしめて曰く、汝が再三の上書、罪甚だ輕からず、而も刀杖猶ほ汝が頭に加はらざるは、我れ末だ命を下さざれば也。汝若し悔い悛むることなく、今後重ねて訴ふるあらば、我れ必ず汝を捕へて斬に處すべしと。日親是れを聞いて曰く、吾はこれ佛子法臣たり、豈一將軍の命に恐れて大覺世尊の告敕に違はむや。『わづかの小島の主等が威さむに恐れては、閻魔王の責をば如何にすべき』とは、高祖上人が吾等に下し給へる遺訓なり。吾れ豈身命を愛むの故に、無上道を捨つるに忍びむや。吾れ今もし將軍の威嚇に恐れて諫

争を已めなば、世人は必ず言はむ、日親こそは市井に傲語すれども、將軍の一言には猫の如くなれるを見よと。是の如くむば、何を以てか祖師上人の遺業を紹述して、この無上大法を後世に傳ふるを得むや。死は初めより吾が期待せしところ、吾れ斷じて死を以て將軍と争はざるべからずと。是に於て憤然筆を執りて、立正治國論と題する一大論文を作る。この論文の主旨は、日蓮が立正安國論に倣ひ、一代佛經に徵證して、天下の治亂が宗門の正邪に依ることを證明し、法華經歸依の時機方に迫れる旨を述ぶるにあり。其の語激切にして明快、其の理着實にして透徹、日宗學者の永く感歎する所なりと謂ふ。

さはれ、この立正治國論こそは、實に日親が迫害史の端緒なりき。

六 捕縛

立正治國論、稿既に脱し、將に淨書を幕府に上らむとす。この時日親を憎めるも

の相謀りて義教に議して曰く、日親台命を蔑視し、更に公廷に争訟せむと欲して此頃書一卷を作り、題して立正治國論と名づく。書方に成り、日ならずして閣下を驚かさむとすと聞く。彼れの不逞にして公威を軽むすること斯の如し。是れをしも赦して罰せずむば何を以て幕府の尊嚴を保たむや。閣下宜しく熟慮して圖るところあれと。義教聞いて憤怒に勝へず。而かも事宗門に關するの故を以て、世上の物議を招かむことを恐れ、故らに輒すく刑を加へず。先づ淨土、禪宗の諸名僧を召して告げて曰く、日親法師と云ふものあり、諸宗を折伏して法訴數回に及べることば、諸師の既に知る所也。然れども我れ素より彼が言を信せず。去歲訴へし時、我れ嚴かに彼れに告ぐるに、若し重ねて訴ふるあらば必ず斬に處すべきを以てせり。今聞くとところに依れば、彼れ飽くまで我が命を用ひず、更に公廷に争訟せむが爲めに既に一書を作り、剥さへ佛子法臣豈公命に恐れむやと公言せりと謂ふ。是れ明かに幕府の威權を無視せるもの、法に於て恕すべからざるや明けし。然れ

ども彼れ亦深く佛法に歸依して、其の所信の爲めに身命を顧みざるものなりと聞く。故に我れ今彼れを刑するに先ち、彼れと諸師とを相對せしめ、法華經と餘經との深淺勝劣を我が面前に決せしめ、以て彼れが折伏の邪法を摧破せむと欲す、如何と。

淨土、禪宗の諸僧は學識信行に於て、固より日親の敵にあらず。皆彼れと對論せしめられむことを恐れ、聲を齊うして答て曰く、凡そ八萬四千の教理、一代五時の說法は、皆機に應じ根に隨ひて成佛の道を教へざること無し、何ぞ獨り法華の一經に限らむや。日親何者ぞ、みだりに私見を以て深淺勝劣の差別を立つ、其の説くところ全く佛法の眞意に違へり。何ぞ故らに相對して是非を争ふに足らむや。且つ夫れ佛法と王法とは固と一體たり。されば世尊亦涅槃に臨みて法を國王大臣に付屬せり。後世佛子なるもの豈獨り公命に背いて而かも佛教に忠なるの理あらむや。想ふに日親は輕浮狂横の一増上慢のみ。妄に怨嫉を抱いて諸宗を罵詈し、

動もすれば身命を抛つと大言す。まことに一笑を發するに堪へたり。彼れ口に如何なる強言を吐くとも、若し臨むに重罪者の責を以てせば、立ちどころに題目を棄てて念佛を唱ふべきのみ。願はくは將軍熟く是れを計らむことをと。

素より短慮偏見にして、初めより日親を惡める義教なれば、忽ち是の甘言に惑はされて宗門對決の擧を中止し、直に日親を捕へて獄に下しぬ。時維れ永享十二年二月六日。

七 大迫害

日親獄に繋がるること一年半許り。後世の人を戰慄せしむべき慘酷なる迫害は此の間に行はれたり。個人の意志が如何ばかり外來の勢力に抵抗し得るものなるか、將に一念の信力が人に如何に強大なる意志を與へ得るものなるか。讀者よ、日親が迫害の事例に就いて、深く自ら省みる所あれ。

恐るべきは先づ獄舎の構造なりき。高さ僅に四尺五寸、廣さ僅に疊四枚を布くのみ。而して特に日親を苦めむが爲めに是の中に投せられたる囚人は、獄吏の哀みにて八人に減せしまでは實に三十六人なりき。四疊敷に三十六人、是れ既に忍ぶべからざる苦痛なるに、其の天井裏には長さ七八寸の大釘を隙間もなく逆に打ちて、小しも頭を擡ぐる能はざらしめたり。然れども是の如きは、彼れが是れより受くべき迫害に比すれば言ふに足らざるのみ。

或時は赫々たる炎天の日中に日親を獄庭に引き出し、薪を山の如く四方に積みて火を放ち、彼れをして其の中央に坐せしめ、笞を擧げて叱して曰く、汝若しこの苦痛を免れむと欲せば、宜しく題目を止めて念佛を唱ふべしと。彼れ答へて曰く、苦熱まことに忍び難しと雖も、謗法の罪を作る時は無間地獄に墮だす。無間地獄の惡熱は、三千世界の火炎を併すも猶ほ十の一にだも及ばず。吾れ何ぞ是の小苦に勝へ得ずして、死後無量劫の苦因を種うるの愚を爲さむやと。泰然として法華の首

題を唱へて動搖すること無し。

或時は凜々たる嚴冬の中夜に彼れを戶外に曳き出し、其の衣を剝ぎ、赤裸々のまゝにして庭樹に縛し水を灑ぎつゝ、咎うつこと徹夜、而して叱して曰く、汝若し是の苦寒を免れむと欲せば、何ぞ彌陀の稱號を唱へざると。日親答へて曰く、寒冷眞に骨に徹す。唯邪法を信する時は八寒地獄に墮するを如何。八寒地獄の寒苦は火を凍らし鐵を碎く。吾れ何ぞこの暫時の凍寒を痛みて、永世の苦因を作らむやと。又高聲に題目を唱へて毫も怯辟する態無し。是の種の拷責幾度なるを知らざるも自若として驚かず。身軀亦信念の力によりてか、ます／＼剛健を加へて少しも衰弱の兆を示さざりしぞ不思議なる。

或時は日親をして浴室に入らしめ、戸を閉ぢて外より焼くこと凡そ半日許り。人皆彼れ既に死せりと謂ひて、戸を開いて是れを見れば、彼れ猶ほ熱湯中に端坐し、依然として小音に題目を唱ふ。人皆驚きて人間の業に非ずとなしき。

或時は彼れを捉へて、仰いで其の口を開かしめ、水を杓子に酌みて口に流し入る。三十六杯に到るまでは、彼れ自ら是れを數へ記したれども、其の後は幾十回なるを知らず。而かも猶ほ死に到らず、從容として面に顰蹙の色をだに現はさざりき。或時は竹の聾を陰莖に貫き、或は赤く熱せる鍬を兩脇に挟ましむる等、殆どありとあらゆる危害と苦痛とを與へたれども、迫害の目的は一も其の功を奏せざりき。日親の信仰は、日にますます其の強固を加ふるのみ。初めより天傷を期したる身命も亦何等の障礙を受けず。奇しきかな、容色亦ますます、怡樂を加へて、人界の苦惱を嘲り嗤ふものの如し。

八 冠鑑日親

是に於て『冠鑑』の名の由來せる一大暴行は、彼れの頭上に加へられぬ。嗚呼是れ人間の想像し得べき最大の肉體的苦惱にあらずや。

もろ／＼の苦責一も功なきを見るや、獄吏上命を受け、一の大いなる鐺を焼き
て紅色に到らしめ、以て彼れが圓顱の上に被らしむ。平生酷烈の拷問に慣れたる
無情の獄吏すら、皆顔を背けて敢て正視するもの無し。然れども日親少しも驚か
ず、合掌唱題して是れを忍受し、鐺の冷ゆるまで毫も動搖せず。人皆驚歎してそ
いろに畏怖の念を起しぬ。是れより京師の人、彼れを稱して『冠鐺日親』と呼びぬ。
冠鐺の責めも猶ほ日親の信仰を動かすに足らず。彼れ獄にありて日夜に正法を
宣べ、且夕題目の聲を絶たず。其の聲遠く獄外に徹して、道行くもの覺えず足を
停め、爲めに信歸の念を起す者すらあり。義教乃ち命じて、其の舌根を抜かしむ。
獄吏憐み、根を抜かずして少しく舌頭を切る。是れより日親の言語往日の如くな
らず、吃々として嬰兒の語るが如し。加ふるに冠鐺の後、頭皮攀拘して赤禿とな
り、髪を剃ること能はず、已むを得ず、長ずるに随つて鐺を以て是れを艾る。其
の形童子の頭に似たり。日親乃ち戯れて曰く、俗諺に老いて再び小兒となると云

へり、それ日親の謂ひかと。

九 義教の現罰

百般の苦痛は、遂に法華經の行者を如何ともする能はざるのみならず、日親の凡人に非ざるを悟りて、歸依の念を起すもの漸く多し。義教憤悶自ら措く能はず。使を獄中に遣はし、日親を詰問せしめて曰く、汝が奉ずる所の法華經の明文に據れば、法華の行者を惱ます者は必ず現罰を被ると。今我れ汝を苦むること年餘、而かも我身に於て一分の障礙無し。法華經の明文妄語に過ぎざるか、將た又汝は法華の行者に非ざるか、二者其の一に居らざるべからず、如何と。日親色を正して答へて曰く、經文何ぞ妄ならむ。吾れ將た真に法華の行者也。あゝ將軍現罰を望むか、三年を過ぎずして必ず奇禍に陥らむと。義教聞いて笑うて曰く、汝の言何ぞ爾かく緩漫なる、三年を経て禍に遭ふとも、何ぞ必ずしも汝を惱ませるが爲めなら

ひやと。日親乃ち答へて曰く、あ、君三年を以て遅しとなすか、然らば則ち今より百日に満たずして、必ず法華經の現罰に中らむ。其の期に及び、悔悟して日親を呼ぶも時既に晩からむ也と。義教聞いて且つ怒り且つ笑ひ、固より深く意に介せず。されど偶爾か、將た必然か、日親の預言は果して空しからざりき。彼れが義教に答へしより恰も九十九日に當り、時は嘉吉元年六月二十四日、義教俄かに赤松満祐の爲めに弑せられぬ。誰れ言ふとは無く、是れ正しく法華經の行者を苦めたる現罰なりとの説、京洛の間に普く傳はりぬ。義教の遺族臣下等震ひ怖れ、俄に日親を赦して餘殃を免れむとす。然れども彼れ頑然として獄より出づることを肯せずして曰く、吾れ身命を捨てて重苦を忍ぶは、一に將軍及び其の一族をして邪法を捨てて正教に歸せしめむが爲め也。諸公もし日親の罪なきを認めなば、何ぞ直ちに法華に歸依せざる。吾れの赦さるると否とは又何かせむ。若し將軍の一門にして改悔の實を擧げて吾が法に隨はずむば、吾れ永く斷じて此の獄を出でじと。

百方陳謝し慰諭すれども聽かず。是に於て義教の近親一人、已むを得ず日親の門下となりて、僅に出獄の諾を得ぬ。

是れより後、近畿の貴賤皆日親の威風に畏れ、信服するもの益々多し。幕府の力を以てして猶ほ且つ其の言動を制すること能はず、天下又恐るるに足るもの無し。是に於て折伏の法鼓いよ／＼高く響き、逆化の幔幢ますます／＼廣く翻りぬ。

十 餘 言

是れより以降、八十二歳の天壽を以て其の終りを告げたるまでの日親の生涯は、法華の行者として實に成功せるものなりき。世人は、冠鑑の一事を知つて、未だ多く其の他を知らずと雖も、其の偉徳高行の世に傳ふべき甚だ多かりき。されど茲には、姑く『冠鑑日親』の迫害の事蹟を記するを以て足れりとせむ。

讀者よ、日親の生涯の如きは、嘗に一宗教者として歎美すべきのみならず、抑々

一個人の信仰の力が、如何に外來の障礙に打勝ちて、其の精神の自由と榮光とを保持し發揮し得べきものなるかを示す絶好の事例に非ずや。願はくは一日蓮宗の僧侶の行爲として卑むこと勿れ。個人の勢力が、時としては地上の如何なる權力にも匹敵して、其の威嚴を保ち得べきことを現示せる人道上の一大事實として、深く自ら省みる所あれ。諸君よ、貢を拂ふもののみが臣下には非ざる也。吾人は吾人の心靈の支配の下に如何なる人をも、如何なる國をも征服し、其の上に君臨し得るものなることを悟れ。カイザルの物はカイザルに歸へせ、神の物は神に歸へせとは、抑々何事を吾人に教ふるか。諸君よ、自ら其の中心の靈性に火を點じて、古賢先聖の遺業を照らせ。個人は決して其の小弱を歎くべきに非ざる也。予は是等の點に就いて熟考の料を供せむが爲めに、茲に諸君の爲めに病餘の筆を驅りて『冠鑑日親』の傳を書きぬ。予をして無益に書かしめずむば幸ひ也。

(三十五年五月。第三卷四六八―四八六)

豪傑の半面

一 清 正

天照大神、正八幡は申すも畏こし。人臣と生まれて死後に神に祀られ、遍ねく國民に拜まるるもの、まづ指を天滿宮と清正公とに屈すべし。天滿宮のことは人皆知れば、茲には清正公に就いて、世人の多く知り及ばざる事柄を談るべし。

清正公とは言ふまでもなく加藤清正のこと也。清正と云へば豊臣太閤の幕下に忠勇無二の臣にして、殊に朝鮮征伐にて雷名をとゞろかせしことは、三尺の童子も知る所なれども、世に稀なる法華經の信者なりしことは、知る人多からじ。

よく繪圖に見る清正の甲の烏帽子は、其長け三八五寸ありと謂へり。この烏帽子は、今も猶ほ熊本の某處に保存せられ、先年伊藤侯の巡遊せられし時、試みにそ

を冠られしに、よろけて歩み難かりしと云ふ事實によりても、そが如何に重量あるものなるかを想像すべし。かゝる重量ある三尺五寸の大烏帽子は、何物にて造られしかと尋ぬるに、數部の法華經にて貼り固められし也。即ち清正は其の烏帽子の材料にとて自ら法華經數部を手寫し、そを漆もて固めし也。法華經は一部八卷二十八品の大經典なれば、そを數部までも淨寫せる紙數は、莫大なりしに相違なし。分捕功名の外に餘念なかるべき戰國の武士にして、かゝる宗教上の心懸けありしは、誠に珍らしき例なりと謂ふべし。

かく三尺五寸の大烏帽子は、手寫の法華經にて固められしのみならず、傳ふる所によれば、是の烏帽子の内部の頂上には、清正が平素信仰して措かざりし日蓮上人の黄金像を安置せしと謂ふ。法華經と日蓮上人とを頭に戴ける清正の志や、貴しと謂ふべし。

頭に法華經と日蓮上人とを戴ける清正は、口に南無妙法蓮華經の題目を絶たざ

りき。傳ふる所によれば清正は、何時の頃よりか一日に數千遍の題目を唱ふることを立願し、行住坐臥、少しも是の大願を怠らず。戰場に臨み敵軍と戦ふ際にも、猶ほ一刀を下す毎に、南無妙法蓮華經と唱へざるはなかりしとぞ。

斯かる熱心なる法華經の行者、日蓮宗の信徒なれば、清正が是の宗門の爲めに盡力せし事少からず。例へば、池上本門寺、身延山の久遠寺、京都の本國寺など、何れも清正の手によりて、造營修繕せられざるは無し。殊に池上の本門寺の如きは、當時清正の手にて建立せられしもの、實に七十五間四面の大伽藍にして、落成の折には、清正かの三尺五寸の大烏帽子を冠りしまゝ直立して縁の下を通行せりと謂ふ。今の淺草觀音様でも十八間四面に過ぎず、七十五間四面と云へば、うそらしき程の大建築なりと謂ふべし。

世には朝鮮征伐や虎退治の清正のみ傳はりて、是の法華經の大信者たる清正は多く傳はらず、惜むべきことと思ひたれば、予の聞知せる大要を記せること右の

如し。

二日 蓮

日蓮上人の事は、予が本年初刊の本誌〔少年世界〕に寄せたる『鎌倉のはなし』の中にて、鎌倉時代のみならず、日本歴史上の何れの時代をも通じて比ひ稀なる豪傑なる由を述べ置けり。實に上人は、宇宙間第一の眞理たる法華經の大義を唱へて、滿天下の衆生を救はむとの大願を起し、是の大願の前には、假令へ法華の宗門を捨てなば日本國の位を譲らむと誘はるるも、題目を已めて念佛を申さずば父母の頭を刎ねむと脅かさるるも、ビクともせじと覺悟し、其外の大難は風前の塵こじまに等しと傲語し、鎌倉殿の迫害に遇ふや、『わづかの小島の主等ぬしらが威さむに恐れては閻魔王の責をば如何にすべき』と宣言し、『法華經の爲めにこの臭き頭を刎ねらむは、砂に黄金を代へ、糞に米を替ふる也』と喝破し、眼中國家の權勢もなく、北條氏の威武

もなき、眞に高天濶地獨立獨歩の大豪傑なりしが、さりとして豪邁なる膽氣のみありて溫柔なる人情に乏しきやと言ふに、大に然らず。日蓮上人が人情にあつく、恩誼に深く、其の情時としては禽獸の果にまで及びしことは、後世の人をして感涙に堪へざらしむるものある也。この事は上人の遺書を讀めば解ることなるが、左に一二の例を擧ぐべし。

上人の信者に四條金吾とて江島遠江守の老臣ありき。是の人武士の身分ながら夙に妙法に歸依して上人の門下に列なり、不惜身命の覺悟を以て上人と共にもろもろの迫害を被れり。上人龍の口にて斬られむとせし時は、路上に馬の轡をとりて慟哭し、刑場に從ひて殉死せむと決心せり。上人は深く是の人の節義に感じ、後年幾多の消息文は、常に靄然たる恩愛の情をたゞへ、殊に或時は、『殿(四條金吾を指す)にして、もし死後地獄に墮せられなば、日蓮も亦共に地獄に墮すべし。たとへ釋尊及び十方の諸佛手をひき袂をとらへて淨土に迎ふるとも、振り切つて必

す殿と共に地獄に墮すべし』との意を述べられしが如き、其の恩情の濃やかなること喩ふべきもの無し。天下の威武を敵として一步も退讓することなき大丈夫の上人にして、他面に於て是の兒女の涕涙ある、殊に尊むべきを覺ゆ。

上人が親を思ふ心の切なるは、六十年の生涯を通じて最も明かに顯はれ、夙に本化門下の龜鑑となれり。殊に晩年『日本六十六箇國、島二つの内に五尺に足らざる身一つ置處なく』して、身延山の深谷に隠るるや、九個年が間、五十餘丁の險山を一日もかかさず、一日に一度は必ず攀ち登りて、遙かに上人の故郷なる房州を煙波の間に望み、經を捧げて父母の恩を拜謝せしが如きは、古今東西の如何なる孝子傳中の事實にも比較し得べき美談なり。

上人病あつくして甲州の身延より武州池上に移る時、身延所領の檀越波木井氏より乗馬一匹に舍人一人を添へてぞ遣はされける。上人この馬をこよなく愛せられ、池上に着きて波木井殿に送る書中にも、是の馬のことをいろいろいたはしく

思ふ旨を書かれ、終りに『知らぬ舍人を附けて候はば覺束なく覺え候。罷り歸り候はんまで、此の舍人附け置き候はんと存じ候』と遊ばされたるなど、自身の病苦を厭はず、ひとへに一匹の馬を慈しむの情、たとしへなく貴からずや。

眞の豪傑は人の爲し難き事を爲すと同時に、人情に篤く、恩愛に濃やかなるもの也。能く人に忍び、世に戻るをのみ偉人の業と心得るは、豪傑の半面を遺れたるもの也。この情愛なくば、かの豪邁もあらず。かの豪邁あれば、こそこの情愛もあるなれ。二者表裏し融會して、茲に豪傑の全人格を造る也。かの美はしき薔薇の織物を見ずや。表には花と刺と別々に織りなされるれども、其の裏面を見れば、花を織る絲、即ち是れ刺を織る絲に非ずや。(三十五年七月。第三卷四九二―四九五)

予の好める人物

日蓮上人

日蓮上人のことは、此の正月の本誌「少年世界」に、鎌倉のはなしを述べた折りにも一言したことがあるが、其の人物に於ても事業に於ても、鎌倉時代はおろか、日本の全歴史を通じて、上人に匹敵し得べき人は幾人も無からう、否、全く無いかも知れぬ。少年諸君よ、此の世の中で眞に偉大なる事業と云ふのは、何も人を殺したり、國を取つたりすることのみでは無い。少年の心にも、兎角頼朝や太閤の様に天下を取つたり、外國を征伐したりするのが、眞に英雄の事業の如くに思はれ、文藝や宗教の上の成功などは、左程に貴むに足らぬことの様思はるであらうが、是れは大なる誤りである。人を殺し、城を屠ることも難事ではあるが、

人の精神を征服し、千百年の後世までも其の勢力を有することは、人間の事業としては更に大きく、又更に尊むべきことではあるまいか。諸君よ、歴山大帝の遺業も羅馬帝國の覇權も、其の時々の榮落到過ぎずして、今日に於ては何の跡かたも無いが、アリストートルの學術や基督の教へは、今日も猶ほ昔の如く人の心を支配し感化して居る。春秋戰國の王霸の争ひも、支那の歴史に空しき文字を留めたばかりであるが、其の當時に陳蔡の野に飢ゑた孔子の教へは、今も猶ほ東洋文明の根據となつて居る。世に所謂る英雄豪傑の事業は壯快は壯快であるが、畢竟一時の野心家の野心を満足せしむる外に、多く後世に影響を與ふるものでは無い。是れを喩へるならば、丁度仕掛花火の一時人目を眩まして、覺えず快哉を叫ばしむるが、間もなく消え去つて元の暗黒に立ちかへる様なものだ。これを文藝や宗教の勢力の深大にして且つ永久なるに較ぶれば、事業の價值何れが大なりやは、おのづから明かであらうと思ふ。されば英國の哲人カーライルと云ふ人は、英吉利が一人の

シエキスピアを有することは、印度帝國を有するよりも貴いと言つた。

又人物の上から見ても、眞に大なる人物とは、其の理想高尚にして品性貴く、且つ意力情操の絶大純潔なる人を謂ふのである。世の所謂る英雄豪傑と呼ぶる人の中には、其の表面の仕事こそ人並み以上に大きいが、其の品性の之に伴うて高潔なるは極めて乏しい。つまり彼等の多くは境遇の幸ひなりしが爲めに、己れ眞に之に當るべき才器品性なくして、偶然に大事を成し遂げた者が多い。例へば、高山の上に吹き上げられた種子が其處に生長して、亭々として天際に聳ゆる様なものだ。もし禪一貫の赤裸にして突き出したならば、東家西家の權兵衛八兵衛同様の人間でないものが幾人あるであらうか。一言すれば、彼等の多くは所謂る時勢の寵兒であるからである。

日蓮上人は其の人物に於ても其の事業に於ても、眞に偉大と稱せらるべき人であつた。先づ其の事蹟から考へて見ても、安房の一漁師の子に生まれ、幼より出

家して清澄に上り、後叡山に學び、十二年の游學の後、當時に行はれたる佛教諸宗門の、何れも教祖なる釋迦の佛意に違へるものなることを悟り、其の故山に歸りて、初めて法華の新宗門を開きしが、聞くもの皆狂として取り合はず。却つて在來の宗門を罵詈せるを怒りて、彼れを殺さむとせし者すらあつた。日蓮遁れて鎌倉に至り、淨土や禪宗の全盛を極めつゝある是の大覇府の大道に立つて、念佛者は無間地獄に墮つべし、禪は天魔の業ぞと大呼せしかば、執權北條氏の怒にふれて、一度は伊豆に流され、二度は佐渡に流され、其の間或は暴民の爲めに庵室を焼かれ、或は龍の口に引かれて首斬られむとし、或は敵人に要撃せられて命を落さむとし、其の他刀杖瓦石とうじやうがしやくの災難、其の數を知らず。前後凡そ二十二年の間、席暖まるに違なく、生疵の身に絶ゆる間は殆ど無かつたとの事である。諸君よ、日蓮の受けた迫害は、實に慘酷極まつたものであつた。そして其の時間も一年ならず、二年ならず、三五年乃至十年ならず、實に廿二年の長い間であつた。彼れは是の長

い／＼廿二年の間、絶えず自己の信じたる眞理を飽くまで宣傳し、生死の間に入して泰然として動かなかつた。常に、此の臭き軀を法華經に捧ぐるは、砂を黄金に代へ、糞を米に替ふる也と言ひ、假令ひ日本國の位を以て誘ふも、父母の頸を切らむと脅かすとも、我れは決して此の眞理をば捨てじ。其の外の大難風だいなんの前の塵たるべしと宣言して、天下何の恐るる所なく憚る所なく、聲の根の枯れざるかぎり、筆の毛の續かむかぎり、正々堂々と天下に呼號した。法然や親鸞しんらんの様に朝家權門に知己あるでは無く、天上天下介然孤立の身を以て、滿天下の僧俗わづかこじまを敵として折伏しやくぶくの法鼓を鳴らし、時の執權たる北條氏を逆賊と呼ばはり、僅の小島の主と卑しみ、七大寺の寺塔をば焼き拂ひて、彼等の頭を由井が濱にて斬らずば、日本國必ず亡ぶべしと極言して、一世の耳目を警醒せし其の態度の雄々しさ、男らしさは、實に我邦の前後の歴史に類似の無い事であつた。

諸君よ、古人の語に、一義を執つて十年を踰ゆるものは必ず眞面目也、と云ふこ

とがある。日蓮は二十二年の長い一ヶ月の間、常に生死の間に出入しながら、其の眞理と信奉せる法華經を説いた。これ程の眞面目が又と世にあるであらうか。されば天も人も、次第に是の至誠の聲になびきて、其の教へは漸く都鄙に擴がり、俗人の歸依するものは言ふまでも無く、淨土、禪宗等の僧侶共も追々と改宗して、念佛の代りに唱題の響きがだん／＼高くなつた。北條より足利の時代になつてからは、是の宗門の勢はますます／＼盛大となり、戰國時代においては、天下の寺院の中にて法華その半ばを占めたとのこと。後年に至つて色々の事情から追々衰微して、今日では眞宗の全盛に壓倒されて了つたが、其れでも堂々として猶ほ日本國の大宗門たるを失はぬ。是れ皆日蓮上人の遺業の餘澤である。

それで日蓮の人物は如何であるかと云ふと、決して世人の多くが信する様な強情我慢一方の人では無い。『七大寺の寺塔をば焼拂ひて彼等の頸を由井が濱にて斬らずば日本國必ず亡ぶべし』などと痛言せられたあたりは、實に辛竦激越の極み

ではあるが、其の裏面に温潤玉の如き愛情が春の泉の様に溢れて居つた事は、『御書』を讀んだ人、讀んで解し得た人の必ず認むる所であらう。女性に對しては常に親切を極められ、夫婦の愛情に對しても常に深厚なる同情を寄せられて、孝順の情に至つては實に後人を感動するに足る美蹟を遺された。即ち六十近き老境に到りながら、猶ほ父母を懷慕するの情に堪へず、身延の山に引籠つてからも、毎日五十餘丁もある險山を攀ぢのぼりて、遙かに生國房州の空を拜まれたとのこと、實に孝行の鑑と云ふべきではないか。是れが一日二日、一月二月の事ではない、雨の日も雪の日も、九年の長い間、一日も缺かさなかつたと云ふに至つては、眞に驚嘆の外は無いで無いか。斯う云ふ慈悲愛情の話が、上人の生涯には外にも甚だ多い。世人が折伏の側の上人のみを見て、單に強情我慢の一狂僧と思ふのは、全く上人の人物を知らぬことを自白するに等しい。されば史傳の中にも、一たび上人を拜したばかりで、其の慈光に射られて其のまゝ歸依したと云ふことは

度々出て居る。之を要するに、上人は知識に於ては、當時の如何なる碩學にも匹敵し得べき深大なる素養を有し、又た其の意力に於ては、生死を顧みずして其の信念所志を貫徹するの大勇猛心を有し、又た其の感情に於ては、溫潤閑雅、所謂大丈夫の俠骨は婦女子の柔腸を妨げざる底の、人情を有たれたのである。

上人の教學、上人の信念、乃至所志は如何。是の問題は今茲に述ぶるには不適當であるから、凡て略す。所詮かゝる偉人を雑誌の一小文で、讀者に解らせようとするは、初めから無理なことであるから、我輩はただ上人に就いて見る所の十の一を記し、少年諸君が後日の研究の助けにしようと思ふのである。

(附) 日興、日持が事

日蓮上人の事をお話した序に、我輩は是非諸君に其の二人の弟子の事に就いて話したい。坊さんの事ばかりで煩さいであらうが、暫らく辛抱して聞いて下さ

い。

日蓮上人に六人の高弟があつて、通例六老僧と呼ばれて居る。日興と日持とは、是の六老僧中の二人であるのだ。

東海道の鈴川の停車場から五里あまり、大宮からは三里もあらうか、富士の裾に大石寺だいせきじと云ふ寺がある。是の寺は餘程の大伽藍で、日蓮宗富士派と稱する一派の本山で、其の開祖が即ち茲に云ふ日興上人である。

是の寺を日興が起てた因縁が甚だ壯快だ。元來法華經といふお經には、迹門と本門とがあつて、前者は學校で言はうならば豫科、後者は本科の様なものだ。日蓮宗の人に言はせると、此の本科は日蓮上人が始めて開いたので、其の以前には豫科、即ち迹門ばかりであつたのだ。そこで日興上人の考へたには、昔し傳教大師は法華迹門の戒壇を起す爲めにすら、比叡山に三千房を建てた。今我が祖師日蓮の開かれた本門の戒壇を建てるには、須らく一萬坊を造るべしと。そこで土地を日

本一の富士山にトして、一萬坊を建築する繩張りまでした。其の跡が今でも萬坊が原と云つて、名前だけではあるが、日興上人の大計畫を後代に語るべく残つて居る。今のだいせきじ大石寺は、日興の當初の考では書院位の積りで、本堂は別に大々的なものを造る筈であつたとのこと。是の事は別に何でもない話の様ではあるが、日蓮上人の教理の廣大なる一つの感化として見ると、頗る面白いのである。

それから次は日持上人の事であるが、是の人の事蹟は日蓮主義の發表としては更に痛快だ。元來日蓮の理想は、其の妙經の眞理を以て先づ日本國を歸依せしめ、それから十方世界に及ぼして、全天下を統一するのであつた。日蓮の死んだ後に、日持上人は是の大目的を繼ぎ、日本國內の事は他の諸老僧あれば事足りなん、予は是れより國外に布教して祖師上人の遺志を繼ぐべしと唱へ、弟子從僕等は危難に勝へざるべしとて一切謝し去り、己れ一人にて今の北海道に渡り、それから北方亞細亞大陸に渡つて遂に其の行方を失つたとの事である。近來或る探檢家の話には

浦鹽の附近で、六百年前に日本僧の虐殺せられた遺跡を發見したさうだが、或は是れが日持の最後ではあるまいかと想像されるが、何分確かなことが明かでない。

諸君、昔から海外から僧侶が來て我邦に布教した例は非常に多いが、我邦から海外異教の蠻族に布教に出かけた人は、日持の外に誰があるであらうか。死は固より覺悟の前である、たゞ其の蠻族に妙經の福音を傳へ、一人でも二人でも眞理の光に救ひたいと云ふ其の大慈悲心は、實に廣大無邊と云はなければなるまい。

諸君よ、我邦に六宗十宗と宗旨の數は非常に多いが、日持の如く海外布教の爲めに死したる高僧を出したる宗旨は、日蓮宗を除いて何處にあるか。日蓮上人の宗教的理想の廣大なることは、其の一つの感化たる日持上人の行動を見ても、よく解かることと思ふ。

(三十五年八月—十一月。第三卷五一九—五二八)

吾が好む文章

(前段 畧)

(178)

◎總じて鎌倉時代の文學には、吾等の趣味に適へる文字いと多し。王朝の如く古からずして而かも古朴なる所あり。江戸時代の如く新しからずして而かも清新なる所あり。音近くして解し易く、意切にして情應ふべし。調に緩急の自在ありて、氣勢の抑揚また意のまゝ也。讀むべく、語るべし。若し文範を古代に求めば、吾れは夫れ鎌倉時代を取らむか。

◎此の時代の物語は、右に挙げたる外、尙ほ義經記、曾我、鳴門中將、秋夜長物語等あれども、まづは平家と太平記とを推すべし。其の他、鴨長明に方丈記、四季物語などあり。西行法師に撰集抄あり。或は十六夜日記、東關紀行の如き、降ては兼好法師の徒然草等もあり。是等は世の八十中の七八は誰も知り且つ讀め

る所なるが、茲に前掲の諸書に露劣るまじき、或點に於ては空前絶後とも云ふべき特色を有する一大文學、この時代に現はれたることを百中の九十九人までは絶えて心附かざるらし。日蓮上人の文章是れ也。

◎上人の文章は、加茂眞淵が嘗て徒然草にも優れりと評せるを外にして、他の國學者等の注意せざる所なりき。平田は上人の遺文の一部を讀みたるに相違なけれども、日蓮は傳敎の蟲食ひなどと罵倒せる外に、文章に就いて一言だも言はず。近年日本文學史の著述は、一二にして足らざれども、三上、高津兩氏の著を初めとして、上人の名をだに掲げざるが多し。坊主の書ける物なれば、讀まずと云ひて國文學者の申譯は立つべきや。鎌倉時代隨一の大文學を念頭にかけざりしは、國學者因襲の僻見に本づけりとは謂ひながら、不覺も甚しと謂ふべし。

◎上人素より文章家ならず。上人の文章などと云ひ立てむは、其の人の志に背ける業ならめど、而も大文章たるの事實は黙すべくもあらず。げに／＼上人が文

章家ならぬ事實こそは、まさしく其の大文章家たるの因縁ともなりしならぬ。

◎上人の文章は、文字章句の排列と謂はむよりは、寧ろ肝膽を活きながら白紙の上に塗りつけたる者と謂はむかた妥當なるべし。所謂る文章家の眼より見れば、字句整はず、文辭粗厲なるものも多かるべし。されど、其が人の心を動かすの一段に及びては、天下の文章何物か是れに及ぶべき。上人の文は文に非ずして精神也。人は文字を見ずして血涙の痕を見、章句を讀まずして師子吼の響を聞く。斯くても文章の極意は達せらるれ、人は何が故に巧ならむとは力むるぞ。げに文は人なりけり。吾れは茲に上人の文を論ずるには非ざれども、序なれば思ひつける二三節を左に記して、今の學生諸君に研究の枝折を予ふべし。

◎『佛滅後二千二百年餘の間、迦葉、阿難等、馬鳴、龍樹等、天台、南岳、妙樂、傳教等だにも未だ弘め給はぬ法華經の肝心、諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の初めに一闍浮提に弘まらせ給ふべき瑞相に日蓮先がけしたり。若黨共

二陣三陣つゝいて、迦葉、阿難にも勝れ、天台、傳教にも越えよかし。僅の小島の主等が威さむに恐れては、閻魔王の責せちをば如何にすべき。佛の御使と名乗りながら臆せむことは、無下の人々也。』

○これは種種御振舞御書の首めに、鎌倉殿の迫害を慮りて、弟子檀那を誡めし文字也。凡そ本邦古今の文章中、雄大崇嚴に於て、是の一段に較ぶべき者ありや、覺束無し。其の觀念の偉大なる、其の文詞の悲壯なる、朗讀一下すれば肉搖き骨鳴るの思ひあらずや。僅の小島の主等が威さむに恐れては閻魔王の責をば如何にすべき、佛の御使と名乗りながら臆せむことは無下の人々也と結びたる如き、一字一句金輪際より生ひ立てるが如し。日本文もて是れ以上の力ある文章を書かむは、神業ならではあり得べしとも思はれず。

◎高祖遺文録三十卷の中にて、吾が最も愛讀するは、種種御振舞御書、如説修行鈔、開目鈔、撰時鈔、佐渡御書、光日房御書、教行證鈔、報恩鈔、身延山御書、

成佛用心鈔、生死一大事血脈鈔、賴基陳狀、波木井殿御書等也。觀心本尊鈔は、教相上本化妙宗の祕鑰として崇めらるる一大文字なれども、理義深邃にして今の吾れには、猶ほ未だ解し難ぬるふしあるを憾みとす。其の他の御書、就中消息文は上人の事蹟と對照して、何れも何れも興會盡し難し。

◎學識宏遠なる上人の物し給へる文なれば、言々典據ありて無學なる吾等には會通の程頗る易からず。大かたは盲人の巨象を探るにも似たらめども、流石に人の心の誠は、高きも卑きも變りなければにや、言ひしらす首肯かるるふしも少からぬぞ有り難き。中にも本誌の讀者諸君に薦むるは、種種御振舞御書也。此書は龍の口の法難を中心として、文應の初めより身延山の幽棲に到るまでの上人一代の事蹟を自叙せられたるものにして、文解し易く、歴史上の趣味さへいと饒し。吾が前號に掲げたる現後録は、拙惡言ふに足らざれども、この御書に擬して作れるなりき。

◎法論の大文字としては、開目鈔を推すべし。此書は喩へば大瀑布の天より落つるが如く、始より終まで段落なく、章節なく、上下兩卷を通じて一氣にして成れり。凡そ論難の文章としてかばかり雄渾を極めたるは、吾が未だ曾て見ざる所也。殊に冷靜なる理論の叙説のみに非ずして、紙背に燃ゆるが如き熱情を藏す。談理に託せる一大抒情文とも見るべし。『詮ずる所は天も棄てよ』よりかの三大誓願を以て結べるあたりなど、音韻錯落の間に天來の師子吼を聞くべし。貴しとも貴し。

◎如說修行鈔は、法華折伏の宣戰狀とも見るべき文にして、詞急にして意迫まれり。節を拍て是れを誦すれば、骨肉飛動の感あり。無上の權威を有てる者の言は自からは是の如くなるべし。教行證鈔は、其の弟子日進に與へて法門論難の覺悟を示せるもの、如說修行鈔と並びて雄壯比ひなし。『日蓮が弟子等は臆病にては協ふべからず。彼れ々の經々と法華經と、勝劣、淺深、心佛、不成佛を判せむ時、爾前迹門の釋尊たりとも物の數ならず。何に況や夫れ以下の等覺の菩薩をや。まして

權宗の者どもをや』と云ふが如きは、日本文學中に他に比倫を見ざる文字ならずや。

◎撰時鈔は佛法東流の次第より、末法弘通の因縁を明かにして、歴史上より上人の地位を説けるもの、辭意暢達にして文理明晰なり。佐渡以後の御書中には、上人の最も意を籠められし者の一つなるべし。報恩鈔も亦開目、撰時の二鈔と並び稱せらるる大文字にして、語簡にして意深し。後の半段は舊師道善房に對する報謝の情を述べられたるものにして、恩愛の情盡せり。身延山御書は、上人晩年の心境を叙せられたるもの、『誠に身延山の栖は、千早ふる神も恵みを垂れ、天下りましますらむ』の書き落しより、鷲の山風の御歌に終るまで、まことに神々しき大文字にして、上人の偉大なる人格はおのづからその間に磅礴せり。もとより長明兼好などの小人生觀に較ぶべくもあらず。正に是れ人生自然を併せて宗教の光に醇化したるもの。波木井殿御書は上人最後の消息文にして、六十年の大なる

生涯を追懐するに足るもの也。

◎上人の文を論ずる、おのづから別種の用意を要す。茲にはたゞ本誌の讀者の爲めに、數言の注意を記せるのみ。鎌倉の時代には僧侶の手に成れる文字少からず。淨土には源空、眞宗には親鸞あり。彼れの選擇集、此れの教行信證、共に見るべき文字也。梶尾の明惠が、法然に對する摧邪輪などもあり。其の他、華嚴には凝然、天台には慈鎮ありて、何れも著書少からず。日蓮上人の御書が是等の間にありて、嶄然として他の即接を許さざるは、猶ほ泰山の群峯に雄枕するが如し。人物の眞價值のおのづから文字に現はるるや、是の如きものあるを見るべし。

◎吾れは歴史上の順序を追うて、吾が好める文章を列擧する考なりしが、圖らずも日蓮上人に引きかゝりて多くの紙數を費したれば、今回は先づ是れにて筆を擱くべし。

(三十五年二月。第四卷九五四—九六〇)

無題錄

(186)

○國民の注意すべき二個の記念祭は、今月に於て施行せらるべし。菅公の千年祭は其の一也。日蓮の立宗六百五十年記念會は他の一也。

○前者と吾人と何の關はる所無し。何となれば多恨なる詩人、小心なる政治家、順良なる王臣と云ふの外、吾人は菅公に於て何物をも認むる能はざれば也。唯後者に關しては、一言の讀者に告ぐべきものあり。

○吾人の見る所を以てすれば、日蓮は日本が曾て産出したる人物中の最大なる者也。彼れを以て日本のルーテルと呼ぶは誤れり。彼れの偉大は獨り基督のそれに較べ得べけむのみ。同國人として彼れを追懷し、景仰し得るは、吾人にとりて大いなる力也。

○彼れの人物を歎美することに於て、佛敎徒は宜しく其の宗門の争ひを抛つべし。基督敎徒も國學者も亦、其の小偏見を排斥して、齊しく彼れにアヤかる所無かるべからず。

○吾人は是の一大偉人の記念祭が、區々たる日蓮宗徒の一部によりて經營せられつゝある間に、國民を舉げて牛馬相關せざるの觀あるを見て、轉た惋惜の念に勝へざる也。

○遮莫、今の日蓮宗徒は何の面目ありて、其の宗祖の記念を新にせむとするや。今日、宗風の衰頹、僧侶の墮落、其の由て來るところ果して那邊に存すと爲すか。日蓮の遺風は既に墜ちぬ。彼等は何を以て所謂る記念會の實を舉げむとする。道路傳道や演說集會を以て彼等の能事畢れりとするあらば、是れ獨り日蓮の罪人のみに非ざる也。

○吾人は茲に、田中智學氏の近著本化攝折論を江湖に紹介せむと欲す。是れ佛

教根本の一問題たる攝受折伏に關する著者の意見を披瀝せるもの。高遠なる議論を行るに平明なる文字を以てし、論斷極めて明快也。蓋し一部の日蓮主義として見るべき乎。是れ一宗一門の徒の私すべきものに非ず。吾人は今の學者青年が是の種の書によりて、其の智見を開拓せむことを切望する者也。

(三十五年四月。第四卷一〇四一—一〇四三)

× ×

◎我邦宗教家：彼等は神の物をも猶ほカイザルに歸へさずむば已ます。超世の理想永く消え失せて、靈は翼なきものとなりぬ。あゝ是の如きをしも猶ほ宗教と謂ふべき乎。

◎是の如き國民も猶ほ其の祖先の中に、日蓮上人の如き人を有したりき。宗教家よ、六百年の往時を顧みよ。少しく自から恥づる所あらずや。

◎日蓮佐渡より赦され歸るや、鎌倉の殿中に激語して曰く、日蓮生を王土に受

けたれば、身は隨ひ奉るとも、心は隨ひ奉るべからずと。是れまさしく四福音書中最大の宣言たる、神の物は神に歸へせの意に非ずや。身は是れ佛子法臣たり。何ぞ一俗吏の爲めに大覺世尊の告敎に違ふべき。神の國は遂に人の國に非ざる也。

◎されば日蓮にとりて、實在せるものは宗教のみ。唯この宗教を護持する處に國家の職能あり、榮光あり。一切世間の權勢威力の如き、正法護持の因縁を離れては、一も存在の意義ある無し。是れ獨り日蓮のみならず、釋迦、基督の眞意にして、乃至一切の宗教の依て樹立する所の第一義也。

◎是の故に謗法の國土は、一日も存在せしむべからず。佛天の威力は、是の膺懲の爲めに世界を監視しつゝあり。恰もクロムエルがダンバーの戦を目して、『神事』と稱せし如く、日蓮は蒙古の來侵を以て、謗法の國土に對する當然の佛罰なりと思惟したりき。

◎あゝマルストンの戰場に臨み、ダビデの詩篇を誦したる人の信仰を解し得る

人○に○非○ず○む○ば、恐○ら○く○は○吾○人○の○言○に○首○肯○し○能○は○ざ○ら○む。殆○い○哉、吾○が○言○や。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

○人あり。前號掲げたる吾人の日蓮論を見、其の讚美の太だ過ぎて日蓮宗徒の言と擇ぶところ無きを笑ふ。知らず、吾人を笑ふ者と、日蓮を知るに於て果して孰れぞ。

○前號掲ぐる所は、謂はば序論のみ。日蓮と日本國、預言者としての日蓮、宗教史上に於ける日蓮の地位、日蓮と其の宗門、日蓮と基督、——是等は吾人が次を逐うて世に問はむと欲するところ、而かも病の爲めに長文を草すること能はざるの故に、暫く腹笥に藏むるのみ。吾人の日蓮論は、猶ほ未だ大方の批判を受け得べき迄に分明ならざる也。所謂る讚美の太だ過ぎたりと云ふもの、果して何の謂ひぞ。

○遮莫、日蓮上人の世に知られざるは疑ひも無き事實也。曰く四個格言、曰く辻説法、曰く龍口法難、曰く佐渡遠流。人は唯是の種の三四の事相に據りて、強

情我慢の一英雄僧を想ふに過ぎず。其の預言に關しては比するにサボナロラを以てし、其の折伏の態度を以ては日本のルーテルに擬するの類、多少の識見を有する者の批評亦是の如きに過ぎざるのみ。誣妄も亦甚矣。

◎是の凡俗至極なる惡世に於て、日蓮の如き人物を祖先として追懷し得るは、吾人にとりてそもく何の幸ひぞや。政治家が良心を嚮ぎ、道學先生が道徳を受け賣する時に、妙經身讀の行者が此土即寂光の大理想の爲めに、天下を敵として戰へる風姿を想望するを得るは、吾人にとりて何等の祝福ぞや。

◎是の祝福の吾人に降りたるは、實に近時の事に屬す。試みに後に來る者の爲めに、吾人の經歷を語らむか。

◎六七年前のことなりき。予は或處に於て偶々日蓮の文章と稱する者を見たる事あり。當時の予は日蓮に就いて何等特殊の感興を有せざりしが、其の文章の一節がいたく予の好奇心を動かしたるは、忘れもせざる事實なりき。然れども予は

未だ佛教の教理に通せず、日蓮の教判等に就いて、何等會得する所無かりしは言ふまでもなし。所謂る予の好奇心を動かしたる一節は、單に其の文字の雄壯にして語調の豪快なる、太だ平生見る所の國學者の文章に異なるものありしが爲めのみ。後來數々是の事を追懷せしことあれども、間もなく是の一節の文字すらも、遺却し去りたりき。然れども何時かは日蓮上人の文章を研究するの機會に遭遇せむことは、是れより永く予の希望の一つとなりたりき。

◎今日より想へば、往年予が偶目したる文章は教行證鈔にして、所謂る好奇心を動かしたる一節は、『日蓮が弟子等は臆病にては協ふべからず。彼れんの經々と法華經と、勝劣、淺深、成佛、不成佛を判せむ時、爾前迹門の釋尊たりとも物の數ならず。いかに現むや夫れ以下の等覺の菩薩をや。現して權宗の者共をや』と云へる有名なる一段なりし也。

◎されど予は專修の學科に忙はしく、この志願も心に任せず。凡そ六七年間つ

間は忘れたるが如くにして過ぎ去りき。然るに去年病を養はむが爲めに大磯に在りし時、日蓮研究の素願を果すべき機縁はゆくりなく現はれぬ。

◎去年の秋の初めなりき。予は、田中智學氏より『宗門の維新』と題する一冊の寄贈を受けぬ。是の書は、予が其の後、本誌上に紹介せしが如く〔先一五頁、參照〕、祖師上人の垂示せる大理想に本づきて今の日蓮宗を改革し、以て世界を統一する一大宗教となさむとする著者の抱負と計畫とを述べたるもの也。予は是の書を讀み、著者が熱烈なる精神の上に及ぼせる日蓮上人の勢力を想ひて、深く心に感ずるところあり。更に上人の文章を研究せむと欲せし往年の志願を憶ひ起し、この一念の發起に乗じて、是の偉人の組織的研究を思ひ立ちぬ。

◎予は是の目的の爲めに、十月の末より鎌倉に移り越しぬ。以爲へらく、鎌倉は日蓮の生涯に於て最も重大なる記念を留めたるの地、其の遺蹟に對すれば、追懷の想念おのづから新たなるべく、孚應の感化亦其の間に現はれむ。且つ是地は予に

『宗門の維新』を寄せたる田中氏の住する處、未だ一面の識無しと雖も、若し告ぐるに情を以てせば、必ず予が研究に對して有益なる指導を與へらるるならむと。

◎斯くて鎌倉に移りたる後、予は田中氏を訪うて面會を求め、告ぐるに來意を以てせり。氏は予の志を諒とし、研究の方法に就いて審かに示す所あり。且つ必要なる書籍を貸與せられたり。是の如くにして予が日蓮研究の端緒は開かれぬ。爾來予は力めて『御書』の精讀と教理の研究とに従事し、時に田中氏と會して判釋を聞くことを樂めり。予の領解は果して多少の進境を示したりや、日蓮上人と予と果して相近きつゝありや。予自らはれを知らず。唯是の研究が予に從來未だ曾て知覺せざりし一種の満足を與へたる事は、予によりて至大の報酬と謂はざるべからず。而して是の間に於て、田中氏が予に與へられたる多大の厚意は、予の實に感謝に堪へざる所也。

◎研究の進歩するに隨ひて、予は先づ日蓮上人に對して從來予が有せる概念の、

甚だ謬れることを覺りたり。想ふに、世人の有する所の概念も、亦是の如きに過ぎざるべし。然らば則ち日蓮の人物は、殆ど全く世に知られずと謂ふも過言に非ざらむ。予は是れを以て、甚だ遺憾なる事なりと思惟したりき。

○日蓮をして通常の人ならしめば、其の知らるると知られざると、世に於て關はる所無けむ。然れども予は彼れの人物に於て、眞に世人の無智を遺憾とするの偉大を認めたり。謂ふに、彼れを世に知らしむるには、多くの困難あらむ。而かも予は如何なる困難も、彼れの真相を世に知らしむるの功德に比較すべからざること認めたり。殊に今の俗悪なる國民に向つて、其の祖先の中に是の如き大人物ありしことを訓ふるは、道學先生が千萬回の講話にも優りて、偉大なる精神的感化を與ふべきを認めたり。是を以て予は自ら量らず、予が認めて日蓮の真相とする所のものを書して、世に問はむとの決心を固めたり。

○予が日蓮研究の因縁は、略々右に説けるが如し。如今不幸にして病の爲めに

長論文を草する能はざるを以て、暫く續稿の掲載を見合はせたりと雖も、佛天の加護によりて、予が素志の貫徹せらるべき日の早晚來るべきことは、予の疑はざる所也。

(三十五年五月。第四卷一〇五九—一〇六四)

感慨一束

(この書簡は廿五年五月ロンドンより、嘲風が書を樗牛に寄せて、シヨルンハウエルとニイチエとワグ子ルとの精神的關係を述べ、言日蓮上人に及びたるに對する返書にして、日附は同年八月十九日夜とあり。嘲風が書簡の大部分は『美の宗教』(三八〇—四〇六頁)に收めたり。茲には事日蓮上人に關する部分を摘録して、樗牛の返信に對する参照とす。嘲風の日蓮觀がその後大なる廻轉をなしたる事は、今一々述へず。)

五月十七日 ロンドンよりの書簡 (二節)

君が大に日蓮の人物を喜び、其の不動の自信を鑽仰するは、僕甚だ之を喜ぶ。

君がニイチエの人物に對して、「先天の契合あるかの如く」感ずる所以は、又此の偉人物を發見したる所以ならん。僕は未だ日蓮につきて多く考察せず、彼れにつきて知る所極めて少き也。故に君の此人に對する深厚の同情と尊敬とに對しては、一言を挾むの權利なきを熟知す。されど友として茲に少しく僕の胸裏に横はる疑問

を開陳せしめよ。此くして君の所見に依りて、僕の疑を一掃せん事を要求するも、亦友たる僕の権利なりと思ふ。日蓮の性格が殆ど超人的の猛烈なる意志と、不撓の勇、不動の自信を遺憾なく發揮したる者たる事は、僕固より之を諒し又之を敬重す。君の日蓮觀は、此點を發揮するに於て頗る當を得たり。是れ亦僕の同情に堪へざる所なり。彼れが亂世に處し、時流に逆ひ、一世の滔々たる凡俗と闘ひし、其の折伏の戰鬪的態度は、即ち他方にて妙法宣揚の宏大なる攝取化導の大慈に出では、總ての宗教的偉人に於て見る所の特質にして、總ての宗教的熱情慈悲は、此の二面の活動に依りて生命を有し實力を呈する事は、僕亦之を諒す。されど同じく攝折二門を具備したる宗祖人物の中につきても、僕はモハンメッドよりは基督を愛し、ルーテルよりはフランシスを悦ぶは、前者の意志擴張に深き愛の根柢を發見し得ず、後者の勇猛には大なる愛の福音存するを見得るが故なり。僕の疑問といふは茲にあり。僕自身が僅に日蓮につきて知見する所と君の日蓮論とに併せ

見たる結果、僕は日蓮の人物がモハンメドやルーテル（或は又ロヨラやサヲナ
 ロラ）に近くして、基督やフランシス（或は又佛陀や法然）に遠きを思はしむ。
 尙近くいへば、僕は日蓮がツゲネルのなりしよりは、寧ろニイチエのなりざりしや
 を疑ふなり、否此く迷ふなり。僕は今、日蓮の遺文に依りて深く其の人を見るの機
 會を有せず。或は門徒念佛の徒の日蓮を誹謗する聲に耳を蔽はれしやを恐るる身
 にてありながら、斯くいふは、此の偉人、特に敬愛する吾が友の渴仰する偉人に對
 する禮を失するに似たり。されど僕は恥をも躊躇をも捨てて、僕の眞情を吐露す
 るなり。僕は元來佛教の中に存する經文尊崇が氣に合はぬなり。而して日蓮は法
 華の妙法を宣布する爲めに、極めて露骨に經文字句崇拜を以て其の攝拆の武器と
 せしやの疑ひに堪へず。南無妙法蓮華經の聲を聞く毎に、此事を思ふ。僕は猶太
 人の宗教が、神罰を以て人意を脅喝し、天變地異の神意神罰に出づるを教へしに對
 して、少なからぬ反情有有するなり。而して日蓮は天變地異災害外寇を以て、反妙

法の結果として人心を聳動せんとしたり。法敵といひ、國難といひ、之を以て人心を警醒せんとする熱情は、頗る同情すべき點なきにあらずとは思へど、此の如き方法或は信仰が、慈悲深き宗教家の態度として、似つかはしきや否やを疑はざるを得ず。僕は今（のみならず古來）の佛教家がやゝもすれば、國家主義といふべき者を武器とし、宗教を以て國家體制の一具にてあるが如くし、又國家の機關を宗教に利用せんとせるを惡むなり。而して日蓮は妙法の爲めとはいへ、特に日本國單位にてもあるかの如き大乘有緣説を以て、其の教法宣布の先鋒としたる事なきやを疑ふ。

君よ、僕のいふ所、或は十分に僕の意を盡し難きを憂ふれど、僕が此等の疑問を日蓮に對して挾むは、決して單に其の教理信仰につきていふにあらず。彼れ偉人と雖も佛教の兒なり、又時世の兒なり。單に宗義見解を以ていへば、彼れを非難すべき事、恰も釋迦、基督も今日の科學説に依りて、非難を免れざる如き者多きが

如くならん。只僕が此の疑問を君の前に開陳するは、日蓮の布教の態度が、其の人物性格の必然的結果にあらざりしやを思ふが故なり。佛教の字句崇拜は其の歴史に於ける宗派分争、宗義争論の時勢に養成せられし悪風なり。經典崇拜は字句拘泥となりて、常に形式的思想と排斥的態度とに伴ふ。セム民族の排斥狭量は特に猶太教に現はれ、エホバの獨一神が恐ろしき怒りの神、罰の神となりし事歴は、又多く狭量なる排斥的心情に伴ふ。ルーテルが此の精神に富みし事と、其がドイツの文化に現はれし事とは、曾て君に書き送りぬ。佛教の國家説やルーテル教の國權結託は、僕殆んど之を論議するの勇なし。深く大なる人心の根柢に、意志の融合、普遍の愛を發見したる者は、之を齒牙にかくるを好まざるべし。一言にしていへば、僕は此の三點は意志擴張の邪路なりと信するなり。而して僕は又不幸にも、多く知らざるながらも、君の尊崇する日蓮に此の如き性格の存せざりしやを疑ふなり。若し又、日蓮に此の如き性格ありとの見が正しかりしとするも、此等

の點は或は其の性格の本質にあらずして、美はしき櫻樹に發生する帯の如き者なるやも知れず。されどこは彼れの意志の猛烈にして、自信の餘りに強かりし必然の結果なりしやと考ふる念に堪へざるなり。

僕は君の言に従つて、田中智學師の本化攝折論を讀みぬ。其の銳利なる見解と強き信仰とは、少からず僕を動かしたり。特に「本化上行と折伏」の一章は、君の日蓮論と相合して共に僕の心情に深き響きを與へぬ。僕は思ふ、日蓮を知らざりし僕は、或は日蓮を誤解したるにはあらざるか。此の一章が日蓮宗の人に依りて、又特に其の宗祖の精神を復活するの目的にて書かれたる者にして、著者の「同情的の信、歸依、奉行」の結果たる此の文が、其の信の對象たる日蓮と愛情融合する者とすれば、其の本源たる日蓮は、或は僕の腦中に存する者と大に異なるなきか、僕は斯く思ふなり。故に他日機を得れば、親ら日蓮の遺文に接して、其の精神に親炙するを勉めん。されど今は猶、今述べし如き疑問を有し、従つて猶君の日蓮

尊敬に對して、十分に滿幅の同情を有し難きなり。或る點にては、君が彼れの自信を發揮したるを喜ぶも、此の喜びは眞の愛とはなり得ざるなり。

僕は一層進んで考へぬ。日蓮の性格は其の時勢境遇に併せ見るを要す。其の時勢國事の日には非なる、佛敎の形式化し化石せる、又彼れ自身の百難辛苦を嘗めし、是等の事情を總合し來れば、其の性格の猛烈なるは、又自ら排斥的性質を帶ぶるの自然なるを知るに足らん。是れ此の偉人の爲めに悲むべき事にして、吾人の大に同情すべき處ならざるを得んや。されど翻つて思ふ、基督の出でしは此の如き世、又彼れの辛慘は決して日蓮に劣らず。是を以て其の敎、時に嚴として秋霜の如く、銳利劍の如き者あり。「世に平和を持ち來せしにあらず。子をして親に離れしめ、妻をして夫と分れしめんが爲め也」の如き、頗る小心なる道德先生を恐れしむるに足る者あり。されど彼れの此言の中には、無量の愛あり。子を親より離すは、眞の父を見せしめんが爲めなり。妻と夫を分つは、其の上に大なる父の愛あるを悟ら

しめ、夫妻の眞の愛情の根柢を體得せしむるが爲めなり。此故に彼れは、昨日を思ひ明日を憂ふるの愚を止めて、父の愛に投ずるを教へ、求めば與へられんとの愛と信とに依りて、人々をして「天に在す父の完きが如く」完からしめ、此れと同心一體ならしめ、人をして其の愛の中に没せしめんとしたり。秋霜の中に光あり、利刃の中に涙あり。僕の見る所に依れば、基督の此の如き性格と愛とは、日蓮の攝折二門に於けるよりも偉大なる統一を有せり。彼れは破邪の要ある世に生れぬ、従つて又折伏を知らざりしに非ず。されど其の教と行と凡て愛の濫光を有せりと思ふが、如何にや。

君は、日蓮の比較さるべきはルーテルにあらず、基督のみといひしも、僕は寧ろ使徒ポーロと彼れとが、性格に於ても經歷に於ても、酷似せるを驚くなり。ポーロを見よ、光に依りて主の召を被り、其の使徒となれり。この彼れの自信に於て日蓮の上行菩薩の自信と幾何の逕庭ありや。彼れが猶太的潮流と闘ひ、特に基督

の高足直弟たるペテロと争つて下らず。エルサレムにアンテオカに、此の猶太的基督教と健闘せし事、日蓮の佛教諸宗に對すると酷似せずや。身は迫害に遭ひ、流浪失望にも屈せず、或る時は地中海にて破舟溺死に垂んとし、終にはロマに獄死するに至るまで、外は異教徒や世俗政權と闘ひ、内は自己教會内の分裂不徳を救ふに日も足らざりし、性格と心事と經歷とが日蓮に同じきのみならず、其の書簡の文章の簡明にして而も遒勁なる、其の思想の深遠且つ明徹なる、僕は日蓮と伯仲せりといふより以上の尊敬同情を有するなり。且つ彼れは、日蓮が幼時より佛門に在りしに異なり、眞摯の考察、不惜身命の求道の結果、頓悟徹底して主の召に應せしは、彼れの人物の如何に眞摯にして、心境墜落なりしやを示さずや。又彼れは艱難苦悶の中にも、曾て厭世的に世を呪詛せず、又人生を惡まず、肉體の罪を惡みても、猶其が靈の宮たるを信じて、肉を靈の命令の下に服するを勉めしは、彼れの性格が猛烈森嚴なる者あると共に、雍和慰安の態度ありしを示せり。彼れが「愛

の頌歌」は此に於て始めて存するなり。僕は君に依りて、日蓮にも「愛の頌歌」ありや否やを知らん事を望むや切なり。

僕は斯く述べ來りて、是等の偉人を上下し、其の優劣伯仲を定めんとするの無禮僭越を敢てするに非ず。僕がニイチェに於て惜む點を、ワゲネルに依りて満足し得んと望むが如く、又基督やポーロを敬慕すると同じ僕的心情が、日蓮に對しても亦同じく鼓動し得るの幸ひを得んと欲するが故に、今君が同情措かざる日蓮に對する僕の惑ひを明かにし、又此と同時に僕が基督とポーロとに於て僕の見得せし偉人の理想を君に呈して、君が日蓮に關する僕の疑惑を排除するの参考に資せんと欲するのみ。

世には、君の日蓮尊崇を指して狂といふ者もありと聞く。ニイチェを狂といひ悪人と罵る世俗が、又君を狂といふも無理ならず。人と人との意氣投合は、其が師弟の間に於けるも、朋友の友情にても、又は夫婦の愛情にしても、其が眞に深

き愛ならんには、凡て意志融化の状態なり。此の如き愛は自ら之を嘗め自ら之と同體になるにあらざれば、到底同情の對象となり得る者にあらず。僅にニイチエの評傳を讀みて彼れを評する人は、ニイチエ崇拜家の心事を見る能はじ。君の日蓮尊敬を冷評し罵言する者あるだけそれだけ、君の此の偉人に對する愛情より發する義務は重からずや。……

八月十九日 鎌倉より

先頃よりの重ねくの御狀、身にしみくと喜ばしく存じ候。春以來此方よりははかなくしき御返事も申さざりしが、兎角は病軀事に勝へず、審かに此の愁思を抒べて君と共に憂を分たむと念へども、情迫り胸悶え、筆を落して文を成さず。何れの日か此の感懷を風露に託して、君と共に自然の中に優遊するを得ん。君よ、哀

しきは吾等が身の上にて候ひけるよ。病は年と共に加はれども、信は獲難く、迷ひは深し。徒らに惆悵して低回すれども、道遠くして日暮れなんとす。この旦夕の命を以て、何れの時か色心相應の信徒となり、如説修行の行者となり得べき。再々の君の御狀、あゝ吾れ涙を以てそを繰返へせしこと幾度ぞ。同じ惑ひに身を苦めて、君は早くも解脱の途に就き給へれども、吾れは猶ほ依然たる吳下の舊阿蒙。力めて書を讀み道を尋ぬれども、見思の惑ひ旦暮に積もるのみ。所詮は沙を絞るに油無く、石を磨きて玉に似ざるか。あゝ吾れ又誰をか恨みとせむ。

君と別れてよりはや二年なかばを過ぎぬ。あはたゞしくも經つ月日かな。吾れも亦病の中に最早二年を暮らし候よ。是の間身世匆忙として相移り、君も吾れも共に人生の宿疑に陥りぬ。世に離れ、人に離れ、さては二十年來の外縁に離れ、吾れは茲に久しうして己れ自らの友となりぬ。あゝ君よ、君も亦この思ひをばよも忘れ給ふまじ。是れまで他人の意味を餘りに多く知り過ぎたる吾れは、却て吾

れ自らの意味をば知らざりき。人生の第一歩たるべきこの自覺を離れて、良しや萬卷の書を讀み、古今の知識を蒐めたりとて、吾れに於て何の關はる所ぞや。吾れは自ら此の覺醒を貴しと呼びぬ。

此の間の消息を今更君に語るの要はあらず。吾等はたゞ此の自覺に本づきて、吾等の世界を建設するの務ありと存じ候。されど君よ、吾等の世界は尙ほ頗る遠かるべし。少くとも吾等の生國にて、吾等の解せらるるは頗る難事なるべく候。

唯意志の存する所に實在あり。君と吾れと此世に存せむ限りは、世は猶ほ吾等の物たるを妨げじ。君よ、吾等は互に心強かるべく候。毗藍の風吹き荒れども、猶ほ消し難きは眞信の一燈ならずや。そも何者の王者か、能く吾等の獨立を危うし得べき。吾れは是の覺悟を以て、君と共に人生の歸趣に安住せむことを希ふものに御座候。

日蓮上人に關しては、君と吾れと不幸にしてその觀る所を異にすれども、是れ唯日蓮てふ一客體に就いての見解の差異にして、是の見解の由來する各自の精神に

就いて毫も乖離する所無きことは、君と吾れと先づ以て互に諒とすべき所と存じ候。君は自ら特に日蓮を研究したる事無しと言はるれども、今の世に日蓮を非難する如何なる識者の言も、大體に於て君の説を出づること能はざるべし。實を言へば是の疑ひは、吾れ自らの胸中にも存する也。されど吾れは是の疑ひを解除すべき他の有力なる事情によりて、上人の人格を醇化し得たるを以て、無上の喜びを感ずるものに候。好んで異を樹つるに非ざれども、君の疑問に就いて少しく述べらる所あるは、敢て君の意に反する事にもあらざるべくと存じ候。事體固より重大にして、吾が信解の力に及ばざるもの多々あらむも知るべからず。他日もし其の謬りを悟り得ば、吾れにとりて此上の幸はあらざるべくと存じ候。

君が日蓮に對する非難の一つは、彼れが大乗有縁説によりて、謂はば國家主義の宗教を打立てむとしたりと云ふにあり。然しながら、こは一考を要すべしと存じ候。如何にも日蓮は東方有縁の小國を以て、後々の五百歳に於て上行菩薩出現の

國土なりとなし、妙法は是の國土を中心とし一閻浮提に宣布せらるべしとの信念を有せしが、それは宗教を以て國家體制の一具となし、若しくは國權結託を以て立教の基礎とせむとせし、世に所謂る國家的宗教と同一視すべきものに非すと存じ候。是の事の子細は、先頃本誌に掲げし『日蓮上人と日本國』てふ拙論に略々盡したりげに覺え候へば、君にも既に御領解の事と存じ候が、如何にや。吾れは己れの信仰する所の眞理に無上の價値を置くことを以て、宗教家の第一義と信じ、既に是の第一義を立てたる後、世上の一切の事物を此中に攝取するところに宗教其物の妙用は存すと思惟す。日蓮は是の點に於て、吾が理想的宗教家に近きが如し。君の見る所如何にや。

君は又日蓮の折伏主義が主として排他的なりしを惜み、ニイチエの個人主義よりもソグネルの愛の福音を擇ぶと同一の理由によりて、多くの同情を日蓮の事業に寄する能はざる由を述べ給ひぬ。こも亦極めて自然の疑ひと存じ候。是の如く疑

ふは獨り君のみならず、世上の識者宗教家等の、苟も日蓮に快からざる者のみならず、斯く言ふ吾れ自らにも亦此の疑ひ無きにしも非ざる也。思ふに愛とは意志融合の謂ひ也。精しく言へば、自己の心の中に他の心を攝容し、若しくは自他互に相渾同するの謂ひ也。かく一切己れに異なる者の存在をも認容し、是れに臨むに無限の同情を以てするを以て愛の極致とするの意味に於て、日蓮の折伏主義に幾何の愛ありしや。斯かる意味に於ての愛の福音は彼れの教理に存せしや、否や。是れは獨り君のみならず、吾れに於ても恥かしながら猶ほ未了の問題に御座候。一切法界を一心の中に解せむとする佛敎的唯心説、或は台家の所謂一念三千の無差別觀、若しくは妙宗獨造の智解と稱する現象卽實在の事觀の妙法、——是等の教理は君の既に熟知し給ふ如く、平等差別の二諦を融合して、吾等の實在に深遠なる意味を與ふる其の形式に於て、頗る愛の極致に似たるものありと雖も、吾れの見る所によれば、そが關はるところは主として智解の範圍に存するに非ざる乎。愛の愛

たる所以の意志の活動としての融合は、猶ほ此の境地に存せりや、否や。吾れ少しく惑ふ。是を以て吾れは、ワグネルの愛は日蓮の教理にも存せしやと問へる君の疑ひを是認し、君と共に世上の日蓮學者に向つて其の解決を希望する者に候。

さりながら實を云へば、是の疑問は從來吾が日蓮崇拜の因縁に於て、多くの重みを有せしものには非ざりき。吾れは、唯客觀的に見たる信仰、もしくは教理の實質を外にして、形式上より日蓮の人格に就て其の崇高偉大を讚歎せるに候ひき。茲に形式的と云ふは少しく語弊あるが如し。然しながら釋迦にまれ、基督にまれ、其の教理の悉く今日の學理的批判に勝ふべしとは、恐らくは何人も思はざる所ならむ。取りも直さず、其の人格の崇拜は、形式上に憑據するもの多きを知るに足るべし。是の意味に於て、吾が日蓮に對する崇拜を形式的なりと云ふに於て、吾れは何の異存も無之候。這般の斷案少しく概括に失するが如し、或は他の誤解を招かむことを恐ると雖も細説の遑無きを如何にせむ。唯々君の判讀を希ふの外無之候。

是の如く述べ來りて、尙ほ日蓮の爲めに一事の君に言ふべきものあるを思ふ。
 抑々日蓮の立場より見れば、其の嚴烈なる折伏は、廣大なる攝受の準備として、一
 種の慈悲の發表として見るべきものには非ざる乎。吾等の觀る所によれば、個人
 としての日蓮は、眞に慈悲深き人なりき。所謂る柔情俠骨並び具はるとは、眞に彼
 れに於て見る所の性格にて候ひき。去りながら、既に天下の民衆に對し、妙法弘通
 の大導師として立ちたる彼れは、妙法的理想に基きて是の民衆を改造せざるべか
 らず。彼れは釋尊に對する絶對的歸伏の結果として、法華爾前の諸宗門を邪教と
 斷じ、隨つて其の謗法を破摧するを以て濁世救護の第一事と爲しぬ。是に於てか、
 其の事業の第一着手として嚴烈なる折伏の要を見る、所謂る自然の勢には非ざる
 べき乎。折伏は攝受を豫想してこそ始めて意味もあれ、攝受は即ち慈悲の用に外
 ならず。即ち日蓮の宗義よりして見れば、大なる折伏は大なる慈悲を待つて初め
 て現はれ得べきものには非ざる乎。彼れが涅槃經の文句に擬して、「一切衆生の異

の苦を受くるは、悉く是れ日蓮一人の苦也』と謂ひ、又『二十八年の間他事なく
 南無妙法蓮華經の五字七字を日本國の一切衆生の口に入れむと勵むは、此れ即ち
 慈母が赤子の口に乳を入れむと勵む慈悲也』と謂へるもの、斯くして初めて生命
 ある文字となり得べしと存じ候。君は是の間の消息を如何に解し給ふや。吾れは
 茲に佛教に所謂る慈悲と基督教などに謂ふ所の愛との間に、概念の差別あること
 を忘れたるに非ずと雖も、日蓮に就いて愛を言はむ者は、先づ是の慈悲を認むるの
 要あるべし。吾れは日蓮の折伏の蔭に大なる慈悲ありしことを疑ふ能はず。彼れ
 が其の生國の滅亡をまでも忍受して、妙法の功德を民衆に願たむとしたるの衷情
 は、深く察すべきことと思ふ也。況や妙宗の教義に逆化下種など云ふ妙用ありて、
 折伏によりて征服せられざるもの、猶ほ反抗の因縁によりて救濟の緒を得べしと
 なすが如き、其の説の如何は姑く措き、亦是の問題に關聯して一考すべき事と思
 ふは如何に。

日蓮上人に關しては、言ふべきこと尙ほ甚だ多しと雖も、本書の主眼は君に郷國の現状を述ぶるに存するを以て、姑く詳細を他日に譲るべく候。

本邦思想界の現状に就いて、何事をか君に言ひ送るとせば、そは吾が不平を書き列ぬるに外ならざるべく候。されど吾等の如き時代の畸形兒より、その不平を取り去らむは、取りも直さず其の言論を取り去るに等し。吾等は此の不平を述ぶるに當りて、最も尊大なるべきことと存じ候。

一言以て是れを蔽へば、本邦の思想界は餘りに平氣に御座候。疑ふべきこと、怪むべきこと、驚くべきこと、怖るべきこと、憂ふべきことの充ち満てる此の時世に於て、彼等の餘りに晏如たるには呆るるの外無く候。舊時代の遺物たる老朽學者に就いて云々するは、吾等の勝ふる所に非ず(此の老朽學者の中に猶ほ壯年なるもの少からざるは君の知る所の如し)。新進の青年學者に就いて見るも、是れ唯老廢

者の年若き者たるの外、一も清新なる理想を抱いて、時世の改造に心を苦むる者あるを見ず。青年の祝福たる懷疑の味は、彼等の嘗試し及ばざる所、弱冠學に志してより證典死書に傾倒するの外、毫も活ける人生の疑惑に逢着するの機會を得ざりしを以て、三五年にして其の學を卒へたるもの、早く既に村學究となり、道學先生と化し了し、平板凡俗の倫理説などを振廻はして、世上又疑惑なるもの存するを知らざるが如き爲すもの、比々皆然らざるは無し。あゝ君よ、昔者須梨盤特は三箇年に十四字を記せざりしが、猶ほ佛に成りぬ。提婆達多は六萬歳を誦じて而かも無間に墮ちたるに非ずや。安住の一念を離れて天下の知識を集むるも、沙上に樓閣を城くに等し。彼等空茫にして自ら悟らず、偏へに知を外に求むるもの、吾等より見れば、何ぼう無意味の事に候はずや。況してや自ら借して人に教ふるの愚を料らず、年三十にも満たざるに早くも老先生の態を成して、諄々乎たるに至りては、捧腹絶倒の限りと存じ候。

嗚呼君よ、文明の苦痛は斯かる時世に於て最も深く感ぜらるるものに非ざるか。

今の思想界の煩瑣と平和と單調と凡俗とは、何時まで吾等を欺き、吾等の精神に安慰を與へ得べしとする歟。吾れは平和を持ち來せしに非ず、子をして親に離れしめ、妻をして夫と別れしめむが爲め也と呼ばはり得る者の出でたるは、やがて斯かる時世には非ざりし乎。君よ、偉人の出づるまでは世は常に平和なるものぞかし。されどその平和は命なき無事也、毒酒に酔ひ倒れたるものの眠り也。吾れは目覺めたらむ時の苦惱を想ひて、一日も早く此の平和の破却せられむことを望むの情に勝へず。眞の晴天は暴風の後に來るが如く、戰鬪を経ざる平和は眞の平和には非ざる也。

所詮は、人々自ら悟るの外無しと存じ候。自ら悟らむと欲せば、先づ自ら疑ふに若くは無し。個人は個人の存在を疑へ。其の何の爲めに既に生き、又何の爲めに將

に生きむむととするるやに就いて、眞ま摯しなる考察をめぐらせ。是れ最も古き疑問にして、
 又も新しき必要也。社會も亦其の存立の根據を疑へ。殊に國家は其の憲法と法律
 と廣大なる版圖と強盛なる軍備とを擁して何の爲めに存在するか、又存在せざる
 べからざるかを疑へ。個人も社會も國家も、先づ其の天分に就いて明白なる覺
 悟を有するに非ざるよりは、一切の行動すべて無意義に終らむのみ。畢竟 デカ
ルトの哲學の如く、吾等は先づ自己の存在に關する自覺を喚び起して、茲に其の
 立脚の地盤を確めざるべからず。君よ、斯の如くにして世に多くの驚きと疑ひと
 苦みと惱みとあらむ。唯是の驚き、疑ひ、苦み、惱みありてこそ、初めて眞摯なる人生
 の解釋はあり得べし。君の所謂る愛の福音も、亦是の如くにして初めて宣傳せ
 らるるを得む。兎も角も吾れは吾が思想界の平氣を以て、其の根本的病弊と思惟
 する也。君は如何に思ひ給ふや。

(中略)

嗚呼郷國の事、傷心すべきもの何ぞ一に是の如く多きや、想ひやるだに心苦しき限りに候。神の物をも其の有となさずむば已まざるカイザルの國に於て、個人はたゞ一個の頭顱を有するの外に、何等の價值をも認められざる也。是を以て吾れは思ふ、當代文明の革新は、社會の上下にゆき互れる現世的國家主義の桎梏を打破するにあり。此の一難關にして通過せらるべくむば、自餘思想界の事、おのづから順風に帆かけて長江を下るの概あるべくと存じ候。言嘯喞として意甚だ明かならず、たゞ、御推讀を仰ぐの外無之候。

君よ、吾れの國家に就いて爾かく言を爲すは、主として個人の爲めに候。個人の精靈は無盡藏也。釋迦出で、孔子出で、基督出で、ソクラテス、プラト、ダンテ、沙翁、ゲーテ、奈破翁出で、バイロン、ニイチエ、日蓮出でたるも、個人は猶ほ依然たる無盡藏に御座候。此の無盡藏を開發する所に人生の精華あり、光榮あり。所謂る人道とは、是の開發の結果を中心として、無限の繼續を歲時と方處とに繋げ

たるもの謂ひに外ならずと存じ候。されば是の無盡藏の開發を障礙する如き生
 活方法は、すべて人道の公敵としてその改造を期せざるべからず。是れ將た個人
 自衛の本務にして、同時に又當代の權利たらざるべからず。吾が先に悟らざるべ
 からずと曰ひしは、即ち是の事の謂ひに外ならざることば、君の既に諒知せられ
 たる所と存じ候。

(三十五年八月十九日、鎌倉にて。第四卷九六四—九八一)

雜談

(222)

◎前號に掲げた日蓮上人と日本國と題する論文に就いて、意見を寄せられた人が少からずあるが、中には日蓮宗の僧侶と覺ぼしき人から、嚴しき叱責を被つたものもある。成程國家的宗教を賣物にしようとする人から見れば、我輩の論旨はいさゝか好都合でないかも知れぬが、我輩の眼中には日蓮上人あるの外、別に今の日蓮宗と云ふものが無いから仕方がない。そして又眞に其の祖師上人の人物を會得せる人であるならば、我輩の意見に賛成をこそすれ、反對すべき理由は毫も無い筈と我輩は思ふのである。

◎日蓮上人の教理にはその根柢に於て、現世の主權と相容れざる明瞭なる特色がある。故に是の宗門歴史を案じて、其の最も盛大を極めたのは戰國時代で、取りも直さず一國の主權が定まらず、是の宗門と衝突すべき當體が未だ世に現はれ

ざる時代だ。然るに信長より秀吉、家康と、日本國がやうやく一主權の下に統率せらるると同時に、是の宗門は追ひ／＼迫害によりて衰頽に赴いた。その精しい史績は茲に述ぶる遑は無いが、日宗學者の夙に心附いて居らるる所であらう。

◎若し日蓮宗にして嚴正に率直に其の祖師の主義を實行したならば、現世に其の法鼓を鳴らし續くることが頗る難事と云はなければならぬ。國家は畢竟野獸の大なるもので、到底是の如き信仰の弘通を看過するの雅量などのあるものではない。幸か、不幸か從來の日蓮宗僧侶は、この嚴正率直の意氣がなく、妙宗信徒の盡すべき本分を盡さなかつたが爲めに、兎も角一宗派としてお茶を濁して來られたのである。今日此の宗門の革命的維新を論じつゝある人は、即ちかゝる曖昧なる態度を捨てて、祖師上人の原始的精神を復活せよと唱ふる復古的運動であるのだ。

◎日蓮宗中に不受不施派と稱ふる一派があつて、今日のところでは祖師の精神を尤も忠實に傳へて居る門派であるとの評判であるが、其の状態は實に見る影も

無い。塵に備前の金川に妙覺寺と云ふ一寺を有するの外、日本中に一末寺をも有たぬ。是れが原始日蓮宗の必然の運命を示して居ると我輩は思ふのである。是の派の開祖の日興上人と云ふのは、固く祖師の折伏主義を遵奉して、豊太閤の大佛の千僧供養にも、家康の發起した大阪の千僧會にも、固く執つて出席しなかつた。是れは邪宗の輩と祈禱を共にせず、謗法の君主の外護を頼まずと云ふ一大決心を示したものだ。斯様に主權の制裁を無視した廉で、上人は十三年の間對馬に流されて、非常の迫害に遭はれたのである。

(三十五年八月稿。第四卷一〇七三—一〇七五)

日蓮研究會を起すの議

予は全國の教育家並びに學生諸君に向ひて、茲に日蓮研究會を起すの議を提出す。

予を信せよ、日蓮は予の知れる日本人中の最大の偉人也。予は和氣清麿、楠木正成、乃至豊臣秀吉を生じたる日本を、さまで大なりとは思はざれども、日蓮を生じたる國土は、實に生まれ甲斐のある國土なることを思ふ。吾人の祖先の中に、日蓮の如き人物を有することは、吾人が世界萬邦に誇稱すべき所也。

日蓮を大ならずとする人を、予は何の妨ぐる所なかるべし。然れども等しき者のみ、能く等しき者を解す。予は諸君と共に彼れを解するの人たるを得ば、是の上もなき幸ひならずや。諸君は須らく、予に信する所あらざるべからず。

既に予に信じて日蓮を偉人なりと假るさば、諸君は予と共に是の偉人を研究せ

ざるべからず。楠木正成、豊臣秀吉は餘りによく知られたり。然れども誰れか吾が日蓮を言ふものぞ。言ふものは是れあり、然れども其の人物は甚だ誤解せられたり。吾人は是れを遺憾とす。

予を以て、日蓮宗の信仰を諸君に強ふる者となさば、是れ大いなる誤り也。予は信仰の大事なるを知る。諸君自らの證悟を外にして、予は諸君に與ふべき何物をも有せざる也。予の勸むる所は研究のみ、批判のみ。諸君は先づ予の志を諒とせざるべからず。

今の世の腐敗は、道學先生の俗悪なる學說の能く救治する所に非ざる、諸君の既に知る所なるべし。願はくは予に信せよ。若し日蓮の精神によりて一世を率ゐること能ふべくむば、當代の風氣必ず一變せむ。彼れの精神を是認すると否とは、予に於て必ずしも強ひすと雖も、苟も予に信するの諸君は、其の道學先生の講義を聞くの違を以て、一度び彼れに接近せざるべからず。

予は是の目的を以て、全國處に隨つて、諸君が日蓮研究會を起さむことを希望す。苟も若干の同志者だにあらば、其の方法の如きはおのづから成立せむ。唯斷じて決心せよ。然らば事業の半ばは既に成れる也。

唯獨學の人の爲めに、予の心附ける研究方法を示さむか。日蓮研究に際して、先づ要するものは高祖遺文錄也。順序としては初めに上人の傳記を詳かにするを可とせむ。傳記には古來註書讀、別頭統記、高祖年譜、日蓮大士眞實傳等あれども、平明にして周密なる、眞實傳を最も勝れりとすべし。遺文錄も漫に釋了し得べきものに非ず。釋義の參考としては錄内啓蒙、考文、祖書綱要の數種あれども、後者最も妥貼の目あり。而して是等傳記、御書を通じて、一代佛教の概念を預想するを以て、研究者は隨時一代大意抄、若しくは天台四教義の如き書によりて、佛教の大意を解し、且つ殊に法華經を精讀せむことを要すべし。法華經は古來註釋甚だ多く、釋文概ね本文よりも解し難し。予の經驗によれば、特殊の文字の解釋の外、すべて

本文のみによりて、自ら思量するを最も好しとす。然れども是の如きは、學者によりてそれぞれ意見あるべし。予は唯予の見聞を記して、諸君の参考に資するのみ。兎にも角にも、諸君は日蓮研究會を起さざるべからず。蟻の爲めに十年を費したる學者あるにあらずや。日蓮を研究するは、日本歴史の寶庫を握る也、諸君の生國の榮光を覺る也、祖先を通じて諸君自らの名譽を増す也。何より貴きは是の偉人によりて、吾人の未だ知らざる人生の大意義の覺悟に到達すること也。即ち是れ他を研究するに非ずして、自らを修養する也。若し夫れ歴史上、宗教上、文學上の餘益に至りては、固より一にして足らざるべしと雖も、上に記する所に比すれば蓋し千の一なるのみ。

(三十五年八月。第四卷九六〇—九六三)

餘沫談論

天才の出現

我れは天才の出現を望む。嗚呼日蓮の如き、奈破翁一世の如き、詩人バイロンの如き、大聖佛陀の如き、哲學者シヨペンハウエルの如き英雄豪傑は、最早や此の世に出づる能はざる乎。久しい哉、我れの凡人に倦めることや。

天才の犠牲

世に凡人の數、幾十百千萬億ありとするも、人類に於て何の益する所ぞ。願はくは彼等の十萬を割いて、一バイロンを得む。願はくは彼等の一百万を割いて、一奈破翁を得む。我れに一日蓮を興ふるものあらば、願はくは代ふるに一千萬の凡人を以てせむ。我れに一釋迦を興ふるものあらば、一億萬亦惜むに足らざらむ。人よ怪む勿れ、彼の木偶に禱るもの、尙ほ且つ犠牲を供ふるに非ずや。天才に

ニイチエの歎美者

◎我輩はゲーテや、バイロンや、ハイチヤ、日蓮や、一世奈破翁を歎美すると同じ様に、ニイチエを歎美する者である。ニイチエは前にも言へる如く、學者ではない。況して實踐道徳家などでは尙ほ更無い。彼れは生知の詩人だ。詩人として其の理想の崇高なること、其の想像の偉大なることは、殆ど人心のはたらきの最高潮に達して居る。殊に十九世紀末の悪文明に育てられた吾々にとりて、此の上もない靈性の慰藉と謂ふを憚らない。(一節、中略)

◎吾人が天才を歎美するのは、吾人の精神的生活を豊富にし、是れによりて自ら慰め、自ら勵み、かねて是の世に處する安立の地盤を求むるのだ。俗學者流の生活する世界以上に於て、吾人の理想的天地を建設するの希望は、是等天才偉人の前蹤によりて少からず確かめられ、且つ勵まざるのだ。吾人は是の希望によりて、

吾人の人格を修養し、吾人の信仰を堅むるのだ。是の間の消息は、歴史論や、アナクロニズムでニイチエを批評し待たりとする輩の窺知を許さぬのは、言ふまでも無いのである。

(三十四年十一月。第四卷一〇一三)

* * * * *

郷里の弟を戒むる書

歳も暮になりて、寂寞の夜半に物思ふべき時とはなりぬ。先頃の御書、修學讀書に關するくさくさの御尋ねは、眞に學徒肝心の用意、及ばすながら愚見左に申述ぶべく候。

今の學校の教へむほどの學科は、人並みに習ひ覚えらるべく候へども、さりとして餘りに執着に過ぎむは、無益の業たるべし。今の教育は多數の學生に行きわたり、彼此人我の差別なく、平等の教化を旨とす。譬へば、松、杉、梅、牡丹、水仙などの

四季さまざまの草木を、一壇坊の上に培養して、一樣平等の發達ならせむとするにも似たり。彼れに好きもの必ずしも此れに適せず、此れに合ふ者必ずしも彼れに相應はず。善し心無き園守ならましかば、高きは抑へられ、卑きは引き上げられ、曲れるは矯められ、ゆがめるは斷ち切られなむ。草木おのゝ其の性によりて、其の處を得むこと中々に難かり。今の教育を其の弊ある側より見れば、まさしく是の譬例にも似たるべく候。沈香も焼かず、屁もひらざる凡人となりて、不足なからむ人々は斯くてもこそ甘むずべけれ。一定男子の眞骨頂ありて、我れと思はむ人々は、是の際穎脱飛躍の覺悟こそ肝要なるべく候。

げに今の教育は器を作りて人を作らず、人に使はるべき小才を作りて人を作るべき大器量を作らず。是れ將たよくよく思案あるべく候。近くは世上幾千幾萬の人の頭となり、大事業に當れる人々を御覽あるべし。才學人に優れたる例しとは甚だ少く候ぞ。所詮は其の人物の浩量有徳なるに歸すべく候。今の教育に人と

なりて、中學より進みて高等學校、大學を卒業し、其の學秀でて外國にまで留學せる學者先生達は、其の數少からざれども、多くはたゞく學者也、技術家也。乞食も一朝金を拾へば富者となり得ると一般、要は學術を拾ひ得たる人と謂ふまでに候。京童が活字引、活書籍などと申すは是れなり。たましく學を修め術を覺え得たる者の斯くて果てむは、人として口惜しかるまじかるべきや。古來大人物と稱せらるる人々の例しにも考へて、よくく勤考あるべく候。

されば立身の第一義は、人物修養の一事に歸着すべきか。是の大歸着の標點あり、是の大安立の地盤ありてこそ、其の學術事業も眞生命、眞活動を得たりと申すべけれ。この本末を顛倒して、たゞく才學技巧の巷に趨らむは、若き時は知らず、年老い心靜まりての後悔及ぶまじく候。今の教育家、學者等の小慧しげなる理窟などは餘り心に留めず、自覺の鎧を著て安心の旗を指し上げ、勇猛不退轉の利劍を提て、一向顧眄することなく、身一期の軍に向はるべく候。げに、觀心の

一法によりては、現世の萬事折伏の軍に外ならず。人物修養の一大事、畢竟自我満足の要諦たるべく候。

人物の鍛錬は行住坐臥、一念時も忘することあるべからず候へども、分けて古人の傳記など甘讀熟量せんこと、最も肝心と存じ候。吾等の生息する今日は、過去無量劫に比すれば泡沫夢幻の短日月也。是の短日月に於て、吾等人々の接觸し、交通し得る人としては、其の數とても限りあること也。是の短日月の限りある人の中には、幾何の英雄豪傑あるか知らざれども、是れを過去萬邦の數千年の歴史に現はれる偉人大人物に較ぶれば、げに九牛の一毛とや言はむ。されば活ける人の中に、師とすべきあらば固より仰で師とすべし。されど吾等の龜鑑と崇め、理想と尊ぶ人は過去にあることと覺悟あるべく候。過去の人は言はず語らず、寂寞として古蹟の中に永眠せりと雖も、其の遺蹟は日月の如く明かに、今も昔の如く世界の上に照臨せり。仰で師とすべく、撈て友とすべし。彼れ物言はざれども、其の不言の教

へこそは一切聲聞のそれよりも貴く、彼れ手を握らざれども、其の默契會通の三昧こそは、まろしく異身同體の親みありと謂ふべけれ。書を讀み道を求めむもの、這個の三昧に入らずば、是れ寶の山に入りて、手を空しくして歸らむにも似たるべく候。吾等が人物の修養、實に是の間に於ておのづから健孚感應の不可思議を現じ候。

げに人物の感化は、不可思議の一事縁に候。當世の道學先生、教育家先生は、言説法度によりて、道德の事成し遂げられ得べけむ様の考にても候や、一切事皆道德々と責め附け候へども、斯様の方法は、狐憑をば棍棒にて畜生々と叩くと一般、根氣沮喪、其の人精神的に死滅せざれば已まざるべく候。所詮德育の事は、其の人にありて其の法にあらず。生いき書生上りの學士先生などの關知せざる事也。よくよく是の事を御思案あらば、吾等の宗師、先達を古人に求むるの已みがたきこと、更に明かなるべく候。

更に是の義を強く申すべし。日月天に懸らずば、人は行くべき道も分ならず、暗中に迷ふべし。若し吾等の其の理想と尊び、光明と仰ぎ、人物修養の大眼目と信奉すべき大人物なくば、是れ天に日月無きと均しく、吾等の心暗黒中に迷へるものと謂ふべし。吾等は押しきつて問ひ申すべし。今の世に、其の心の暗黒中に迷はざるもの幾人ありや。或は利に餓る、或は智に渴へ、營々として世を夢の如くに暮らす人も、若し中夜心を沈めて、我れの事業に何の理想ありや、我れの未來に何の光明ありや、我れの人物に何の標的ありや、我れに面して笑ふもの幾百千人あるも、眞の我が心を會通融和せる心は、世に果して是れありやと自ら問はば如何。誰か其の身のさながら暗中廣野に彷徨せる、天涯萬里の孤客にも等しきことを感ぜざるべき。あはれ心細きは決して人の上には候ふまじ。吾れ人亦心を沈めてよく思案すべきにて候。人生一期の大事、是れに過ぎざるべく候。

兎角は言、抽象に馳せ、會通あいつうの程も如何と存じ候へども、思ふこと憚りなく申し

陳じ候。今の學者、教育者の多くは、決して其の實御身等の眼に或は映せむ程のえらき人々には是れ無く候。其の博く物識れる點をこそ、吾が師とも頼み申すべけれ、人物修養の一大事に臨みては、觀心自得の工夫の外他に道無きことと先づは心得らるべくや。世に知識と申すものは無量無邊、幾百代の生を累ね、幾下劫の世を數ふるとも盡くし得られまじく候。生れつきての好みならば是非もなく候へども、益もなき事を究め盡さむとて、再びは受け難き人身を消耗し去らむは、いよいよ心無き業なるべし。所詮は吾が安心を堅め、吾が人物を磨き、當來二世を通じて如説修行の人たらむの大願に資するに非ざるよりは、一切の道教學智すべて無用と觀せらるべく候。學問の眞工夫、是の外に出でざるべくと信じ申候。委細の旨は重ねて申すべし。あなかしこ。此の書輕々しく御覽あるまじく候。

現代思想界に對する吾人の要求 (節錄)

古の人訓へて曰く、汝等求めよ、然らば與へられむ。尋ねよ、然らば遇はむ。叩けよ、然らば啓かれむ、是れ信仰なりと。吾人は不幸にして現代に對して、多くの信仰を有する者に非ず。或は其の言の荒野に叫ぶものの如く空しく消え去らむを恐ると雖も、而かも一片耿々の微志、黙して而して已むべきに非ざるを覺ゆ。希はくは今の宗教家、哲學者、教育倫理學者をして、暫く吾人の歎求に聽くところあらしめよ。

吾人熟く現代思想の趨勢を考ふるに、言説徒に煩はしくて實行の見るべきもの少く、理義日に多端に流れて事證は則ち藐焉たり。博學多識の學士は雲の如しと雖も、其の會して談ずる所を聞けば、恍として隔世の事に似たり。萬卷の書は庫に滿ちて、學徒是れに附くこと菌の如しと雖も、年々市に遍きの著書、何れか活ける

人生の知識を與ふる者ぞ。抑、吾人にとりて、最も大いなる疑問は、人生に非ずや。吾人は、それが爲めに惱み、それが爲めに苦み、それが爲めに展轉して慟哭す。あらゆる徳業と罪惡と、功利と教學と、實に是の疑問の解釋の爲めに世に現はれたるに非ずや。今の時は文明の世と稱せらる。釋迦、孔子、基督、日蓮等ども恐らく夢想し能はざりし工業と學術とは、燦として是の文明を裝飾せり。然れども吾人の心靈は、是れが爲めに何等の希望と安慰とを得たりしとするぞ。思うて茲に至れば、吾人は惆悵として嘆嗟せざるを得ざる也。

宗教、哲學、教育、道德、是の四つのは、吾人の精神的生活に關して、最も重大なる職能を有するものたり。世に處して誤らず、道に安じて迷はざらしむるものは道德也。觀心自證の上に、人物修養の道を啓くものは教育也。物心二界の交渉を明かにして、吾人の理性に平和を與ふるものは哲學也。若し夫れ人間靈性の無限なる歎求に應へ、理義會通の境域を離れて、無上超絶の眞理を示現し、吾人の精

神的生活に、最高の希望と安慰とを與ふるもの、是れを宗教と爲す。……(中略)……

今日の宗教が、宗教としての何等の威嚴、何等の勢力をも有せざるは最も明かなる事實也。人間靈性の支配者を有せざる、是の不幸なる時代に生まれたる吾人は、既に種々の形式に於て、是の深大なる憂悶を愴へたり。新道德、新宗教に對する多年の歎求は、即ち是の憂悶の發聲に外ならざる也。而して我が思想界は何を以て此の歎求に應へたるか。天下の學者は國民の爲め、社會の爲めと稱して、争うて其の意見を公にせり。然れども是れ唯學說のみ、意見のみ、理以て争ふべく、辯以て析くべし。人生一大事縁の覺悟に關して、何等の光明を投ずるものに非ざりき。吾人の求むる所のものは信仰也。而して彼等は信仰の歴史と性質とを説けるのみ。餓ゑたるものは麵包を得ずして、却て麵包の説明を得たり。而して彼等は以て吾人の飢渴を救ふべしと爲す也。

吾人は現今第一流の思想家、當來の宗教に對して熱心なる考察に従事しつゝ、

ある多くの學者あるを認む。兩井上博士、元良、加藤、村上諸博士の如き是れ也。

諸氏が其の宏博深遠なる學識によりて、一世を指導せられむとするは、國民の宜しく感謝の意を表すべき所なるべし。然れども吾人をして忌憚なく言はしめば、諸氏の關する所は學說のみ。而して學說と信仰とは本來別種の事項に屬す。理義の考覈、辨析の精微によりて、活ける宗教を造り得べしとは、吾人の思惟し能はざる所也。學術上の研究として、諸氏の事業が本邦の學界に寄與する所の小少ならざるべきは、固より疑ひを容れずと雖も、而かも諸氏が是れによりて或は本邦將來の宗教を建設し得べしとの抱負を懐けるあらむ乎、吾人は遺憾ながら、諸氏の志望に信賴する能はざる也。井上、元良、加藤博士の如きは、學者にして宗教家に非ず。學者の態度に據りて宗教を論議する、固より其の所なるべし。而かも本來僧籍にありて徳望一世に高かりし村上專精氏が、其の宗教家の本分に遠ざかりて、等しく學究的態度を取るに至りたるの一事は、吾人の深く遺憾とする所也。

一昨年三十三年の春、釋尊降誕會に於ける氏の演説は、今猶ほ吾人の耳にあり。其の東本願寺の腐敗を慨嘆し、一代民心の教化は、最早や是の如き腐敗を極めたる形式的宗門に依頼すべからざるを道破し、仰で一大偉人の是の濁世に出でて、新信仰の福音を鼓吹する者あらむ事を歎求せしは、正に現代民衆の希望を言ひ盡くせるものなりき。吾人は、當時に於て、深く望みを氏の誠虔熱烈なる宗教心に囑し、自ら釋尊付屬の行者を以て任すべき者、或は是の人に非ざるかを思ひたりき。嗚呼吾人の希望は一片の空想に過ぎざりし事、今や漸く明かならむとする也。村上氏は、吾人の妄に思惟せし如く、宗教家に非ずして宗教學者なりき。氏は井上、元良、加藤諸博士と共に、言論談理によりて信仰を求めむとする人なりき。我邦の學界は、氏によりて或は有力なる一學者を獲たらむ、是れ賀すべき也。然れどもあゝ是れ、吾人民衆の要求と抑々何の關はる所ぞや。

去年十月、村上氏は、眞宗大谷派の僧籍を脱するの告白書を天下に公にせり。其

の理由とする所は、一宗派の僧侶たることは、氏が従事しつゝ、ある佛教研究の態度を維持すること、相容れざるが爲めなりと謂ふにあり。氏が所謂の佛教研究の態度とは、古代印度に於ける婆藪槃豆氏及び訶梨跋摩氏が、俱舍論並に成實論を著はせしが如く、一宗一派の私心を去りて公平無私に佛教を研究し、各宗教理の根柢を貫通せる共同の理想を統一し、以て佛教の眞精神を發揮するにあり。而して氏は是の研究を以て今の廢頽滅亡に近づきつゝ、ある佛教を興隆する唯一の方法となし、是の研究の一結果たる佛教大綱論が、舊思想者に容れられざるべきと、猶ほ法然の選擇集が明恵、公胤等の誹謗を受けしが如くなるべしとなし、而かも宗教全體の爲めを思ふ者の、古より保守者流の反對を預期すべきと、猶ほ傳教、弘法、法然、日蓮の如くなるべしと説き、以て氏の態度が舊佛教徒の反抗に遭遇すべきを預想せり。

一宗教學者として是れを見れば、村上氏の態度は實に歎賞に餘りありと謂ふべし。然れども吾人敢て斷言せむ。是の如きは、決して宗教家の態度に非ざる也。佛

教の批評的、はた比較的研究や太だ好し。唯是れによりて新信仰を求めむとすとは
 何の謂ひぞ。信仰は生命也、解析によりて求むべきに非ず、證悟也、談義によりて
 達すべきに非ず、感情也、論理によりて解すべきに非ず。觀心自得の修證ありて、
 茲に初めて理義會通の人に語るべきものあらむのみ。理によりて情を強ふる、是
 れ僞情也。論を借りて信を迫る、是れ僞信也。吾人の要求する宗教と毫も爲す所
 無し。古より學理研究の結果として一宗教の建設せられたる事例は、吾人の未だ
 曾て知らざる所也。村上氏は法然日蓮を援引せり。然れども法然の淨土門が選擇
 集によりて開かれ、日蓮の法華宗が開目鈔によりて建てられたりとは、吾人の思
 惟する能はざる所也。げに、捨閉閣抛と云ひ、一向專修と云ふ、固より淨土一門の
 關鑰たり、特に九條關白の付屬を待て知れたるに非ず。法華折伏と云ひ、一念三千
 と云ふ、正に是れ妙宗立脚の元意、豈佐島流竄の日に始まらむや。法然、日蓮、既
 に立教の當初に於て、是の理を唱へたりき。然れども是の理ありて、初めて淨土

門あり法華宗ありきとは、吾人の決して信する能はざる所也。凡そ信仰の祕密は健孚感應の一大事縁に屬す、悟るべくして言ふべからず、理義文字はたましく其の外面の形相を解釋するに過ぎざるのみ。是を以て眞正の信仰は常に理解に先つ、理論の結果初めて信仰あるに非ず。古より宗教の創立が多く預言、天啓、默示に起原し、一切人智の究明を超絶するは實に是れが爲めに非ずや。吾人は固く信ず、淨土念佛宗と本化妙宗とは、畢竟一個の元始的事實也。法然、日蓮の偉大なる人物の上に感孚應受せられたる一個の宗教的祕密也。而して選擇集と開目鈔とは是の事後の註釋たるに過ぎざるのみ。村上氏が氏の所謂る批評的研究の態度によりて、是の二人の事蹟に倣ひ得たりとするもの如きは、吾人の解する能はざる所也。

されば、村上氏の所謂る批評的研究の如きは、宗教の立場より見れば畢竟閑事業のみ。其の興廢汚隆と何等著大の關係を有せざるのみと謂ふべし。村上氏が是れを以て、佛教從來の研究に一生面を拓かむと言ふや、可し。是れによりて佛教其物

の、頽廢を振興し、世道人心の腐敗を救治せむと言ふが如きは、吾人の得て信ずる所に非ざる也。畢竟氏は學說によりて信仰を求めむとするもの、嗚呼是れ木に縁て魚を求むるものに非ずや。

讀者よ、吾人が村上氏を以て爾かく言を爲す所以を怪む勿れ。吾人は現代思想界の惡風潮が、誠度摯實なる好個の宗教家村上氏其人の如きをすら、猶ほ數十年來の名譽ある僧籍を抛ちてまでも、冷靜枯淡なる一學究に化せしめむとするの事實を見て、痛恨悲惋の思に堪へざるものあれば也。吾人は毫も村上氏を非難せむとするものに非ず。氏によりて博學達識なる宗教學者を得たるは、我が學界の爲めに喜ぶ所也。然れども學界の喜びは、吾人民衆の福祉と何の關はる所ぞ。飢ゑたるものにとりて望ましきものは麵包也、麵包の比較研究に非ざる也。(一節、中畧)

吾人の要求の顧みられざるは、常に宗教、哲學、教育のみに非ざる也。吾人は今の所謂道學先生に向て、吾人の苦衷を披瀝せざるべからず。……(中畧)……

吾人は身久しく學界に生息せるもの、教育社會の現狀に就いては、其の觀察恐らくは大過無きを信する也。而して吾人の見る所によれば、今の所謂る倫理修身とは、倫理に關する理論、學說の謂ひにして、道德其物の事本の謂ひに非ず。今の學者が之を校舎に説き、學會に講ずるや、唯是れ理のみ、論のみ。或は倫理學說の異同を述べ、或は道德意識の發達を説き、或は徳名の品彙稱謂を論じ、以て彼等の所謂る倫理修身の趣旨を得たりとするもの如し。而して斯かる倫理修身の學者は如何の人ぞと見れば、多くは是れ白面書齋裡の學士のみ。德行操持の人に勝ぐれたるものあるに非ず、令名佳聞の世に仰がるものあるに非ず。たゞたゞ西洋倫理學の知識に於て、多少常人に超ゆるあるのみ。嗚呼是の如き人をして是の如き事業に當らしめ、以て徳教振作の大事を成さむとす。天下何物の突梯か、能く是れに如かむや。

夫れ道德の事たる、言ひ難く説き難し。唯一事の争ふべからざるは、そが觀心修

證を以て第一義と爲すこと也。觀心修證の事もと自得、理以て推すべからず、辯以て強ふべからず。要は健孚感應の不可思議と謂ふの外無し。如何にして是の不可思議を現じ得べきやは、やがて教育者、倫理學者等の研究すべき一大問題なりとす。然れば是の問題は、古より満足に解決せられずして今日に及べり。今日以後も恐らくは解決せらるるの時機無かるべし。而かも一事の争ふべからざるは、道德の感化が其の人に在りて其の法に存せざる事也。吾人は決して一切の道教學智を擧げて、道德上無用なりとするものに非ずと雖も、其の元始的動力が知識以上の或者なることを以て、争ふべからざる事實なりと信じ、而して同時に是の或者が多くの場合に於て、所謂人物の感化に由來することを認むる者也。吾人は是の點に關して多言するの違無し。唯之を古賢先哲の遺業に鑑み、吾人自らの證悟に省みて、敢て是の如く信ずと云ふを以て足れりとせむ。たゞ見よ、釋迦、基督、日蓮の教は古今を通じて渝らず、其の道の獨り汚隆あるは如何。孔子の教は論語十卷の外

に出でざるべし。然れども誰か孔子自らの口より其の教を聞くことの、猶ほ獨り其の書を讀むが如けむと言ふものぞ。大奈翁の下には幾個の小奈翁あり、大藤樹の下には幾個の小藤樹ありき。其の事にして能く其の道を述べ、其の文にして能く其の神を傳ふべくむば、今の道學先生の門下にも幾多の賢哲あるべし。否、道學先生自らの如きは、實に大賢先哲を凌駕せる大人物となり居らざるべからず。

吾人をして忌憚なく言はしめば、今の社會、殊に教育社會が必ず倫理學の書齋先生に託して、道德修身の大事に當らしむるは、實に謂はれ無きの甚しきものと謂はざるべからず。道德其物を要する者に向つて倫理學説を講ずるは、是れ米を求むる者に石を與ふるものに非ずや。人物の修養を望み、觀心自得を希ふ者を動かすに、區々たる理義辨口の末義を以てするは、吾人其の何の故なるを解せず。徳教の爲めの倫理學は、植物學の如く講義し、若しくは領得せらるべきものに非ず。夫の多少西洋倫理學の著書を讀みたりと謂ふの外、何等常人に異なる無き白面近眼の

書齋的、道學先生をして、靈性化導の人生一大事縁に關はらしむるが如きは、偶々現代思想界の一缺點を暴露せるものと謂ふべし。夫れ唯倫理學説の講義あるのみにして而して道德の感化なく、倫理學者のみありて徳行家無し。世を舉げて倫理修身を叫ぶも、名教地を掃ひ、社會公私の腐敗日に益々甚しからむとするもの、毫も怪むに足らざるを見る也。

讀者よ、吾人をして徒に現代を誹謗するものと爲す勿れ。吾人は靈性の安慰の爲めに宗教を要し、理性の平和の爲めに哲學を要し、人格の修養の爲めに教育、道德を要す。是れ豈最も簡明なる人性本然の要求に非ずや。而して今の思想界は、宗教の代りに宗教の學説を與へ、哲學の代りに哲學の歴史を與へ、教育道德の代りに教育、倫理の理論を與ふ。而かも求むるものは遂に與へられざる也。二十世紀の文明とは、是の如く人性本然の要求を無視するものなる乎。

吾人は敢て現代の思想界に向つて、其の進路を誤れる事を警告せむ。吾人の見

る所を以てすれば、今の學者の多くは器にして人に非ざる也、能力にして人物に非ざる也。吾人は學者の名譽を是認す。然れども吾人は學者となるの前に、先づ人たることを要するに非ずや。人として缺くる所あるの學者は、學術を知りて人生を解せず、一切の道教學智を擧げて自家書齋裡のものとなさむとす。あらゆる僞學は是の如くにして世に起り、理義日に多端にして收拾する所を知らず、顧みて人生の歸趣に關しては茫然として與る所無し。本邦現代の思想界は、即ち其の好事例にあらずや。

是れを要するに、あらゆる人生の問題を藐視せる今の學者の學究的態度は、吾人の毫も徳とする所に非ず。吾人は今の思想界が、吾人民衆の歎求に應じて、改造せらるるの時一日も早からむことを希望する者也。畢竟今の時要するものは、學者に非ずして實行家也。宗教の方面に於ても、哲學、教育、道德の方面に於ても、人生に對して統一的解釋を與ふるの實行家也、觀心自覺の上に立脚せる意力あり、情熱

ある實行家也。口耳三寸の學の如きは、今の學者先生をして關はらしめよ。人生は知識にあらずして事實也。吾人が靈性の安慰と希望とは、是の事實の解釋の上に繋れり。吾人は是の事實を色讀し、身現し、其の大いなる人格の云爲によりて、吾人が本心の證據を促がす程の一大實行家の出でむことを望む者也。

嗚呼吾人は求めたり、然れども與へられざる也。尋ねたり、然れども遇はざる也。叩きたり、然れども啓かれざる也。吾人民衆の歎求は、遂に荒野に叫べるもの如くなるべき乎。昔者基督の教を説くや、エルサレムの民皆駭きて曰く、この人は學士の如くならず、權威を有てる者の如く教へ給ふと。嗚呼今の時、誰か吾人に權威を有てる者の如く教ふるものぞや。

(三十五年一月。第四卷八七一―八八七)

中江兆民居士 (一節)

生●の●覺●悟●は●即●ち●死●の●覺●悟●也●。●哲●學●宗●教●は●死●の●學●問●也●。●是●の●人●生●の●一●大●事●因●縁●に●關●し●て●爲●す●あ●る●に●非●ず●む●ば●、●一●切●の●道●教●學●智●、●吾●人●に●於●て●何●爲●る●も●の●ぞ●。

(三十五年一月。第四卷一〇一九—一〇二一)

* * * * *

教科大學

教科大學の設立を説くものあり。曰く、以て宗教の頹廢を救治せむと。誤れる哉、學説によりて信仰を求む、野に行いて魚を採るが如けむのみ。今の宗教界に要するものは知解以上の人物也、學説文字は已に／＼其の多きに勝へず。

(三十五年一月。第四卷一〇二六)

麵包を求めて石を得たり

吾人は靈性の安慰の爲めに宗教を要す、而して今の學者與ふる所は、宗教の學說のみ。吾人は理性の平和の爲めに哲學を求む、而して今の學者供ふる所は、哲學の歴史と認識論とのみ。吾人は吾人の人格の修養の爲めに道德を要む、而して今の學者の訓ふる所は、倫理學の理論のみ。米を求めて砂を得たり、麵包を求めて石を得たり。嗚呼夫れ飢ゑたるものを如何せむや。

先づ人たらむことを要す

今の學者口ありて手無く、言説ありて實行なし。畢竟識の貴きを知りて、人生の更に重すべきを解せざるの弊に坐す。

學者たる可也、然れども先づ人たらむことを要す。然らざれば、萬千の知解も半錢の價値無けむ。

年若き人よ

年若き宗教家よ、爾かく世を果敢なむこと勿れ。善く食ひ善く飲む、是れ人生の事實に非ずや。

年若き哲學者よ、爾かく世を難むする勿れ。理の争ふべきもの、初めより争はざれ。吾人は美酒に對して、先づ其の泡を吹くに非ずや。

年若き教育家よ、爾かく吾人の言に眉を顰むる勿れ。罪無きものは恐れず、恐るるものは疚しければ也。人は焼かれむことを慮りて、其の火を怖るべきに非ざるをや。

年若き道學先生よ、爾かく善惡を以て心を勞せざれ。かの流沙に沈むものを見よ、自己の叫びの爲めに自ら溺るるに非ずや。

事後の註釋 理前の是認

人よ、何ぞ汝の争ひを止めざる。古より趣味に争ひ無しと稱せらる。されど吾人の人生は、趣味の争ひに外ならざるに非ずや。

理論は事後の註釋のみ、事實は既に理前に於て是認せられあるを知らずや。

怯夫に非ざれば即ち偽人

人性は爾かく圓滿なるものに非ず。吾人今にして神たらむは早からずや。強ひて違はざるを求め、力めて戻らざらむを銜ふも、省みて安からず。即ち性を殺して塵に自ら欺く。是れ怯夫に非ざれば、是れ偽人。

今の世の學者概ね是の類のみ、何ぞ其の云爲の死灰枯木の如くなるを怪まむや。

(三十五年一月。第四卷一〇二三一—一〇二六)

怯夫に非ざれば即ち偽人

無題錄

(二節)

◎井上圓丁氏の甫水論集は、必ず世上に歓迎せらるべし。所謂る護國愛理の二主義を標榜し、野にありて哲學的知識の普及に力めたる氏が二十年來の經歷は、今の操持なき學者間には、兎も角も珍らしき事例たるを失はず。其の言概ね平明にして解し易く、事を淺近に假りて理を高遠に託す、用意見るべきものあり。其の說に服せざる者をして、猶ほ快く其の言に聽かしむる圓通滑脱の技倆は、氏に於て特に推重すべしとす。氏も亦所謂る老大家の風ありと謂ふべし。

◎然れども吾人は所謂る老大家に於て、幾多の慊らざる所あり。其の說の中正を求めて斷案の多く曖昧なる、世故閱歷に長ずるの弊として青春の理想を失へる、

敵を作らむことを恐れて、故らに圓滑の辭令を用ふる、文情共に平穩に過ぎて、讀者を動搖するの力無き、概ね皆然らざるは無し。

◎若し所謂る中正を以て旨となさむか、事是れより容易きは無けむ。唯平淡和樂の辭は、時弊に對するの立言として、人を動かすの力無きを如何。人往々矯激を以て吾人を責む、吾人不肖と雖も豈駁者の言を俟つて、所謂る平穩の理を解せむや。

◎餘事は姑く措かむ。甫水論集中、吾人は『余が所謂宗教』の一篇を推さむ。是れ曾て哲學雜誌に掲げられたるもの、近時の宗教論中、色讀體達の旨義に於て、尤も吾人の意を得たるに近し。

◎氏は佛教教理に於て、台家の所謂る事觀の妙法によるもの如し。佛教の厭世教に非ざるを主張し、眞如開發の現實世界に即して、直に安立の地盤を求むべきを説くところ、淨土念佛の厭離思想を取らずして、寧ろ日宗哲學の一念三千の眞意に近しと謂ふべし。『將來の佛教に就いて日蓮宗諸師に望む』の一篇、亦氏の思想

の傾ぐところを見るべき也。

◎予は佛敎敎理に於て、全く門外漢たり。然れども台家一流の此土寂光の妙理を擴充して、一大現世敎を建立したるの一事は、實に日蓮上人の大卓見なることを認めざるべからず。井上氏の眼を是の點に着けたるは、吾人の同意を表する所也。

◎『天下萬民 諸乘 一佛乘と成りて、妙法獨り繁昌せむ時、萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らむ。吹く風枝を鳴らさず、雨壤を碎かず。代は義農の世となりて、今生には不祥の災難を拂ひ、長生の術を得、人法共に不老不死の理り顯はれむ時を御覽せよ。現世安穩の證文疑ひあるべからざるもの也。』

是れ即ち『此土即寂光』の事觀の敎相を、現實的に表彰したるの言なりき。

(三十五年五月。第四卷一〇五七—一〇五九)

無題錄

◎道徳を説くに、日常市井に見る所の平凡の事實を以てせよ。何人にも學むで得らるべく、力めて達し得べき類例を以てせよ。非常異例の事を語る勿れ。英雄豪傑の傳奇の如き、兒童の心を動搖するものは、力めて是れを避けよ。——是れ、今の道學先生の吾人に訓ふる所也。甚しい哉、今の倫理、教育の俗惡凡庸を極めたるや。

◎平凡の人を造るに、何ぞ故らに教育の煩はしきを俟たむ。非常の時に處するの道、是れを教ふる平日に於てに非ずむば、果して何れの時に於てぞ。且つ夫れ道徳は摸倣に非ずして感應也。英雄豪傑の事蹟を體するの時、現はるところは大なる理想の光被也、新たなる生命の化育也。夫の道學先生の如きもの、畢竟是の三昧を解せざるの弊に坐するのみ。

◎凡人を造るのみが、教育の目的には非ざるぞかし。天才無き人類を想像せよ、是れ、あらゆる想像中の最醜最惡なるものに非ずや。釋迦、基督、プラト―無く、

ミケランジェロ、沙翁、ゲーテなく、クロムエル、奈破翁なく、孔子、日蓮なき世界の歴史を想像せよ。嗚呼誰か、是の如き想像に勝へ得るものぞや。

◎世に若し天才を作るの道あらば、そは天才崇拜することに外ならず。凡俗に甘ずる人をして、欲するがまゝに凡俗ならしめよ。天若し一個の天才を降さむが爲めに吾人に要むる處あらば、吾人は如何に犠牲をも貴しとせざらむ也。

◎蠢々乎として生死するもの、世に幾億兆ありとするも、永遠なる人道に於て、何の徳とするところぞ。百萬の生靈は斃れたり、然れども一奈破翁の名を歴史に留めんが爲めの代償として何の悔ゆる所ぞや。

◎吾が説や、多くの人に容れられじ。然れども何人にも破られじ。

吾が言に聽いて喜ぶ人は少からむ、然れども世界の人のすべての歡びも、吾れ自らの満足に比すべからざる也。

吾人は想ふ、平和は餘りに長く此の世に續きたり。斯くて人は是の平和の世の長きに慣れて、餘りに平氣になり過ぎたるに非ざる乎。

怪むを要せざる也。鮑魚の中に入るもの、久しうして其の臭きを忘るるが如く、彼等は凡て物に對して驚きの心を喪へりと覺ぼし。憂へあれども憂へず、悲みあれども悲まず、疑ふべきに安じ、惑ふべきに住まる。文明の苦痛は此の世の上下に充ち滿つれども、彼等恬として省みず。たゞたゞ名聞利養の外に、世間又疑惑なるもの存するを解せざるもの如く爾り。嗚呼人は何時まで自ら欺かざるべからざる乎。

○

現世に於ける一切の學智と道德とは、其の根柢に於て既に現世を是認す。彼等は現世を超越せずして附隨し、審判せずして讚美し、戒飭せずして阿從す。一代の文教、詮し來れば現世の註釋に外ならざるのみ。

山に入て山を見ず。此の世の真相を知らむと欲せば、吾人は須らく現代を超越せざるべからず。斯くて一切の學智と道德とを離れ、生まれながらの小兒の心を以て一切を觀察せざるべからず。



嗚呼小兒の心乎。玲瓏玉の如く、透徹水の如く、名聞を求めず、利養を願はず。形式、方便、習慣に充ち満てる一切現世の桎梏を離れ、あらゆる人爲の道德、學智の繫縛に累はされず、たゞたゞ本然の至性を披いて、天真の流露に任かすもの、あゝ獨り夫れ小兒の心乎。

吾人もと學無く才無し。唯野性の生まれながらにして、移し難きものあるのみ。年來人に離れ世と絶し、藐然として天地の間に嘯く。潜に想ふ、是の心それ或は小兒の心に邇からむ乎。願はくは依て以て、聊か平生の疑惑を陳べ、録して大方の教を請はむか。

人の生を求むるは、此の生に價值を認むれば也。即ち知る、人生畢竟價值に外ならざるを。

人生既に價值也、是を以て人生の歸趣は常に最大の價值と相伴ふ。最大の價值の存する所、即ち是の價值の所有者にとりて、人生の全意義の包括せらるる所也。

至上の幸福茲にあり、最高の道義亦茲にあり。絶對也、無上也。苟も自我の存在する限り、天上天下無二亦無三の尊貴也。人は是れが爲めの故に執着し、欲求し、煩悶し、戰闘す。時として繼ぐに死を以てして悔いざる也。豈啻に悔いざるのみならむや、彼れは是の如くにして、其の生存の意義を全うし得たるを喜ぶ也。

看來れば、事體極めて簡明なるに非ずや。吾人は生く、生くるは價值の爲め也。即ち最大の價值と共に生き又死するは、理の當然にして事の必至也。

是の如くにして、吾人は是の世に生死する能はざる乎。

世に道德なるものあり。吾人の行爲を判決して、善惡是非の目を立つ。人は是の判決を慥れて、偏へに其の則に違はざらむことを是れ力む。知らず、是れ果して何の意ぞ。

人生の價值なるは、既に是れを了す。而して記せよ、價值はそを有する者のみの價值也。能持の主體を離れて、世間又價值なる者の存せざること、猶ほ眼を去りて色なく、耳を外にして音無きが如し。即ち價值の物たる、主觀的也。

常に主觀的なるのみに非ざる也。價值は畢竟個性の反應に外ならざるを以て、同一事物は必ずしも凡ての人に對して、同一價值を有すること能はず。即ち價值は主觀的なると共に個人的也。

既に個人的也、是を以て價值の物たる、與ふべからず、受くべからず。辯以て強ひ難く、力以て傳へ難く、言說理解を超絶して、人々自ら自得するの外無きのみ。

換言すれば、價值は自ら創造し得る者にして、初めて其の所有者たり得べきのみ。人生既に價值也。而して價值の主觀的にして、個人的なる亦既に是の如し。畢竟生を此の世に享けて、茲に自ら人生の價值を造り、其の價值の最も大なるものに隨つて、安住の地を求めむと欲す。人生の意義又盡せりと謂ふべし。他の目して善と云ひ、惡と云ふ、吾れに於て何の關はる所ぞ。若し道德の目的にして、最大の幸福を與ふと云ふにあらば、吾人は既に是の如き道德の實行者たるに非ずや。豊營に實行家たるに止まらむや、更に又其の創造者たるに非ずや。

試みに是の言を録して、道學先生の座右に呈せむは如何に。

○

是の如く言はば、難者必ず言はむ。無數の民衆は汝と共に此の世に共存せり。社會是れが爲めに起り、國家是れが爲めに立つ。所謂る道德は、是等凡ての民衆の幸福の爲めに存する也。汝の言ふ所の如き、是れ汝一人の事のみと。

嗚呼汝一人の事は、何故に爾かく重しとせられざる乎。吾れは吾れ自らの爲めに生きずして、抑々何物の爲めに生きべき乎。吾人は必ずしも社會國家を輕しとせざるも、而かも吾れ自らの重きに比すべからざるを思ふ。他愛可也、博愛又妨げじ。畢竟唯是れ意識上の問題のみ。換言すれば、一個の客體としての社會國家等は、吾れに於て沒交渉也。唯是の客體にして吾が主觀上の事實となり、茲に吾が生存の上に於て、多少の價値を認めらるるに及びて、吾れと彼等と初めて亦多少の關係を有し來るべきのみ。吾人は是の意味に於て民衆を認容し、國家を認容す。畢竟外より吾れを折くに非ずして、内より彼等を攝するのみ。是の攝折の意義を解せざる人は、未だ曾て個人の尊嚴を解せざるの人也。

吾人曾て曰へらく、三千法界を以て是の一念に攝す、道義初めて語るべしと。

即ち是の謂ひのみ。嗚呼今の道學先生の幾人か、果して能く這般の消息を解し得ん。

(三十五年十月。第四卷一〇八二—一〇八七)

無題錄

(272)

○あらゆる學術は、常に奴隸的のものである。問題は常に外より與へられる。彼れは是の與へられたる問題に對つて、解釋を提供すれば、それで好いのである。

○問題の提供者は、時としては自然である、又時としては天才である。學術は常に、此れ二者の何れかの奴隸である。

○迷信は世人が騒ぐほど、左程怖るべきものでは無い。むしろ怖るべきは、道學先生の固陋なる道德説である。基督を十字架に上ぼせたのも、ソクラテースに鳩毒を飲ませたのも、スピノザを迫害したのも、乃至はシヨペンハウエル、ニイチエを苦めたのも、皆是の道德説の爲せる業だ。

○昔は、犠牲は少數の偉人に限られたが、今や多數の凡人が是れに代ることとなつた。彼等の口無きが故に、世は平和に見ゆれども、實に死滅に近づきつつあるの

である。

◎迷信は力である。ダンバーの戦を、人が出来事と言つたのに對し、『是れ人事に非ず神事也』と怒りたるクロムエルは、恐らく當代第一の迷信者に相違無かつたであらうが、其の事業は天日と共に輝けるのである。日蓮は三災七難の佛讖を叫むで一世を警めたが、今日の學者などの眼には、是れ程大いなる迷信者は無からう。然しながら是の迷信の上に打立てられたる、彼れの事業の如何ばかり偉大なりしよ。

◎我輩は斯う思ふのである。迷信と云ひ、眞信と云ひ、つまりはどちらでも好いのである。唯必要なるは、精神である、赤誠である、不惜身命の大勇猛心である。◎今の人は祈ることを忘れた。是れこそは、今の世の最も大いなる禍ひと謂ふべきであらう。

◎大いなる人となるの道は、唯二つあるのみである。己れの小さきを悟るは、

其の一つである。己れの大いなるを信ずるは、他の一つである。前者は情により、後者は意による。彼れは攝受門、此れは折伏門。彼れは易行道、此れは難行道である。彼れは釋迦基督の教義にして、此れは奈破翁、ニイチエの信條である。

◎人を脱して神となる、己れの小さきを悟る所以である。人のまゝにして神となる、己れの大いなるを信ずる所以である。

消息書簡

三十四年十一月十五日

(鎌倉長谷より 同要山なる田中智學氏へ)

拜復、昨日は御枉駕難有奉存候。唯今は御使者を以て、法華會義全部八冊御貸與被成下、奉謝候。早速可及拜讀候。又預て恩借之宗義鈔一冊御使者に託して御返却申上候間、御落手被下度候。又明日あたり參堂如何之御指諭、難有拜承、夜分歸途寒風に襲はるるも如何と存じ候へば、乍勝手午前中に罷出度、尙右にて御不都合可被爲有や、伺上候。萬々其折申述度。草々不宣。

(第五卷四一四)

三十四年十一月十五日

(鎌倉より ライブチヒなる姉崎へ)

嘲風兄！ さて何事より書き初むべきか。此の秋のはじめより絶えて御消息を

申さざりしが、君よりは度々の御書面、うれしく懐かしく讀み返し々候ひき。今は言はまほしきことも、此の狭き胸には忍び難きまでに多くなりまさりつ。いでや卷紙のあらむ限りを、是の思ひにて染め申し候はむよ。……

人は訓へて曰く、愚なる者よ、汝は此の世に於て如何ばかりの者と思ふや。人は多く國は弘し。汝が如きの生死存亡得て鬪する所に非ず。小我に慢じて増上の惡念を起すとも、世の汝を見ること飛花落葉にも劣るらむと。げに〜飛花落葉にも劣るべき身也、うたかたの有れども無きが如き果敢なき身也、とは素より存知の旨ながら、たい此の一念の抑へがたく、ほだし難きを如何にすべき。あゝ君よ、人の生まるる、己れの爲めに非ざれば、そも何物の爲めぞ。世に最も悲むべき眞理は、人生の事實なることには候はずや。

*

*

*

*

*

*

かゝる思ひを君讀まば、笑ひもし給ふべきを、姑く止めなむ。去月初めより鎌倉

に移り越し候ひぬ。……鎌倉は君の好み給へる土地の一なりしやに覺ゆ。今や秋も深うなりて、古き霸府のたゞすまひ、一向所感の身にはたゞならず覺ゆ。縣孝孺が所謂、百里停雲總殺氣、一林高樹皆秋聲のながめ、目も寂しう心も疎く相成申候。此地に住へる縁に、何か土地に關する一著述試み度思へども、例の古跡の探討は鎌倉志八卷と新編相模風土記百二十五卷とにて盡きたり。何かそれ以外の述作もやと思念罷在候。日蓮上人の追懷に勵まされて、過日來其の傳記並に高祖遺文錄など繕き居候が、さても是の偉人の生涯こそ今更貴くも仰がれ候ものかな。心も言葉も中々に及ばず候。上人の人物は、其の教義を味はでは解し難ぬるふしありと、さる先輩の勧めにより、法華經等をも讀み申候ひしが、げに方便、壽量二品の本義なくては、日蓮上人一代の大信仰大抱負も、其の根柢を失へるに同じきこと覺束なくも合點致候ひぬ。げに遺文を讀まむ者は、先づ彼の經を讀むべきにて候ふべし。遺文中の開目鈔、種種御振舞鈔などは、申すに及ばず、其の他の消息文みな、

上人の傳記に對照して興會難盡。文學として見るも、上人の人物そのまゝの大發現、げに鎌倉時代第一の偉觀とや申すべき。三上氏等の日本文學史に、一語も言ひ及ばざりしは、如何にともしぶかし。君の意見如何。若し興大いに加はらば、せめては是の偉人の一面を攝取して、吾が筆端に活現したきもの也。……(中略)……

君よ、憐れと見給はずや。吾れは又ニイチニの思想に、先天の契合あるを覺えぬるは如何にぞや。人は吾れに向て言へり、汝は先に日本主義を唱へたるに非ずや、文學美術をさへ、國家的歴史的の立場より論評せむと企てしに非ずや、今や則ち如何の狀ぞと。哀しい哉、吾れは答ふべき言葉を知らず。唯自ら省みて、心のまゝにして、自ら欺かざりしを喜ぶのみ。天も照覽あれ。遠きに在ます君の、我が身近くにありても見そなはせ。良しや世を擧げて僞と罵らむも、吾れに於て引くべき一分の責あるを覺えず。所詮は矛盾の人身を受けて、此の末法の世に人となりぬ。大覺世尊だに、四十餘年未顯眞實と宣らせ給ひて、法華爾前の經典をば一妄語に

附し給ひぬるものを。いかに況むや、性淺く果乏しき吾等如きに於てをや。あゝ多くは言はじ。君よ、這般の煩悶を如何とか見給ふぞ。見上ぐれば、窓前の山樹一分の紅を染めぬ。春秋席あり、日月晝夜を度る。人心何ぞ獨り是の如く常なきや。なか／＼に申すも愚かの限と存じ候。…(中略)…

書かまほしきことの半ばをも書かざるに、書くべき紙の残り少なになり候ひぬ。佐渡は紙の無き處と、かこたせ給ひし日蓮上人の語も思ひ出されて、由無きことを長く書き列ねむの、心無き業を已むべくや。畢竟、吾徒はお互に強からざるべからず、又強がらざるべからず。叶はぬ迄も理想の旗押し立て、一度は甘心の軍果し申さむす。君の歸りまさむ頃は、明後年の暮なるべくや。吾れは先づ生を力のみ、糧を蓄へむ。壯き者のすべき程の事爲さで朽ちむは口惜し。開目鈔下卷の左の文字をば、君には如何に見給ふぞ。あゝ是の意義、是の精神ならでは、何事も

果し得られまじうぞ覺ゆる。

詮ずる所天も棄て給へ、諸難にも逢へ、身命を期とせむ。……善につけ惡につけ、法華經をすつるは地獄の業なるべし。大願を立てむ。日本國の位を讓らむ。法華經を捨てて、觀經等に就いて後生を期せよ。父母の頸を切らむ、念佛申さずば。なんどの種々の大難出來すとも、智者に我が義破られずば用ひじとなり。其の外の大難、風の前の塵なるべし。我れ日本の柱とならむ、我れ日本の眼目とならむ、我れ日本の大船とならむ等と、誓ひし願破るべからず。

*

*

*

*

(第五卷四一四—四二六)

三十四年十二月十日夜

(鎌倉より 東京なる登張信一郎氏へ)

帝國文學の原稿は、過日歸りがけに芥舟に話せし通り、ドーモ是から新しきも

のは出来ニクシ。依て中學世界の爲に書き候「現後録」と題する日蓮物語、是れは到底中學物にあらず、聊か小生得意の文體に候間、右御掲げ被下度候。讀者は全く別なれば、不都合なかるべきか。右現後録は、小生假りに豪傑文體と名くるものにて、今の……スラクラシタ「奴隷文體」に反せるものにて、即ちニイチニ主義を文體の上に發現したるものに候。小生は帝文の讀者に一讀して貰ひたい。依て右様御取計被下度、博文館に謄寫申附候間、兩三日中には屹度御送申上候。尙ほ有無御返事を乞ふ。

(第五卷四二九)

三十四年十二月十一日

(鎌倉より タイプチビなる姉崎へ)

是頃は兎角無沙汰勝になつて面目ない。當時は萊府に住つて居らるる事は、學士會の宿所名簿に承知して居る。健康は如何か。僕は兎角はかゝしくないに困る。

學校の方も、此十二月の暮から來年の三月まで休で、後で補缺することにした。別に變つた事もなく、唯不愉快だ。……僕は來年の帝國文學に「况後録」と云ふ一夜作りを書いたが、いさゝか一氣呵成の得意物で、僕を精神を日蓮の自叙を假りて現はして居る。是非讀でくれ給へ、文體もいさゝか注意した。……家の後の山には水仙が盛だ！

(第五卷四三〇)

三十四年十二月十四日朝

(鎌倉長谷より 同要山なる田中智學氏へ)

拜啓仕候、此頃は寒氣頓に加候處、御起居如何。今朝は御近刊の妙宗一部御寄送被下、毎々の御芳情不堪感謝候。爾後恩借の法華會義は隨時熟讀罷在候。今朝の妙宗紙上、山川君の物し給ひし聖祖の洪化文中の本化上行菩薩の一段は、特に興會不淺拜讀仕候。高祖遺文録も十五卷までは略々目讀仕候へば、近日參堂の折は

其後卷拜借相願度候。來る十八日頃までは、少々俗事の爲め拜趨仕難く候へ共、二十日頃には拜眉の榮を得度存居候。其節は上人御傳記并に法華經に就きて、御垂訓を仰度奉存候。萬々其折に申殘候。早々不一。

(第五卷四三一)

三十四年十二月二十日

(鎌倉より 宇都宮なる笹川種郎氏へ)

過日の御書拜讀、御無事御精勵の趣、大賀々々。小生事病癒依然あしともよしともなく、先は心境共に碌々たる事と御承知被下度候。……來春の帝文に美文御寄稿の由、久々の御執筆、鶴首罷在候。小生も况後録と申すもの一篇寄稿仕候間、御一讀の榮を得ば幸甚。右は日蓮上人の述懐に擬したるものに有之候。當地移住來、日蓮研究は愉快なる一事業に有之候。上人は實に日本第一の偉人と思はれ候が、貴兄所見如何。小生は日本二千五百年史中、是人に於て、始めて崇拜的英雄に

遭遇せしの感あり、興會不淺、感謝之念日に深く相成申候。小生は來春梅花の咲迄、當地冬籠りに御座候。……………

(第五卷四三二)

三十五年一月二日

(鎌倉より ライプチヒなる姉崎へ)

僕に與へたる君の書は……………今日……………讀んだ。嗚呼讀了た時の僕の心持を何に喩へやうか。僕は自ら力を増した様に感じた。實に會心の文字とは、斯の様の文の事であらう。中段以後は文調に一種天籟の響があつて、其の自然の流露に千萬鈞の力がある。君の大なる信仰が活々として表はれて居る。僕は此書が我邦の思想界を警醒する力の大なることを疑はぬ。丁度僕が今月の太陽に「本邦思想界に對する吾人の要求」と題した論文と大に趣きを同じうする所がある様に覺ゆ。此頃は日蓮上人の研究に身を委ねて居る。此英雄の生活によりて吾等の弱き命の

強くなる様に感じらるる。病氣は寒に向つてから少し善い様に感ずる。……

(二月九日頃、ライプチヒ着。第五卷四三三—四三四)

三十五年一月五日朝

(鎌倉長谷より 同要山なる田中智學氏へ)

新春の御よろこび申納候。

一昨三日は、折あしく荒風の爲め參堂致かね、遺憾此事に御座候。又昨日はわざわざ御使者給はり候處、是亦折惡敷外出中にて、御芳志を空しうせし段、御海怒被下度候。今五日には午後には拜趨可仕と構居候處、夜來風邪惡寒を催し、卅八度内外の發熱にて臥床罷在候次第、一兩日は外出叶ふまじきやと被存候間、此旨あしからず御諒察被下度候。又過日御會下山川君より少年雜誌記載の事項につきて、御丁寧なる御書給はり痛入候。生意氣なる小兒輩の惡戯、もとより懸念す

るまでも無之事、御一笑被下度候。同君は右の記事に就きて、來月の妙宗紙上に御辯駁の御文可有之やに御報有之候ひしも、貴重の御紙面、此れ體の瑣事に御汚の事は、勿體なき事と被存候。尙同君へ御傳被下度奉願候。

楮餘萬々、兩三日風邪快癒後、早速參堂の節申述度候。 勿々不宣。

舊臘御約束申上候帝國文學は、別封御郵送申上候間、御一覽被下度候。號揃はず、御判讀是祈。

(第五卷四三四—四三五)

三十五年一月二十六日

(鎌倉長谷より 同要山なる田中智學氏へ)

拜讀。一昨日寒天の處、はる／＼御來訪を給り、光榮不過之候。段々の御高論興會難盡、いよ／＼退轉なく修業の上、本化妙宗の醍醐味に接するの日を樂み居候。高著攝折論、單行御發刊のよし拜承、拜讀の上は、批評等は力不及候得共、何分の所

感無臆面、太陽紙上に掲載可仕候。極寒の際御上京、折角御厭可被遊候。

早々不一。(第五卷四三七)

三十五年二月二十四日

(鎌倉長谷より 同要山なる田中智學氏へ)

謹啓、小生事過般持病の咯血を起し、十餘日間絶對安靜を命せられ候まゝ、御寄送の高著、御親切なる御書面に對しても、御禮の御返事も不差上、缺禮御許被下度候。唯今は初めて褥上にて執筆仕候仕合に御座候。

丁度「日蓮と基督」と題する論文に着手せむとする實際の障礙相起候事なれば、今月は何も書き得ず候ひき。此のみ遺憾に候へども、或は更に靜思熟考の機會を與給へる天の攝理にもやと、一層同問題に就きて省慮罷在候。御經驗も爲有候半が、病臥もなかく、趣味あるものにて、多用なる平生難得多くの精靈上の經驗を

得、且讀書の暇を得候上には、無上の機會と存候。

妙宗研究に就いては、毎々御懇切なる御鞭撻にあづかり、駑馬小生の如きも、其度毎に不少力を得候事に御座候。尙此上とも何分の御指導仰上候。

右病中亂筆御免被下度候。追々快方に赴候間、乍憚御安心被下度候。

草々不一。(第五卷四三九—四四〇)

三十五年三月十日

(鎌倉長谷より 同要山なる田中智學氏へ)

拜啓、過日は遠路御見舞を給はり、御芳心之段々不堪感佩候。かの夕は折あしく荒風に候ひしが、御歸途別に御障も不被在候や、御案申上居候。目蓮上人論はいよく近日起稿仕べく候。試に腹稿之大要左に略記し、御高見を仰ぎ度候。尤も實地に筆とり候折は、序次題目等に多少の變化有之候と存候。

一 結要付屬(?)

靈山會下結要付屬の次第を法華經によりて略序し、後文日蓮上人と上行菩薩との關係を暗示す。

二 上行菩薩出現の預言

時に關しては大集經之五ヶの五百歳、藥王品の「後五百歳」の定解等。處に關しては彌勒菩薩、天台、傳教等の預言的遺文等によりて末法の初。日本國の時處を上行出現の舞臺とし、次に其人に關して、勸持品等の預言によりて上行菩薩の概念を定め、

三 法華經の行者としての日蓮(?)

文は一轉して日蓮傳に入り、佐渡流竄の迫害の起盡を述べ、「佐渡」は日蓮によりて一大自覺の機縁なることを一言す。

四 上行菩薩の自信

上行の天職を自覺せる日蓮の心的徑行、其宣言より、佐渡三年の大法悟を略述し、此大使命の自覺が、日蓮一生の大基礎なることを論じ、前文の上行出現の預言等を日蓮の自覺により解決す(所謂本地垂迹の意義を評す)。

五 日蓮と預言

次に釋尊の預言との關係を論じ、日蓮の信仰、自信は預言によりて證せられたるを述べ、自らも預言の力によりて一生を感化せむとせし次第を述べ、預言は天地人生の上〔に有?〕する至上力を意味すること、而して日蓮が此力は、釋尊付屬の法華經の行者、上行菩薩たるによりて生ずることを論じ、開宗の預言、立正安國論、蒙古來襲、十一通書……等を略叙して、預言者としての日蓮を評叙す。

六 日蓮と日本國

佛識、佛教に本づける國家主義の眞面目を論じ、其遺文によりて是を證し、一閱

淨提廣宣流布の一大理想と、日本國護持の觀念との關係を説き、終に其超國家的大理想を讚嘆す……

七 蒙古來襲に對する日蓮の態度

日蓮傳中の一疑問なること、又恐らくは日蓮傳中の一苦悶なりしことを推論し、日本國の滅亡を喜び、若くは希望せる日蓮の精神を解釋（もしくは其外觀の矛盾を調和するもの）するものは、恐らくは一閻淨提廣宣流布の佛識に本づける大理想によりて確立せられたる、日本國の一時的膺懲手段に過ぎざりしならむこと、等を論ず。

八 日蓮と基督

大略こんなものに有之候。先生などより見れば、極めて幼稚の觀察には候半なれども、廣く日蓮上人の精神を知らしむるには、多少の力あるべきか。小生の論文

の一の希望は、専ら日蓮の心境に入りて、其當時を解釋せむとするにあり。而して可成は、全篇を枯淡なる歴史的哲學的の者たらしめず、詩的（假構的空想的に非ず）のものならしめむとするにあり。小生の景仰する上人の人物性行によりて、活ける人生の一大詩篇を感じするを得ば、小生の大に〔悦？〕とする所に御座候。

楮餘萬々、御面晤の折に讓度候。右略稿に對し御高見御漏被下候はば、大慶奉存候。 匆々不一。

追而、過日御願申上候高祖遺文錄卷十二、十三、十四、十五、四冊拜借願はれ候はば難有奉存候。甚だ蟲のヨキ願には候へども、其中御家人中にて長谷へ御序の節も有之候はば、御付託之程奉願候。
(第五卷四四三—四四六)

三十五年三月二十七日夜 蓐上にて

(鎌倉長谷より 同要山なる田中智學氏へ)

拜啓、其後御病狀如何候や、御伺申上度心懸居候處、今年は梅にもそむける身の、櫻にも縁無からむとてや、兩三日前よりたま／＼蔚上の人と相成候まゝ、仰臥のまゝに一書認申候。本月妙宗紙上卷頭の御論は、近來の大文字、敬讀仕候。殊に小生の感動せしは、御高著宗門の維新に對する世評に就ての御文に候ひき。物の數ならぬ不肖如き者をだに、かばかりの御力と思召候迄の時勢の非は、二十餘年來金剛不壞の御熱誠もて經營せられ候鴻業に對して、如何ばかりの御無念ぞや。感涙といめあへず候。妙宗合卷一、二遺漏なく拜讀、興味津々。中にもをり／＼草の御物語、病中所觀など面白く拜讀候。其中三、四をも思借仕度、事理兩觀之御説は、尙ほ三卷に互りて不少小生の樂觀を惹起致候。

此等は儲おき候。日蓮上人の國家觀に就いての御高説の段々、重々拜讀、且拜聽仕候。尙ほ氷解せざる一難團有之、是等いづれ其中拜芝之上、親しく教を請度候。太陽紙上へは今後半年許は、上人に關する卑見(或は感慨とも申さむか)を陳述致

度、結構仕居候。師子王門下の學衆方等へは、釋迦へ說法に候半事勿論ながら、多少世間に、上人研究の端緒もしくは動機を與ふるならんかと望居候。中には幼稚の見も多々可有之、其折に御叱正被下度候。

日蓮上人の傳記も、本邦希有の佳談と被存候まゝ、其中離蓐會心の折には、何か小童輩の爲めに一篇草し度心懸居候。

開宗記念大會も近づき候折柄、精一御攝養奉祈候。小生も今後一週間も相續き候て、床をはひ出ること可叶かと望居候。萬々拜晤之折申殘候。不一。

三十五年四月三日

(第五卷四四七—四四八)

(鎌倉長谷より 東京なる山川智應氏へ)

去ぬる一日夜、御認めのお書、今朝披讀仕畢候。御情の濃かなるを何に例ふべき。讀みくゞて胸もとゞろかれ申候。如何なれば、世に物の數ならぬ小生をば、か

程に御心に懸けられ候やらむ。げに／＼あやしきえにしとのみ思はれ候よ。御兄上様のことにつけての御述懐、他事ならず胸打たれ申候。素より御覽の通りの我儘者にて、人之師兄たるの資格などは露もたぬ者に候へども、か程までにかりそのにも思ひ懸けられ候をば、何とてあだには思ひ申候べき。感慨胸にせまりて心も言葉もなかくに不及候。げに此世、人多く國弘けれども、相知れる友無ければ、沙漠に獨居すると何ぞ選ばん。名利の爲めに互に相笑ふものは、吾等にとりて木石にも等しからずや。今貴兄の如き誠度なる知遇を忝うす、小生にとりて如何ばかりの此世の力にて候半よ。宜敷御推量可被下候。特に小生病痾の爲めに、佛天の加護を御祈被下候趣、此の御芳心、何時の世にか忘すべき。素より永らへたりと〔て〕、何事も爲し得ざる小生ならむも、男子之意氣猶ほ今生にあき足らざる所あり。切に攝生加護仕可候。色々申上度事ありげに思はれ候へども、折ふし胸塞がりて、筆及ばず候まゝ、こゝにさしおき申候。草々不盡。

三十五年四月十六日

(鎌倉長谷より 同要山なる田中智學氏へ)

拜復、唯今御使者を以て、御書及日本橋論御遣被下、落手仕候。御使者の言によれば、此頃は餘ほど御回復の趣、大賀奉存候。小生も漸次快方に赴き、昨今は平生とほゞ變ることなき氣分に相成候間、乍餘事御放念被下度候。日本橋論は慥に今日の俗物共を驚覺するに足るべき御論と存じ、早速御書添の旨意をも申含め、博文館へ送附可仕候。

小生此頃大遺憾の事有之候。此頃醫師並に近親共より、『書くことは已めよ』との忠告を受け、不得已當分廢筆同様、唯短小の漫言位、折にふれて書き漏らす事と定め申候。日蓮上人に關する論文も、右事情にて一兩月は相休み、短文にて十分鼓吹致す積に御座候。無念御察被下度候。乍併顧みれば、病餘苦惱の際の筆は、筆

端萎縮思想縦横ならず、却て體胖氣旺の時機を待つかた、可然と存候。此月末の御記念會には、都合次第、可成上京仕度心念に御座候。萬々拜晤の折。草々。

追て、過日懇々御垂示の心理療法は、目下大に實行中に有之候。(第五卷四五二)

三十五年七月二日夜

(鎌倉より ロンドンなる姉崎へ)

(上略) ショペンハウエル、ニイチエ、ワグネル、此三人の間の關係を論じた君の文によりて、僕は此三人間の關係其者を知ることよりも、君の精神の要求の那邊にあるかを知る處に、僕は少からず幸福を感じる。此事に就いては、僕は君に滿幅の敬意を捧げねばならぬ。恐らくは僕は猶ほニイチエの理想に彷徨する者であらう。愛の福音に應へ得る迄には、尙ほ多少の曲折を経ねばならぬのであらう。此事は僕の中心の慚愧で、又同時に懺悔である。此間の僕の精神状態は、他日精しく君に打

明けたいと思つて居る。日蓮に對する君の批評も大に僕を啓く所がある。併しなから國家と宗教との關係については、君の日蓮觀には多少の不備がある様だ。丁度此事を、明後日發行する太陽紙上に僕はザツト書いて置いたから、自然君の手に届いたら是非一讀して呉れ。僕は日蓮に於て其の信念の爲めに、國家をも犠牲とする偉大なるイゴイストを觀た。今日の道學先生的倫理説に勝へざる僕の大なる安慰は、此人の此特質に現はれた。是の如くにして安立し得らるべくむば、天下他に何物をも要せざる如く感ぜらるるのが、僕の目下の病であらうも知れぬ。(中略)

日本では、今年程雨の多い年は無い。四月花の頃から、天氣の續いた事は極めて少い。實に不愉快な年であつた。僕の家には二百坪ばかり地面がある(家を合せて)。其中に小さい花壇を拵らへて、草花などを植ゑて楽しんで居る。此れで平和な樂が得らるるか如何か、今猶ほ試験中だ。先日土井が花の種を送つて呉れたので、兩三日前早速蒔いた。今日はもう出さうなものと、其の翌日から小兒の様にノゾ

ヒて居る。

此地には、語るべき友は田中智學氏の外には一人もない。氏の門弟の一人は、如何いふ因縁か、ヒドク僕を慕て、朝夕病氣回復の祈禱を僕の爲めにして呉れて居る。田中氏は、扇ヶ谷の奥に居る。相見ること一月に一度位で、日々寂寥な生活をして居る。山水の風景も餘り面白くない。ドーモ清見潟のあたりが思ひ出さるる。

社會も別に變つた事もない。學界も別に變つた事もない。ダルマパーラが先達田中氏を訪うて當地に來たので、氏の依頼で一日接待してやつた。……

三十五年七月二十二日

(第五卷四五八—四六一)

(鎌倉長谷より 同要山なる山川智應氏へ)

拜復、智學先生には、いよ／＼明廿三日伊東へ御出向可被遊旨、拜承仕候。小生も御同道申上度は山々なれども、昨今の健康の状態、何となう氣進まず、旅中萬

一御迷惑をかけ候事もやと、懸念いたされ候まゝ、今回は見合はせ候間、先生へも可然御披露被下度候。

過日は細々御書給はり、くりかへし／＼うれしく閲讀仕候。懶怠の身、御返事にも不及、楮餘萬端、會晤の日を待ち申候。

謹みて、伊東に於ける田中先生及び貴下の健康を祈り、講習會の成功を奉祈候。

三十五年八月十日

(鎌倉長谷より 同要山なる山川智應氏へ)

去る六日、御無事御歸鎌の旨拜承仕候。伊東御滞在中は殆ど陰雨打ち續き、嘸御困却の御事と奉察候。尙先生宮根へ御出立前に、御閑暇も被爲有候はば、御枉駕

被下度、少々用事も有之候。小生より伺可申處、連日の不天氣にて、健康の點思はしからず候へば、先生へも可然御傳被下度候。 不一。

三十五年八月二十日

(鎌倉長谷より 同要山なる山川智應氏へ)

拜啓、『日蓮が南無妙法蓮〔華〕經を唱へよと勸むるは、慈母が赤子に乳を勸むるの慈悲也』と様の文句ありと記憶せしが、そは何事にて、本文は如何に候ひしや。乍恐縮、折返し御教示を乞ふ。

田中先生御論注文之件、拜承仕候。

三十五年八月二十九日朝

(鎌倉長谷より 同要山なる山川智應氏へ)

拜讀仕候。日本之柱に就いては、過日御話の日、直に催促致おき候へども、今日まで返事無之、當惑罷在候。想ふに佐々不在の爲めか。尙隨仰、再び督促可仕候。

天候回復、神氣爽快を感じ申候。其中御閑之折、御枉駕待上候。不一。

三十五年九月二十八日

(鎌倉長谷より 同要山なる山川智應氏へ)

廿六日の御書拜讀仕候。十數日前より健康大に衰へ、病徵思はしからず、心氣懊惱を極め候まゝ、何となしに鶴沼へ罷越候處、素より病に遁るべき身ならねば、病苦は彌増り候まゝ、過日又歸宅、臥床罷在次第に御座候。毎々の御心遣、永世忘れ難く候。十年の友も一月逢はざれば、路人に等しくなる今の世に、君は如何なれ

ば、物之數ならぬ小生に斯くは憐を垂れ給ふらむ。殊に久しき以前より、日々之御祈禱まで之御志のうれしさは何に喩へ申すべき。兎ても長からぬ生命なるべければ、折角之御祈念もあだにならずやと、是のみ心苦しく候。仰せ越されし御書は、小生も爾か思ひ立ちし折なれば、早速讀始、今更に新しき慰藉を感じ申候。是よりは日々誦讀可致候。秋氣定まりて天朝かに相成候はば、病勢も或は衰へ可申や、其節は少々思立候事有之、駿河清見瀉のほとりに、數日之旅行を試可申候。昨今は咳嗽劇しく、且定時發熱盜汗等あり、閉口致居候。小生思想に關して御思寄之事は、何分之御注意を仰度候。素より定まれる信念も思想も無之、唯隨時思念する所は、隨時之發作とも見るべきものか、三界廣藪として一心寄するに處無し。色心共に浮浪之小生に候へば、人にも世にも飛びはなれたるふしのいとく多かるべく候、是非も無き事に御座候。山崎氏の新體詩に就いては、其中佐々に相談可致候。田中先生の序文は、御あづかり申置候。今朝の暴風雨にて、師子王文庫は別に損害な

きや。小家南之垣根倒れ、いさゝかの花壇は淤泥に委し去り、見るも哀れげに御座候。誠に昨日までは、紅恨紫怨之風情もありしが、誰か此夜半之あらしを想ひ知りたるべき。——夜半に嵐の吹かぬものかは——他の上のみは無之候。不盡。

(第五卷四六一—四六二)

況
後
錄

況後錄

山川智應註解

而此經者 如來現在

猶多怨嫉 況滅度後

(法華經法師品)



伊東いとに死しなず、

弘長元年、官上人を伊豆伊東に流し、俎岩に棄てて殺さんとす

龍たつの口くちに斬きられず、

文永八年北條氏

上人を謀叛人に準じ、相州龍の口に斬らんとす

不思議ふしぎに存たがらへし命いのちも、

此處こゝ佐渡さどが島しまを今いまは最さい

後ごの地ちと覺おぼゆるぞ。

龍の口に斬り得ざりし幕府は、上人を佐渡に流し、尙何時頸刎ぬべきやも知れざる風聞ありしかば、開刀鈔の製作にも、頸切らるるならば、日

蓮が不思議をとどめん」ともいはれたり

あら嬉うれしや、人ひと人ひと、是これ程ほどの喜よろこびをは笑わらへよかし。

日蓮程の果報にられんほどの者もの、果報果報の勝れたる者の勝また世にあるべしや。古いにしへより君きみの爲た

めに死しせしもの親おやの爲ために死しせしもの妻子財寶さいしざいはうの爲ために死し

せしものはあれども、法華經ほけきやうの爲ために命いのちを捨すてしものありや。

經經の「勤持品」に「我不愛ニ身命ニ但惜ニ無上道ニ」
とはあれども、未未た其の人人なば見見ずとの義義 是是の教をの爲めに臭くさき頭かうべを刎よねら

れむは、砂いさごに黄金がねを代かへ、糞ふんに米こめを替かふるに同じ。今いまこそは霜さう

露るの日影ひかげを待まちつばかりの命いのちながら、化城くまじやうの迷まよひ遙とほに去さ

りて、法華經法華經「化城喻品」に、方便方便の佛教佛教をば、五百由旬五百由旬の道程道程の半半ばすぎ三百由旬三百由旬にして、幻化幻化の都城都城を

靈山りやうぜんの開顯かいけん眼前まごのあたりにあり。
「法華經」は、靈鷲山靈鷲山に於於て祕妙秘妙方便方便の扉扉を開開きて、釋尊釋尊出世出世の

取取るる如如く悟悟りたるを
眼前眼前にあり」といふ 頸くびは鋸のこぎりにて引ひきも切きられよ、胴どうは稜銚の銚の銚稜形も

て、貫つらぬかれもせよ、足あしには絆ほだしぐ鎖くわ具具を打うちて 錐きり捫もみにもせよ。

この息の根の通はむ程は、南無妙法蓮華經の聲をばよも絶たじ。

吾れは是れ粟散の邊土佛教に、閻浮提十六の大國、五百の中國、十千の小國、無量の粟散國ありといふ。故に、一般に佛教徒は、日本を

粟散の邊土といへり安房東條上人長狹郡東條郷小湊に生るの旃陀羅梵語屠者と譯す、不律儀の義。雜心論に三種を擧げたり。捕魚者その一なり。

上人漁夫の家に生る、故に自ら謙していふが子、身賤しくして性劣れり。智解に於ては

天台傳教隋の天台大師智顛、我朝の傳教大師最澄、ともに法華經を數揚せりが千分の一にだも及ばじ。

れど法華經の行者なるが故に、即ち是れ一天の眼目四海の

柱石たり。「開目鈔」に、上人自ら智解は天台傳教の千分が一分にだも及ばれども、難ヲ忍ビ慈悲勝レタル」行者なるに於ては、敢て譲らずといはれ、又、法華經「法師品」、「寶塔品」に、此の經の

行者は、佛の代官、人天の眼目、衆生の依止處と説けり。六難九易の教法華經「寶塔品」に、惡世末法に此の經を説き、「書き持ち」暫くも讀み、「一人の爲にも説き」聽き受

けて義を問ひ、「奉げ持つ」此の六の事に實に爲し難く、「法華已外の恒沙の經を説き」須彌山を他方に擲げ、「足指を以て大千世界を動して他方に擲げ」有頂天に立て餘の經を説き、「手に虚空を把りて遊行し」大地

を足の甲に置きて梵天に昇り』『劫燒に乾坤を覆て燒けず』『八萬法藏十二部經を持ち説きて聽者に六神通を得しめ』『千萬無量の法を説き恒沙の衆生を六通の羅漢とす』此の九の事は到底爲し難き大難事の如くなれ

ども、上の六難に比すれば寧ろ易しと説きて、末世法 三障四魔の説は、報障、業障、煩惱障を三障

死魔、天子魔を四魔とす。法華經の修行進めば、『三障四魔紛然トシテ競ヒ起リ』テ行者を妨ぐとは、天台大師摩訶止觀の説 素より熟く知れり。唯唯

末法不祥の世に 佛の滅後二千年以後を末法といひ、鬪諍堅固とて惡競争に人心かたま 生

まれたる身の法王の宣旨 佛陀は、諸法の王なれば、法王といふ。宣旨とは、釋尊法華經

以て救ふ外なしとて、上行菩薩 默し難く、身命を抛つて救世の大願に志

し、ここに權實二教の軍を起し、 法華の實經を以て、諸餘の權方便經より立てた

と、即ち『念佛無間、釋天魔、眞言亡國、律國賊、諸宗無得道、 忍辱の鎧を着、 法華經「勸持

通は『當着忍 妙教の劍を提げ、 法華經を、元品の無明 一部八卷 法華經一部を入

の肝心 即ち所詮の眞理 妙法五字 妙法蓮華經の五字にして、上人は之を以て、經典の

名にあらす『體也心也』即ち肝心なりとせられたり の

旗を指し上げ、一代の風雲を捲き起こして、折伏の戦しやくぶく たかひ 破折調伏

といふ義。攝受と共に佛教化導の根本義也。上人の開教は、諸々の邪見を折伏して、絶待正義の正宗を立つるにありに從ふこと、ここ二十餘年。

建長五年四月廿八日より、文永九年佐渡に在りて「開目鈔」の製作まで、實に二十年也。あはれ法華經の行者が爲すべき程

の軍は、日蓮 いちれん ほぼ仕遂げたりと覺ゆるぞ。法華經の行者、末法に於て遵

品等に説かれ、上人「開目鈔」に自ら仕遂げたりといはれたり。是の經の爲めには大覺世尊だに九楨の

大難に値ひたまひき。大覺世尊は、釋尊をいふ。九楨の難とは、「六年苦行し孫陀利に誇られ三旃遮女に腹に木盃を伏せて佛に孕されたりと誇られ」提婆に大

石もて足を傷げられ、「木楯もて脚を刺され」「毘樓離王に釋氏の族を殺されて頭を痛め」「阿耆多王の爲め九十日馬麥を食はされ」「婆羅門の聚落に乞食して鉢空しく」「寒風八夜三衣を索むるなり。是みな出世本懷

の法華經を説かんとて、忍びて受けたまへる故にいふ。不輕菩薩は杖木瓦石を被りき、法華經「不輕菩薩」に、

を信ぜざる僧俗の前に、法華經によりて必ず成佛すべきを説き、強て彼等を禮拜折伏して、杖木瓦石を被ることを説かれたり。上人の四大格言は、此土成佛を信ぜざる念佛、法華經に依らずして成佛をいふ眞言、禪、

律等を折伏して、法華經によりて此土にて成佛せよといはれ、不輕の折伏と意同しければ常に自ら不輕に比せらる。竺の道生は蘇山に流され、

法華經の譯者たる羅什の高足道生法師、法華經を講じて疏を作る。又法顯譯の泥洹經に、闍提を除いて外は皆佛性ありといふを難し、法華の義を以て闍提も佛性ありと立て、智勝法師に譲せられ、蘇山に謫居せし

めらる。法道三藏は面に火印をあてられ、宋の徽宗、道教を信じて佛法を破る。法道法師之を諫争し、面に黥涅せられ、道

州に流る。天台大師は南三北七の仇となり、天台大師法華を講じて、江南江北十人の學匠の義を摧破す。その師徒ともに大師

を仇とす。傳教大師は六宗に憎まれ給ひき。傳教大師、法華經「普賢經」に「圓頓大乘戒壇を立てんことを、桓武聖

帝に請ふ。南都東大寺の小乗戒壇を踏める六宗の學匠、一破澄未だ唐都を見ず」等嘲り憎む。大師「顯戒論」を造り之を破折す。日蓮こそは、居處を逐は

るること二十餘度、敵人の戕害に臨みしこと三たび、一度

は頸の座に据ゑられ、二度は遠流の罪に行はれて、今やこ

の北海の孤島に明日をも知らぬ命とはなりたるぞ。あら

嬉しや、喜ばしや。古賢先聖だに讀み給はざりし妙法の極意

をば、妙法の極意は、事行の妙法、即ち眞理の實行なり。今ぞ日蓮こそは讀みたむなれ。勸持品

勸持品

一〇〇二十行の偈げは、法華第十三の品なる「勸持品」に、八十萬億那由陀の大菩薩、末法法華弘通の最難事じにして三類の強敵迫害甚しく流罪死罪に及ぶ由を、二十行の偈をもて説きたるを

日蓮にっぺんだに、此の國此の世よに生まれ、別わかして此の島しまに流ながされ

ずば、世尊よそん一代の大妄語だいまうごとなり果はてなむず。法華經は東北の小國に縁ありこ惡世末法を救ふとあれば、此

の國こく「此の世」といひ、法華の末法の行者は、「數々かずかず露出セラレ」と勸持品に説きて、屢々國を追出さるとある故、上人「開目鈔」に「日蓮度々流サレズバ數々ノ二字イカンガセン」といはれたり。今、別して此の島に

流ながされずば」とは、先には伊東、「別して再度此の島に流されずば」の文妄語となるとの義をいふ 如何いかに人人ひとごと、一代聖經いちだいせいけいの付つ

屬ぞくは、まさしく日蓮にっぺんが頭かぶに懸かかれりと覺おぼえたり。一代聖經の魂たる法華經は、我が身に讀よ

めり。法華の付屬我に在るは明なり。『法華經ノ六難九易ヲワキマフレバ一切經ヨマザルニ隨フベシ』(開目鈔)なれば、法華の付屬を身證せる我に一切經もまた自ら隨ふぞとの意 是れ程ほど

の譽ほれをば祝いはへよかし、是れ程ほどの慶よろこびをば笑わらへよかし。日にち

蓮れん最早もちはやこの世よに望のぞむ所ところ無なし。

されど顧かへりみれば心地こち好きよきが越方こしかたかな。三類さんるみの強敵かうてきは

「勸持品」に、「俗衆増上慢」とて、俗人の反對者、「道門増上慢」とて、僧侶の反對者、「僧聖増上慢」とて、高僧の反對者と三類の敵ありて、法華の行者を刀杖瓦石と我慢嫉妬と譏奏侮蔑等とを以て迫害し流罪死罪に及ぼしむべしとあり。之を三類の強敵といふ。吾が爲めに善知識ならずや。當時、俗と僧と高僧と共に上人を迫害して、上人に「勸持品」の

偈を身讀せしむ。即ち彼等は、上人を法華經付屬の行者と爲し遂げし、善知識ならずやとの義。「種種御振舞鈔」にも、「日蓮が佛ニナラン第一ノ方人ハ景信、法師ニハ良觀、道隆、道阿彌陀佛、平ノ左衛門、守殿マシマサ

ズバ、争テカ法華經ノ行者トハナルベキト悦ブ」といはれしに同じ。北條氏無くば、北條氏が流罪死罪に處する事なくばの義。法華折伏の本

意を如何にすべき。末法付屬の未來記は、「勸持品」、「神力」まさしく

日蓮が生涯に、事實もて記されたり。刀杖瓦石もて身に流されたる

日蓮が血潮は、やがて妙法勝利の願文に染められたり。上人の血

せる弘通によりて、法華經は活現せられ、これによりて佛陀の豫言は、遂に必ず事實となり世界統一、妙法勝利の本願も成就すべき時來らんと願ふ、其の願文を我は此の法難の血もて書くぞとなり。昔

は半偈の爲めに體を投げ、雪山童子、半偈を聞か、身を燒きしもの。王

菩薩、佛と法華經とを供養し奉らんため、身を香油に浸し燒て燈と爲す。だにありしを、日蓮が身の幸をば如何

にとか見む。中にも龍の口の頸の座こそ面白かりけれ。いで一期の思ひ出に、日蓮が今生の不思議を書き遺さむず。

二

去ぬる文永五年の正月、西戎蒙古國より我が國へ牒狀あ

り。文辭暴慢にして、まさしく侵逼の禍心を露はせり。彼の

に「朕が志ヲ布告ス：兵ヲ用フルニ至ルト、夫レ執レカ好ム所ゾ、王其レ之ヲ圖レ」等の語あり 鎌倉殿を初めとして、國の上下

齊しく罵り騒ぐのみにて、民に安き心も無し。愚なる人人か

な。斯程の事は、日蓮既に文應の昔に勸へ置きたりしものを、

文應元年、上人「立正安國論」を撰し、早く國の謗法を去り正法に隨はずば、國に賢人なんども

あるならば 夙つとに用もちゐて 禍わざはひを未み然ぜんに防ふせぎたりしならむに、今いまに及びて 眉まゆに火ひの附つきたらむ様に 猥あはて騒さわぐ態さまの 可笑をかしさよ 愚ぐ昧まい無ぶ道だうの鎌倉かまくら殿どのも、流石さすがに今いまは 目め覺めめたるらし。いでいで 再び 安國あんこく論ろんの正義せいぎを示しめして、一世いつせの迷夢めいむを驚おどろかすべし。是れ 身の爲ために申まをすにあらず、神かみの爲ため 君きみの爲ため 國くにの爲ため 一切いっさい 衆生しゆじやうの爲ために 申まをすにこそ。

そもそも 安國あんこく論ろんは 日蓮にちれん一いち期ごの遠鑑えんかん、本化ほんげ妙宗めうしゆ 創業さうげふの大本たいほん 正法しやうぽうを立てて日本國にっぽんこくを根本こんぽん的に安んじ、以て道法だうぽう的世界せかい統とう 一の基礎きそと爲すは、實まことに上人じやうじんの宗しゆを創つくめ教きやうを開ひらく大本義ほんぎ也 なるを以て、事煩ことわづらはしけれ

ども 重ねて 是れを申まをさむか。要えうは 金光明こんくわうめうきやう經きやう、仁王にんおう經きやう、大集だいしゆ經きやう、 藥師やくし經きやうの 三災さんさい七難しちなんの佛ぶつ讖しん に本もとづき、以上いじやうの四經しきやうに皆みなひとしく、國くにに邪惡じやくの法ぽう充ちゆう ち、正善しやうぜんの法ぽうを失うしなへば、天災てんさい地ち天國てんこく難なん並ならび

起ると説く。三災とは、「穀貴」、「兵革」、「疫病」。七難とは、「人衆疾疫難」、「他國侵逼難」、「自界叛逆難」、「星宿變怪難」、「日月薄蝕難」、「非時風雨難」、「過時不雨難」。姑く藥師經のみを擧ぐりたり。安國論は、「兵革」を除いての二災、「他國侵逼」、「自界叛逆」の二難を除いての五難、具さに當時の國家に起り、「牛馬蒼三斃」骸骨路二充ツニ入りにて、其の原由を究め、現在の事實を上の上の四經の文に歸納し、是れ國に正法を失ひ邪法の盛なるに基くとし、之を改めずんば、他の一災、二難亦必ず來るべしと豫言す。 謗法正法に背き謗る。

也の罪を改めて、正教の擁護に歸らしむるにあり。數十年こ

のかた天變地天 踵を接して起り、飢饉疫癘 天下に遍きは、

偏へに是れ 謗法の罪に坐す。そは 正法退き滅ぶれば、諸天

善神 共に此の國を去りて、邦土忽ち魔界となればなり。當今

佛閣藁を連ね、經藏軒を竝べ、僧は竹葦の如く、尼は稻麻の如

しと雖も、皆是れ 天魔波旬斃王の名の徒の 解脫同相の衣を纏

へるもの、諂曲にして 人倫を欺誑し、邪惡にして 魔界の眷

屬たり。

勸持品に曰く、「惡世ノ中ノ比丘ハ邪智ニシテ心諂曲ニ……我慢ノ心充滿セシ法滅盡經に曰く、「魔沙門ト作りテ吾ガ道ヲ壞亂セン」と此の意をいふ

就中、近

代の法然、捨閉閣抛の四字を

掲げて、法然の「選擇集」に、十六段に互けて念佛の外の外の法華等一切の法門を掲げてよ「閉ちよ」と勸めたるをいふ

一向專修の念佛を唱へ、一代五時の肝心たる法華

經を無用のものと誹謗し、其の教天下に蔓りて、人皆是

れを信ず。善神ここに退き、惡鬼ここに代はる。天下の災難洵

に以あるなり。今や聖經示す所の七難三災、唯其の二つを剩

すのみ。人は既に疫に苦しみ、日月既に蝕し、星宿既に列

を失ひ、風雨既に時に非ず、今より來らむものは夫れ自界

叛逆難と他國侵逼難とならむか。前證既に争ふべからず、

何ぞ後驗の違はざるを疑はむ。あはれ是の國久しからず

して内亂あらむ 又久しからずして外寇あらむ 今に於て

計を運らさずむば、夫れ岌岌乎として危い哉 施すべき道は

唯一つあるのみ。畢竟、念佛は墮獄の教、地獄に墮つる教也 禪は天魔

の業、眞言は亡國の宗旨、律は國賊の事、是等一切の邪宗

を斷滅して、無二無三 唯一乗の法華に歸依し 給はば、災難

消除 國土安全なるべき也。

あはれ 人人、日蓮が此の安國論を勸へて、北條殿に奉り

しは、蒙古の使の來れる今年文永五年を去る 十年の往時に

てありしぞかし。今はた其の言に露違はず。残るところの

他國侵逼難をば如何とか見る。佛の未來記にも劣らず、末代

の不思議 何物か 是れに過ぎむや。今に及びて 猶ほ日蓮が言
 葉を用ゐずば、國はやがて 西戎の俗となり、人はやがて 蒙
 古の民とならむ。一世の愚昧なる、知らずして 亡落の淵に 近
 づけり。法華經の行者たらむもの、いかでか 是れを看過みすし
 得べき。日蓮 茲に 身命を抛つて、再び 安國論の先識せんしんをかざ
 し、十一通の書状を認め、鎌倉殿北條時宗を初めとして、平左衛門
 尉北條彌源太 建長寺 壽福寺 極樂寺 以下の權家 大寺に 送
 りて、當來眼前の覺悟を促しぬ。

素もとより 身命しんみやうを抛なげつての業わざなれば、言いふべき程ほどの事ことは 押おし切き

つて言いひぬ。あはれ 日蓮程にちれんほどの者ものの言葉ことばに 何なんの憚はげる所ところやあら

む。其の旨こころに 謂いへらく、蒙古の來襲らいしやくは 久ひさしからずと覺おぼえた

り。早はやく 建長寺けんぢやうじ、極樂寺ごくらくじ等の 邪宗門じやしゆもんを 閉鎖へいさして、一佛乘いつぶつじやうの法

華けに 歸依きゐし給たまふべし。建長寺けんぢやうじの道隆だうりゆうは 建長寺の開山大覺禪師 人ひと 崇あがめて佛

陀だの如ごとく、極樂寺ごくらくじの良觀りやうくわんは 律宗の慈善僧忍性菩薩 世よ 仰おほいで 羅漢らかんの如ごとく。さ

れど 是等ぜとうは 野狐やこの袈裟けさ 着きけたるが如ごとく、其の 蒙昧もうまい 佞惡ねいあくなる

こと、禽獸きんじゆうにも 劣せうれり。道隆だうりゆうが事ことは、彌源太入道御消息に、但し道隆の振舞は日本國の道俗

らん。佛法の邪正じやしやうこそ 愚人ぐふじんなれば 知らずとも、世間の事は 眼前がんぜんなれば 知りぬらん」と仰おほせあるによりて、其

の行狀ぎやうじやうの佳よならざりしを知るべく、良觀りやうくわんが事は、教行證御書に、彼の良觀が日蓮遠國へ下向と聞く時は、

況 後 録

諸人しよじんに向て 急いそぎく 鎌倉かまくらへ 上ありかかし。爲ためめに 宗論しゆろんを 途みちげて、諸人しよじんの不審ふしんを 晴はらさんなど 自讚じぜん毀くわい他たする由よし、其

の聞きえ候まう。此等こゝろも 戒法けいぽうにて や有あらん、強つよちに 尋たづね可べし。又日蓮にちれん鎌倉かまくらに 罷はり上ある時は、門戸もんこを 閉とめて 内うちへ 入いるべ

からずと之を制法し或は風氣など虚病して罷り過すべからず、須すべからずらく、誅戮ちうりくの沙汰さたを急いそがるべ

し。日蓮は是れ日本第一の法華經の行者にして、兼けん知未萌ちみほうの

預言者よげんしやなり。這回このたび蒙古對治調伏たいぢてうぶくの任にに當らむもの、日蓮を舍

いて誰ぞやと斯か様に言いひ張りしことなれば、一身しんの危殆きたいは言い

ふも更さなり、日蓮にちれんが弟子檀那等でしだんならが上うへにも必かならず禍わざはひあるべしと

想おもひければ、則すなはち書しよを彼等れらに與あたへ、大蒙古國だいまうここくの牒狀てふじやう到來たうらいに

就つき、十一通じゅういつつうの書狀しよじやうを以もつて、鎌倉殿かまくらどのを初はじめ方かた方を驚おどろかし奉たてまつり

ぬ。日蓮は申まをすに及およばず、弟子檀那等でしだんならが流罪死罪りうざいしざいは、一定免いちぢやう

れ難がたからむか。必かならず妻つま子こ眷族けんぞくを思おもふ勿なれ。權威けんい刀杖たうじやうに怯おそるる

勿なれ。法華經ほふけうの爲ためめに生死しやうじの縛きづなを切きつて、佛果ぶつこくを遂たげ給たまふは

喜ばしからずやと申し遣はしぬ。

是等十一通の書状は、果して上下の怨みを深うせしとぞ覺えし。或は使を罵り、或は受領に及ばず、或は受領すれども上へも申さず。所詮は諸宗緇素の怒りを加へ、柳營内外の憤りを重ねたるらし。是れ素より日蓮が當初存知の旨なれば、驚きもせず、怖れもせず。靜かに處刑の日を待ちたりしに、怪しい哉。何事もなく、打過ぎて、文永もはや八年の半ばを越えぬ。

扱ては一時の苟安に狎れて、他界侵逼の大難をも打ち忘れ、法華經の行者が未萌の佛讖を一妄語とは思ひけるよ。良

し其の儀ならば 日蓮思ふ子細ありとて、ますます 不退轉

の勇猛心を奮ひ起し、名をも惜まず 命をも捨て、念佛無間

禪天魔 眞言亡國 律國賊と聲を限りに呼ばはり、一乗の

教相を啓いては 權宗の邪道を打懲らし、法華經の教相を以て諸宗
の邪道たるを打つないふ 三

敵の誹謗に接しては六難の誠を事ともせず。三類強敵の大道害は、寶塔
品に六難の誠に當れども捨身

決定の大願は其の難 風強ければ 浪荒く、龍大なれば 雨猛き様に

法華折伏の鬨の聲 天地に震ふばかりに言ひ張りしかば、迷

ひ狂へるものの憐れさよ。己のが無明の夢よりは 醒めむとも

せで、偏へに日蓮が正法の教を怨み、故最明寺殿時の尼御

前などに取り付き、鎌倉殿 平左衛門尉等が怒を煽り立て、日

蓮れんこそは 故こ入にふ道だう殿どのを 最明寺 入道殿 無む間けん地ぢ獄ごく 最重の地獄、極苦 間断なき故に名く に墮おちたり

と申まをし難はやせる 無む類るゐの悪あく僧そうぞと呼よばはりぬ。かくて 柳りう營えい

にて 僉せん議ぎあり。日にち蓮れんの罪ざい科くわ 所しよ詮せん遁のがれがたし。頭かうを刎はぬべき

か、鎌かま倉くらを追おふべきか。弟てい子し檀だん那な等らの所しよ領りやうあるものは所しよ領りやうを

没ぼつし、或あるは頸くびを切きり、或あるは牢らうに入いれ、或あるは遠えん流りうに處しよせらるべ

しと取とり沙さ汰たす。捕ほ卒そつの出しゆつ向かう 今いまは日ひもあらじ と傳つたへられぬ。

四

日にち蓮れん悦えつで曰いはく、斯ごとかるべしとは素そより存ぞん知ちの旨ちめい也なり。昔むかし者しや

樂がく法ぽふ梵ぼん志じは、厘わづか半はん偈ぎの悟ごりを得えむが爲ために、其そのの皮かわを剥はい

で紙となし、其の骨を削りて筆となし、其の肉と血とを絞
 て墨水となしき。雪山童子は、身を魔王鬼神の口に投げて悔
 いざりき。法華經の御爲めに捨つる身の幸こそ嬉しけれ。樂法

梵志は一偈の爲めにさへ斯の如く。雪山童子は半偈の爲めにさへ斯の如し。ともに佛經なき所なればなり。彼に比すれば吾れは佛經も佛經、その本懷眞實の經王たる法華經の爲めに捨つる命なれば、その幸いふべからずとの意なり。樂法雪山ともに釋尊過去世の菩薩行中の事跡なり。諸經論に説かれたり

如何に人人、勸持品二十行の偈をば吾等常にいかに讀み
 奉りたる。三類の強敵は言ふに及はず、もろもろの比丘等の
 利養を貪り名聞を求むる徒、國王大臣に向つて法華經の行
 者を誹謗し毀傷すべしとは、即ち今の吾等の身の上ならず
 や。數數見擯出の五字は、日蓮が徒これを讀まずむば、何人

か。是。れ。を。讀。む。べ。き。身。は。佛。讖。を。現。じ。て、この惡世に導師と
 なりぬ。「勸持品の佛讖を身を以て實現したるものは、即ち惡世の導師の事を爲す也」 喜ばしや。

されば苟かりそめにも日蓮が弟子と名告らむ人人は、一人も臆
 すべからず鎌倉殿の弓矢の爲めに毀らるべき我等が忍
 辱の鎧かは逃にげもせざれ匿かくれもせざれ所領ある者は所
 領を與へよ、親あるものは親を棄てよ、妻子あるものは妻
 子を思ふなかれ、首も刎きねられなむ、手足も切られなむ。是
 の臭くさき軀かみを離れて、寂光じやくくわうの樂土らくど寂光は常寂光の略、常樂我淨の四徳を圓具せる本佛の住處たる理想國に向はむ
 時、妙法五字の旗高く指し上げて、吾れこそは日本第一の
 法華經の行者よと聲こゑ高高たかだかと名告らむは如何に。

所詮は おのおの思ひ切り給へ。此の身を法華經に替ふる

は、石に珠を代へ砂に黄金を替ふる也。佛滅後二千二百二

十餘年の間、迦葉 阿難等 印度小乘弘通 阿羅漢達 馬鳴 龍樹等 印度耨大乗 弘通の菩薩 南岳

天台 妙樂 傳教等 支那日本の法華弘 通の正しき人師達 だにも 未だ弘め給はざりし法

華經の肝心 諸佛の眼目 「普賢經」に、妙法 たる 諸佛の眼目といふ 妙法蓮華經の五字、

末法の始めに一闍浮提に弘まらせ給ふべき瑞相に日蓮先駈し

たり。法華經「藥王品」勸發品等に、此の經末法の初めなる五五百歳に闍浮提(即ち吾人の住せる世界) 如來滅後五百歳於闍浮提廣宣流布」と説かる。如來滅後に五箇の五百歳ある中、

後五百歳は最後第五の五百歳にして 二千年過ぎて後末法の初なれども 若黨共 二陣三陣つづいて 迦葉 阿難に

も勝れ、天台 傳教にも越えよかし。厘かの小島の主 當時の實際の主權者たる北

條氏を指さ 等が威さむに恐れては 闍魔王の責をば 如何にすべき。

現世の數ならぬ迫害に恐れて法華經を捨つれば必らず地獄に墮つべし、その時は小島の主等の威には類ふべくもなき閻魔の責を受くるを免れざるに非ずやとの御意

佛の御使と

名告りながら臆せむことは無下の人人也。『内の御文は「種種御振舞御書」の一節を引ききたる也

吾れは斯く吾が弟子檀那等に説き示して、今にも鎌倉殿

の御使あらむ時、見苦しき振舞あるまじき由をくれぐれも申

し含めぬ。

五

斯くて文永八年八月の初めに及び、廳所より召し出されぬ。

日蓮を中にして鎌倉殿を初め平左衛門尉以下列坐の態、た

だならず見えし。日蓮一一究問に答へて曰く、建長寺壽福

寺じ極ごく樂らく寺じ等とうを燒やき拂はらひ 道だう隆りゆう上しやう人にん 良りやう觀くわん上しやう人にん等とうの頸くびを刎はねよ

と申ませしこと一言ごんも相さう違ひ無なし。是こ等らは 正しやう法ほふの怨おん敵てき 國こく家かの

大だい賊ぞくなれば、磔はりつけ、八はち裂せきにも行おこなはるべき族やからなり也。首くびを刎はねよと申ます

に何なんの不ふ思し議ぎかあらむ。但たゞし 最さい明みやう寺じ入にふ道だう殿どのを 無む間けん地ぢ獄ごくに墮お

ちたりと、御ご他た界かいの後のちにて 申ませしとは虚そら事こと也。念ねん佛ぶつ無む間けん 禪ぜん

天てん魔まとは、入にふ道だう殿どの 存ぞん生じやうの時ときより 申ませし事ことならずや。是これ程ほど

の大事だいじの法ほふ門もんを 御ご存ぞん生じやうの時とき 勸すめ參まからさざりしことやある。畢ひつ

竟きやう 右みぎの事こと、國くにを思おもひ 民たみを思おもふ 日にち蓮れんが孤こ忠ちゆうに出いづ。誠まことに百ひやく世せ

の平へい穩ゑんを祈いのられなば、速すみかに 改が悔けの實じつを擧あげらるべし。日ひ

蓮れんは 一いつ貧ひん道だうながら 法ほふ華わ經きやうの行ぎやう者しやなれば、即すなはち是これ 釋しやく尊そんの御ご

使日本國の眼目にて候ぞかし。其の言葉を御用ひなくば、
 やがては梵天帝釋日月四天の御咎めありて、爾時後悔あ
 るべきを慮り給ふべき也。と何憚らず申し陳ぜしに、鎌倉
 殿を初め平左衛門尉等聖者の言を聞くべき耳なくして、偏
 へに太政入道の狂へる如くに罵り騒げるこそ笑止の極みな
 りしか。

越えて九月十二日、平左衛門尉頼綱を北條氏の家司 即ち内管領大將とし
 て、數百人の兵共日蓮が松葉が谷名越の内の庵に押し寄せぬ
 窟か一人の瘦法師を召し捕らむとて、斯ばかりの意を用ひし
 こそ氣の毒なれ。朝尙ほ早くして人馬の響き遠くより近

づきぬ。あはれ事あるかな、日蓮が日頃月頃待ち設けし願
 は遂に達きぬるよと思ひながら、徐ろに南の戸を開き、眞
 先なる頼綱に向ひて、咨爾の來ること何ぞ遅きと申しけれ
 ば、兵共眼を瞋らし聲をあららげ、刀杖瓦石を以て散散に
 狼藉す。中にも平左衛門尉が一の郎從少輔房と云ふもの、走
 り寄りて日蓮が懷にせる法華經の第五の卷を取り出し、吾
 が面を思ふがままに打ちこらす。吾れ微笑して、第五の卷
 は即ち勸持品ならずや、爾等そが識文もて吾れを撲つこと、
 奇なるかな奇なる哉と申しけるを、侮られたりと思
 ひけむ、大將を初め兵者等ますます怒りをなし、經典佛具

を 或あるひは踏ふみ 或あるひは毀やぶり、凡およそ家いえの二三間けんが間あひだは 金口きんく 今いまは轉くわんじて

說法いふの文字もんじ 土芥どがいに塗まみれて 足あしを容いるべき所ところもなし。 日蓮にちれん大だい

音聲おんじやうを放はなつて、 皐あらし面白おもしろや、 平左衛門尉へいざゑもんゑいが 物ものに狂くるふを見みよや

人ひと。 日本國にっぽんこくの柱はしら 唯ただ今いま倒たふれぬぬるるぞと 呼よばはりぬ。 聞きくもの

顔見合かほみあはせて 安やすからぬ色いろあり。 日蓮にちれんこそは 御勸氣ごこんき 御ごとがめと 程ほどの語ことばを

蒙かぶれる身みなれば 臆おそしてこそは 見みゆべきに、 さは無なくして 勝かち

ち誇こほれる者ものの如ごとくなるは 如何いかに。 扱あつかては 是こゝろの事こと 僻事ひがことにやあ

るらむ ところ 思おもひしならめ。 召捕めいぼの兵共へいどもが上人じやうじんの大宣言だいだいげんに呆氣だいきに取とられ

て、さては此召捕は間違かとおもひしと也

六

其の日も暮れぬ。吾れは拘禁の身となりて 武藏守殿當時の引

付衆、後の連署たりし大佛宣時

にあづけられ、武藏守は斷獄の主任者とす。しての「預りし」と爲りし也

やがて夜半に及び

て、龍の口にて刑に行はれむとす。かくて馬に騎せられ兵

共に擁せられ、若宮の小路に打ち出でて赤橋の前にさしかか

りぬ。爾時人人の驚き騒ぐを鎮めつつ、八幡大菩薩に最後

に申すべき事ありとて、馬より下り北の方を屹と睨まへ、

大音聲に申す様。いかに八幡大菩薩は眞の神か。昔者和氣

の清麿が頭を刎ねられむとせし時は、長一丈の月と顯れさせ

給ひ、清麿字佐に下向の途にて、道鏡刺客をもて殺さんとせしに、此の奇瑞ありて果さずと傳ふ傳教大師が法華經を講ぜし

時は、紫の法衣を御布施に捧げさせ給ひき。是も字佐八幡にて講經の時の奇瑞なりと傳ふ日

蓮は日本第一の法華經の行者也、日本國の一切衆生が謗法の罪によりて無間地獄に墮つべきを助けむが爲めに、是の邦に生まれたる釋尊付屬の御使ぞや。今や身に一分の過なくして刑に引かれむとするをば、神には如何に見そなはするぞ。

其の昔多寶塔中に釋尊法華經を講じ給ひし時には、三世十

方の分身無量の諸天諸佛日蓮上人の御義には、天照八幡等をば本地に約して諸佛と仰せある事あり。今は其義を擴くす中に

は天照大神八幡大菩薩も其の座に連りて法華經の行者に

疎略なるまじき誓狀參らせしをば、如何が忘れさせ給ひし

ぞや法華經「安樂行品」等に「諸天晝夜常ニ法ノ爲メノ故ニ而モ之ヲ衛護ス」等とありされば日蓮が申す迄もなく

いそぎいそぎ是の處に出で合はせ給ひて、塔中付屬の宿願

を果させ給ふべき也。若しさも無くむば、日蓮今夜頸切られて寂光寶土に參らむ時、日本の天照大神正八幡こそは起請を用ひぬ。妄語の神なれとさしきつて教主釋尊に言ひつけ參らせ候はむず。若しそを痛たしと思し召さば、いそぎいそぎ御計らひあるべき也と。群集の人々は日蓮がかく申すを聞きて、あはれ鎌倉殿の氏神に法外の悪口を憚らざる日蓮こそは悪鬼羅刹の分身ならめなんと罵り合へりしか。

日蓮にちれんを載のせたる馬うまは警護けいごの武士ぶしに擁ようせられ、御靈ごりやうの社やしろ倉くら

權五郎ごんごろうを祀まつれる社より極樂寺ごくらくじの坂さかを通とほりて、七里しちりが濱はまに打うち出いでぬ。二に

更かうの月つきは雲くもに入いりて、劍戟けんげきの光ひかり獨ひとり松火たいまつの炎ほのほにきらめきぬ。

四條金吾どうきんご四條ノ中務ノ三郎左衛門尉頼基、北條氏の一門名越越後守光時其子四郎親時の老臣也兄弟四人けうだいよにんは、途みちより馳はせ參さん

じて馬うまの口くちに取り付つき、あはれ御様おんさまよと泣なき悲かなしむことと

限りなし。やがて龍たつの口くち當時刑人を斬殺せし所、蒙古の使者をも、後ち其處にて斬りぬに着つきて、濱邊はまべ

の圓座みんざに下おろされぬれば、執行しつかうの奉行ぶぎやう刑執行の奉行にし平左衛門へいざゑもん

尉じやうが下知げちと覺おほしく、太刀取たちとり既すでに吾わが背後はいごに立たてり。四陣ぢんの

篝かやりは星ほしの如ごとく連つらりて、萬目まんもく悉ことごとくく吾わが身みの上うへに注そがれたり。

金吾きんごは今いまぞ御最後ごさいごよと身みを投なげ伏ふして泣なき轉ころぶ。日蓮にちれん

申す様、あはれ不覺の殿原かな、是れ程の悦びをば笑ひも
 せて、何に平生の約束上人一門の門規は、身を死して法を弘むるを以て眼
 りなき榮譽とすること、平生より定まれるをいふを違へ
 らるることよとやがて合掌瞑目して、今ぞ最後と覺しき
 時、『江の嶋の方より月の如くなる光物の鞠の如くなるが
 飛び來り、辰巳の方より戊亥の方へ光り渡る。頃しも十二
 日の夜の味爽に物の形も定かならざりしが、物の光り月
 の如くにて人の面も皆鮮かに見ゆ。太刀取眼くらみて倒
 れ伏し、兵共も怯ぢ怖れて一町許り走り退き、或は馬より
 下りて畏まり、或は馬の上に蹲まるもあり。已上『の文は』種種御振
 『舞御書』聖文の一節を引用

したる
もの也

日蓮

大音聲を揚げて、

如何に殿原

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

人^{ひと}を獨^{ひとり}り差^さし措^{くわ}きて、何^{なに}處^{ところ}にか退^ひき給^{たま}ふぞ。夜^よも明^あけなば見^み苦^くしかりなむ。急^{いそ}ぎ寄^よりて頸^{くび}切^きるべくは疾^{はや}く切^きれよかし。如何^{いか}に如何^{いか}にと呼^よばはれども、兎^う角^{かく}の應^おへする者^{もの}無^なく、又^{また}打^{うち}寄^よる人^{ひと}も無^なし。やや久^{ひさ}しうして兵^{つはものども}共^{とも}來^{きた}りて、兎^うも角^{かく}も相^さ模^{がみ}の依^え智^ち 愛甲郡依智郷、本間の依智といふ。武藏守宣時が支配下佐渡の地頭本間六郎左衛門重連が住めるところ へ入^いらせ給^{たま}へと申^{まを}すにぞ、依^え智^ちとは何^{いづ}れ處^{ところ}ぞ。國^{こく}家^かの囚^め人^{にん}を獨^{ひとり}り歩^{あゆ}まする法^{はふ}やある。案^あ内^{ない}せよやと申^{まを}し付^つくれども、唯^{ただ}茫^{はう}然^{ぜん}として答^{こた}ふる者^{もの}無^なし。其^その狼^{うろた}狽^たへ騷^{さわ}げる状^{さま}。笑^{せう}止^しの限^{かぎ}りに見^みえたり。

* * * * *

斯^すくて吾^われ龍^{たつ}の口^{くち}の頸^{くび}の座^ざを助^{たす}かりて依^え智^ちに入^いり、翬^{よく}

十月十日 依智よりこの佐渡が島に移り越しぬ。十月廿二日の「寺泊御書」に「今月十日相州

愛甲郡依智郷ヲ起ツテ」と仰せられたリ

其の間の子細は煩はしければ書かず。

八

昔者釋尊多寶塔中に坐して妙法を説き給ひし時、五

十小劫佛の神力の故に半日の如く謂はれき。法華經涌出品に地涌の菩薩釋迦多寶分身の三佛を

供養せし時 今の二十年 歲月短きに非れども、法華經を身讀せ

る日蓮が身にとりて片時の如く思はるるぞかし。末法弘通

は塔中付屬の大願「寶塔品」に法華經を付屬したまふ語に「此ハコレ難事ナリ、宜シク大願ヲ發スベシ」當ニ大願ヲ發スベシ」等仰せらるるに由れり 法

華折伏は聖經自爾の本義聖經は法華經をいふ。自爾は自然といふが如し。天台大師も「法華ハ折伏ニシテ權門ノ理ヲ破ス」といはれ、上人また塵

々之を引かる日蓮身に上行の使命を受けて法華經の行者が爲すべき程の事はほぼ爲し遂げきと覺ゆるぞ嬉しき。
上行とは法華經「涌出品」に始めて出て

一切經中に曾て出でざりし大菩薩にして、「神力品」に釋尊より此經の精神たる題目の付屬と末法弘通の使命とを受け、その教の弘通法、迫害及び利益、その教の宗旨等ことごとく彼の品及び「不輕品」「勸持品」等に擧げられたり。日蓮上人は佐渡流罪前にその弘通迫害等の全部を爲し遂げ、その宗教宗旨の半ばを開き、佐渡及び身延において之を大成して上行の使命を圓滿に實現せり。あはれ鎌

倉殿吾れに於て何かあらむ。十宗の緇素もとより墮獄の徒

たり、吾れ夫れ獨り誓ひて日本の眼目僧を人天の眼目とも人天の大導師ともいふは、迷を離れたる清淨の眼目明か

にして、よく正理を見て人天を導くが故なり。上人が自ら日本の眼目といふ、特に深義あり。となるべき也。北海波荒く孤島

雪深けれども、苟くも化城の迷を離れて本土の開顯本土とは本國土の略に

して眞理の國土、術語の所謂常寂光土なり。その開顯とは、方便の教には此の娑婆は迷の土、眞理の國土は外に在りといふも、之は幻化の都城の如き迷に氣安めせし教也。眞實の法華經によれば、娑婆世界はそのま

吾人の迷へ開顯せらるれば眞理の國土となる。法華正法の行者は、常に此の開顯の本土を心中に見るゆゑ、いかなる處もみな常寂光土ならぬはなしと也。にだに與からは、

吾れ等が居住して一佛乘法華經をいふ。一切衆生を佛になす唯一の教乘なれば也。を行ぜむ處、い

づこか常寂光の都ならざるべき。靈山釋尊法華經を説ける印度の靈鷲山なれども法華經の寶塔品より囑累

品」までの説相によれば、此の靈鷲山の名が天地法界を盡して一佛國土とする常寂光土の異名となりたるなり。日蓮上人が「靈山へ參ル」とか「靈山ノ道」とか仰せあるは、皆この意義の靈山にして印度の靈鷲山に非

ず。そは「諸御書」「御義口傳」「日向記」に明也、今も亦其義なり。それを「本有ノ靈山日夜二往返スベシ」ともいはれたり。今の文は、靈山と本有とを修辭上ニク處に分けて對偶となせる也。の道は

一步の外にあり、本有の淨土晝夜に往返すべし。何ぞ鎌倉と

伊豆と龍の口と佐渡とを問はむや。此の四ヶ處は、上人法華經を身讀せる處にして、寂光土ともいふべし。されど寂光は

内にしては我が心にあり、外にしては國家世界に擴がるべきものなれば、單に此の四處のみならず、日本國乃至世界のいたる處に法華經を身讀して、寂光土を實現すべしとの義をいへり。於我滅

度後應受持斯經「神力品」の付屬の偈の文乃至速爲疾得無上佛道「寶塔品」の付屬の偈の文と

説かれたる聖經の文空しくば、「神力品」より乃至と瀾りて「寶塔品」に至るまでの十一品に、上行菩薩に末法法華の弘通を付屬せら

れたる文義を充實せしが故にかくいふ。諸佛の舌上行への付屬を讀證して釋尊多寶分身舌を梵天に付くる事「神力品」の説相也も切られなむ、

多寶の塔

多寶の塔は「寶塔品」に「法ヲシテ久シク住セシメンガ爲ノ故ニ」來りませりとありて、また法華經の付屬の爲めに存在す

も壞れなむ、寂

光の土も地獄の巷と

變じなむ。

釋迦多寶十方分身の證せし上行菩薩の末法法華弘通が空しき妄語ならば、妄語の當然の結果として、彼の

佛たちの住する寂光土は地獄の巷となるべし、諸佛は大火炎にむせぶべし、いかでか左様の事あらむ、さらば「神力品」乃至「寶塔品」の上行付屬は實語の豫言ならむ、さらば事實は必ず現時の末法に出來せざるべからず。出で來れり、吾れ實に彼の付屬の文を身に色讀したり。吾が上行の使命、上

行の垂迹は天地山川の確なる事實なるよりも確なる事實となれりとの義を含めり 『詮ずる所は

天も捨て給へ、諸難にも遭へ、身命を期とせむ。

善法華より他の善法又は善業

につけ惡世間煩惱より生ずる惡心及惡業につけ法華經を捨つるは地獄の業なる

べし。大願を立てむ、日本國の位を譲らむ、最大なる誘惑法華經を棄

ててくわんぎやう觀經觀無量壽經即ち阿彌陀念佛を勧めたる經也等に就いてごしやう後生死後の極樂往生也を期せよ、父

母の頸を刎ねむ最大なる迫害念佛申さずば、なんどの種種の大難出

來すとも、智者佛法の道理を深く明に究めたる人に我が義破られずば我が立つる所の宗義を論破せらるる

況 後 録

に非 す 用 る じ と な り。 其 の 外 の 大 難 風 の 前 の 塵 な る べ し。 我 れ

日本 の 柱 能く顛倒を支ふる人即ち とな ら む、 我 れ 日本 の 眼 目 能く眞偽正

正 眞 に 導 く 人 即 ち 靈 界の師徳に譬へらる とな ら む、 我 れ 日本 の 大 船 能く生死災禍の河海を渡す人

な ら む 等 と 誓 ひ し 願 破るべからず。』 已上 『丙 の 文

南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

此の篇は、種種御振舞御書、開目鈔、如説修行鈔、佐渡御書、觀心本尊鈔、最蓮房御返事等に據りて述べたるもの、私意を加へたる所少し。上人追懷の事は假構に出づと雖も、録する所は事蹟の眞實を傳へて、毫も疑を容れず。文中『…』を施せしは、上人御書の原文を、其のまゝ用ゐたる處を示す。謹みて、聖文を汚すの罪、大なるを謝す。

(明治三十四年十二月。樗牛生)

況 後 録 終

樗牛論評

姊山
崎川
正智
治應

高山樗牛の日蓮上人崇拜に就いて

山 川 智 應

○

高山樗牛！ 彼れは予の最も敬愛せる先輩であつたと共に、また最も思慕せる心兄である。予は今、わが心兄の香骨を瘞むる龍華寺から、海を隔てて此方、三保貝島の地に、朝夕起居して居る。平素は忙殺せられて何等感想の餘裕もないが、残んの月淡く照せる味爽あけぐれ、さては夕靄の薄く霞める日暮など、天邊の玉芙蓉と相對して、穩かに靜かに長く横はれる有渡山を顧みては、限りなき追懷に慄がれざるを得ない。おもふに心兄の靈も、わが恩師が事業の近く三保の地に發展して、彼れの起信の動機となつた、『宗門の維新』、實現の曙光となるを見ては、必ず屢々この地に來格することであらう！ 果然、予が此處に移り越して已來、わが心兄

は、幾度ならずわが夢に入つた。

懐かしき心兄、その信仰に就いての談を書くべく机に向つた。書くは書く、併しわが胸に湛へたこの限りなき思ひを記すべくわが筆は餘りに貧しい、彼れの信仰を冷靜に批評すべくわが心は少しく熱して居る。しかし彼れの信仰（といひ得べくむば）に入つてからの精神に就いては、たゞわが恩師と、姉崎先輩と、予との外に天下またこれを語り得るものはない。予はいづれ一度は、心兄の信仰に就いて纏まつたものを書かう。今はたゞ忙裡の寸間を偷むで、秩序なく思ひのまゝを筆に任せる。

○

嘲風先輩が、「文は人なり」に於いて、亡心兄の心的経過を、『憧憬の時代』、『自信の時代』、『煩悶の時代』、『渴仰の時代』と分けたのは、實によく亡心兄の人物を知つたものであると同時に、樽牛の人物が、その短かき三十二年の生涯に、凡そ

あ、ら、ゆ、る、『人』の、經、過、す、べ、き、道、を、履、み、盡、し、た、こ、と、を、表、は、し、て、居、る、と、お、も、ふ。

人間の境遇は種々である、しかし幼少より青年時に際して、何かしら憧憬的空想を有つて居ないやうなものは、それは最早語るに足りない、否、どんな人間でも大なり小なり、きつと有つて居るであらう。それが或は自信となつて働いてお終ひになるもあれば、或は自信まで落着かず、憧憬からすぐ煩悶になるのもあらう、或はまた憧憬から直ちに渴仰になつて、自信も煩悶も知らぬ人もあらう。或はまた憧憬、渴仰、自信、煩悶。憧憬、煩悶、渴仰、自信。憧憬、渴仰、煩悶、自信といふやうにその道行きを異にする人も多からう。彼のナポレオンの如きも、幼時の憧憬、青壯強時の自信は、終にセントヘレナの煩悶となり、臨終の『あゝ、竟にナザレの大工の子に及ばざりしか』の衷心の叫びは、彼れの『渴仰』に入る一轉機ではあるまいか。豊公老後の大佛供養や、徳川公への遺言には、また彼れの煩悶と渴仰との痕跡を一是強く一是淡く印したるものといつても、甚しい誤りでは

あるまい。そして、強い自信のあつたものほど、強い煩悶が来る、その後には強い
渴仰も来よう。反對に強い煩悶または渴仰のあつた者には、また強い自信も来る
であらう。即ち樗牛先輩の經過した途は、『人生』の履むべき道を、尤も順序よく
履むで来て居るやうである。この點に於いて、予はわが心兄を偉なりとする。

此處でちよつと挿むで置きたいのは、『人間』には、樗牛心兄の様に、華やかに
心の變化を盡す人と、雪嶺博士の様に、ほとんど變らない心持ち……實は變つて
居る。『眞善美日本人』を書いた雪嶺先輩は、今の三宅博士と、確かに何處か變つ
て居る、が、それが何時の間に變つたかは解らない。また變つたとしても、根本に
は目立つて變つて居ない……を抱いて居る人とがある。雪嶺先輩の如き自主的の
人も中々偉い。不得要領の得要領！面白い。しかし變らない心持ちの人は、大
なら大、小なら小で、豫め知るべきだ。よく變化する人物は、その進境に知るべか
らざるものがある、と同時に『人間の世』の實際の味ひを餘計に味ひ得るであらう。

わが心兄はその側の人間である。

心兄の四期は、『人生の旅路』の宿驛を順序よく経過した。たゞ惜しむべきは、到着すべき寶處まで到着しなかつた。今一步といふ處で、天は斯人を奪つて了つた。到着すべき寶處とは何ぞ、それは、『渴仰』の階段を経て、『同化』の堂に昇り、『自覺』の室に入るのである。あゝ天や無情！　されどこれ、彼れが異彩ある文星、詩人的評論家、活識ある學者として生まれた天分の止むを得ないものであらうか、噫。

○

予が心兄を知つたのは、所謂『煩悶』時代の美的生活論から、日蓮上人『渴仰』時代に入つた時、即ち恩師を訪問しに來られた時からである。それから殆むど僅に一年、相識るや實に短い。が、その心に残せる互の印象は深かつた。いで心兄の渴仰の、起、因、と、状、態、と、範、圍、と、所、期、と、價、値、と、影、響、と、に就いて、聊か所感を述べて見

よう。

樗牛心兄の日蓮聖人渴仰は、明治三十四年九月の末に、恩師田中智學先生が『宗門の維新』といふ一冊子を、朝野の名士、主もなる操觚者、七百餘名を選むで寄贈せられたに起因する。その時恩師は、『高山はきつと何かいふであらう』といはれたが、ヨモヤ奔り來つて道を問ふに至らむとは、誰も豫期しなかつたことである。此の書を得た宗門の高僧などいふ者でさへ、餘り話しの大きなのに膽を潰した。青年の或者などは、恩師を嘲つて、『小説家になつたら可からう』などと忠告文を書いた。どの雑誌記者も、大抵は『日蓮的氣焰の熾んな書だ』とか、『世界統一の夢想を書いたものだ』とか云つた丈で、誰れあつて眞面目な批評を爲し得た者も、その思想の奥に何物があるかを觀破した者もない。たゞあつと驚いた體たらくだ。その消息は大町桂月氏が、後ち宮崎虎之助氏の『新福音』を評した中に、『田中智學氏の「宗門の維新」と此の書とは、奇書を通り越して、天下の狂書である。』

但、田中氏の方のは聊か根據があり相だ』といふ風な事を書いて居たのによつても、大凡その有様が見え透くやうに窺はれる。然り！然り！大抵な凡俗は、『狂書』と考へたらしい。書く事を商賣にして居る人達がそれだから、所謂名士といふ人は何も言つて來ない。たゞ一人、恩師の親交ある友、坪内雄藏博士が、懇篤なる感激の狀を寄せ、且つ要山へ來訪せられて、種々の談もあつた。それは如何にも眞面目なものであつた。その外には誰もない。恩師を始め、予等は、慚然として今更ながら日本思想界の淺薄なるに呆れて居た。時しも十月の二十五日、一人の風采閑雅な紳士が突然と尋ねて來て、『先生にお目に掛りたい』と名刺を出して案内を乞うた。取次の手からその名刺を取ると『高山林次郎』とある。意外！何しに來たのだらうとは、編輯部の總ての訝りの眼の囁きだ。恩師に通じると、『三保の間に通せ』との事、三保の間とは、襖と地袋に、三保の松原の不二と、龍華寺の蘇鐵とを畫いた客間である。予は客を此に導くと、室に入るや否、『あッ此

處にもありますな』と襖と地袋とを見て、さも愉快らしく感嘆的調子で云つたのは、『宗門の維新』に、日蓮主義によれる將來の世界統一を論じて、三保清見一帯の地を理想化して、日本の大立關とした大計畫を聯想したのである。暫く接待をして居る裡に、又意外！ に感じたのは、この客人が、世の雜誌で囃す様な『鼻の高山』といふ氣振が少しも見えないことであつた。來意は、『宗門の維新』を頂戴して、それに就いて少しく御伺ひ申し度いことがあつてとの事で、やがて恩師がお出でになつた。すると高山氏は、『宗門の維新』を贈られた禮を厚く述べて、その理想の雄大に驚いたこと、文章の熱烈に魅せられたことなど語つて、さて『あの御理想は、先生の御考へでありますか、日蓮上人の御遺志御理想でありますか』と問うた。仍て恩師は諄々、大聖人の主義抱負事蹟から、今の世間及び宗門が、毫も大聖の真相を知らざること説かれた處が、一語一句傾聽して、會心の談に至ると、頸を少し曲めて感服する、『全く左様です。私なども矢張、日蓮上人は一

個風變りの強氣な坊さん位らしか考へて居ませんでした。が、少し前に偶ふとした處で、上人の御文章を見ました時から、何となく其の人物に偉すげれた處があると感じましたが、今度あの御書物を頂き、親しく御話を承つて、始めて今までの上人に對する考を根柢から一變へされました。如何でございませう、鎌倉へ移住しまして、上人の研究を致したいと思ひますが、佛教のことは、大學で村上さんから少し聴ききましたが、別段の智識を持つて居りませんが、上人のは大分他とは異つて居る様に思はれます。何分の御教示を願へれば幸福で御座います」と、眞摯まことこころな誠心まことこころこめての話で、恩師も、『それは結構な事だ。今の日本の學界に、大聖人を知らないのは、自らの親を知らぬ様なものです。貴方の如き俊秀な人が研究をなさるのは、我が思想界に取つて如何にも悦ばしいことで、及ばすながら、御研究の御手引は致しませう』と承諾せられて、尙ほ研究上の方針、注意なども受けて、『それでは移住次第改めて参りまするが、どうか宜しく御指導を仰まかします。』宗門の維

新』は批評などは到底及ばざる所で、聊か感想を漏らして紹介を致さうと存じま
す』とて歸つて行つて、程なく長谷寺の境内に住居を移し、更に訪ね來られた時
は、いよ／＼研究に従事するとの事で、半日ばかりも指導を受け、また感想を述
べて是正を乞ひ、侍座せる予にも種々の談論を試みるさま、毫も粉飾がない。常
識に富むで禮儀をよく心得た人である。この日、『高祖遺文録』と『日蓮大士眞實
傳』と『法華經宗義鈔』とを借りて歸つたのが、研究のはじめであつた。恩師は、
『噂とは人物が全く違ふ様だネ、世の風評は今更ながらアテにならぬモノだ』との
仰せがあつて、予等一同もひとしく、『實に左様でございます』と同意した。これ
が、心兄の日蓮上人研究に入つた事實因縁である、直接の事實因縁である。予は
更に已下、この直接の因縁を生じた遠因を調べて見よう。

○

心兄を悪く云ふ一部の人が、よく『高山は病氣になつて、その感情の鬱悶を

日蓮崇拜に遣つたに過ぎない』などと云ふが、『牛羊の眼を以て衆生を評量すべからず』とは、斯様な人を誡めるに尤も適當な佛語である。それは病氣も、心兄をして渴仰の時代を作らせた一因縁には相違ないが、その病氣の爲めに血迷つたやうにいふのは、皮相嫉妬の見である。恩師は云はれた、『高山が肺病の爲めに、日蓮崇拜に向つたと云ふなら、天下の未だ大聖人の眞價を知らざる迂濶な者は、みな肺病になるが宜しい、こんな國家人生の幸は無』と。いかにも痛快だ。

予を以て見れば、心兄の『日蓮聖人渴仰』は、決して附焼及ぢやアない。一時的の氣安めぢやアない。彼れは、彼れ自らの求めて居たものを、三十一年にして始めて得たのだ。彼れは、彼れ自らの偉大無限なる典型を、日蓮聖人に於いて見ることを得たのだ。即ち彼れの性格が、無意識的に深く、日蓮聖人の如き全象的偉大を求めて居ると共に、彼れの境遇は彼れをして、何等かの偉大なる者に依らしめねば止まぬ様に促がした。そこへわが恩師の『宗門の維新』が一點の靈火を投じ

て、彼れをして日蓮狂の目を取らしめたので、彼れは當然求めつゝありしものを求めて満足したものである。

嘗て彼れが、坪内博士の『馬骨人言』を博士のと信せず罵倒した時に、島村抱月氏が、之を反駁した中に、『君は當代の才人だが、識に短である』といふ風なことを言つて居た。また一面からは、『樗牛は感情の人だ』といふ評もある。併し公平に見るならば、心兄は決して所謂『感情の人』ではない、彼れの智力の俊秀であつたことは、彼れの著書『文明史』でも『論理學』でも、何でも、讀む人に心地よく理會せしむる程に、要領を得て居る。彼れの意志の弱くないのは、彼れが思ふことを少しも遠慮なく言明し得る男らしい處に見ることが出来る。予は心兄において智も情も意志も、よく揃つた人物で、比較的情が深い人とする。たゞ『才の人』といふのは當らない。凡そ『才』といふものは、上すべりのするものだ。彼れは明かに豊けき『才人』には相違ないが、併し決して『識見』に缺けて居ない。のみならず

彼れには『才』や『學』や『識』より深い『直覺』といふ力をヨリ多く有つて居た。彼れの言にも筆にも、この『直覺』の閃きが到る處に發見せられる。彼れの文章が社會の如何なる階級の者にも愛讀せられ、彼れの執筆の有無によりて、『太陽』に一萬已上の賣高の相違を來し、彼れの『全集』が『紅葉全集』已上の賣高を維持して、十ヶ年少しも衰へないのは、直ちに人心の幽微を衝くこの『直覺』の力である。常に文壇に清新の問題を供して、彼れ來れば文壇爲めに賑ひ、彼れ去れば文壇爲めに萎靡するのは、又みなこの力だ。それに次いで、彼れの識見だ。彼れの『才』の如きは、それ已下の者だ。予は、抱月氏が『才の人』と評したのに對して、『直覺の人』むしろ『識の人』と斷じ、或は『感情の人』といふものに對して、『智情意ともに豊かにして、情に深き人』であると斷ずる。

○
この性格が、即ち彼れの、日蓮上人の崇拜渴仰に入る自らの素因である。日蓮

上人に對しては、單に『才の人』や『情の人』は、決して根柢から渴仰するに至るの
 はむづかしい。たゞ『等しき人のみ等しき人を解す』、大小こそあれ、同型の者近
 き者が、互によく憧憬、同化するものである。試みに予のこの言を證する爲めに、
 彼れの文中から、自らを語れる章句を拔萃しよう。まづ彼れの自信の尤も深かり
 し『日本主義』時代のから出さう。

一物存在の眞意義は、其の依て以て物たるを得る所の精神本領の存在にあり。正義を以て立つ所の
 もの、一朝屈辱を忍ばば、是れ已に滅亡なり。形骸は性格を作るゝこと能はず。世間、名存し實亡べるも
 のあり。進化の美名の下に、滅亡の事實を掩へるものあり。……あゝ名目主義の弊なる哉、形式主義
 の禍なる哉。正義の爲めに滅亡する國家は、滅亡によりて榮ゆ。所謂大義親を滅すとは、實に是の
 大主義の福音に非ずや。今や其の性を失ひて、而も其の命を全うするものあり。彼等はひいて、國家
 をして精神的死亡を遂げしめむとす。國其の性を失へば、是れ變化に非ずして滅亡に非ずや。世には
 死せる宗教あり、然れども國民は國家をして死せしむべからず。あゝ形式主義の弊なる哉。

正義の爲めに斃るるは、正義と共に生くるなり。世には形骸のみを以て立たざるものあり。個人も
 國民も、已むを得ずむば、死して而して後ち生くるの大覺悟大精神無かるべからず。

(成敗と正義、三十年八月。「文は人なり」一〇六)

この自信の根柢は『日本主義』にあるが若しその主義を大轉步せしむれば、殆んど『日蓮主義の國家觀』に近似した超越^{△△}想である。

公德は私情を没せざるべからず、大義まゝ親を滅す。理を談じて冷酷鐵の如きものを以て、一概に無情漢となす勿れ。冷[○]え[○]た[○]る[○]鐵[○]に[○]も[○]、打[○]て[○]ば[○]美[○]妙[○]な[○]る[○]響[○]あり。

(冷鐵のひびき、三十年十月。「文は人なり」一〇七)

また『日蓮聖人の折伏主義』の小説明とも見得られる。

知識の高遠彼れが如く、學術の精緻彼れが如きもの、世間何ぞ限らむ。獨り其の忠厚の器質を挾みて終始其の徳に反かざるに至りては、歐陽文忠公は眞に一代の國士なる哉。上下四十年、事多く志と違ひ、道途に世に行はれず。具さに世路の崎嶇を歴、迤邐困蹶、幾度びか流竄の禍に罹るも、剛正の節果敢の氣、死に至るまで衰へず、堅く公義の是非を執り、凜乎として動かす。勢利前に誘ひ、斧鉞後に迫るも、從容として大義に就けり。箕山の側、潁水の湄、英魂靈氣永く千秋の龜鑑となる、亦宜なる哉。王介甫は公の政敵、曾て『一國に在りては則ち一國を亂し、天下にありては則ち天下を亂す』と罵りたるもの、而かも公の死を弔して嘆じて曰く、『公や復び見るべからず、我れ誰と與にか歸せむ』

高山樗牛の日蓮上人崇拜に就いて

と。吁、一世の國士、人を化する亦是の如きものある乎。

(士の徳操、三十年十一月。「文は人なり」二〇八)

節操を以て持立し、忠誠國を愛ひて困躓崎嶇を避けず、誘惑に迷はず、迫害に屈せざる國士の風格を羨望する彼れが情操は、やがて後來、『日本の柱』たる、日蓮上人一代の大事蹟に、讚歎渴仰を極めたる素地である。併しながら、彼れの所謂『正義』なるものは、机上の空論を云ふのではない。彼れは國士を崇ぶと共に、腐儒を惡むだ。そして文字の外の書を讀む活識を忘れなかつた。

人心は偏し易し。其の境遇天性おのづから、彼れをして等々不知の大觀に勝へざらしむ。學藝の士に於て、殊に然りとす。

夫の書の外に知識なく、圖書館の外に世界なく、同臭交友の外に人間なきは、所謂學者の自ら高しとする所以にあらずや。抑、自己の人たるは何に因りてか然る。

學者にして始めて人たるか、將た人にして始めて學者たるか。彼等は未だ曾て這般の問題に想到せざる也。

彼等は自ら觀察秤量の公平を誇る。而かも己れを揚げて他を抑へ、昂然自負、人を見る、こゝ土芥の

如きは、常に彼等に見る所、是れ古今の通弊なり。……今夫れ大自然の眼より是等の數々たる小量を下瞰せば、其の螭蛄旦夕の智見を挟み、謂はれなくして他を凌蔑するの輩は如何に見ゆべきや、所謂、
 學いよく深くして智いよく淺きもの、眞に憫殺すべきなり。

……今の紛々たる小學者は、書の外にも知識あり、圖書館の外にも世界あり、同臭交友の外にも人間あることを覺らざるべからず。
 (三十年十二月。「文は人なり」一一二)

凡俗や文學者の外に、人間はない様に考へて居る『人生觀上の自然主義』の唱道者や、他人の招待を受けてその家に行き、オーヴーコート^{Overcoat}の儘に座敷に上つて、家人の勸むる火鉢、座蒲團を、突立つて傍に一瞥しつゝ、床の間の前に立ちはだかつて、座敷中を見廻はすやうな野蠻不作法なる倫理學者などは、この文章に生薑一へげを和へ、五合の水を一合に煎じて、朝夕二度づつ飲むが宜しい！わが心兄は、學生上りには實にめづらしい常識の優れた男だつた。日蓮上人の『成佛の法に係はらざるものは、世間普通の道理に依るべし』『少々佛教に違ふとも、其の國の風俗に違ふべからざる由、佛一つの戒を説き給へり。此の由を知らざる智者

共、神は鬼神なれば敬ふべからずなんと申す強義がうぎを申して、多くの檀那を損する事ありと見えて候也』との御語は、根本の大義には嚴烈比類なきに係はらず、餘の末節及び世間の事には、すべて世間の事情を盡くされたのを表はすので、これまた、心兄契合の一樞機である。すでに世間の活きた事情を盡すの雅量がある。なんぞ人生自然の情慾を形式的に粉飾するの愚を學ぶべき。

『酒と女と歌とを好まざる者は、終生呆癡たらむのみ』。若し今の學究にして、是の言が、宗教革命の大勇者ルーテルの口に出でしを聞かば、或は其の意外なるに驚かむ。其の意外に驚ける者は、更に退いて三思せよ。吾人は寧ろ今の小量切々たる村學究をして、是の意氣の一分を得しめむことを欲す。吾人豈彼等に向て、酒と女と歌とを奨むるものならむや。

智ありて意なきもの其の弊や屈、情ありて意なきもの其の弊や靡。現下の青年學生の多くは、屈に非ずむば則ち靡のみ。今の精神界の沈滞に一振掉を加へむものは、夫れたゞ意育なるかな。

〔無題〕三十年十二月。「文は人なり」(一四)

これ或點に於て、彼れが他日「美的生活論」を唱ふる素地とも見得らるると共に、進むで『世間の留難來るとも取りあへ給ふべからず、賢人も聖人も此の事はのが

れず。たゞ女房と酒うちのみて、南無妙法蓮華經となへ給へ。苦をば苦とさとり、樂をば樂とひらき、苦樂ともに思合せ、南無妙法蓮華經とうちとなへ居させ給へ、これ豈自受法樂に非ずや』の上人の樂世主義『靈的生活』に契合する所以である。

古にありては、學は氣を養ふにあり。今の人一たび儒衣を服すれば、反て奄々として將に絶せむとす。是れ何の象ぞや。人の爲めに學あり、學の爲めに人あるに非ざるなり。專念學に力む、名は則ち嘉すべしと雖、而も翻て人生の目的を遺却するあらば、是の如きの學は是れ何爲るものぞ。

吝嗇にして錢を是れ蓄ふる者、人は是れを守錢奴と呼ぶ。錢なるもの素と人の爲めに存す、人、錢の爲に存するに非ざれば也。苟くも人生に益なくむば、陶朱の富も半錢の功無けむ。然らば則ち、何ぞ守錢奴を嘲りたる所以を以て、夫の死學者を罵らざるや。(三十一年三月。「文は人なり」一三六)

かくの如き彼れの活識は、遂には『夫れ國は法に依りて而して昌え、法は人に依りて而して貴し。國亡び人滅せば、佛を誰れか崇むべき、法をば誰れか信すべき。先づ國家を祈つて以て佛法を立つべし』智者學匠の身となりても、地獄に墮

ちて何の詮かあらむ』の實際的佛教に入る傾向を示すものではあるまいか。されど彼れは、所謂功利主義を喜ぶ者でない。また智力情趣の缺けたる『意志の人』なるものを好む者ではない。

今や、一切の趣味は、世の美しき者の累ひとなりぬ。人は其の嗜好をだに道德の規矩によりて律し去らむとす。假面は盛装に缺くべからざる者なり。否、不義の名を甘んずるに非ざれば、彼れはその假面をだに脱ぎ難き也。

今や、社會は一路となり、人生は一面となりぬ。人は如何なる場合に於ても、唯一つの顔、一つの聲を有せざるべからず。否らざれば僞人として詆られむの憂ひあればなり。

今や、人人自ら獨りを喜びぬ。友は彼れに要無きなり。彼れは利害に非ざれば動かさず、世は是れを直しと呼べり。彼れは自らの幸福をだも他人の口より聞かずむば飽かざるなり。

斯くて、趣味無き人は、趣味なき家庭を作り、趣味無き社會を作り、趣味無き國家を造り、この大なる人生をして、徹上徹下、趣味無きものとなし了せむとする也。

かの其の情を抑へ、其の色を動かさざる人は、大いなりとして尙ばる。されど性を矯むるものは、均しく是れ僞りには非ざるか。あはれ離愁に泣かず、公義に憤らず、冷灰枯木の如きもの、何が故に獨り大なるか。かの弊纏袍を着けたるもの、何故に高くして、純綺袴を穿てるもの、何故に卑しき乎。

尙ぶべきは、唯その嗜好の高からむことには非ざる乎。

吾れ事を爲すに當りて、人は先づ其の利する所如何と問ふ。あゝ利する所乎、利する所乎。天下の事利を離れて爲すべからざる乎。一面の人は唯一面の人を見る。劍を把て琴を弾き、三軍を鑿して野花に泣く。彼れ其の行に於て、矛盾する所ある乎。

(三十一年十二月。「文は人なり」一七八)

斯の如く、人生の一切を「二天作五」とせむとする世の無趣味に慨ける彼れの鬱悶は、竟に之を惡み憤らざるを得なくなつた。

惡を爲さざるものは有り、惡を憤るものは尠し。然れども惡を爲さざるの精神を擴充せば、遂に惡を憤るに到らざるべからず。

(三十二年九月。「文は人なり」一九七)

昔者、基督、野に咲ける百合の花を指して曰く、ソロモンの榮花の極みも、其の榮え是の花の一つにも及ばざりきと、如何にかしこくも大いなる宣言ならずや。簞笠の、時として王冠よりも美はしきを知らず。金とダイヤモンドと銀行手形の外に何等の趣味を解せざる者、争でか是の大いなる宣言の眞意義を解せむや。吾人は是の如き世を惡む。

(三十二年十一月。「文は人なり」二二四)

而も他の『日本主義』者と異なる彼れは、かゝる不平鬱悶と公憤憎惡の感情とを一轉して、人生の根本に向ひて、早く既に深き疑問と趣味とを有つことを知つて

居た。

人に生死あり、國に興亡あり。流轉の卷、日に忙はしくして、昨今の是非長へに新なり。憐れなる人の、悲み、泣き、喜び、勇み、躍り、仆れ、争ひ、狂へる間に、是の一切の法界を載せ、聲なくして運り行く、『時』の如何に大なるよ。蟬蛻の生を享けて盈尺の地に展轉し、各、其の可憐なる希望の爲めに煩悶す。吾等一念是に至れば、覺えず惘然たらずむばあらず。

是に於て乎、人間ありて最も古き疑問は、更に新なる意義を以て吾等の前に提供せらるる也。あれ人は何處より來り何處にか行かむとする。あゝ誰れかそを吾人に教へ得べきぞ。

明治三十一年將に暮れなむとす、世界と日本と吾等とは、是の一歳によりて、何物を永遠の中に寄與し得たるべき乎。嗚呼誰かそを吾人に告げ得べきぞ。

年來り年往き、人生まれ人死す。柳岡絮果年々是の如し。吾人は何の望む所ありて、是の限りなき單調を反復せむとする乎。歳晩に臨みて吾等の讀者と共に考ふべきは、是の一事のみ。

(歳暮卅一年十二月)

と、實に宗教的世界觀の機微に觸れて、而も空想ならず。『世界』と『日本』と『吾等』とが永遠の中に何物をか寄與したると云ふが如き思想は、とても宗教を單に世界主義だの、個人的だの、又は國家主義の宗教だのいつてゐる者の稚見とは

はるかに選を異にして、わが『日蓮主義』に於て『世界』と『日本』と『個人』との
 顯本を究竟する大理想に冥契すべき暗示となつてゐる。けれども斯の如き人生の
 根本問題は、彼れの精神の全體を占領するに至らなかつた。然るに、三十二年の
 六月末に、彼れはゆくりなくも、わが恩師の雑誌『妙宗』によりて、日蓮上人の
 梵音に接した。實はこの頃「妙宗」は「太陽」にも送つて居たやうに覺えて居る
 が、姉崎先輩の記憶によると、この時、心兄は嘲風先輩と共に、何れかの方面へ
 遊びに行きて、停車場で「妙宗」(第二編第六號)を見て、亡心兄はその巻頭の日
 蓮聖人の「教行證鈔」の一節を手帳に寫したさうである。彼れの後ちの述懐に依
 ると、深く此の文章に感じたといふ事だが、實際さうであらう。彼れが翌七月の
 「太陽」の『腐敗せる宗教家』と云ふ文中に、始めて其の文を引用し、已後屢々日
 蓮上人の事を云うて居る。

宗教家にして果して眞に救世の本願を有する乎、彼等は當に是の大勇猛心を示さざるべからず。人

なして血を見るを畏れしむるものは、眞の宗教心に非ざる也。迫害と禍難とを避けしむるものは、眞の慈悲心に非ざる也。……又、日蓮の教示の如何に壯烈なるかを見よ。曰く、『日蓮が弟子等は臚病にては協ふべからず。彼々の經々と法華經と勝劣、淺深、成佛、不成佛を判ぜむ時、爾前迹門の釋尊なりとも物の數ならず、何に況や夫れ以下の等覺の菩薩をや。況して權宗の者どもをや』——法華一宗は、是の如き烈々たる光焰の中に産まれたり。區々たる迫害又何かあらむ。一匹の蟲を殺さざる慈悲の法性も、一朝激すれば、河嶽の流時も是れを妨ぐる能はざる也。是の活氣ありて、宗教始めて立つ。

〔「腐敗せる宗教家」三十二年七月〕

これ彼れが、上人の人物の偉れたることを覺えた始めで、やがて又、後年、恩師に依つて、『日蓮上人渴仰』に入る遠き外因であり、殊に「妙宗」掲載の『日蓮上人の遺文』を見たとき、如何にも不思議な因縁であるが、彼れは此の頃、美學を専攻して居たから、その後ち上人に就いて深く研究する事もなかつた。處へ翌三十三年、留學生として海外へ出發する間に、數年前に蒞して潜伏して居た悪性の病に罹つた。が、翌三十四年三月に至るまでは、敢て海外渡航を絶望したわけではない。煩悶の時代には入つたものの、未だ彼れの希望の光が前途に閃

いて居た時だ。この頃すでに偉人崇拜、宗教渴仰の精神がほの見えて居ることは上の『歳暮』の感などの思想が、自己の境遇によりて、具體化し來らんとする相狀であるとも見得られる。

世間にはオーソリチーに對する信仰としいへば、直ちに迷信と同一視する人多し。されど吾人を以て見れば、オーソリチーに對する信仰ばかりたしかなるは少し。

オーソリチーを信ずるとは、其言を信するに非ずして其人を信する也、其の高大なる人格の現はれたる一形式として其言を信する也。人の智には到らざる所あり、人の情には達せざる所あり、宗教茲に立ち、信仰茲に本づく。こは人の弱點ならむも、殆むど必然とも云ふべき弱點也。オーソリチーに對する感情は一種の宗教也。吾人は是の偉大なる人格の中に於て、知り難きことをも知り得べく、感じ難きことをも感じ得べしと信する也。かゝる人格の發展としては、一言一行も吾人にとりては、言ふべからざる高大なる意義あるが如く觀らるべし。古への所謂、言は人なるもの、即ち是れ也。

されば其言を以て相争ふは、表面上の事也。争ひの根本は人の争也、性格の争也。天下は道理もて動かし得べしとする人あらば、そは未だ共に談するに足らざる人也。(人格の力、三十三年七月)

人格に對する信賴の中に、知り難きことをも知り得、感じ難きことをも感じ得

べしとするところ、優に宗教智得論者と、智解排斥論者とを超越して、本化妙宗の『信中得解論』に契應して居る。また争の根本を以て性格の争とするが如きは、一種の格言で、これ等が彼れの直覺の力である。

越えて三十四年三月、彼れは遂に洋行を斷念せざるを得ざるに至つた。そして再び評論壇に立たねばならぬ身となつた。その時の感慨を披瀝した『姉崎嘲風に與ふる書』は、實に一代の識才たる彼れにとりて、傷心に堪へざるものである。蓋し一年間の煩悶は、彼れをして餘程深き自省を興へたものと見えて、此の書にはよく自己自らを語つて居る、稍眞の自己を見出して來て居る。

茲に再び評論の筆を本紙上に執るに到りたるは、予の寧ろ恨事とする處也。凡そ評論なるもの、も達人高士の事なり。短才寡聞予の如き者、徒らに世を亂り人を惑はすに終らむのみ。是れを過去の經驗に考ふれば、一是一非、多くは我執の偏見、一時の妄念、徒らに人の詆りを受けて、身に一毫の益あるなし。今に於て當時の事を思へば、漸汗覺えず背を沾すもの少しとせざる也。而して當時自ら悟らず、文藝の批評に關して一家の識見を有せりと自信し、縱横忌憚なく其の所信を告白して、自

ら其の意を得たりと爲したりき。識者は寧ろ其の穉氣を愛したらむも、予豈今に及びて其の過ちを再びするに忍びむや。……

足下の知る如く、予は矛盾の人也、煩悶の人也。予が今日までの短き生涯は、實に是の矛盾煩悶の裡に過ごされたり。予は是の苦痛を解脱せむが爲めに、予の爲し得べかりし殆ど總ての方法を盡したり。然れども其の効果として見るべきもの一もあらざりき。予が得たる些細の知識は、予に光明を齎らさずして、却て暗黒を興へたり。予は意志の鍛錬によりて是の疑案を解決せむと努めしが、予が感情は是の目的に對して餘りに強かりき。予は幾度びか思ひき、寧ろ一切の欲求を解放して、其の爲すがまゝにあらしめむ、我れに於て其の獨を樂しむ、亦可ならずやと。然れども吾が心流石に疚しかりき。畢竟悟らむが爲めには吾が情強きに過ぎ、迷はむが爲めには吾が智明なるに過ぐ。予は是の中間に佇徊して、遂に適歸する所を知らざる也。足下よ、惡夢に覺はれたる夜は眠らざるに等し。予は實に是の十數年の歲月をかゝる煩悶の間に過ごし、人生の荷負、寧ろ其の重きに堪へざるを覺えたり。而かも予は幸に絶望せず、歎嗟せず。何時かは光明の天地に遭遇するの日あるべきを信じて、靜かに其の修養に勉めたりき。今や齡既に而立に及びて、青春將に暮れなむとす。而して矛盾と煩悶と依然として元の如き也。あゝ足下よ、是れを如何がすべき。然らば則ち、予に一言の辯なき乎。曰く否。予は矛盾の人也、煩悶の人也、而して又我執の人也。主觀の人也、是の如き人、當代の文藝に對して毫も爲すある能はざる乎。曰く、必ずしも然らざらむ。たゞ其の爲す所の、所謂の批評家と太だ相近からざ

らむのみ。...

(三十四年五月。「文は人なり」二七六)

わが心兄は、自らの直覺的なる聰明によりて、科學的知識及び現代文明の根柢に横れる懷疑の窠に早く到達した。之を脱しその謎を解くべく意志の鍛錬によりて、冷灰枯槁の學究子とならむには、彼れの強き熱情がこれを妨げる。さればとて感情の自然のままに其の欲求を解放して、所謂自然主義者たるには、彼れの明智が之を妨げた。かゝる矛盾の間に煩悶して遂に適歸する所なく、現代の知識と、自らの意志と共に自らを安立せしめざるを感せる彼れは、己むを得ず自らの性格のままに動かむとした。煩瑣、冷淡、無趣味、沒理想なる現代を超越して、自らの中に安立と價值とを見出さうとした。此點にあつても彼れは時代の先覺である。その凡俗的頹敗的デカダンの自然主義とならずして、偉人的廓清的ヒーロー的理想主義となり、終に日蓮崇拜に歸結したのは、彼れの所謂趣味、性格で、彼れは一生を通じて、向○上○的○進○步○的○自○主○的○中○心○的○の○性○格○を○躍○動○せ○し○め○て○居○た○。此時の自覺

によりて、彼れの『日本主義』時代の國家、正義、德操などの思想は、姑らく影を歛めて、人生、個人、趣味、價值の方面からの感慨は、こゝに『美的生活論』となつて現はれた(三十四年八月)。ニイチエもまた傍らから之を鼓動した。が、彼れ自らも單にそれを以て満足して居なかつたことは、左の文字がこれを證して居る。

吾人の言、甚だ過ぎたるが如し。然れども讀者よ、時勢に慣る者の言は、おのづから是の如くならざるを得ざる也。

吾がこゝろ、波にも似て碎けたるか。など圓かの儘に寫さざる、大空高く澄みわたる月。

(無題録、三十四年八月) (自ら自らを疑へる證)

斯くて學知によりて得たる記號や、形式や、名目の差配按排に満足しがたく、自らの直感のみにも満足しがたき彼れは、事實の人生の上に偉大なる趣味と價值を味ひ得たる偉人天才と直ちに靈性の接觸を遂げて、心と心との呼吸の上に、信仰安立の地盤を見出さうと試みた。即ち前に引いた『人格の力』の思想が、實際に活動して來たのである。

吾人は吳々も世人に告ぐるのである。吾人が天才を歎美するのは、吾人の精神的生活を豊かにし、是れによりて自ら慰め自ら勵み、かれて是の世に處する安立の地盤を求むるにあるのだ。凡俗者流の生活する世界以上に於て、吾人の理想的天地を建設するの希望は、是等天才偉人の前蹤によりて少からず確められ、且つ勵まざるのだ。吾人は是の希望によりて吾人の人格を修養し、吾人の信仰を活かし且つ固むるのだ。是の間の消息は、倫理見や歴史論で、ニイチエを批評し得たりとする輩の窺知を許さぬことは、言ふまでもないのである。(天才の歎美、三十四年十月、「文は人なり」三〇八)

この實際的思想は、空理を斥けて事實を尊び、知識を輕しとして信仰を重しとし、偉大なる信仰と偉大なる事實とを求めて、自らそれによりて向上すべき、人生、個人、趣味、理想、價値みな此の事實信仰の上に活躍するものなることを悟らうと云ふ風になつて來てゐる。

◎人生は事實也、空理に非ざる也。漫りに主義を標榜し學說を糊塗す、畢竟何の關する所ぞ。道學先
 座好で理を談ず、疑ふらくは、中心果して信する所ありて然る乎。

◎知は易く信は難し。百知あつて一信なからむには、初めより學ばざるに如かじ。……

◎喇嘛去り、モルモン來る。去來我れに於て何の關する所ぞ。今や信仰は外にあらずして内に在り。

人人遂に自ら悟らざるべからず。外にあるものは儀禮のみ、否らざれば職業のみ。世の宗教といふもの、即ち是れ。

○嗚呼天下好く書く者の多くして、好く讀む者の尠きや。情激する時、語逼らざるを得ず。理絶する時、言明かなるを得ず。機微言外に在り。囁嚅として唇頭に上らず、人は即ち壯語を作して他を欺くものと做す、何ぞ思はざるの甚しき。

○理の精しからざるを怪む勿れ、精ならざるは粗ならむが爲めのみ。吾れは唯吾れに同じきものを求む。何ぞ人の異を妨げむ。

○若し偏に理を争はば、吾れ不肯なりと雖も、豈俄に道學先生の後に落つるものならむ。千萬言唯意のままのみ。區々の辨折、等々を待つて知らむや。(三十四年十月。文は人なり。三一〇)

彼れは『美的生活論』や、ニイチエの提唱に對する學究者流の論難に對しては、意氣昂然堂々としてこの宣言を爲し得つゝあるにかゝはらず、顧みて彼れ自らとして、而かも未だその心に眞の満足を得る何物も得て居なかつた。が、所謂、空理、形式、名目を得て悦べる學究の巢窠を去つたとは、自ら深く喜び且つ慰むる所であつたらしい。

書を寄するものあり。曰く、言論畢竟人物のみ、足下の近狀憐むべきが如しと。嗚呼果して然る乎。吾れ豈自ら憐むべきを知らざらむ。若し夫れ、憐て而して自ら樂むの境地は、即ち足下等の知りざる所に屬するなからむや。

然り、言論畢竟人物のみ。吾心近來靜穩を缺ぐ、猶ほ水平の風に亂るるが如き乎。詩あり、曰く、吾がこゝろ、波にも似て碎けたるか。など圓かのみまゝに寫さざる、大空高くみわたる月。

吾が文もと文に非ず、其の詩亦詩に非ざる也。

(三十四年十月)

ところへ「宗門の維新」が舞ひ込むだ。彼れは一讀の感慨を漏らして、『其の意氣の猛烈なる、其の抱負の高大なる、其の理想の深遠なる、而して其の文章の雄偉なる、吾人は以て近時宗教界の一大文字なりと賞賛するの、決して溢美に非ざるを信する也』といひ、『田中氏が二十年來内外の障礙に抵抗して、終始其の主義を枉げず、斷々乎として益々其の侵略的態度を擴張するの一事は、少くとも其の教祖の偉大なる精神に感孚する所ありといふべし。吾人深く其の志を壯とし、其の行を偉とす。其の文章亦彷彿として高祖遺文の流韻を傳へたるが如き、亦吾人の

欽羨に堪へざる所也』と、彼れは茲に、自ら最近に思ひ當てたる偉人信仰、人格陶冶の實際の人證を得たのである。現代の空理空智に堪へざりし彼れが、直ちに趨つて恩師に教へを請ふに至つたのは當然の事である。恰も塞せかれつゝありしが、水門を開かれて、滔々快速の勢を以て溢れ出づるが如く、彼れの渴仰は茲に其の境的を得た。彼れは求めて而して與へられたのである。這間の消息を心兄自ら認めて、斯う云つて居る。

是の如くして予が日蓮研究の端緒は開かれぬ。爾來予は力めて『御書』の精讀と、教理の研鑽とに従事し、時に田中氏と會して判釋を聞くことを樂めり。予の領解は果して多少の進境を示したりや。日蓮上人と予と果して相近きつゝありや。予自ら是れを知らず。唯是の研究が、予に従來未だ曾て知覺せざりし一種の満足を得たる事は、予にとりて至大の報酬と謂はざるべからず。而して此の間に於て、田中氏が予に與へられたる多大の厚意は、予の實に感謝に堪へざる所也。

三十一年間『未だ曾て知覺せざりし一種の満足』を得た彼れは、たゞ自己の有とのみせずして、世の爲めにその満足を分ち、この光明に浴せしめんことを試む

るに至つたのが、彼れの日蓮狂的絶叫である。已上の経過を觀察して、誰かまた『高山は病氣に血迷つた』とか、『珍らしもの好き』だとか、『感情的だ』とかの名の下に、その入信の動機を説明し得るものがあらう。彼れは實に彼れが久しく求めつゝあつた自己そのものの、超絶的偉大なる理想的典型を、日蓮上人に於て見出したのである。即ち心兄が日蓮上人の信仰に入つた起因は、内は彼れの性格に原因し、外は「宗門の維新」の啓發に感激したのである。

起因と、状態と、範圍と、所期と、價值と、影響とを書くべき子は、起因の爲めに餘りに多くの紙を費した。後の詳しいことは、又時機を得て示すこととし、その概略をいうておかう。

○

斯の如き根柢深き起因から渴仰した心兄の『状態』は、ほとむど傍目から見れば、『狂』といはるべき程であつた。自らが關係する有らゆる雑誌に鼓吹する、知

友先輩に上人の偉大を吹聴する、訪問者があれば「種種御振舞鈔」を讀むで聽かす。最後一ヶ年の彼れは、この『日蓮上人鼓吹』によつて、華やかに限りなく四方を彩れる崇大なる光明を遺して逝いたのである。

而かもその渴仰の『範圍』は、決して單の人格崇拜ではない。彼れは未だ教學を正則に研究して居なかつた、まだ純粹の信仰にも這入つて居なかつたに係はらず、その日蓮主義的思想は、殆むど今少しで彼れの全思想全人格を占領せんとするまでになつて居た。或は『一念三千によりて忠孝節義はじめて活く』といひ、或は『理前の是認、事後の註釋』といひ、或は『現代を超越せざるべからず』といふの類、皆その波及飛沫である。たゞ猶ほ自己とニイチエとの痕跡を全脱して、日蓮聖人に全く同化し畢るに至らなかつた彼れの短生涯を憾みとする。

されどその『所期』は、なかく大なるものであつた。彼れは上人研究が進むと共に、深くその教學が世に知られざるを遺憾とし、また帝國大學に於て、この

日本特有の佛教が講せられざるは、日本思想界の恥辱なりと慨き、如何にもして自ら奔走し、帝國大學にその講座を設けしめようと冀望して、若しその冀望の成つた時は、出講を願へるや否やを恩師に確かめた。恩師も、それは貴下の誠意に對し、さういふ場合には必ず聘に應ずると諾せられたので、心兄は孰れかの方面へその事を漏らしもし、また少し病氣がよくなれば上京して話すというてゐた。恩師は、若しその事が急にでも成るとその準備をせねばならぬとて、その組織的講案を立てられたのが「妙宗式目」である。が、この事は遂に果されなかつた。また心兄自身としては、「上人論」と「上人傳」を日本文で書き、教學研究の後には、獨逸文で「上人と上人の教義」とを彼邦の學界へ提供して見たいといふ希望であつたが、せめてその中の一つだけでも成熟させたかつたと、今更ながら残り惜しさに堪へない。

次に、心兄が「日蓮上人論」の『價值』をいふと、まづ『本化上行の自覺』

を第一に採つた處、『日蓮上人と日本國』において現世的國家主義を否定した處は、ともに世間の學者の見地としては、古今に稀れな銳利正醇なる見識である。それは兩方とも足りない處はある。併し、今から十年前なることを知らねばならぬ。あの頃は、宗門の坊さんでさへも、本化上行説を迷信とし、寧ろ、その説あるを迷惑として、切りに鎌倉時代の人間としての日蓮上人のみを謂うて居たものだ。まして世間に至つては上行自覺などは舊思想、蒙昧思想として居た。恩師が深く之を唱道せられるのを、悉く怪しむで居た。然るに心兄は直ちにそれに傾倒し、これあるが爲めに、聖祖は實に偉大なるものだと喝破した。また國家に就いても俗想の國家と眞理の國家とを別けて居る。この二つは、確かに『上人論』としての中心を衝いたものである。是れ彼れの味解的直覺が生むだ眞に價値ある議論である。

終りに、その影響をいふと、心兄がさかんに上行の自覺を説き、觀心修證、感孚

渴仰の重むすべきを云うた時には、佛教界は純理性派の「新佛教」と内觀流の「精神界」とが、思想的代表であつた。然るに心兄が彼の論を唱へてから後、一年か一年半の間に、是れまで嘲笑して居た、宗教的自覺は、早くも貴ぶべきものとなつて、宮崎氏の『佛陀メシヤ』だの、綱島氏の『見神』、近角氏の『見佛』、「精神界」の『親鸞彌陀本迹論』などが盛んになり、宗教的偉人の傳記が諸方から出版せられて、一時を賑はした。各地に日蓮上人研究會は起り、遂に今の天晴會のやうなものまで出来る様な時勢になつたので、今でも彼れの書を見て、日蓮上人に來る青年も往々ある。況して表面に現はれざる感化影響は、蓋しちよつと計られまい。

*

*

*

*

*

*

*

性格の人 高山樗牛

姊崎正治

樗牛曾て日蓮上人を評して曰く、『彼れの追懷は力也、信念也』と。『強大なる個人の意力の現はるる所、其處には必ず永遠の生命あり』、猛烈なる意志の力によりて、上は多寶塔中の釋尊と感應交孚し、下は末法濁亂の爲に攝折の大音を放らたる日蓮に對して、樗牛が強大なる意志の吹き込みを感得したるは抑々何の爲ぞ。

樗牛の一生は變化の一生、彼れの思想は休みなき活動なりき。明治二十四年、彼れが仙臺に文學會を起して『永遠無窮なる世界の中に其の靈想を發揮する文學』を以て、人生に暗夜の燈明を與へんと擬したる時より、三十五年、日蓮の『我れは上行也』の自覺に對して滿幅の歸敬を捧げ、『預言は天地人生の上に有する至上の力』なるを悟らんとして、忽然人の世を辭せしまで、前後十一年餘。此の間彼れ

は或は講堂の人となり、或は文筆の士となり、或は道德の理想を研究し、或は思ひを美術の鑑賞に潜め、又或時は日本主義に依りて國家理想の道德を宣行するに身を委ね、又忽にして世の毀譽を顧みず、病體の苦を物ともせず、個人の自由尊嚴を主張し、美的生活を色讀せんとしたり。此を以て人は樗牛を稱して變化の人といひ、彼れの思想を以て極端より極端に移りたりとなす。さなり、彼れ自らも此の變化を回顧して感に堪へざりし者の如く、或は自ら稱して敗亡の身といひ、或は『少年時の慰藉を再びバイロンに得んとは』と嗟嘆したり。世の伶俐なる論者よ、彼れの變轉の故を以て妄に彼れを罪し、彼れを貶する勿れ。此の變轉を自覺して其の過渡の煩ひ、其の回顧の悲みを嘗め、而して其の煩ひをも辭せず、悲みにも屈せず、斷々乎として行かんと欲する所に行き、言はんと欲する所を言ひて少しも憚らず、少しも怖れざりしこと彼れの如き者、世に果して幾人ありや。

世人は只思想の發表、境遇出處の變化多かりしの故を以て、其人を指して直に

節操に乏しく、性格なき人といふか。自らにして自らの性格を自覺せざる人は、又他人の性格の何たるを了解し、同情する能はざるべし。二十世紀文明の子、多く自ら覺らずして世と共に浮沈す。彼等は自身の性格を見ず、此の故に人の性格に對する同情、見解極めて狹隘なり。多情多恨といへば、意志なく戰鬥力なき懦弱の『鷺見柳之助』の如きに過ぎず。鯁骨健意といへば、剛愎無情『星亨』の外を知らず。此の如き狹隘なる同情見解の人に向て、ゲーテの如き多情多恨、日蓮の如き鯁骨健意を説くも、恐らくは猫に小判に過ぎざらんのみ。

哀むべき樗牛は、此の如き世人より、變節の人、極端の才と評せられたり。されど世の褒貶は吾等の關する所にあらず。只此の如き淺薄なる見解は、實に一點同情の缺乏より來り、而して其の結果として、世人の多くが此の一高山樗牛の性格の中に、又彼れが一生の意志あり力ある健闘の中に、吾等が如何なる『力』を得、如何なる『信念』を發掘し得るかを看過するを悲むなり。一日蓮の追懷によりて、

此の如き力と信念とを得たる彼れ自身の性格は、即ち人と人、精神相呼吸し得る力と信念との源泉を深く汲みたる者ならずや。斯く精神の源泉を汲み得る人の精神は、又其れ自らにして一つの源泉ならずや。生命の水は此の泉より湧かずや。然らば則ち我等も亦彼れの追懷によりて、彼れの眞摯直往の性格と相感通して、同様の力と信とを彼れの源泉より汲むを得ずや。

思想は、人の精神が外物と交渉したる結果の發表なり。されば外物に常住の相なく、世相境遇に變轉の數免れ難き以上は、何れの人か其の思想に變轉なからん。只思想は變化するも、其の變化の根柢に横はりて憧憬する所、要求する所の牢乎として抜くべからざる者ありてこそ、其の思想の變轉も意義ありといふべく、其人は即ち性格の人といふべきなり。蓋し人の性格は根本に於ては、或哲學者の言へりしが如く不動ならん。されど多くの人は、此の根本性格の要求を固持せざるなり。根柢の要求と外界の境遇とが相衝突する場合には、自ら外物に降りて終に自

ら守る所を失ふなり。性格の人は然らず。根柢の意志は何れの時にも、如何なる事情の下にも、決して譲歩せず、降服せず、自ら守り、自ら貫くを知る。樗牛がイブセンをニーチェと相竝べて、其の『意志の詩』『理想の詩』を歎稱して、

彼にありては、凡ての事『萬事』か、然らざれば『皆無』なり。彼れは譲歩を知らず、況や屈辱をや。彼れは是の本來の意志を貫徹し、實現する所に人生の極致ありとなし、隨て人は生れながらにして戰死すべき運命を擔へるものと爲せり。

といひしもの、正に是れなり。

樗牛の性格は其の短き一生の中に、『萬事か、否らざれば皆無』を能く實行したり。彼れが文學によりて人生を觀んとしたる時には、文學は彼れの生命にして、バイロンは彼れの偶像、近松は彼れの師表なりき。彼れの文學は、文字紙面の文學に非ずして、血と涙との文學なりき。彼れが後年、日蓮上人の文章中に色讀の文字を得て之を喜びしは、即ち彼れが少年時よりの渴仰を代表せり。文學に依て人生を觀じ、理想と現實との衝突に悚然として心動くに及では、彼れは人生の問題、

複雑なる社會生存の倫理に着目し、彼れは此の人生の神祕を明かにせんと期し、猛然として倫理の攻究に入り、道德の理想を求め、終に斷然國家主義の行者を以て自ら任じ、日本主義と生死を共にするの概ありき。されど國家主義なる者が、如何にしても永遠の理想を現實にするには、餘りに偏局なるを看破するや、彼れは廓然として悟りし者の如く、徹履の如くに日本主義を捨てて、尊嚴犯すべからざる個人の意志、偉人の性格に於て、自己の理想、性格の實現を見んと欲し、『人の精神は無盡藏也』と叫び、此の精神の自覺によりて萬世に呼吸し、三世を永遠の『今』に收め盡したる大精神を求めんとし、ホイットマンよりニーチェに入り、ニーチェよりして終に日蓮を得、此の人によりて永遠の光明に接し、永遠と呼吸相通するを感得するに至れり。此の總ての時に於て、彼れは忠實に『萬事か、否らざれば皆無』の格言を色讀したり。而して是等變轉の際に於ける彼れの行動は、滅せんとしても滅すべからざる要求、人生神祕の獲得にありしなり。

固より彼れ自らも、此の『人生の神祕』の何たるを知らざりき。知らざりしが故に斯く煩悶し、斯の如く健闘したりしなり。只何物とも知れず、何處よりとも定かならざるながらに、人生の奥には總て吾等の望み、恨み、喜び、悲みの源泉となり、此の有爲轉變の人の世に、此の電光石火の人心の中に、其の永遠の光を現はし、寂光の理想を實にする者あるをあこがれしなり。此れを神祕と稱すべきか、理想と名けんか、將た又幸福と云はんか、永遠の生と云はんか、彼れ自らも知らず、又斷せざりき。且つ此の理想と人世現實の束縛との衝突、隔離は、如何にして融和し得べきや、是れ彼れの煩ひ、惱みしものにして、又彼れの生命、即ち彼れの根本性格なりしなり。

彼れの思想は變轉したり。彼れが此の永遠の理想を現世に出現せしめんとする方法は、幾度びか異方面より着手せられぬ。されど他の人よりも多くの變轉を經たる彼れの精神は、其の根柢に於ては一貫して、此の永遠を把まんとの要求努

力によりて活きたり。思想内外の詳細に至りては、他日の解説を俟つも、茲に試みに、彼れの精神が幾多變遷の中に、一貫の要求を有せしを觀察せん。

彼れの思想上の初戀は文學にありき。最も森嚴なる意義に於て、人生の奥底を發揮して之を人の肺腑に置く底の文學にありき。二十四年、彼れが文學會を仙臺に組織するや、其の雜誌の初號に自家の好尙を公にせり。

日本文學の要する所は、輕妙なるにあらずして、寧ろ森嚴なるにあり。洒落なるにあらずして、寧ろ眞摯なるにあり。(元祿小説の流行)

といひ、又或は『文學と人生』とを論じて曰く、

(人生の)高尚なる理想とは、他なし、心塵寰を脱して自然に同化するにあり。

文學は……此の紛々たる浮世より吾人を拔て直に自然と同化せしむる者、……眞理と共に其善を理解し、其善と共に其美に感應するの能力を吾人に與ふる者。

徳義……愛情……愛國友誼の情……美麗なる風景とは、何物ぞや。若し詩にして此の永遠無窮なる世界より其の靈想を發揮するなかりせば、此等は又言ふに足らざる者ならんのみ。

此に於て、彼れが理想の詩人は、『自然の微妙を看破し』形體以外に蘊蓄する徴

妙は汪洋として、其の情琴を鼓し……感情横溢して意氣八荒に充塞する人『靈想を命とする人』なりき。

此の理想は彼れをして、英文學と英文聖書との熱心なる研究者たらしめ、『文學者の信仰』の力の人生に重大の意義あるを主張せしめ、又沙翁がハムレットの『存らへんか、存らへざらんか』の獨白の諳誦者たらしめたり。彼れは此の時、悲哀の快感を説明し、大膽にも人生悲壯の調は即ち彼岸の聲にして、『其の耳に響くや恰も我が故郷の音の如く、其の心に感ずるや恰も我が靈魂の呬きの如く、……猶ほ永別の友兩々手を握て宿情を媚語するが如き思ひある』を論じたり。而してこは文字の上の論議にあらずして、實に二十歳なる一青年の生命、内心の聲なりしなり。

文學に依りて人生の祕奥を探らんと決意して勇進したる樗牛は、此の目的の爲に日本の沙翁と呼ぶる近松巢林子の研究に入りぬ。彼れは、此の研究に入りてより、近松と共に、又近松作中の人物と共に人生の情義に泣き、人生の運命を觀

じ、この涙の中に何となしに大なる光明の理想が人生の根柢に潜めるを見、人と人との精神の交感同情は、此の大なる精神の中の發動なるを悟りたり。彼れは之を稱して理想界と名け、人間の理想にあこがれて動く根本意志を人間の原的性格といひ、又自然の感情と名け、人間の原本要求は此の原的性格の自由なる活動にあり、文學は即ち此の活動の鼓吹者なりと斷じぬ。曰く、

原的性格は、近松人物の最大なる活動力なり。一の意思が一の動作となるまでには、其の間に自由なる福力の争ひありと雖も、其の原性は常に其の最後の勝利者也。故に其の結果よりして之を見る時は、猶ほ原性の中に先天的必然力ありて人間の行爲を支配するが如し。然らば則ち、何物か此の原性格をなす。他なし、自然感情是れ也。……感情の作用は本能的なり、直覺的なり。理以て之を折ぐべからず、辯以て之を衽ぐべからず。其の來るや電光の如く、其の去るや石火の如く……感奮激揚の際に在りては、恍惚として醉へるが如く、而かも一種抵抗すべからざる壓抑の氣ありて、麋鹿の溪水に向ふが如く、人をして知らず識らず其の指導に従はしむ。人誰か其の性の赴く所に從て之を喜ばざる、之を喜で誰か之を欲せざる、欲して得ざる時は誰か之を悲まざる、得て而して他に奪はる、誰か之を恨まざる。此の如きは、よし宇宙の眞理に徹底して世界人生を達觀するの大哲學者も、眼に一丁

空なき田夫野人も、孰れか此れに同感を表せざる者なげん。……

想ふに世に、社會生存の必要に迫られ、内心涙を欲で燃ゆるが如き感情を空寒し、外冷然恬愔の風を装ふもの果して幾何ぞや。半夜神澄み氣靜かなる時、熟く思ひ廻らせば誰か浮世のまゝならぬを悲まざる者あらんや。人の詩歌を好み小説を嗜む所以のものは、所詮このまゝならぬ現實世界より文學の理想界に入り、其の中の人物に向て同情を表することによりて、自己が零時の救ひを得んことを望むなり。……感情は最初の決定者にして、又最後の勝利者なり。……あらゆる大なる動作は歸する所、感情の中に發動せざるなし。

感情に支配せらるるの故を以て、近松の人物を一概に卑賤なりと考ふるは甚だ誤れり。……道德の高卑、……知識の深淺(此を以て人物の高卑を漫に定むるは非なり)。……人は大なる小兒に外ならず。小兒の時機を經過せりと雖も、小兒の本性は終生之を失はず。吾人の一生の動作は要するに、小兒の幼稚なる感情の上にて起因し、隨時特殊の潤飾を受けたる者のみ。若し吾人をして少しも社會の慣習制裁を顧みることなく、生存上の利害得失に就て絶て思料する處なく、天下地上毫毛の羈束を離れて、其の爲さんと欲する所をなさしめば、吾人は……擧つて赤裸々たる小兒となり畢らん。……『我は賢なるが故におさんに泣かず』といふ者あらば、是れ人間以上にあらざれば人間以下の動物なり。……おさんの渾身を悲み小春の情義に泣くものは、所詮自己を悲み自己に泣くものなり。讀過の際、恍惚として自他を辨ぜず心揚がり情切にして、身は宛然として詩中の人となり了り、而も巻を閉ちて後ち卑と

呼び、賤と稱するもの……是れ即ち自己を卑うし、自己を賤むものに非ずして何ぞや。

(近松研究。六章、近松作中の人物性格)

(398)

讀者よ、此の文を以て單に樗牛が、研究の結果に出でし近松に關する意見と思ふ勿れ。是れ即ち彼れ自らが自己の所謂原的性格に關する自覺、近松によりて誘はれ覺まされたる彼れの自覺を表白したる者なり。又原的性格に關する此の解釋の當否を問ふ勿れ。此の見解の是非如何に係らず、是の如きは即ち彼れ的人格、彼れの生命を成せる性格なりしなり。

これより以後大學在學時代に、彼れが心を潜めし問題は、即ち此の原的性格を如何に現世に實現すべきかにありき。或は之を稱して倫理の研究といひ得ん。されど彼れにとりては、此の研究は學識の爲の研究に非ずして、彼れの根本要求の滿足の爲なりき。此の故に彼れは一方にて、道德なる者の中に原的要求を實現するの法を求むると共に、他方にては、又超世の理想をして直に之を形相に表はす

『美』の探求に熱中したり。又此の善と美とが人類の歴史に現はれたる跡を見んが爲には、文明史にも指を染め、又是等研究の終局の解釋として、形而上學の必要をも唱へたり。

此の研究が彼れに教ふる所多かりしは確かなり。されど彼れは研究に逐はれ、學識に束縛せられざりき。彼れは『厭世主義と人生の價値』(二十八年)に於て、先に主張せし厭世論を以て、人が自己自らの力を知らざるより出づる誤想なりと斷じ、又『道德の理想』(二十八年)に於ては、是等の幸福満足は此の無涯なる理想に近づく努力、戮力に存するを信じたり。學說としては、或は變化と稱し得ん、されど此の變化は、一に彼れの『原的性格の要求』に出でしなり。故に彼れは厭世を排しつゝかく論じて曰へり、

吁、理想と現實と、是れ洵に悲むべき而も亦喜ぶべき對比なり。心に理想を持して而して身は現實に蹉跎す、是れ悲むべし。而かも身は現實に踴躍して、心は理想に徜徉す、是れ實に喜ぶべきにあらずや。……理想は吾人に命と望とを與へて吾人をして不滅ならしむ。

而して特に注目すべきは、彼れが『道德の理想』を論じ、極めて學究的に幸福利
 害の打算に基きて、倫理を研究しつゝも猶、此の如き道德が盡力(Exhaustion)即ち後に
 所謂る戮力なき終局圓滿の状態に至れば、既に道德なりや否やを疑問となせる
 事なり。道德的戮力と本能的優遊との矛盾といふことは、即ち現世的利害、人間
 的義理と根本の要求、超世理想との柄鑿といふに同じ。彼れは、一時は此の問題を
 疑問とせしも、其の考察は已まざりき。此の矛盾を、一時は國家主義によりて解
 釋せんと擬せし樗牛が、終に個人の方に人生究竟の意義を求め、本能の満足、原
 的性格の自由活動、即ち理想隨順の美的生活に最後の解決を得、此の解決を階段
 として一念三千の法門に入らんとせしは、決して偶然の事にあらず。所謂る原的
 性格は最初の決定者にして、又最後の勝利者なり。樗牛は或時は戀に泣きたり、
 されど其の實彼れの戀は、人界の戀にはあらざりき。彼れは一時は國家至上主義
 を唱へたり、されど彼れが求むる真正の國家は、地に建てられたる國家には非ざ

りき。彼れの原的性格、根本的要求は此の如く一貫して渝らず。彼れは此の要求を以て、『萬事』とするに非ざれば『皆無』なり、人生も無意義なりと信じ、此の信念に依りて活きたりき。論じて此に至て尙ほ一言、彼れが日本主義の爲に論せざるべからざる者あり。人多くは樗牛が國家主義と個人主義との間に表裏反復せしを云ふ。されど此の『表裏反復』は、彼れが根本性格の一發動に過ぎず。彼れの日本主義は、決して其の唱道者の或者の如くに、日本單位の國粹保存主義には非ず。

彼れは人性自然の要求を、此の主義によりて現世の利害と調和せんと試みしなり。故に彼れの日本主義に於ては、原的性格即ち理想は主なり、國家的道徳は客なり。

もし理によりて究竟の見地を示せば、人生の目的は完全なる幸福に存し、完全なる幸福は人性（人の原的性格、根本的要求、本能的理想）の圓滿なる發達に外ならず。其の家族を作り、社會を組織し、更に之を統率する國家を結成す。唯是れ目的地に到達するの方便に過ぎざるなり。……故に人生の理想境の國家に對するの關係や、包有的にして超絶的にあらざるなり。……吾人は常に吾人が國家を結成したる當初の目的に照鑑して、人生究竟の意義を遺却せざらむことを冀望せざるを得ず。國民的道

徳は、常に是の如き樞要に關して一段寛裕なる見地を存せん事を要す。(日本主義と哲學、三十年六月)

樗牛の日本主義に關しては、尙ほ他に評論すべき者ありと雖も、此の一段の覺悟は、彼れの原的性格が常に如何に活動して、國家的倫理說の中にも決して其の要求を枉げざりしかを示して餘りあらずや。彼れは一時、國家主義によりて自己の理想を實現せんと試みたり。彼れは其の間と雖も猶ほその根本的性格を失はざりき。彼れが戀に泣きし涙は、即ち國家主義の蒸氣を作り、彼れが文學に灑ぎし熱誠は、即ち日本主義の熱火として發表せられしまでなり。此を以て樗牛が日本主義の最高點に達したる頃、(三十一年五月)彼れは平民詩人ホイットマンの爲に萬丈の光焰を吐き、兼ねて自己の胸臆を吐露したり。

げに世を擧て人は覆面の中に呼吸せり。あはれ彼等如何なれば其の本來の面目を祕密として掩ひ隠さざるべからざるか、將た掩ひ隠さんとするか ……自然の要求を蔑視して、人生の自由を弄ぶは、果して爾く貴ぶべき事なるか。 ……

ワルト・ホイットマンこそ、是の偽りの世と偽りの人と、是の似而非文明とに反抗して、社會人生

の眞面目を發揮したる北米現代の詩人なれ。……彼れの訴ふる所は、汗と血と涙と誠とを以て實在の人生を釋き得たる人にあり。

此の言を讀み來りて、讀者は如何の感をなすや。彼れの原的性格の熱火の如何に旺盛なりしか、彼の國家主義は如何なる源泉に養はれしか。請ふ、熟慮して彼れの文を三讀せよ。

樗牛が日本主義の表皮を棄てて、赤裸々に彼れの個人的理想を唱道し、世をも憚らず人をも人と思はざりし態度は、最も明かに彼れの原的性格を示せり。今之を説くを要せじ。性格の人としての彼れを見んが爲に、彼れの晩年を繚説するは、太陽の光の強きを説くに均しければなり。

されど茲に尙ほ一つ、その晩年につきて論すべき一事あり。彼れが日蓮欽仰につきては、或は疾の爲に宗教に入り日蓮に狂したりなどと評するもありと聞く。是れ全く彼れの性格を知らず、徒に區々の私心を挾で、眞率直往の人物景慕を曲

解する者なり。樗牛の人物は、先天的に日蓮と契合する者あり。直往敢行人に下らず、人に譲らず、信せんと欲する所を信じ、言はんと欲する所を言ふ彼れは關東氣性の粹なる日蓮と、自然に神相通せしなり。故に彼れが一度び日蓮の『佛滅後二千二百餘年云々』の文を瞥見するや、此の偶然の一瞥は、已に彼れの心中に日蓮敬慕の種を開發したり。常に文字以上の大文字、口耳以外の大精神にあこがれし彼れは、上人の文に依りて直に其の意氣を呼吸せしなり。後に上人の文を評して、

上人の文は文に非ずして精神也。人は文字を見ずして血涙の痕を見、章句を讀まずして獅子吼の響を聞く。……上人の文章は、肝膽を活きながら白紙の上に塗りつけたる者なり。……げに文は人なりけり。
(吾が好む文章)

といひしもの、即ち是れなり。此の故に彼れは公に日蓮狂として世に出づる前、三十三年五月、即ち留學の内命を受けし當時已に宗教家の覺悟を論じて、『昔者日

蓮の教を唱ふるや、曰く、吾れは是れ釋尊の行者也と、如何に偉大なる宣言なるよ』
 とて其の欽仰の意を表せり。彼れの日蓮崇拜は、所謂る三世淪らざる友の先天の
 冥契なり。彼れは日蓮の文に於て、彼れ自身の精神の聲を聞き、日蓮の上行自覺
 に對して、自家原的性格の化身を見しなり。此を以て彼れが三十四年秋、田中智
 學氏の「宗門の維新」に接するや、其の文によりて直に著者の心膽に同化し、直に
 其の門を叩て肝膽を其の前に披き、此れよりして人の狂と呼ぶをも顧みず、明か
 に日蓮崇拜の心底を世に公にしたり。彼れが當時「宗門の維新」を評せし言に、

嗚呼世に閑文字多し、言はざるべからずして初めて言ふもの、果して幾何ぞ。田中氏の是書の如き
 は、眞に言はざるを得ずして言へる者か。其の説の當否如何は姑く措き、世人は須らく憂世者の最も
 眞摯なる憤慨録として、一讀の勞を吝むべきに非ざる也。

と、然り樗牛自らの日蓮崇拜も、實に言はざるべからずして言ひし也。彼れの日
 蓮狂(若し狂といふべくんば)は、狂せざらんと欲するも能はざりし也。蓋し彼れ

の日蓮崇拜は彼れが性格の最も明白なる最も熱烈なる表白なりき。精神交感の先天冥契に出づる偉人崇拜が、いかでか一疾病の爲に生まれんや。樗牛の性格を解せざる人は、又彼れの日蓮狂を解するを得ざるべし。

性格の人は、性格の要求にあらざれば動かさず、生死猶ほ枉ぐ能はざる根本要求の本能が、如何にして一疾病、一失望の爲に枉げられんや。彼れは一生を通じて『己れに忠なる』を以て人生の大事、人間の本體と信じたり。己れに忠にして、思はんと欲する所を思ひ、行はんと欲する所を行ふ、是れ彼れが原的性格なりき。

三十一年一月、彼れが日本主義に熱中せる當時、『己れに忠なれ』として記せし所を見よ。

眞正の著作は、自己の發現なり。己れ中心是れを感せずして、而して感じたるが如く裝ふは、是れ即ち偽善の心なり。夫れ人情虚偽に動かさず、偽善者の心を以て安そ人を動かさし、世を化する事を得べき。

又彼れが國家主義より一轉して、個人本能の尊嚴を喝破するに至らんとせし時、

ニーチエを始め、威武も屈せず、利害得失生死一切に迷はざる文人、即ち文明批評家の俊傑を稱揚したる時の言を聞け。

詩の第一義は、自己自ら自己に忠なるにあるのみ。我れは我れにして他の何物にもあらず。是か以て欲せざるべからざる者を欲す、已むを得ざる也。詩即ち是れのみ。或は彼れを選び或は此れを擇ぶ、赴く所は虚偽あるのみ。

文明批評家は、己れの信する所に非ざれば動かす、己れの信する所を貫徹せんが爲めには、即ち一世を敵として戦ふを辭せざるの氣魄あり。利害の打算は彼れの知らざる所、彼れは推歩せずして、跳躍す。而して意志の満足は、實に其の至高の報酬なり。是の覺悟あるもの、初めて文明批評家たり得べき也。

『己れに忠なれ』、嗚呼是れ彼れの一生を貫く大警語なりき。天は崩れ地は壞るるとも、彼れの『我れ』は滅せず。彼れは自分自らの存在が『天日の懸かれるよりも明かに、大日本帝國の存在よりも確實に』して、此の『我れ』は即ち『萬事』にして、此の一事を讓歩するは即ち生命萬年を棄つるものなるを信じて、其の一生を貫きぬ。而して其の短命なる一生の間に嘗めたる幾多の變轉曲折は、一に此の『我れ』

の欲する所に從て動きたる結果に外ならざるなり。『我れ』と意氣相通じ得る者には、己れを捧げて之に歸敬したり。彼れが近松の人生觀に於て、『愛』の何たるを説けるは、即ち彼れの精神が他の精神と感應し融合したる活ける經驗にして、其の言は幼稚なる表明の中に、能く彼れの精神を告白したるものなり。其言に云く、

愛は既に吾人と共に生まる。自我に對しては、三世離るべからざるの友。人生に對しては、幸福の最大なる源。吾人の宿命は天にあらず地にあらず、只此の自己の胸奥に潜在せる一點愛情の靈に存す。

故に吾人は外界に對して、此の内面的必至の運命を現化したるに非ざれば已まざる也。

愛情といひ、運命の現化といひ、又先天の契合といひ、總て彼れ自らの活ける經驗を経たる感應道交の云爲に外ならず。蓋し人の同情は、常に其の性格を同じうする人に對して發す。是れ即ち先天の契合、宿世の因縁なり。愛も崇拜も皆性格、根本精神の共通より出づ。樗牛は日蓮と神相通じたるが故に、之を崇拜したるなり。吾に日蓮のみならず、近松に對してもニーチェに對しても、皆然りしなり。

彼れ曾て、近松の心中を評して曰く、

須彌梅檀の山の月に色卽是空を觀ぞし三界の教主を想望するの心は、卽ち相の山の辻歌に花一時の
 眺めを歌ふの心なり。櫻井驛の訣別に忠孝の義烈を感じたるの涙は、卽ち蜷川の夕風にまゝならぬ戀
 路を啣つの涙なり。

(近松研究、五章)

嗚呼彼れの見し近松は、卽ち彼れ自身に外なかりき。此の心近松に對して發すれ
 ば、其の作中の人物と共に泣き、此の心ニーチエに向て動けば、則ち當世の僞學を
 痛罵し、人格あり意氣ある天才の爲に獅子勇猛の公憤を發露し、又此の心日蓮の
 精神と同化して動けば、神は本化上行の中に入り多寶塔中の釋尊に面接し、人生
 の中に妙法の寂光を觀得せり。彼れがニーチエを評して云ひし如く、『蓋し彼れは
 哲學者に非ずして詩人也。而して彼れの歌へるものは山に非ず、河に非ず、(花鳥
 風月に非ず)、恐らくは彼れ自らも解する能はざりし天地人生の幽微也、(神祕也)』
 此の天地人生の神祕を探り、其の幽微に入るの心は、彼れをして一度は、人生

まゝならぬ戀に泣かしためたり。一度は道德の理想、人生の歸結の渺茫無涯たるに驚かしため、而して國民國家の自覺に依りて、此の無涯の人生に橋梁を架せんと試みしめたり。かくて此の心は即ち最終に彼れをして性格の中心、人心の奥に、火滅すべからず、劍切るべからざる、靈の永久なる者あるを明白に悟らしめ、此の大覺悟は即ち本能の主張となり、此の主張は即ち日蓮の靈の中に没我歸敬を現はさしめたり。

嗚呼、性格の人高山樗牛。彼れは煩悶と健闘と、悲みと喜びとの一生を自己に忠實に、自己の原的性格、自己の本能人格の爲に殉じたり。人にして苟も世の利害に動せず、人心の變轉に驚かず、自己に忠に、自己の性格に對する自覺を有せば、其人にとりては此の樗牛の一生は、一樗牛の不幸なる短命のみにあらし。『性格の人』は『一時に生活せずして萬世に呼吸』す。彼れの『生命には過去無く未來なく、唯永遠の現在あるのみ』なればなり。樗牛が日蓮上人に對して、『彼れの

追懐は力也、信念也』といひし其の言は、彼れの肉體と共に消滅すべきものなる
か。

*

*

*

*

*

*

*

信仰の人 高山樗牛

凡そ人を信ずるは、自ら恃むより生ず。信とは、平たくいへば意氣の投合なり、肝膽相照らすなり、自己の精神人格を捧げて信ずるに足るべき、自己の生命を投ずるもその人の爲には悔ゆることなき精神人格に歸依信賴するなり。愛といふもこの信、友情、忠孝、皆この信にして、宗教の信仰といふも亦この信の外に出でず。宗教には種々の信あり。或は天然の中に神格を認めて之を信ずるもあり、唯一正義の神、慈悲の神、若くは又救世の師主、濟度の覺者を信ずるもあり。されどいづれもそれ自らをその人に投じ、自らの精神とその神格の精神とを結合するより生ずる信ならざるはなし。最も普通にいへば、宗教の信は宇宙に普満し、總ての精神の生存、活動の根柢たる大精神の中に自己を没するにありといひ得ん。

されど吾等が最も深く最も熱烈に信じ得る神格は、最も明かに吾等の人格、精

神と交通し得る人格的又精神的の神ならざるべからず。吾等の信は、即ち人格、精神の融合なればなり。是の故に佛教は佛陀の人格に於て、眞如妙法の活きたる人格的發現を崇拜し、キリスト教は教主キリストの人格に於て、永遠なる神の子の人界化現を信す。熱烈眞信の人は自ら恃むが故に人を信じ、深遠なる靈界の氣を呼吸し、普遍なる神靈の光に照らされて、身は人ながらにして靈は神靈と融合したる人物中に、神人を認めて之を崇拜す。宗教的信仰に入りたる人にとりては、佛陀は單に丈六の肉體に生を享け、二千年の昔印度に生息し、八十年の一生に弟子沙門を感化せし歴史的人間のみにあらず。佛陀は眞理光明の悟得者、解脱妙用の實現者にして、眞理その物の肉體的化現、解脱の實力の人格的發表なり。即ち法身の應化、妙化の實力なり。キリスト教にありても亦然り。實に彼れを教主として信仰する人にとりては、彼れは單に大工の子にあらず、郷黨に容れられざる狂熱者、國民に嫉惡せられてその刃に死せし一歴史的人物にあらず。神を父として

その愛を體現したる『神の子』なり。眞理と光明とを自己の人格に依りて、光りに背ける人界の事實と化せしめたる永遠のロゴスなり、神人なり。

此を以て宗教の信仰に鎔冶せられたる精神は、人界の愛の中に久遠の光を見、信賴の同情、同化によりて永久の生命に入る。何となれば自己の人格生命を捧げて同情し歸敬すべき神人の人格に融合投歸するの人は、即ち己に佛陀なりキリストなり、神人の人格を自己の中に同化體得したる者なり。かれの生命は神人のそれと合一せり。かれの人格は此に於て、偶然にこの世に出でて消え逝く人間にあらずして、神人が體現したるその眞理の光りに照らされ、その救ひの力に攝せられたるものなり。かれの生命は眞理と共に不滅にして、かれの過去は光りと共に永遠に、かれの未來は亦救ひの妙用と共に不朽なり。かれが現在の一生は、この永遠の過去と永遠の未來とをこの『今』に發見したるものなり。その人は神と呼吸相接し、佛と血脈相通せり。

此の如きの信念は眞に、人生の力なり光明也。されば絶対に神人に歸依するま
では至らずとも、苟も自信に基きて、自己の尊崇すべき偉人を發見したる人は、
その限りに於て偉人と靈相通じ、それに依りて永遠の光りに接觸せしなり。自ら
を捧げて人に歸依せん爲には、自らの自信自覺が明白鞏固にして、この自覺と相
投合し得る偉大なる人格を發見して之と合一するを要す。自ら信せざる者は、又
人を信ずるの勇氣と誠實とあるなし。ニーチェがシヨペンハウエルを評して、『シヨペ
ンハウエルの書を繙きてその第一頁を読みし時より、此の作は全篇全く信服すべ
き者なることを感じ、その書は、かの人が特に己れの爲に書き残し置きくれしも
のの如くに、よく理會し同感しぬ』といひしも、畢竟はニーチェが自己の自覺人格
をシヨペンハウエルの中に發見し得ての依信ならずや。ポーロが一旦天上の光り
に接して、直にキリストの靈に接したるを得し、滿幅の誠意と歡喜とを以てキ
リストの使徒となりしも、亦畢竟自ら覺り自ら信ずるところあり、その自信自覺

に於て、キリストの人格に身心の誠を投じたるなり。

樗牛は自信の人なりき。人はかれを稱して我執の人といひ、彼れ自らも稱してイゴイストと傲しぬ。されどその我執、そのイゴイズムは、一に自己人格の信賴と自信貫徹の熱誠とより出でしなり。かれはまた性格の人なりき、此の故に自らを信じたりき。自らを信じたるが故に、又信賴して己れを捧ぐるに足ると信ずる人に對しては、滿幅の尊敬と絶對の同情とを注ぐを敢てしたり。かれは近松の戯曲の中に自己心情の聲を聞きぬ。是に於て近松に歸敬したり。ホイットマンの赤裸々なる自信貫徹の勇氣眞摯に於て、自己性格の需要が充たさるるを見たるが故に、この人と同感し、ニーチエの人物に於て自己の人物を見たるが故に、この人と共に本能要求の生活に優遊せんとしたり。『聖人の心は明鏡の如し。此の一つの者明かなれば、則ち物として之に映せざるなく、心として之に感應せざるなし』(王陽明)。己れに誠あり、故に能く人の誠に服し。己れに信あり、故に喜むで人

の信を信ず。性格の人、自信の人なる樗牛が、又熱涙ある近松、眞摯なるホイットマン、熱烈なるニーチヒに同情歸敬し得たる者、決して偶然にあらざるなり。

されど樗牛が眞に自己靈性の奥に入り、永遠の覺醒に依りて永遠に歸敬すべき大人格は、過去と未來とを『今』の一瞬に接し、久遠實成の妙法を自己の人格に實現し、色讀したる宗教的大信者、大行者の中に發見せられたり。即ち樗牛が曾て偶然にも『偉大なる宣言なるよ』と評せし日蓮、『我れは是れ釋尊の行者』なりと信じ又行せし日蓮その人は、即ちこの妙法の色讀者、宗教的大行者なりき。此の時(三十三年五月)樗牛は未だ多く日蓮に關して知る所なかりき。この一句の讚歎が如何にかれ自身の人格と日蓮とを結び附くる先天の契合、宿世の因縁、久遠の感應、本有の靈光に出でしかをも明白には自識せざりし也。『我れは是れ釋尊の行者也』との日蓮の一宣言は、彼れが一生の、否、永久の生命たりし法華奉行の大覺悟を表するの宣言なり。日蓮は自らを信じたり。此の故に、法華經を信じ、釋尊を信

じ、信はその命となり行ひとなり、人と法と、自らと佛陀と感應融合し來て、彼れは即ち法華經の色讀者、釋迦佛の使徒、妙法の化現となりぬ。されば、この一宣言は日蓮が信仰の一片ながら、その一端一片は、實にかれの人格を體露したる精神の粹なり。龍を知る者は、其の鱗の一片を執ても猶ほ龍を知る。樗牛が殆ど不識の中に日蓮のこの一言に感服せしは、實にかれが龍を見るに先てその鱗を見しなり、否、この鱗の中に龍とは明かに知らざるながらに、已に龍の映象を見しなり。日蓮が、自己と佛陀との間に久遠の冥契あるを信じて、大覺悟を開發したると同じき感應は、樗牛と日蓮との間に、此の時已に發露し始めしなり。

人は樗牛の我執を惡むが如くに、日蓮の狂熱を誹る。狂熱の容れられざるは、世に自信の人、誠實の人なきを證す。キリストは此の如くにして十字架上に殺され、サデナロラは狂熱の爲めに焚き殺され、日蓮が好まざりし法然も亦此の如くにして遠流の罪に處せられたり。此等の聖賢覺者が世間より狂熱として排せられ

悪、ま、れ、し、は、皆、か、れ、等、が、天、の、使、命、己、れ、の、身、に、在、る、を、信、じ、こ、の、大、覺、悟、大、自、信、を、抱、
 きて、世、と、戰、ひ、こ、の、戰、ひ、に、依、て、天、命、豫、言、を、實、に、せ、ん、と、せ、し、結、果、な、り。キ、リ、ス、ト、に
 して、古、の、豫、言、者、が、此、の、世、に、現、は、る、べ、し、と、定、め、た、る、メ、シ、ア、ス、の、自、覺、を、有、せ、ざ、り、し
 ならんには、彼れは平凡なる一説法者として一生を送りしならん。サチナロラは
 キリストの神の國を此の世に實現するの任己れにありと信じ、法然は彌陀の本願
 を世に宣布するの使命己れが雙肩にかかるを自覺したるが爲に、終に凡俗の世間
 と衝突し戰闘したり。而して日蓮に至りては、佛を信じ、法華經に歸敬したる結
 果、その身にして多怨多嫉の苦鬪を経ずんば聖經の文空しかるべく、世尊の法華
 經も遂には一妄語となるべきを見たるが故に、進で世と戰ひ、人の惡みを買ひ、
 好で自ら死地に就き、喜で世の刀杖瓦石を被りたり。

伊東に死なす、龍の口に斬られず、不思議に存らへし命も此處佐渡が島を、今は最後の地と覺ゆるぞ。
 ……今こそは霜露の日影を待つばかりの命ながら、化城の迷ひ途に去りて靈山の開顯眼前にあり。頭
 は鋸にて引きも切られよ、胸は稜鋒もて貫かれもせよ、足には絆しを打ちて錘捫みにもせよ、この息

の根の通はむ程は、南無妙法蓮華經の聲をばよも絶たじ。……

六難九易の教、三障四魔の説は、素より熟く知れり。唯々末法不祥の世に生まれたる身の、法王の宣旨黙し難く、身命を抛て……折伏の戦に従ふこと、こゝ二十餘年。あはれ法華經の行者が爲すべき程の軍は、日蓮はゞ仕遂げたりと覺ゆるぞ。……居處を逐はること二十餘度、敵人の戕害に臨みしこと三たび、一度は頸の座に据ゑられ、二度は遠流の罪に行はれて、……古賢先聖だに讀み給はざりし妙法の極意をば、今ぞ日蓮こそ讀みたむなれ。勅持品二十行の偈は、日蓮だに此國、此世に生まれ、別して此島に流されずば、世尊一代の大妄語となり果てなむす。……末法付屬の未來記は、まさしく日蓮が生涯に記されたり。刀杖瓦石もて身に流されたる日蓮が血潮は、やがて妙法勝利の願文に染められたり。……(況後録)

こは樗牛が日蓮を知ること深きに從て、益々その人の熱烈なる人格に歸敬したる結果、日蓮の遺文によりてその心事を記したる者なるが、この自信あり意志ある人格と、その結果として躬親ら活きたる法華經の行者とならんと期したる、その絶對の歸依信仰とは、又洵に樗牛を感化し、彼れをして自己の人格を捧げて日蓮に歸依せしめたり。樗牛は自ら信じ自ら恃むが故に人を信せしなり。自ら恃む

が故に、絶對の歸敬を法華經に注ぎ、その體得色讀の行者たらんと期せし日蓮を
 信せしなり。

乃ち知る。樗牛の日蓮景仰は完全なる意氣の投合なり。呼吸相通じ、血脈相應
 ずる意志の融合即ち宗教的信仰なり。彼れが一旦日蓮の文章に接して、その文章
 によりて直にその人格を感得し、『文は人なりけり』といひしは、上人の文が文の
 爲の文にあらずして、直にその肝膽を吐き出し、血涙によりて書せられし文なり
 しに因るは云ふまでもなく、又樗牛自身の人物が『文は人なりけり』の文によりて、
 直にその人を信じ得る根本性格の自信を有せしが爲なり。彼れが三十四年の秋一
 旦、田中智學氏の「宗門の維新」に接して、その文によりてその人を見、而してそ
 の人が絶對の歸依を捧ぐる日蓮と意氣相通するに至りしも、皆實にかれの人格が
 人の眞摯なる人格、熱烈なる意志に同情感應し得る資ありしが爲なり。三十五年
 一月二日の書簡に、彼れが『此頃は日蓮上人の研究に身を委ねて居る。此の英雄の

生活によりて、吾等の弱き命の強くなる様に感じらるる」といひ、同四月の日蓮論に於て、『彼れの追懷は力也、信念也』といひ、それより以後、機會ある毎にこの意を述べ、又それより得たる信念を告白し、信力を發展して死に至りしも、皆彼れ自身と上人との應感孚化に出づ。日蓮を我執狂熱の人といふも可なり、樗牛の日蓮歸依を稱して偏癡早計といはばいへ。此の如き人格根本の感應道交は、決して偶然に出づる能はざるなり。

樗牛の日蓮歸依は、先づ眞摯にして他を恐れず、己れに忠にして自信の力にのみ動ける、上人の人物を崇拜することによりて生まれり。而して始めに彼れが觀たる上人の人格は、即ち彼れ自身の人格にして、二者の交通は精神根柢の先天的冥契に出でし定數なる事は、明かに之を意識せざりし如く、又日蓮が法華經の行者を以て自ら任するに至りし、その信行が如何なる靈性の本源より湧き出でしやには、十分考へ及ばざりき。されど日蓮が、敵人の戕害に臨みしこと三度、終り

に頸の座に据ゑられ、又終に遠流に處せらるるに及びて、茲に上首上行の大覺醒に到達したると同じく、楞牛は實に日蓮のこの覺醒に著目するに及んで、心靈信仰の奥に入り、預言が『天地人生の上に有する至上の力』なるを悟るに至りぬ。この時までの彼れの日蓮歸依を、單に人物崇拜と稱し得べくんば、この覺悟より後の崇拜は實に心靈の獲得、靈性の健孚道交といひ得べし。かれはそのこゝに至りし道行を稱して、教理の研究と云へりと雖も、その所謂る教理は、宗義談理の空論にあらず、又法華經なる文字が耳目の學にあらずして、洵に法華經法その者、靈界の光明その者の生命の研究、即ち法華の妙法とその活きたる體達者たる日蓮との、久遠實成の聯絡を色讀味識したる研究なりき。

此の研究に於ける彼れの大問題は、即ち日蓮が上行出現の預言を信じたるその信仰には、何の根據あり、又如何なる意義を有するやにありき。上行の預言とは簡單なる者なり。法華經（その文は何人が何れの時之を記したりやは、今之を問

ふを要せず)、その法華經には、世尊この經を説き、それを末法に流通せしめんが爲に、地涌の菩薩その上首なる上行にこの經を付屬せること、而して末法の菩薩が人間に現はれて、その使命を果すに當りての覺悟についての訓示、又その人がこの經の爲に世の怨嫉を被り、辛き世間の迫害を受けんことの預言を宣明せり。而して爾後の佛教の師主は、上行出現の國は東方の小國にして、時は末法の始めなるべきを種々に宣説し置きたり。法華經の説者記者、果して數千年の後を洞觀するの明ありしや否や、又諸論師は何の據るところありて、上行出現の時處を定めたりや、吾等は今之を穿鑿する方法を有せず、又その要を認めず。要は此の如き預言、若くは軽く見て豫期希望が佛教の中に存在し、而してそが儼然として法華經の中に記されありし事の事實なるを認むれば足れり。

此の如き預言が必ず實にせらるべきを信じ、又自ら之を實にせん爲には、その經の行者として、好で進で怨嫉迫害を受くる者は、今の世の人の名利を逐ふに巧

なる常識を以て見れば、慥に迷信者愚者の信行なるべし。されど世に此の如き人出で、而してその人が此の預言の色讀者、實現者を以て自ら任じ、その熱情より出でし事業が幾分にもその預言に應じたるの結果を示し、その聖經弘布の運を振起せしとせよ。預言者の根據は措て問はずとするも、その人の信が、その信の力に依りて豫言を實にせしといふその事實は、拒むべからざる現實の事ならずや。且つ又その人が預言を信じ、幾分にも之を實現したる結果、終に自ら自己の人格は、その預言中に現はれたるかの上行其人たるを信するに至れりとせよ。上行とは果してありし人なるか。上行とこの末代の實現者と、如何なる聯絡の存せりや。吾等は姑く之を疑問とし、若くは之を疑ふとも、而も末代の實現者其人の人格は、かの預言の化現ともいふべく、色讀者ともいふべく、その限りに於ては、二者の人格は同一なる事は拒むべからざる事實にあらずや。さればかの預言を實にする人といふに於ては、上行なる人格と日蓮と同一なりといふは決して迷信にも

あらず、空想にもあらず。法華の上行預言のあらゆる點を實行する人としては、日蓮は即ち上行なり。この關係は人格の關係として、資格の繼紹として現前の事實なり。上行が實在の人なりしや否や、上行其人が如何にして日蓮と現はれ得しやといふ疑問に關係せずして、日蓮が上行たるや否や、上行の預言が眞實なりや否や。これ等の疑問は、一に日蓮其人の決心如何、信仰如何にかかはる疑問のみ。その人にして一度びこの決心信仰を懷て、法華に説かれたるまゝの上行の行爲を實行せば、日蓮は即ち上行たり。古の記されたる法華經中の上行の人格は、即ち今の日蓮之を體現し、その信行は日蓮之を色讀せり。

カーライルの云ひし如く、『一旦覺めし思想は復眠入る事なし』。樗牛の斷せし如く、『強大なる個人の意志ある處、その處には永遠の生命あり』。余は預言を記したる人(その人は誰なりしにもせよ)と、之を實現したる人との間には靈性の交通、先天必然の冥契あるを信す。又假令此の如き交通冥契の信仰を除き去ると

も、記されたる事を實現したる人は、即ち記されたる活劇中の人物なりといふに於て、何等の支障あるなし。大なる戯曲家が至難の戯曲的人物を描き、而して此の人物をよく舞臺に演ずるの俳優現はるる時あるべしと預言したりとせよ。而してその後自ら恃む所ありてこの預言に應じ得べし、又應せざるべからずと信じて、その信の力によりてよくその役を演ずる俳優出でたりとせよ。この俳優は即ち作者の預言したる俳優その人なりといふに於て、又この俳優がしかく自ら公言するに於て、何の支障ありや。誰か之に異議を挟む者あらん。若し之に異議を挟む者あらんには、その人は即ちかの俳優よりも巧にその役を演じ、之に依て彼れよりも適切明白に作者の預言に應ずるの人ならざるべからず。自ら之に當るの覺悟と勇氣と技量となくして、漫に他の俳優が作者の預言に當らざるを論ずる者は、無責任の漫罵をなす者に外ならず。假りに預言その者が空想にして、預言に應じたりとの信仰が迷信なりと許すも、その信仰が預言の幾分にても、之を事實に體現

したるその事實あれば、何人もその事實を否定するの權能を有せず。

預言と之に應じ之を實現する人との關係は、此の如く實有にして、何人も之を拒むの權能なしとすれば、而して之を拒む人は、即ち之が實現者としてはやはり自らこの關係の實有を證する外なしとすれば、第二の問題は、この關係は偶然に起り得るや否やに移らざるべからず。

預言者には、假令ひその預言が實現せらるる必然の運命あるを預知洞見するの明はなかりしとするも、その人は自ら預言したる事項が實現せられ、之を實現すべき人物の出でん事を望むの要求、熱情を蓄へしは明かなる事なり。預言なる者は、少くともこの要求の發表なり。何れの地に何時生まれ、如何なる人を父母とし、如何なる面相をもてる人が、その預言に應ずるやを預知するの明はなかりしとするも、その預言者の熱情に感奮健孚し、その預言に明言したる事實だけを實行し色讀する人だにあらんには、預言者の要求は充たされたるなり。預言者の精神、熱情

は、その感應者を得しなり。されば預言の實現なるものは、預言者の精神が預言に應じたる人の精神を感化し、吹き込みたりといふも可なり。二者の精神が神相交り、氣相呼吸したりといふも可なり。人間の高遠なる觀念、眞摯なる熱意が、偶然に生起するものにあらずして、人心本然の源泉より湧き出づる天籟なりとすれば、又この本然の靈性が人界に消滅せず、天籟が何時何れかの處に鳴り得るものとすれば、預言當事者二人の精神感應は、實にこの本來靈性の共鳴にあらずや。空氣の中に一たび發せられたる音響は、縦令ひその時その處にある人の耳には聞えずとも、そは永遠に空を掠め天を度りて、それと共鳴し得る物象に當りて再び響を發し得るに非ずや。光も然り、熱も亦然り。莊子が、天籟の萬物に當りて、物各々その音を發せしむるものたるを道破せしも、王陽明が我が一心の元聲天地の氣と相應じて和協の律を發すといひしも、皆これに外ならず。音響光熱の物質運動は、此の如く過去にしても未來にしても永遠の共鳴なり。然らば人間靈性の

響が偶然に起り、卒爾として永へに消え逝くといふ人あれば、人間精神の力を以て音響、光熱よりも劣れりとする者なり。一旦偉人の精神に發動したる熱情、要求、豫期は、決して世の現實論者（精神を物質よりも劣れりとする暫留的現實論者）の考ふる如く、生じては消えて逝く者にあらず、その活動が時としてはその人と共に消えて再び現れざるは、その物が全く消えたるにあらず。之と共に鳴し感應して之を再現するに足る第二の偉人出でざるが爲のみ。若し次で起るべき人格が、預言者の預言的熱情によりて熱せらるるに足りなば、その人は即ちその預言の體現者色讀者となるなり。地球より發散したる熱は、第二の太陽系時代に入りては再び地球に似たる天體の熱となるにあらずや。

かく觀れば、預言の力と預言の信仰とは永遠の光なり。預言の體現は偶然にあらず。問題は唯、何れの人が自ら意を決して之が色讀者たるや否やにあり。されば預言者の精神も偉大なれども、此れと共に體現者の人格は一層偉大なり。此を

以て預言者なる洗禮のヨハネは、『我より後に來る者は、われその靴の紐を結ぶにも當らず』と宣し、釋尊は、法華經を上行に付屬して、上行は即ち末法に於ける眞理の顯示者にして、釋尊自身の代表者なるを明かにしぬ。預言の大精神と感應し、預言の付屬委託に激奮したる人物が、身を挺し命を捧げて、その預言を體現する爲には、如何なる迫害にも屈せず、身命をも棄てて顧みざるは固より必然の數のみ。世に預言者あるは幸なり。されど預言者あるも之に應じ之を色讀する者なくば、預言は何等の效果なくして終らん。世昏迷にして達士出で、預言實現の要に迫られて之が實行の人現はるは、人生の光明生命にあらずや。舊約全書の預言が、キリストを得て始めて意義あり實効あるに至りし消息を見れば、法華經中上行出現の預言は日蓮を得て、始めて世尊一代の大妄語となり果てざりしを欽仰すべきなり。

楞牛が教理の研究と稱せしは、即ちこの預言の關係を、人間心靈の大問題とし

て研究せしなり。否、人間心靈の大問題を、日蓮の自覺信行によりて解釋し得、而して日蓮が自ら上行と信せし如く、日蓮を上行として信せしなり。彼れの日蓮崇敬が單に世に通稱する人物崇拜のみにあらず、深き心靈の奥に入りし、永遠の信仰なりといふは此の點にあり。樗牛の日蓮崇拜は、實に日蓮が法華色讀の大人格を色讀せしものなり。彼れが日蓮研究の項目中、『日蓮と預言』の章に、『預言は天地人生の上に有する至上の力』といひしは、決して空言にあらず。是れかれが信仰の覺醒なりき。

寒外十月、北地風荒く波高し。彼れは暫らく越の寺泊に泊して、天候の回復を待らぬ。勿劇の境を離れて忽ち幽靜の地に客たり、感懷果して如何。嗚呼彼れは遂に目覺めたり永遠に目覺めたり。二十年來の疑惑は霧の如く散じたり、法華經の預言は、是の覺醒によりて更に新しき生命を得ぬ。東海の佛子日蓮の生涯は、俄に寂光寶土の光明に照され、直に佛識の現證となりぬ。彼れの過去は永遠の過去となりぬ。彼れの未來も久遠の未來となりぬ。彼れの接觸したる一切の衆生と國土と、凡て彼れの一身に關聯して妙經預言の註脚となりぬ。彌勒、天台、妙樂、傳教等は彼れによりて初めて妄語の

罪を免れたるのみならず、一代佛教の歸着は彼れによりて初めて現前の事證となりぬ。是の大自覺の喚起せられたる時、鎌倉の流人、安房東條の旃陀羅が子日蓮は、一躍して本化地涌の上首上行菩薩となりぬ。

(上行菩薩と日蓮上人)

日蓮の此の如き覺醒は、即ち楞牛かれ自身の覺醒なりき。彼れ始めて日蓮の人物に於て、多難怨嫉を辭せず、刀杖瓦石を喜び迎へて自信を貫く魁偉の一沙門を認め、その心事行蹟に於て大なる我執不屈の人物を見ぬ。此の如きは、猶ほ世の所謂る人物崇拜と大に異なるものにあらざりき。此の如きは一般に世人がルーテルの勇を稱し、ナポレオンの奇傑なるを讚歎するものと大差なきなり。されど楞牛は此の如き世俗的崇拜を以て甘んぜず、進で日蓮の此の如き人物は如何にして生まれ、此の如き勇奮は何れの源泉より迸り出でしやを研究したり。而してその所謂る教理の研究、眞理の根柢より、日蓮研究は彼れの眼前に久遠不滅なる靈の感應を現はし來り、法華の預言と日蓮の色讀との間に永遠の光ありて二者を結べる

を發揮したり。日蓮が自ら上行なりとの大覺醒によりて永遠の生命を體現し、佛識の現證となりしが如く、樗牛自らは又この日蓮の大覺醒を體得して、靈界寂光の大覺悟を得たり。

樗牛が此より進で日蓮と基督とを比較し、或は日蓮の日本國に對する超世的態度を論破したるも、皆一にこの大覺醒の餘瀝のみ。此等の論點は之を他日に譲らん。樗牛の日蓮崇拜は、預言の信仰に於てその最高最深の點に達し、又その全體を盡せり。預言の信仰は、かれが日蓮崇拜の中心點なり、それ故に又その始なり終なり。日蓮の人物事業が、上行の自覺に依りて焦點を煥發したると同じく、樗牛の信仰はこの一點に於て、永遠の靈光に接したるなり。彼れはこれに依りて現代を超越したるなり。彼れにして尙健康の餘命を全からしめたらんには、必ずや旺盛なる意氣を發揚し來て、日蓮が法華上行の靈光中に自己の覺醒信念を體現したるが如くに、自ら日蓮が預言色讀の靈の力を再現せしや必せり。されど哀むべ

き樗牛は、病敗の身如何ともするなく、心靈のみは信仰感應の光に照らされながら、身は又現世肉體の生を超絶しぬ、信仰の人高山樗牛が一生の最後は、此の如くにして夕陽の西天に光雲を輝かせし如く、信仰の靈光に照らされて、現實の濁世を超えて久遠の淨土に入りぬ。

自ら恃む人にあらずんば、人を信せず。人を信せざれば眞信の靈光は、決してその精神の中に輝かざるなり。

高山樗牛と日蓮上人終

大大大大大大大大
 正正正正正正正正
 三三三三三三三三
 年年年年年年年年
 七九九七七六六六
 月月月月月月月月
 五 廿廿
 日 三一
 日 日日
 九八七六五四三二一
 版版版版版版版版
 發行發行發行發行
 行行行行行行行行

(製復許不)



發行所

(振替貯金口座)
東京二四〇番

博文館

東京市日本橋區本町三丁目

印刷者	印刷者	發行者	編者	編者
博文館印刷所	高橋季吉	大橋新太郎	山川智應	姊崎正治

—〔高山樗牛と日蓮上人〕—
(定價金壹圓)

(場 I)

故文學博士高山林次郎遺稿

文學博士 姊崎正治君 共輯

檇牛全集

全五部大卷判布製金緣美裝

正價一冊金壹圓五拾錢 小包料金拾貳錢

第一卷 美術及美術史

第一部 美學上の研究

○美學上の思想說に就て○美感に就ての觀察○月夜の美感に就て○宗教と美術○詩歌の所縁と其對象○日本畫の過去及び將來に就て○歴史畫の本領及び題目○再び歴史畫の本領を論ず○坪内先生に與て三度び歴史畫の本領を論ずる書○『審美綱領』を評す○壯美及び優美○外界の美○自然美

第二部 日本美術史未定稿

第一章 總論（日本美術の特質を論ず）

第二章 奈良朝以前の美術

第三章 天平時代

第四章 平安朝時代

第二卷 文藝及史傳 (上)

▲文藝評論

文藝と人生

近松巢林子

第一期

（明治廿八年九月より廿九年九月迄）

運命と悲劇、歴史的精神外十二目

第一期 (雜論)

文學會漫評、青年文人の厭世觀、其他三十四

第二期

（明治三十年六月より三十三年七月迄）

我國現今の文學界に於ける批評家の本領、明治の小説其他

第二期 (雜論)

齋藤綠雨の色道論を讀む其他五十三日

第二期

（明治廿四年一月より二十五年一月迄）

文明批評家としての文學者、作文論、其他十二目

第三卷 文藝及史傳 (下)

○釋迦

○平相國

○菅公傳

○史傳雜纂

西歐美術譚——ナポレオン三世

古事記神代の卷神話及歴史——ジ

ヤンヌ、ダルグ——ハイネが事

東北物語——世界の四聖——冠鑑

日記——豪傑の半面——予の好める人

○文藝評論補遺

戯曲に於ける悲哀の快感を論ず○

日本民族の特性と文學美術○吾が

文學界に於ける道義的傾向○古寺

院の寶物○人才と我文學界○美術

に對する購買力○西郷南洲の銅像

を評す○外二十四目

第四卷 時論及思索

第一期(論理、問題研究の時代)

人性終に奈何○厭世論○道徳の理想を論ず○鳥國的哲學を排す外に十日

第二期(國家主義の時代)

日本主義○日本主義と哲學○世界主義と國家主義○宗教と國家○我國權と新版圖○自說論外廿四目

第三期(雜篇)

歴史と人種○成敗と正義○基督教徒の逢迎主義○士の徳操外八十目

第二期(信仰覺醒の時代)

美的生活を論ず○日蓮上人とは如何なる人で○日蓮と基督○吾が好む文章外に八目

第二期(雜篇)

無題錄○笑はむ乎狂せむ乎○口耳の學○空腹高心外に五十目

第五卷 想華及消息

瀧口入道(歴史小説)

感想○吾妹の墓○戀情論○放蕩論○雲中梅○今様三首(敦盛忠度小春)○准亨郎の悲哀○傷心録○わがそでの記○厚積薄發○冷鐵のひびき○送年の辭○秋色○歲暮○思ひ出の記外八項

雜篇○鳥海山紀行○夏季の學生

○海の文藝○清見湯日記○猶多放言○人と愛情其他

消息○國元實父○姉崎博士○笹川臨風氏○井上博士○登張竹胤氏

○其他(宛てたる消息百餘種)

外篇

倫理教科書(社會雜論、皇室に對する本務)

世界文明史(文明史とは何ぞや羅馬帝國と基督教)

○理學○近世美學

故文學博士 高山林次郎君著

近世美學

全一冊洋裝菊判 紙數三百二十八頁
並製正價金四拾錢 郵税金 八錢
特製正價金五拾五錢 郵税金 十錢

(內容綱目)

上篇美學史一斑

第一章 緒言

第二章 美學史の概見

(希臘人の美學思想外十
二項)

下篇近世美學

第三章 キルヒマン氏の
美學

序言○美の概念○美感
○感興ある實體○形象
性○理想化○官能的快
感○キルヒマン氏の美
學に對するハルトマン
氏の批評

第四章

ハルトマン氏の
美學

○美の具象的階級○美
の種類○人性及宇宙に
於ける美の位置○ハ
ルトマン氏の假象論の由
來

第五章

スペインセル氏及
びグラントアルレン氏

○スパンセル氏の進化
論的美學○グラントア
ルレン氏の生理美學

第六章

マーシャル氏の
快樂的美學
(細目十數項)

——(博文館發行)——

故文學博士 高山林次郎君著

論理學

全一冊菊判美本 紙數三百餘頁
並製正價金四拾錢 郵税金 八錢
特製正價金五拾五錢 郵税金 拾錢

(內容綱目)

○總論

○名辭命題及三段論法

○序論

○命題

○命題の對當

○直接推理

○思想の原則

○間接推理概論

○三段論法の式及格

○三段論法の諸變態假言
的三段論法撰言的三段
論法及び兩刀論法

○三段論法論

○不正確なる推論

○歸納的三段論法

○概論

○似而非同上

○自然法の一致

○因果律

○觀察設想及立證

○歸納的研究法

○原因の不定と結果の混
淆とより生ずる研究の
困難

○經驗に關する誤謬

——(博文館發行)——

故文學博士 高山林次郎君著

世界文明史

洋裝 菊判 美本 紙數三百七十六頁

並製正價金四拾錢 郵税金 八錢

特製正價金五拾五錢 郵税金 拾錢

文明史は、人類生活の統一前歴史也、歴史的發達の精神は、是れによりて、初めて釋するを得べし。本書筆を有史以前の民族に起し、佛蘭西大革命に至るまで、章を重ねること拾有五、主として哲學宗教文藝及政事の上より、東西歴史の隱微を描破せんと擬す、殊に基督教と西洋歴史との關係に就いては、犀利痛切な極め、讀者をして、目眩指顛の概あらしむ、而して參考該博、用意慎密の二點に於ては著者の大に力を注ぎし所、傳記、記事、編年の外に真正の歴史あることを知らんと欲する者は、須らく本書を讀まざるべからず

——(博文館發行)——

東京帝國文學博士 姉崎正治君著
大學教授

ハルトマン氏 宗教哲學

全一冊 菊判 美本 紙數四百頁

並製正價金四拾錢 郵税金 八錢

特製正價金五拾五錢 郵税金 拾錢

本編はカント、ヘーゲル、シエリングの宗教哲學を統合し、批評し吠檀多の無宇宙論、佛敎の涅槃論を精査して、東西宗教の粹を蒐め古今哲學の結果によりて、宗教哲學の一大系統を組織したるもの。宗教哲學の大成として世に迎へらるるも偶然にあらず。

——(博文館發行)——

シヨペンハウエル氏原著

東京帝國大學文科大學教授

文學博士 姉崎正治君譯

(全部完成)

意志と現識としての世界

全三冊菊判

正價

上製頗美本

上卷金壹圓八拾錢 小包料
中卷金壹圓六拾錢 各冊金
下卷金壹圓八拾錢 拾二錢

シヨ氏の哲學は近世思想とギリシヤ思想との融合、東洋思想と西洋哲學とを連鎖、徹透の思想と別袂の論議を以て、高遠の思想を宣べ、寂靜の福音を傳ふ、その大著作は全部今や流暢なる日本語にて讀み得べし、翻譯は總て口語にして特に原著の論調語氣を寫すに勉めたり。哲學書は難解のものなりとの誤解はこの一書によりて、一掃せられん。出版者、亦この廉價を以てこの不朽の傑作大譯書を世に提供するを誇りとせん

——(博文館發行)——

東京帝國大學文科大學教授

文學博士 姉崎正治君著

美の宗教

全一冊四六判上製 正價金壹圓
紙數四百九十頁 郵稅金八錢

本書は基督敎國の一美術家と佛敎家の一宗教研究者とが思想を交換して美の宗教を言明せんとしたる一篇。人生宇宙を美の進化、人格の融合の活劇と觀じ、文學、戯曲、音樂より説き起し、細胞生活より星界に上り、個人、家族、社會、國家の神靈生活より神靈の歸入に及び、靈魂の不滅、神靈の顯現に到る、終りに佛敎を詳論し、並に編者の此主者に出たる論文數篇を收めたり。

——(博文館發行)——

文學博士 姉崎正治君著

停雲集

全一册四六判上製 正價金壹圓卅錢

紙數五百五十頁

寫眞版四十頁

郵稅金拾錢

亡友を想ひ、異國の友と思を交へ會遊の地を追懐し、停雲徘徊して追へども去らざるの情、この一篇をなす。感想と紀行とを經とし、繪畫と戯曲とを緯とす。清閑の友旅窓の伴侶として情緒と趣味との人に薦む。

——(博文館發行)——

文學博士 姉崎正治君著

花つみ日記

全一册四六判上製 正價金壹圓卅錢

紙數六百頁

寫眞版三十六枚

郵稅金拾二錢

南イタリヤの美國、北スコットの山地、野邊に花草を摘み、古寺に美術の花を賞てし日記一篇、その中には湖畔の佛誕會に異國の友を會して佛敎を語り羅馬の寺院に聖教會の生命活動を視察し、南歐に北歐にあらゆる種類の交友に接したる跡を傳ふ。天然美術の記録、宗教、文明の評論として江湖の一讀を薦む。

——(博文館發行)——

故鳥谷部春汀君著

春汀全集

全三冊菊判上製 正價各金壹圓五拾錢
表裝華麗美本 小包料各金拾貳錢

(書目)

第一卷 ● 明治人物月旦 (前編)

(政治家月旦)

第二卷 ● 明治人物月旦 (後編)

(外交家、教育家、軍人、
實業家、文士記者各月旦)

第三卷 ● 各種の評論

(外人月旦其他)

故鳥谷部春汀氏の文品は世既に定評あり、殊に其人物月旦の技に至りては殆んど天下の絶品と稱せらる。今其の漸なる遺文中、最も世に喧傳したる人物月旦及び各種の評論を編輯し、三巻に分冊して恰く江湖に薦む

——(博文館發行)——

田山花袋君著

花袋文話

全一冊四六判洋裝 正價金八拾錢
紙數四百四十頁 郵税金八錢

本書要目

○描寫論○明治の作品研究○卓上語○文章より見たる現代の小説○文章新語○旅のインキ壺○山水小論○現代の紀行文○諸家文章短評○短篇小説の話○フロカベルとゴンクール○アルフオンスドオアエ○太平記と南朝の遺蹟○方丈記に現はれたる源平の盛衰○『浦のしほ貝』に見出したる「自然」

——(博文館發行)——

文學士 横山健堂君著

評論
漫筆
人と水

全一册三六判上製 正價金七拾錢
紙數四百二十餘頁 郵税金四錢

黒頭巾氏の文、趣味の富、論斷の精、既に世評あり、此の書、装幀は意匠を凝らし、潇洒たる小冊子、恰もポケットに入るに適す。車上に讀むべく枕上に讀む可く、全篇の項目、著者得意の壇場に屬し、すべて其の三四年來の短文短句を集英したれば、秀句勁句疊出す、書は小さくして内容は甚だ博し。奇警の觀察、清新の造語著者の眞面目、收めて、唯だ此の一卷に在り人をして一讀耽讀、自から快然として微笑せしむるものあるべし、敢て江湖に薦む。

——(博文館發行)——

文學士 三輪田元道君著

人と社會

全一册菊半截形 正價金五拾五錢
紙數四百八十餘頁 郵税金六錢

著者三輪田文學士は、單に學校内の教育家に止まらず、活社會の指導家なり。其識見の卓越することは、世既に定論あり。今や將に思想界の動搖せんとする氣運に際して、吾人の適從すべき所を明にせん爲め、人生問題社會問題修養問題及び家庭問題等に就き、意見を發表す。恰も大旱に於ける雲霓の如く、讀書界の大に待つ所なり。敢て之を江湖に勸む。苟も天機人情を解せんとするものは、老若男女の區別なく以て机上の友とすべく、以て世路の葉とすべし。

——(博文館發行)——

文學博士 姊崎正治君編 (樗牛筆蹟書簡入)

●博 文 館 發 行 ●

樗牛 文は人なり

全一冊 四六判上製
紙數五百頁 插畫數十葉
正價 金 壹 圓
郵價 金 八 錢
稅 金 八 錢

附錄 性格の人 高山樗牛

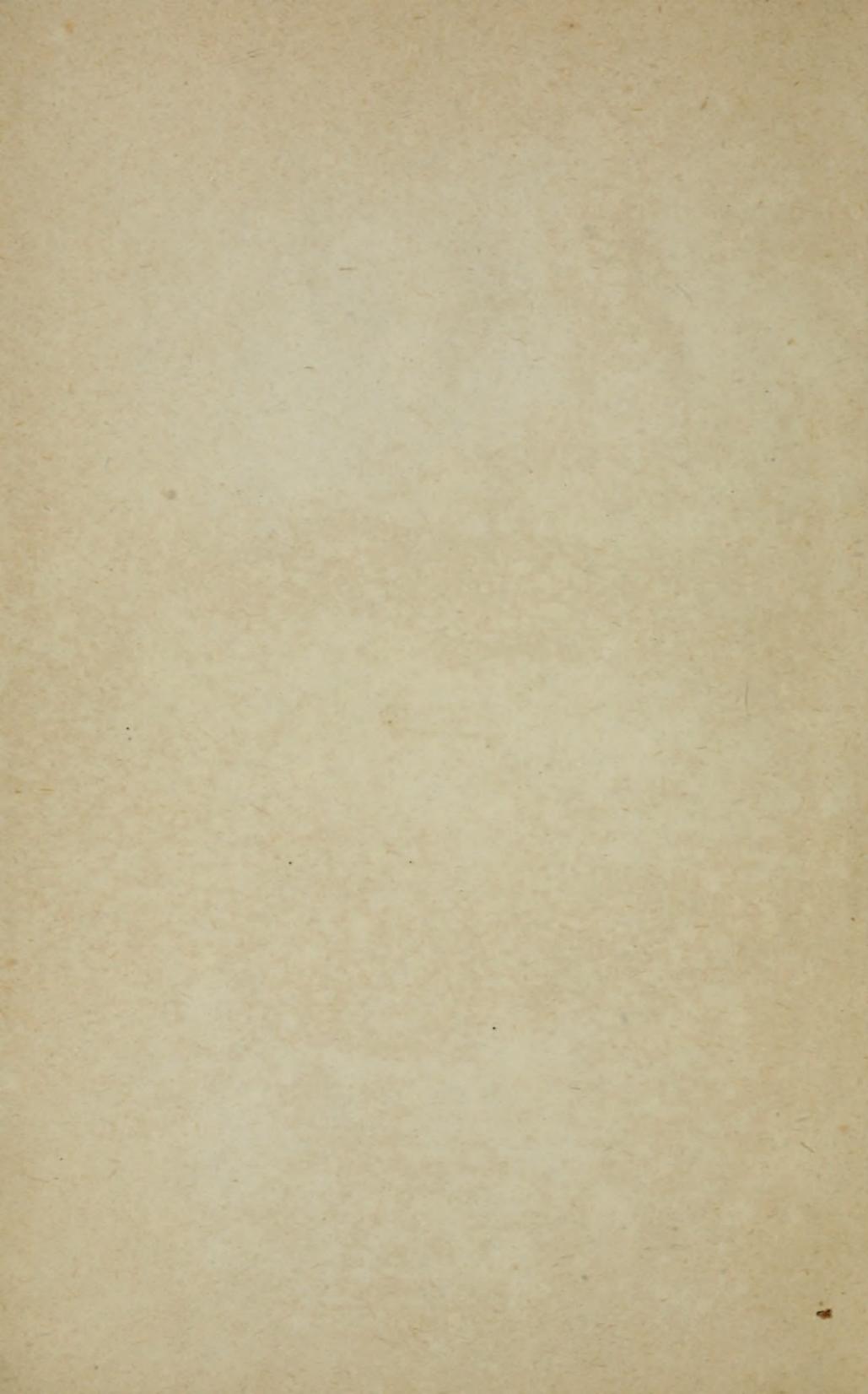
內第一期◎憧憬時代 第三期◎煩悶の時代
容第二期◎自信の時代 第四期◎渴仰の時代

情思慕の青年時代より、自信の人、煩悶の人、信仰覺醒の最後に至るまで、樗牛氏一代の意氣感、
べき文章の粹を集めたるもの、全集以外の材料と編者の論評とを加へ、文に依つてその人を傳ふ、新刊『高山
樗牛と日蓮上人』と相待ちて、現代超越の主旨を宣揚するは此の書にあり。

文學士 故 齋藤野の人著作
文學博士 姉崎嘲風君 共輯
文學士 小山鼎浦君

●哲人何處にありや 全一冊 洋裝菊判

野の人の聲、而かも想は天界に馳せ、論は天才の權威を主張し、哲人の欣求を以て一生を貫きし故人の論文
遺著を輯め編次したる者近年勃興し來れる新思想主義の豫言なり哲人を喚び起すべき靈の聲なり。



KITAZAWA BOOKSTORE

北澤書店

東京・神保町2-3 TEL (261)1271

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02951 3777